
攻撃魔術の使えない魔術師

絹野帽子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

攻撃魔術の使えない魔術師

【Nコード】

N9966Q

【作者名】

絹野帽子

【あらすじ】

オレ（大杉健太郎：大学生）は、気づくと異世界で幼児になっていた。これっていわゆる前世の記憶を持つての転生ってやつ？どこかで聞き覚えがある名前だと思ったら、死ぬ直前までハマっていたオンラインゲームの世界にそっくりだ！？

そして、始まる異世界での第二の人生……………

（誤字や脱字などは、発見または報告があり次第、適時修正して
います）

(2011/9/10 『学術都市フエルベル編』を開始しました)

はじめに

『小説家になろう』で掲載されている異世界転生モノが好きで、自分も書き始めてみました。

タグが狙い過ぎですが、私も好きなので「しょうがないなあ」と思っていただければ幸いです。

本文を読まれるにあたり、以下にお願いしたいことを掲載しておきました。

面倒とは思いますが、ご一読ください。

作中の名称について「のような」という表現を省略することがあります。

例えば「パンのような物」は「パン」に、「ニワトリのような鳥の卵」は「卵」とだけで表現します。

世界の雰囲気を出すために、オリジナルのモノに関しては、相応の説明をします。

例えば、「リルコの実」というオリジナルの果物を出す場合、「イチゴのような見た目で、味はレモンのような味」といった説明をしたいと思います。

同様に、言葉の冗談なども日本語に準拠しています。

「猫が寝込んだ」という冗談は、本来日本語でしか通じませんが、作中では異世界の言葉を喋っているキャラでも通じるとしています。

これらは、読みやすさを重視しているためです。

異世界という設定である以上、現実世界とまったく同じ言葉を使っているとは思えません。

ただ、お約束として「洋画の吹き替えのように、本文の言葉は翻訳されている」と、お考え下さい。

私の前作同様、この作品も別所で連載しているものを改めて投稿しています。

また1話辺りの文字数は1500〜2000文字程度と少なめです。

その分は更新回数でフォローしたいと思っています。

誤字、脱字、誤変換、言葉の誤用などありましたら、『感想』等でお知らせ下さい。

それでは、どうぞよろしく願います。

「グロリス・ワールド」

テレビとパソコンの違いがほぼなくなり、マルコン（マルチビジョンネットワーク・コンピュータの略）が次世代映像受信機として当たり前となった時代。

デジタルゲームといえば、今やオンラインネットワークによるサポートのないゲームは、ほとんど絶滅したと言って良かった。

ネットワークを介したマルチプレイを始めに、公式からのバグの改修サポートはもちろん、中にはゲームの攻略支援などのサービスが付いてくるゲームも販売されていた。

ゲーマーに、「世界でもっとも有名なゲームは何か？」と質問すれば、10人中8人は「グロリス・ワールド」と答え、1人が「メモリー・オブ・アザー・ワールド」と答えるだろう。

『グロリス・ワールド』、正式なタイトルは「メモリー・オブ・アザー・ワールド」、素直に和訳をすると「異世界の思い出」、約5年前に公式リリースされたゲームである。

『グロリス・ワールド』とは、「メモリー・オブ・アザー・ワールド」の総合デザイナーのハンドルネームであるグロリス・アーケディアから付けられた通称であった。

当時の最先端のコンピュータ技術を用いて、精密に作られた世界は、“世界で最も美しい異世界”というフレーズと共に、そのゲー

ムシステムは廃人的なユーザーを世界中で何万人も生み出したことで有名となった。

発表当時は、月額60ドル、当時の日本円にして約7,200円という高額な料金にもかかわらず、グロリス・アーケディア氏の狂人的なゲームデザインに惚れ込んだ世界中のファンによって支えられた『グロリス・ワールド』は、運営され、そして進歩していった。

『グロリス・ワールド』も、多くのファンタジー系ゲームと同じくモンスターとの戦闘は充実していた。その精密な世界に反映して、まるで生きているかのようなモンスターの狩猟もまた『グロリス・ワールド』の魅力の一つであるのは間違いない。

例えば、鹿のようなモンスターを退治する場合、まず、水辺などで、そのモンスターが現れるのを待ち、水を飲もうと現れた所を仕留めるのである。

複数のキャラクターと協力して、ゴブリンの群れを退治したり、山奥の洞窟の置くに潜むドラゴンを退治することもできた。

そして、このゲームにおける最大の魅力は“ルーン”と呼ばれる、特殊な言語を使った魔術にあった。ゲーム中、全てのキャラクターは、この“ルーン”を使い、魔力を消費することで魔術を使用できる。

ただそれだけならば、今までの従来のゲームと変わる所はない。『グロリス・ワールド』の画期的であった所は、この“ルーン”を独自に組み合わせることができ、プレイヤーが自由に魔術を創造することができる点にあった。

“ルーン”を組み合わせる順番、消費する魔力の量、発生させた
い魔術の効果によつて、『グロリス・ワールド』における魔術は無
限の可能性を持っていた。

それゆえに、一部のプレイヤーは、新しい“ルーン”の組み合わ
せを考案しては、より強力な魔術を創造することにハマったのであ
る。

おおすぎけんたろう
大杉健太郎も、そんな『グロリス・ワールド』の廃人的なプレイ
ヤーの1人だった。

彼は奨学金制度で無事に大学へ入学し、その大学で知り合ったク
ラスメイトから薦められるがままに『グロリス・ワールド』を始め、
どっぷりとゲームの虜になってしまったのである。

『グロリス・ワールド』の世界は優しく、ゲームにロゲインして
いる時は、彼のコンプレックスとなっていた現実を忘れさせてくれ
た。

健太郎の一風変わった所は、攻撃的な魔術には一切興味がなく、
俗に支援魔術と呼ばれるキャラクターを回復したり強化する魔術の
創造に熱中した所であった。

他人を助けるのが好きならば、誰かと一緒に狩猟に出て回復役に
徹したり、熟練者が初心者狩猟に付き添って、モンスターを攻撃

せず、支援魔術で援護だけすることはよくある話である。

健太郎の場合、そういうわけでもなく、彼の興味の中心は効率の良い支援魔術の創造とその使用方法の追求だった。

まれに知り合いを連れて、モンスターの狩猟に出ることがあったが、それはあくまで、研究した魔術の実践であった。

反面、支援魔術の使い手としての健太郎は、1人で3人分の働きをされると言われ、彼と組むと効率が5割上がるとまで言われていた。

そのため、よく狩猟に誘われたり、狩猟の固定メンバーにならな
いか？ と勧誘された。ただ、そういった勧誘をするプレイヤーの
多くは、健太郎のことを“効率のよい道具”としてしか見ていない
考えが透けていた。

段々とその手のプレイヤーとの関係が面倒になった健太郎は、以
前からの本当に気の会う仲間以外と狩猟に行くことをやめ、狩猟に
出たとしても、事前に高額な報酬を約束させた。

そんなことをするならば、狩猟の際に手を抜くなどをすればいい
のだろうが、それをやるには彼の良心が邪魔をした。基本的に「い
い人」ではあった。

アルバイトからの帰り道。

眩しいトラックのライトが歩道を歩いていた健太郎を照らし……

……。

次の瞬間、ガッドンツという鈍い音とともに、健太郎は自分の体が強く突き飛ばされる感覚を受け、意識を失った。

トラックの運転手の過労による業務上過失致死。

裁判による判決は、懲役2年6ヶ月執行猶予4年となり、10年以下の懲役又は300万円以下の罰金という法律に比べれば、かなり軽い判決となった。

これは、被害者の大杉健太郎に遺族がいなかったことと、被告人がまだ若いことにあり、裁判官の温情であったが、世論を騒がせることになった。

しかし、その判決も世論もこの物語に一切関係はない。

関係あるのは、大杉健太郎と呼ばれた彼が、この世界での生を終えたということだけである。

??歳：「暗い水の中での温もり」

温かい……………。

オレは確かトラックにぶつかりそうになって……………、と、そこ
まで考え、その後の記憶がないことに気づく。

意識はあるが、まるで夢を見ているかのようにボンヤリと考えが
上手くまとまらない。

手足も顔も上手く動かすことはできない。事故のせいだろうか。

辺りは暗く、身体は温かな液体包まれている。

以前、ネットワークのテクノロジー系ニュースで見た有機ナノマ
シンプセル治療という単語が思い浮かぶ。

特殊な液体が入ったカプセルに医療用有機ナノマシンを散布させ
て、患者を細胞レベルで治療する技術だ。

つまり、オレはそれほどの重体なのだ。

トラックに追突されたのだから、命があっただけでも儲けモノだろつ。

ここまで考えがまとまるまでに、苦勞をした。

苦勞というのは、少し意味が違うかもしれない。

今のオレには、自分自身について、ボンヤリと想像をめぐらせることしかできない。

そのボンヤリと想像することさえ、とても時間が掛かるようなのだ。

『○○○○……○○○○……○○○○○○○○○○……』

時折、カプセルの外側から人の声や歌などが聞こえてくる。

聴覚自体が上手く働いていないのか、正確に聞こえているわけではなく、なんとなく、オレに語りかけているような、そんな気がしているだけかもしれない。

すごく穏やかな気持ちだ……。

オレの身体を包む温かな液体は、ゆっくりと揺れる。

それがまた、オレを穏やかな気持ちにさせ、意識が夢と現^まを行ったり来たりする。

もしかすると、誘眠作用がある薬品が液体に混ぜられている可能性があった。

それくらい寝ても寝ても寝たりない。

オレは、身体を治すのが最優先だと考え、眠気に身を委ねて、できるだけ身体を楽しんでいた。
もつとも考えることと寝ること以外、何もできそうにはなかったが……。

そして、オレは、突然押し出されるような流れに巻き込まれ、カプセルから追い出された。

鈍い痛みとヒヤリとした外気を感じ、思わず……、

「ほぎやあ、おぎやあ、おぎやあ………」

漏らした声は、上手く言葉にならなかった。

3歳：「朝、目覚めて……」（1）「

眠っていた意識がゆっくりと浮上し、パチリと目を覚ます。

オレは身体を起こすと、這うようにしてベッドの端に向かう。上手く身体を回して、足からベッドをおりる。

もぞもぞと寝巻きを脱いで、ベッドのそばに畳んである服を手取る。

慣れない内は時間が掛かったが、今では1人でも着替えることができるようになった。

着替えが終わったら、ペタペタと部屋を歩いて、姿見の前まで移動する。

鏡に向かってニコリと微笑むと、目の前の鏡に映っている愛らしい子供が微笑んでくれた。

『われおもつゆえにわれあり……』

オレの記憶に残る、哲学的に有名な言葉を呟く。

これは物心がついてから、毎朝の行なっている日課だった。

そろそろ、この日課を止めようかと考えている。

それは、今のオレの状況が決して夢ではなく、現実なんだと認めることでもある。

オレの名前は大杉健太郎と言った。しかし、大杉健太郎は、名前からも分かるように黒髪黒目の純粋な日本人で、20歳はたちちようどの大学生だった。

決して、淡いシルバーブロンドに綺麗な青い瞳、まるで人形のような3歳児ではない。

今のオレの状態を一行で説明するなら、“前世の記憶を持ったまま転生をした”となる。

最近になって急激に「前世の記憶」を認識できるようになってきた。

元の世界の雑学として、人間の脳というのは、生まれてから3歳になるまでの間、外部からの刺激によってニューロンが急速に増え、それにもない脳の機能が発達するらしい。

容量の小さいコンピュータに、大量のデータを処理させようとしてもうまくいかないのと一緒で、未発達の脳には「前世の記憶」を処理することが難しかったのだらう。

後になって母親から、よく寝る赤ん坊だったと聞いた。

それは「前世の記憶」が乳幼児の脳に対して負担になっており、脳を休ませるために身体の防衛機能が働いていたんだろう、と推測できる。

生まれてから3歳になるまでの記憶は大部分がおぼろげで、ほとんど本能のままに正しい赤ん坊ライフを送っていた。

赤ん坊は1人で食事もできないし、それどころか、立ち上がった
り、自分の意志でろくに動くこともできない。

つまりは、食事や下の世話を人にみてもらわなければならないこと
とだ。

正直、母親が綺麗な女性だったのは役得だと思う。が、色々と突
き詰めると3歳児にして人としての道を踏み外す気がするため、あ
くまで、自分は重態の患者と同じだった、ということにして精神の
平静を保とうと思う。

それはびておき
閑話休題。

大杉健太郎だった頃のオレは神を信じていなかったけど、今なら
ば、そういう超常的な現象もある程度は前向きに信じられるかもし
れない。

人間の記憶は脳に宿る、という科学的な常識が、自らの経験によ
って覆されたのだから。

最初は、子供になった夢を見ているのだと思っていた。けれど、
明^{めい}晰^{せき}夢^むだとしても、今体験していることは異常なまでに詳細で、オ
レの意識はハッキリとし過ぎている。

3歳の誕生日が過ぎ、前世の記憶をきちんと認識できるようにな
ってから、オレは、毎朝、自分の姿を鏡に映し、日本語を発言し、
そして、これが夢ではないことを再確認していた。

それも今日までにしよう。

オレは、この新しい人生を生きていく。

目下の目標は、楽しく人生を送れるように努力することにしよう。

3歳：「朝、目覚めて……」（2）

現状で、オレには幸運だと思えることが3つある。

1つ目は、生まれ変わって日本人ではなくなったが、正しい赤ん坊ライフを送っているうちに、両親や使用人が喋っている言語を自動的に習得したらしいこと。

逆に意識して喋らないと、日本語を喋ることができないくらいだ。多分、思考もこの世界の言語で行なっているのではないだろうか？

2つ目が、生まれた家が、それなりに裕福であること。

この世界の貧富の基準は分からないが、少なくとも使用人を2人も雇えるような家だし、富裕層と言えるだろう。

これは、前世の1人暮らしだった生活からは信じられない環境だ。父親が田舎の領主みたいな立場にあるようだ。

3つ目に、この世界の法則が元の世界とあまり変わらないこと。

物を落とせば下に落ちるし、水は高きから低きに流れる。

少なくとも屋敷にいる人間は目が2つで口は1つ、手足は2本ずつで、指がそれぞれに5本ずつ。

食事は、黒っぽい粒が混じったパンに、肉や魚や野菜など。どう

やら酒もあるらしい。

季節があつて、太陽が昇れば昼だし、沈めば夜になる。月が大小2つあるのはご愛嬌だろう。

さつきから「元の世界」や「この世界」と言っているが、両親や使用人の言葉から、ここは日本であるどころか、少なくとも“前世で生きていた地球とは、全く異なる法則が働く場所である可能性”が発覚している。

分かりやすく言えば“異世界”なのだ。

未だに確実な情報ではないが、オレが入手した情報では、この世界は、オレが前世でハマっていた『グロリス・ワールド』の世界に酷似しているらしい。

神の眠れる世界カルチュア

唯一の大陸、ミュージシアン大陸。

それはまさに『グロリス・ワールド』の舞台となる世界と同じ名前だった。

そうだ、これは4つめの幸運として数えていいかも知れない。

もしかすると、この世界には、美しいエルフ族の乙女やモフモフした獣人族の子供がいるかもしれない。

古代帝国の遺跡には、まだ誰も見つけていないお宝が眠っているかもしれない。

『グロリス・ワールド』最大の魅力であった“ルーン”による魔術が使えるかもしれない。

剣と魔法の世界、これほど男のロマンを刺激するものはないだろう。

さつきまで、今の現実を認める覚悟ができず、ウジウジとしていたというのに、もうこの世界に対してワクワクしている自分に呆れてしまう。

ただ忘れてはいけないのが、オレの身体はまだ3歳児なのだ。

いくら、精神年齢が成人した男のモノであっても、この世界の常識もなければ、体力もない。

あと10年くらいは、親元でこの世界の常識を勉強したり、身体を鍛えたりする必要がある。

できれば、野外で活動するための技術なんかも覚えたい所だ。

コンコン。

と、オレが決意を新たにした所で、ノックがされ、使用人のお姉さんが入ってきた。

「おはようございます、お嬢様。洗顔と朝食の準備が整っております」

「……………それから、淑女しゅくじゆとしての嗜たしなみとかも覚える必要があるだ
ろうか？」

3歳：「バーレンシア家の人々（1）」

使用人のお姉さんに連れられ、洗顔を済ませ、食堂に行く朝食の用意がされていた。テーブルには1組の男女が椅子に座って、オレのことを待っていた。

「おはよう、ユリア」

「ユリイちゃん、おはよう」

「おはようございます。お父さま、お母さま」

ユリア・バーレンシア。それがオレの新しい名前だ。

端正な顔に柔らかい笑みを浮かべて、最初に挨拶してきた男性が、ケイン・ガーロオ・バーレンシア。今生でのオレの父親。

オレの淡いシルバーブロンドと青い瞳は父親譲りなのだろう。淡いシルバーブロンドにキリっとした青い瞳が似合うイケメンである。年は24歳、働き盛りの若者という所だ。

名前と家名の間にある「ガーロオ」というのは、父親が忠誠を誓っている国から与えられた爵位みたいなものだろうと考えている。

同じ発音の“ルーン”があり、意味が《大六》^{ガロオ}なので、多分6番目くらいに偉い爵位なのではないだろうか？

家に来た客が、父親を「ガーロオ・バーレンシア」と呼んでいた

記憶が残っている。

オレのことを、愛称にちゃん付けで呼んだ女性が、マリナ・バーレンシア。ふわっとした栗毛のロングに、クルミ色の瞳がおっとりとした雰囲気をかもしている。

オレを生んだとは思えないくらい若くて綺麗な母親だ。

それもそのはず、今年で21歳。

つまりは、17歳の時に父親とイイコトしちゃって、18歳でオレを生んだ計算になる。多分、この世界の平均結婚年齢は低いんだろ。

『グロリス・ワールド』でも、キャラクターに設定できる年齢の下限が15歳だったから、15歳で社会的な成人と認められるのかもしれない。

オレはそんな両親の遺伝子を受け継いでいる。自分で言うのも何だが、かなりの美少女だ。

後数年もすれば立派な美少女にランクアップすることは間違いない。今から楽しみだ。

オレは母親の隣に置かれた専用の小さな椅子によじ登るようにして座る。椅子を登る時に両親から向けられる応援するような眼差しが少しくすぐつたい。

椅子に座ると、使用人のお姉さんが、オレ用のコップにお茶を注いでくれた。

使用人のお姉さんは、アイラという名前です、家名はまだ分かりません。

母親と一緒に屋敷内の家事を手伝ってくれている。住み込みではなく、朝早く（オレが目覚まらずと前）にやってきて、夕方になると自分の家に帰っていく。

赤茶つばい髪を後ろで一つにまとめ、少しキツイ感じがする目付きのクールビューティーさんだ。

瞳の色は濃い茶色。外見年齢的には、母親より年上に見えるが、母親が童顔であることを考慮し、言動から18歳くらいだろうと思っっている。

ついでに、ここにはいないもう1人の使用人は、ロイズという名前の男性だ。こちらも家名は分からない。

黒色の短髪に赤茶色の瞳をした30代後半くらいの渋いオヤっさんという感じだ。

母親やアイラさんには向かない力仕事や庭仕事を主に担当している。

父親から、庭の隅にある馬小屋の横に小屋をもらって、そこで寝起きをしているようだ。

「精霊様に大地と河川の恵みを、日々の糧として、頂いておりますことを感謝いたします」

「感謝いたします」「かんしゃいたします」

父親が精霊様への祈りを捧げ、オレと母親がその後に感謝の言葉

を続けた。これは、まあ食前の挨拶で、「いただきます」「みたいなものだ。

この世界では、神様仏様ではなくて、「精霊様」が身近な信仰の対象になっている。

これも『グロリス・ワールド』の設定と同じならば、この世界の創世では、まず一神が在り、最初に神は精霊王たちを創り、次に精霊王たちと共に神は大地や海や森を創り、最後に人類の祖である古い民を創ったとされる。

その後で神は永い眠りについて、創世の章が終わる。

つまり、今、この世界を守護しているのは、神に世界を託された精霊王と、その精霊王たちに配下として生み出された精霊たちである、とされているのだ。

眠っている神様より、実際に見守ってくれている精霊様に祈りを捧げるといふ辺り、実に合理的な信仰だ。

朝食のメニューは、黒っぽいパンにホワイトシチュー、三種類くらいの野菜を炒めたもの、それと甘いオムレツだった。

この家の食事は1日に3食だ。朝は軽く、昼はもつと軽く、夜はしっかり取るのが基本となっている。昼はオヤツと言った方が正しいかもしれない。

おそらく、他の家もそう変わらないと思う。

「むう……（あむつ、もぐもぐ、じつぐん）」

野菜炒めに入っていた緑色の野菜をまとめて口に入れると、味わう前に噛み砕いて、お茶で飲み込んだ。

基本的に素材が新鮮なのか、どの料理もとても美味しい。

ただ、身体が子供になったせいとか、味覚的に甘いものがとても美味しく感じる反面、苦味や刺激のあるものが全く美味しくない。

食べ残しても誰にも怒られたりしないだろうが、バランスのいい食事は将来の美貌と健康のためと、我慢して食べるようにしている。

それと、この身体ではお酒も大して美味しくないだろう。前世では喫煙はやらなかったけど、飲酒は大学の入学と共に少々……結構嫌いではなかった。

オレと違い、お茶の代わりにワインを飲んでいる父親が少し羨ましい。

3歳：「バーレンシア家の人々(2)」

名残惜しそくに母親が父親の身体から離れた。

3分か……今日はいつもより短かったか？

「それじゃあ、行ってきます」

「いつてらっしやいませ、あなた」「いつてらっしやいー」

この世界の常識は、まだほとんど分からないが、キスや子供の頭を撫でる仕草が親愛の情を示しているところなど、元の世界と同じ部分が多いようだ。

さて、玄関先で毎朝3分以上かけてキスをするという、この2人のお見送りの挨拶は、果たして当たり前の常識なのだろうか？ 多分、違うんだらうなあ。

夫婦のサンプルが、両親しかいないので答えは出ないが……あえて言うなら、万年新婚夫婦という言葉が似合う。まあ、両親の仲が円満なのは良いことだけど、見ているオレの方が恥ずかしくなる。

3分というのは、オレの体感時間だ。もっとも時間感覚については、かなりの自信がある。

前世では、「タイマーの画面を見ずに1秒の狂いもなく10分を

計れる」という特技があった。

『グロリス・ワールド』では、魔術の効果時間が切れたかどうかが一見して分からないため、事前に効果時間を計っておき、支援魔術が常に途切れないように魔術を使うようにしていた成果だ。

時間と言えば、この世界の1年は「地の季節、風の季節、水の季節、火の季節、森の季節、海の季節」の6つの季節に分けられる。

『グロリス・ワールド』の知識では、この世界は6と言う数字が神聖視されているためだ。

これは、神が最初に創った精霊王の数が6名だったことに由来するらしい。

地の季節が、元の世界で言う大体1月から2月くらいになる。

1つの季節は10日を1巡りとする6巡り(60日)からなり、1年が360日となる計算だ。

オレが生まれたのが「水の季節の3巡り目の第2日」、今が「水の季節の4巡り目の第8日」となる。

1日は昼の6刻と夜の6刻に大雑把に分けられ、厳密な時間の区切りはない。オレの体感時間では1刻で2時間より少し短いくらいだと思う。

短い時間だと「10を数える間」とか、口頭でのカウントになる。

嬉しいことに基本的なモノの数え方は、10進法が基本となっているようだ。

ついでにこの世界の度量衡についていうと、最も小さい長さが1

イルチ（≒約1cm）、最も小さい重さが1グラル（≒約10g位）になる。

大きな単位として、長さは100イルチで1メルチ（≒約100cm）、100メルチで1キルテ（≒約100m）となる。重さは100グラルで1ガラル（≒約1kg）、100ガラルで1ギロム（≒約100kg）となるらしい。

これはあくまで、自分（3歳児）の体重と身長から割り出した相対的で感覚的な比較だ。

両親がオレの身長と体重を「95イルチ（約95cm）くらいの15ガラル（約15kg）くらい」と言っていたことを根拠としている。

お金について言えば、『グロリス・ワールド』では、金の単位は「イエーン」だった。今の生活でオレが、お金を使う機会がないため、貨幣価値は良く分かっていない。

少なくとも、小さい子供がお小遣いを握り締めて、近くのコンビニまでアイスを買いに、なんて簡単にできる世界ではないからだ。

……と、話を少し戻して。

オレが今のところこの世界で知っている場所は、この家の敷地と、裏の森に少し入った所までだ。

この家の敷地は、正面の道を除いて、回りを森に囲まれている。

家の敷地は、表と裏の庭を合わせれば、結構な広さになるが、森はその何百、もしかすれば何万倍も広いようだ。

家の正面から少し遠くを見ると、小さな集落が見える。そこがこの家から最も近い、アイラさんの実家がある村だ。

その村でさえ、歩いて半刻（1時間弱）程度掛かる距離にあるらしい。

父親は、その村を含めた近くのいくつかの村を治める立場にあり、普段から馬に乗って見て回っているようだ。

そろそろ麦の収穫が始まるとかで、最近は少し帰りが遅くなっている。

それでも、日が落ちる前には必ず帰ってきて、母親を抱きしめる愛妻家だ。本当にごちそうさまです。

裏の森に入ってすぐの所に小川が流れている。

普段、そこで母親やアイラさんは洗濯をしている。暖かい季節なるとみんなで水浴びに利用したりもする。

残念なことに、この家の“入浴”の文化はあまり進んでいない。

身体を洗うのは、水浴びか、水浴びができない時は、お湯を沸かし、柔らかめの布で肌を拭^{ぬぐ}う程度だ。

風呂は、絶対に欲しい。オレは生まれ変わっても日本人の心は忘れていないのだ。

いつか自分で造るか、父親に甘えて造ってもらおうと思う。

3歳：「バーレンシア家の人々（3）」

朝のお見送りが終わると、居間で母親による勉強の時間となる。生徒はオレとアイラさんだ。

元々、アイラさんの奉公は行儀見習いのような意味も兼ねているらしく、家事を手伝いながら料理や裁縫を学び、時間を作って、母親から簡単な学問や様々なマナーなどを学んでいたらしい。

最近では母親がオレに本を読み聞かせている合間に、アイラさんは母親から色々なことを教わっていた。今は刺繍を習っているようだ。

「さてと、昨日はどこまで読んだかしら？」

「水の精霊王さまが、風の精霊王さまと、西の島で出会ったところ
です」

「と言うことは、ここからね」

オレは母親の横に座り、広げられた本を横から覗き込む。

母親は本の文字を一字ずつ指でなぞりながら声に出し、オレに読み聞かせることを意識してゆっくりと読む。

これはオレに字を教えるための学習の一環だ。

「1人でご本が読めるようになりたいです」とのオレの申し出を

受け、先日から文字を教えてくれるようになった。狙い通りだ。

文字さえ読めるようになれば、父親の書齋にある本で自習することもできるようになる。

今、母親が読んでくれているのは、この世界の神話だ。

まず、母親が一文ずつ読んで、それぞれの単語の意味を教えてください。

物語のキリが良い所で、母親は一度オレに本を渡し、本の読み直しをさせる。

アイラさんは、そんなオレと母親を横目に見ながら、黙々と刺繍の針を動かしている。

オレが本を読み直している間に、母親がアイラさんの様子を見にいき、質問を受けたり、気づいたところを指導をする。

「じゃあ、ユリイちゃん。最初の言葉は『月』よ」
「はい！」

最後に、母親が今回読んだ話から、いくつかの単語を選んでオレに見えないようにして読みあげる。その単語をオレが土板つちばんに書く。

土板というのは、あまり高さのない薄い木箱に細かくしつとりした土を敷き詰めたものだ。

細い棒を使って文字が書け、土を均ならせば文字が消えて繰り返し使える。

紙は貴重品らしく、重要な文書にしか使われない。前世の世界のように白いノートに書き取りながら練習などはできない。

土板なら、作るのも簡単だからだ。

この世界の文字は、6個の親文字と5個の子文字と呼ばれるモノを組み合わせた30文字からなり、前後にある文字の並び方によって同じ文字でも複数の発音をもっている。感覚としては日本語における漢字に近い。

例えば「よ」と言う文字で、「むよう」と「きよう」なら、「ムヨウ」と「キヨウ」と発音する。「き」の文字の後に「よ」がある場合は、「ヨ」にならずに必ず「ヨ」と発音する。

それから、同じ意味の言葉でも「丁寧さ」の度合いにより2つから3つほどの違いがあるらしい。神話の本は、ほとんどが最も丁寧な言葉を使って書かれているため、教材としては最適のようだ。

文法としては、基本的に「主語」「述語」「修飾語」の順番に並ぶ、どちらかと言えば英語に近いだろう。

「形容詞」は、それぞれの単語のすぐ後ろにつける決まりになっている。キツチリしたのが好きなオレには嬉しい仕様になっている。

母親が出す問題に、いくつかの単語を正解し、いくつかの単語をわざと分らない振りをした。

大人の理解力と子供の記憶力の良さを持っているオレは、かなりの速度で文字を覚えてつつある。が、あまり子供らしくない行動は

取りたくないの、まだ覚えていない振りをしたのだ。

さて、どのくらいなら、不自然ではなく、ちょっとした天才程度で済むだろうか。

人のいい母親を騙しているようで、少しだけ、ほんの少しだけ良心が咎める。

しょうがない、と割り切っている。これは、オレの我侷わがままなのだから。

もしオレが大人の精神を持っていことがバレたら、どうなるだろう？

3歳児が大人顔負けの、下手をすれば、今の文明以上の知識を持つて喋るのだ。

それは、「すごさ」を通り越して「おそれ」を招かないだろうか？ オレには、その可能性が決してないと言い切れない。

……この両親なら、あっさりオレの存在ごと認めてくれそうだ、というのは今のところオレの願望でしかない。

3歳：「森へ行くろう！（1）」

今日の昼食は、定番のパンケーキだった。3日に2回は昼食に出てくる。

挽いた麦の粉にヨーグルトっぽいミルクと卵を混ぜて焼いたシンブルなものだ。

オレは、自分の頭と同じくらいのサイズのパンケーキを2枚食べる。

もっと食べようと思えば食べれそうなのだが、食べ過ぎは肥満の原因になるしな。

この世界にダイエット薬があるのか分からないのが、そういう魔術は覚えがない。あ、獣や鳥に変身したり、幻覚で一時的に外見を誤魔化す魔術はあったはずだけど。

ユリアなら、少しぼっちゃりしていても可愛いのかもれないが、食べ過ぎは何より健康にも良くない。

さて、そんな昼食の最中。

オレはある目的のために、母親にお願いをしていた。

「お母さま、ご飯を食べ終わったら、うらの森におサンポに行きたいです」

「あら、それじゃあ、アイラさん、一緒について行ってくれる」

「かしこまりました」

昼食はアイラさんも同じテーブルについて、一緒に食事を取っている。

うちの家族は、あまり身分の低い高いには拘らないようだ。逆にアイラさんの方が気にしているように見える。

オレも前世の影響か、そういった身分と言ったものにはいまいちピンときていない。そもそも、前世ではただの貧乏学生だったからなあ。

まあ、さすがに父親と同じテーブルに付くわけにはいかないのか、朝食の時は壁際に控えて立っている。

「あの、お母さま。おサンポには、わたし1人で行きたいのです」

「まあまあ、ユリイちゃんは、アイラお姉さんがキライなの？」

「ちがいます！ でも、わたしはもう3才になったので、おサンポくらい1人でできます」

「うーん……、でもねえ？」

正直、オレなら普通の3歳児を1人でサンポに行かせるなんて無謀だと思う。

そもそも、こんなにしっかりと受けた受け答えができる3歳児がいるということは例外そのものだが。

前世で自分が3歳だった時の記憶はないが、ペットの犬や猫と変わりなかったんじゃないだろうか。

同じ家で育った3歳児は、まさにそんな感じだったし。

少し、オレの正体にバレてしまう危険性もあったが、この程度なら早熟な子で済むレベル……だといいなあ。

本当は早熟どころか、かなりの天才児だと思うが、両親共に訝いぶかしむどころかオレの優秀さを褒めてくれる。少し鈍くて、底抜けに優しい両親に感謝である。

「わたしは、いい子です。ちゃんと1人でおサンポできますよ?」

いまいち煮え切らない母親に必殺の《ヒュア・キラキラ・アタック純真な眼差し攻撃》!

「もちろん、ユリイちゃんはいいい子に決まっているじゃない! わたしとあの人の子供なんだから!」

こうかは ばつぐんだ!

「分かったわ。わたしはユリイちゃんを信じる!

でも、絶対に遠くに行っちゃダメよ? それと、小川と井戸の傍には、絶対に近寄らないこと。危険ですからね? お水が欲しくなったら帰ってくるのよ? 約束できる?」

「はい、やくそくします。お母さま、ありがとうございます!」

母親の承諾の言葉を引き出したところで、前言を撤回されないように、にぱっと止どめの《エンジェリック・スマイル極上 天使の微笑み》を撃っておく。

「うつつ……あなた、ユリイちゃんは、立派な大人になっちゃいました。3歳でもう親離れの時期が来るなんて、早すぎるわ……」

「えと、奥方様……別に、親離れというわけでは……」

うん、オレ（の身体）は、まだまだ子供ですよ？ 親離れにはちよっと早いと思います。

今ひとつ、母親にはとぼけた所があつて、可愛い人だと思う。血の繋がった母親に持つ感想じゃないけど。

「お母さま！ わたしは、リップに1人でおサンポをしてみせます！」
「ユリイちゃん、頑張るのよ！ わたしは草葉の陰から見守っているから！」

わざとノってみたけど、想定以上のノリの良さだ。

というか、草葉の陰から見守るのは、死んだ人ですからお母様。

あ、アイラさんがオレたちを見て、コメントに困る顔してら……。

3歳：「森へ行こう！」(2)「

家の裏庭は、正門側の表の庭より何倍も広い。

馬で駆け回れるくらいの広さがあり、厩舎や小さなハーブ畑などが設けてある。

その裏庭から森の川へ通じる小道があり、オレはその入り口に立っていた。

一度後ろを振り返って、左右を確認……んー？ 確率は半々つてところか。

何の確率かというと、アイラさんがオレを見守るためにこっそり付いてきている確率だ。

隠れている人の気配が分かる、なんていう能力は持っていないため、あくまで予想でしかないけど。

「まあ、いつか。よし、いくぞー」

と、勇んで森に入っすぐ、木の根元で四つん這いになっている男性を見つけた。

「あれ？ ロイズさんだ」

「おう、お嬢様か。……ん？ どうしたんだ、1人か？」

オレが声を掛けると、立ち上がったロイズさんがこっちに振り向いて、周りを見回し、怪訝けげんそうな顔をした。

「どうやらオレが1人でいることが気になったようだ。」

「おサンポです。わたしももう3才だから、おサンポは1人でもできるのです。」

「ロイズさんは、ここで何してるんですか？」

「俺は、ここに生えてる薬草を採ってたんだ」

「やくそう？」

「ラルシヤっていう草で、葉が薬になるんだ。病気の時に飲んでよし、傷に塗ってよしの万能薬だな。」

「普段から、茶葉と一緒に淹れて飲むと健康にもいいな」

ラルシヤの葉 といえば、『グロリス・ワールド』で最もよく使われる回復薬の ハイランクポーション の材料だった。

また一つ『グロリス・ワールド』と同じ部分を見つけ、少し感慨深いものがある。

「万能薬と言われるぐらいなら、覚えておいて損はなさそうだ。」

「けど、一見して、そこらの雑草との違いが分からない。」

「その葉っぱはどうやって見つけるのですか？」

「こいつは独特な匂いがあるから、すぐに見分けがつくんだ。ほら、

嗅いでみな」

「……くちやつー！」

ピーマンとパセリを混ぜて、何百倍にも臭くしたような匂いだった。鼻の中がとてつもなく臭い。

思わず顔を背けたオレを見て、ロイズさんが愉快そうにイイ笑顔を浮かべている。

いい年して、イタズラ小僧かつー！！

味は分からないが、匂いからするとかなり苦そうだ。

ゲームのキャラには、よくガブ飲みをさせていたが……かなりの拷問になりそうだな。

「ま、こんなもんでいいか。俺は屋敷に戻るけど、お嬢様はどうする？」

「わたしはお昼ごはんを食べたばかりなので、もっとおサンポしてから帰ります」

「そっか、気をつけるんだぞ」

「はい！」

当初の目的のためにも、ここで帰るわけにはいかないのだ。

小川には近づかないという母親との約束を守るとして、目的地は森の中の少し開けた場所にしよう。

3歳：「魔術を使ってみよう！（1）」

裏の森に入って、3歳児の足で10分ほど歩いた所に森の広場はあった。

わざわざ母親を口説き落としてまで、ここに来たかというところ、それは魔術の練習のためだ。

オレは、ほとんどの世界が『グロリス・ワールド』と同じであると確信している。

そして、『グロリス・ワールド』であるならば、オレは魔術を使うことができるはずなのだ。

『グロリス・ワールド』では、基本的にどんなキャラクターでも“魔力”を備えているからだ。

“魔力”とは、「可変と可能性の力」と定義される「魔法を行うために必要な力」のことで、肉体に属する体力、魂に属する魔力と説明される。

走れば体力が減って、動かずに休めば体力が回復する。同様に、“魔力”が減った場合は、魂を休ませれば回復する。魂を休ませるのは、睡眠が一番手っ取り手段だ。

その個体が保持している“魔力”を保有魔力と言い、全快している時に保持している“魔力”の量を、最大保有魔力量と言う。

なお、ここで言う魔法とは「世界の理を自分の意思で変革する能

力」であり、何も無い場所で水や火を生んだり、肉体を強化したり、幻影を作り出したり、ありとあらゆることが理論上は可能である。

魔法には大きく2つの種別がある。1つが魔導、もう1つが魔術だ。

魔導は基本的として、生れつき備わった魔法的な才能や能力のことを指す。

例えば、ドラゴンが巨体を浮かせる【飛翔】も口から吐く【フレイ火炎ムレスの息】も魔導に分類される。

他にも精霊が持つ【属性支配】、人類が生れつき持つ可能性がある【せんてんせい先天性加護】、一部の人類種族の特性とも言えるエルフの【魔法適性】やドワーフの【炎熱耐性】なども魔導となる。

その魔導とは逆に、後天的なものが魔術である。

魔術は、魔法的な技術であり、技術であれば、才能による差異はあっても取得が可能なのだ。もちろん、才能が皆無に近いが、本人の努力が足りなければ、取得することはままならない。

さて、この魔術に必要なのが“ルーン”である。この“ルーン”は世界の理の一部を示しているとされる文字のことだ。

正直、この辺りの設定についてはうる覚えで、“ルーン”を正しく発声すれば魔術が使える、位にしか覚えていない。

実際、『グロリス・ワールド』における魔術の創造は、キャラクターに“ルーン”を覚えさせる所から始まる。

覚えた“ルーン”の特性を考えながら、“ルーン”とルーン”を

順番につなげ、どのような効果を生じさせるかを設定する。この時に“ルーン”同志の連携が上手くいき、また、生じさせたい効果と選択した“ルーン”の特性が一致すれば、魔術の創造が成功となった。

ちなみに、このとき重要なのが、一番最初と最後につなげる“ルーン”である。

この2つの“ルーン”が魔術の方向性を大体決めてしまおうと言ってもいい。

魔術を創造したら、キャラクターの使用魔術欄に設定し、ボタン一つで魔術を使うことができた。

もちろん各種“ルーン”の知識や魔術の構文などはバツチリ覚えている。

「すう……ふう……」

ゆっくりと深呼吸をして気持ちを落ち着ける。今から、オレは魔術に挑戦する。

アイラさんが見張っているとしても、こうして、草の中で遊んでいる振りをしていれば、近くに来て手元を覗かれたりしない限り、大丈夫だろう。

唱える“ルーン”は、手元にごく少量の水を作り出すだけの、簡単な魔術だ。

「……………《滴よ》ウオーラ」

ピチャン、という水音が発生し……………なかった、あれ？

「《滴よ》ウオーラ……………《滴よ》ウオーラ……………《滴よ》ウオーラ……………」

試しに同じ“ルーン”を何度か唱えてみるが、汗ほどの水も出てこない。

この魔術を使うために必要な消費魔力は、ほぼ最低値と言っている、そうなるかとオレは水属性の“ルーン”との適性が皆無なのだろうか？

「《石よ》ダスーラ、《音よ》ジィムーラ、《熱よ》ノアーラ……………」

続けて他の属性系統の“ルーン”も唱えてみるが、一切の反応がない。

小石も音も熱も発生しなかった……………あれれ？

もしかして、オレってば、魔術の適性が皆無、とか？

3歳：「魔術を使ってみよう！（2）」

さて、いきなり問題が発生した。何が原因だろうか？

まず考えられるのが「何かやり方を間違えている」か「オレには魔術が使えない」の2つ。

前者ならばまだ希望がある。

いざとなれば、この世界の魔術師に弟子入りするなり、魔術の教本みたいなものを入手して読み込めばいい。

問題は後者だ。

例えば身体が「今の時点では使えない」なら、成長するのを待てばいいが……「オレには魔術の適性が皆無」とか「この世界の魔術は『ゲロリス・ワールド』と全く違う」となると最悪だ。

しかし、ここまで酷似した世界で、魔術という大きな要素だけ異なっている、というのも妙な話だろう。

とりあえず、後者を考えずに前者、「何かやり方を間違えている」として少し考えみよう。

そもそも、単純に“ルーン”を唱えただけで、魔術が使えるって

いう考えが安易過ぎだったか？

もし、“ルーン”を唱えただけで魔術が発生すると“ルーン”と似た発音の言葉を迂闊うかつに喋れなくなってしまう。

さらに、この世界では日常会話の中でも“ルーン”と全く同じような発音が使われていたりするわけで……。

「あー……浮かれ過ぎてたろ、オレ。」

少し考えただけで、この答えに行き着くんだから、事前に分かってもおかしくなかったはずだ。浮かれてなければ。

となると、魔術には“ルーン”を唱える以外にも何か必要なものがあるはずだ。

ボタン？

ゲームだったら、ボタン一つで魔術が使えるけど……現実の世界に、ボタンはない。

保有魔力？

魔術を使うには魔力を保有できることが必須だ。

「オレの最大保有魔力量は「0です」とか言われるとゲームオーバーって感じなんだが……。」

ん？　そういえば、魔力の消費量の設定は、どうやって決めてるんだ？

『グロリス・ワールド』では、“ルーン”をつなげて魔術を創造するとき、各“ルーン”に決められている消費魔力を“ルーン”の必要消費魔力の最低値から最大値の間の数値に設定し……………。

……何か、引つかかったな。

ボタン1つ？ 最大保有魔力？ 魔術を創造？ 消費魔力の最低値と最大値？

……………？

あ？ ああっ！！ そうか、オレは、きちんと“魔術の設定”を
していなかったんだ。

魔法とは「世界の理を自分の意思で変革する能力」であると、さ
つき考えてたばかりじゃないか。

ここで言う“魔術の設定”とは、自分が使おうとしている魔術が、
「どんなものであるか」をきちんとイメージしているか、というこ
とではないだろうか？

そうか、それなら……………何とかかなりそうな気がしてきた。

オレは目をつぶって、軽く深呼吸をする。

そして、『グロリス・ワールド』で魔術の創造用エディターを思
い出す。多分、オレが魔術をイメージするにあたって、『グロリス・
ワールド』でのイメージが役に立つはずだ。

系統は「水属性創造系」、分類は「生活補助」、効果「ごく少量

の飲み水の作成」、消費魔力は必要最低値2点で……………。

「
《^{ウォーラ}滴よ》
」

息を吐いた時のようなフワッとした何かが、オレの身体から抜けた。

そして、オレの両手の間には水滴が生まれ、ピチャン、という水音が足元から聞こえた。

3歳：「魔術を使ってみよう！」(3)「

「^{ダスーラ}《石よ》、^{ジィムーラ}《音よ》、^{ノアーラ}《熱よ》……」

小石が落ちて、「ポン」という音が小さく鳴り、もわつとした熱気が発生した。

コツさえ分かってしまえば、後は簡単だった。

要するに「どんな魔術か」をきちんとイメージしてから、「ルーン」を唱える必要があったのだ。

正確には「魔術を使うことで、“何を起こす”かの明確な意思」を持つこと。

「魔術を使うから水が出る」のではなく、「水を出すために魔術を使う」という考え方をしなければいけなかった。

この考え方は、言葉にすると似ているが、因果関係的には正確ではない。

例えば水が欲しい時、「蛇口の栓をひねって水を出す」のは、正しいように思えるが「蛇口の栓をひねったら、みかんジュースが出てくる」可能性だつてある。

水が欲しいならば、ちゃんと「水が出る蛇口の栓をひねる」必要

があるということだ。

「……………《ウォーラ滴よ》、《ウォーラ滴よ》……………あれ？」

調子に乗って、魔術を使っていたら、再び何も起こらなくなった。

「《ウォーラ滴よ》、ん……………魔力切れ、かな」

今度の原因はハッキリしている。オレが保有魔力の残量が0点、空っぽになったのだ。

ゲームを始めた頃の頃はよく「待つて、m p e」とか言ってたっけ……………。

「m p e」とは「マジック・ポイント・エンプティ」の略で、意訳して「魔力切れ」のこと。

自分の残り魔力を把握できるようになって、一人前の『グロリス・ワールド』ユーザーだ。

魔術が使えることについて夢中になっていたな。

えーと、1回の消費魔力が2点の魔術を10回くらい使ったか？とすれば、オレの最大魔力量は20点くらいということになる。

けど、20点か、ちよつとした魔術1回分の消費魔力しかない。まあ、時間はあるし、地道に「魔力上げ」をしていくしかないか。

日常的に運動をすることによって体力が増えるように、最大保有魔力量も増やすことができる。

これは『グロリス・ワールド』では、キャラ育成の基本なのだが、保有魔力の残量が0になるまで魔術を使い、そのあとで最大保有魔力量に回復するまで休憩をする。この時に最大保有魔力量がほんの少しだけ増える。

これが「魔力上げ」と呼ばれるトレーニングである。

1回の「魔力上げ」で増える量は、最大保有魔力量の約1%程度、つまりは最大保有魔力量が増えれば増えるほど、1度に増える量は増えていくが……それでもかなりの回数を求められる。

『グロリス・ワールド』で最も面倒な作業と言われ、この仕様が合わずにやめていく新規ユーザーも少なくなかった。

幸いなことに一度増えた最大保有魔力量が減ることはない。この世界も同じ仕様だといいなあ。

保有魔力の回復はゲーム内で「寝る」というアクションを選択し、1時間ほど放置すれば最大保有魔力量まで全快した。

確かゲーム内の時間と実時間の差は、6倍だったから……実時間で6時間の睡眠か。

幸いなことに、今のオレは3歳児で未来はまだたつぷりある。他

の魔術がどんな風に使えるか気になるが、ゆっくりと確認していけばいい。

1日に1回、魔力が空っぽになるまで魔術を使って、一晩休んでが、ちよつと良いくらいだろう。

と、今後の予定が立った所で、そろそろ屋敷に戻るか。初日から心配させて、明日から許可が下りなくなると面倒だ。

けど、このまま帰ったんじゃ面白くないし。

んー、せつかくだから、お花でも摘んで帰ったら、女の子っぽいか？

女の子っぽいで思い出したが、この世界の料理も気になるな。

自炊をしていた分、簡単な料理の知識ならあるし、嬉しいことに食材は「のような物」とつくが、元の世界と変わらない物が多い。

いつか、創作料理として、家族に振る舞うのも悪くない気がする。

3歳：「才能に関するエトセトラ」(1)「

「ただいまー！」

「お、おかえりなさい、ユリイちゃん……………はあはあ」
「おかえりなさい、ませ、お嬢様……………すうはあ」

家に帰ると、まるで全力疾走した後のような母親とアイラさんが待っていた

母親は椅子に腰をかけて、アイラさんは箒にもたれかかるようにして、息を整えている。

……………結局、2人で後をついてきてたんだな。

花を摘んだ後、オレは急に立ち上がると、走って屋敷に向かってみた。

まあ、そんなオレの動きを見た2人は慌てて走って先回りをした、と……………その努力に免じて気がつかない振りをしてあげるよう、服についている葉っぱとか。

「お母さま、ありがとうございました！ これは、かんじやの気持ちです」

そう言って、笑顔と共に小さな花束を差し出す。

「まあまあ、可愛いお花ね。アイラさん、花瓶に活けておいてもらえるかしら？」

「かしこまりました」

オレの手から花束を受け取った、アイラさんが部屋から出て行った。

「お母さま、明日からも1人でおサンポに行ってもいいですか？」

「うん、そうねえ。」

ユリイちゃんは、ちゃんと約束を守ってくれてたみたいだし……1人で水の近くに寄らない、あんまり遠くに行かないって約束してくれるなら

「はい、やくそくします！」

軽く語るに落ちてるよな。水辺に近づかないという約束を守ったと言っののは、見守っていないと言えないセリフだろう。

まあ、しばらくは、後ろについてくるかもしれないけど、こっちが注意すればいいか。

「それじゃあ、夜のご飯まで、お庭であそんでいますね」

「はい、何かあったら、すぐに戻ってくるんですよ」

「はい！」

他の人の目がある所では、あまり派手なこととはできない。
なので、軽く身体を鍛える程度にしようと思う。

裏庭ではなく、玄関側の表庭で、体操をしたり、走ったりする。
幼少期は下手に筋力をつけると成長を阻害すると、前世で聞いた
覚えがあるので、あくまでほどほどを心がける。

ムキムキマッチョな美少女っていうのも微妙だしな。

目標はスラリとしなやかで細身の美少女だ。

今のところは、まだ幼児体型っていうか、ぷにぷにした感じが否
めないが。

運動が終わったら、緑色のアリみたいに地面に巣を作っている虫
を観察したり、アイラさんと一緒に花壇の水やりを手伝ったり、ロ
イズさんがウマを世話するを眺めたり。

まあ、3歳児のできることなんて限られているわけで、これが結
構時間が余る。

将来に向けて色々とやっておきたいこともあるし、今日からは、
その時間も有効に使っていこう。

そんな決意を固めていると、父親が馬に乗って帰ってきた。
と入れ替わりに、アイラさんが村へ帰っていく。

こうして、オレの新しい1日は終わった。

3歳：「才能に関するエトセトラ」(2)「

魔術の特訓を始めてから、1巡り(10日)が経った。

今日は、水の季節の5巡り目の第8日である。

この1巡りの間、オレは森の広場で色々な魔術を試して、その効果に喜んだり、楽しんだりしていた。

「ジイム ジャート
ラトレ・下・ジヤ《音を聞くは兎の耳》」

まず、森の広場に到着したら、この魔術を使うようにしている。簡単に言えば、聴力を上げて、周りの音から人や獣の気配を察知する魔術だ。

あまり魔力は消費させずに使っているの、それほど遠くまでは分からないが、母親やアイラさんが近くにいたとしたら、発見することはできる。

魔術が使えるようになった翌日、一番最初に試した魔術だった。

この魔術で2人を発見したら、子供っぽく怒って見せたり、悲しんで見せたり、天才子役ばりの演技を試してみた。

そんなことを何回か繰り返したせいかな、オレの行動に安心したのか、ここ数日は後をつけてくることがなくなった。

こうして、やっと大々的に魔術の特訓ができるようになった。

いくつか魔術を試しているうちに、自分の魔術の才能に関する発見がいくつかあった。

まず、特訓を始めて10日目にして、オレの最大保有魔力量が26点になったこと。

これは1回の「魔力上げ」における保有魔力量の増幅量が、1%どころか3%もあつたことになる。

1%とか3%とか、数字で書くと誤差のようなものだが、実際にはバカにならない誤差だ。

この調子が1年以上続くなら、相当な保有魔力量の増加が見込める。成長期だからだろうか？

次に、地属性系、水属性系、火属性系、風属性系、動力系、生体系、思念系、時空系の主系統、概念系、操作系の補助系統、全10系統における基本的な“ルーン”はどれも問題なく使えたこと。

必要消費魔力が大きくて試せていない“ルーン”もあり、現時点では、どの系統との相性が良いのかは分からない。

多分だけど、生体系の“ルーン”とは相性が良い気がする。

これは実感と次の発見と関係する予測だ。

「ダス・ド・ローア《石の弾》！ …… やっぱ、ダメかあ」

そして、唯一困った発見は“攻撃魔術を一切使えない”ことだ。

初歩中の初歩、小石を投げつける攻撃魔術さえも使えない。

保有魔力には一切の問題はなく……オレには、思い当たる節があった。

「これは、きつと【一角獣の加護】……………だよなあ、はあ」

思わず3歳児には似つかわしくない溜め息がもれてしまう。

【一角獣の加護】とは、生れつきでのみ人類が持つことができる
魔導【先天性加護】の1種だ。

全ての系統の“ルーン”との適性が必ず悪くならない（特別に良くなることもない）代わりに、攻撃魔術が一切発動しなくなるというものである。

オレの『グロリス・ワールド』のキャラクターに持たせていた魔

導だから詳しく覚えていた。

能力的には悪い魔導ではないのだが……。

あ。
巨大な火の弾とかをドツカーンってやつに、憧れてたんだけどな

ドツカーン……………。

3歳：「才能に関するエトセトラ」(3)

さて、思わぬところで落とし穴があったが、オレの新しい身体は予想以上の才能を秘めているらしい。

攻撃魔術こそ使えないものの、間接的に敵を対処できそうな魔術はいくつもあるし、問題はそれほどない。

今後のことを考えるなら、身を守るためにも戦闘技術は身につけたい所だ。

前世の記憶を元に、覚えている範囲で格闘技の知識などはあるが、実際に動くとなると難しい。

ボクシングのイメージはあるのだが、実際に正しいパンチを打っているかが分からない。

オレの経験不足による問題だ。

それに、この世界なら剣や槍など、武器による戦闘技術が一般的なものであるはずで、それも是非学びたい。

しかし、覚えたいことばかりが増えていくなあ。
少し目標を整理を試みよう。

まず、母親から教えてもらっている文字。

ひとまずは、父親の書齋にある本を1人で読めるようになりたい。この世界の本は貴重らしく、書齋にある本の数は多くはないが、まあ少なくともない。

本を読めるようになれば、そこから知識を得ることができる。ネットワークを使えば、気になる情報を好きなだけ調べられた前世とは比べべくもないが。

この世界の常識。

これについては、元の世界と大きく変わる所が少ないために助かっている。

ちなみに、お金の単位は「シリル」らしい。父親が話しているのを聞いた。

それでも具体的な硬貨や貨幣価値は分からないし、うっかり常識なことをしてしまうかもしれない。

情報収集は要継続だ。

身体を鍛えること。少なくとも健康な肉体を維持。

できることなら、格闘技や剣術なんかもきちんと学びたい。

問題は、この世界の婦女子が、そういった野蛮なことに興味を持つことが許されるかどうか。

雰囲気的に「家主が絶対で、娘は政略の駒」みたいな価値観がまかり通っている可能性だってある。

……………想像しただけで、娘に甘い父親に感謝の念が絶えない。

いざという時のために野外で活動する技術。

オレはアウトドアとかに夢を見て、ネットワークでその手のコンテンツを読んでいたりした。

いつかお金が溜まったら、とか思っていたんだけどなあ。

実地で試したことがないので、機会があれば訓練の必要はありそうだ。

ただ、これは優先度は低めで後回しかな。

“入浴”についての普及。そのための風呂の作製。

お風呂は日本人の心です。

できる女子^{おなこ}の必須スキルとして、料理や裁縫などの家事も忘れてはならない。

料理については、元の世界の料理をいくつか再現してみたいところだ。

食事はマズイどころかとても美味しいのだが、こっ、魂に刻まれた懐かしい味というのはあるのだ。

味噌と醤油については、諦めているが……。

最大保有魔力量アップ。

この世界の治安はよさそうだが、それでも元の世界の日本以上に

安全とは言えないだろう。

その際にものを言うのはオレにとって魔術であり、その魔術を十二分に使うために必要になる魔力は、少なくて困ることはあっても、多くて困ることはない。

大雑把に並べてみたけど、こんな感じか？

将来的には、世界を旅して回ったりしたいが、これは両親が許してくれるかが問題だ。

女の1人旅、しかも良家の第一子となれば、箱入りは確定かなあ。

少なくとも、成人になる15歳までは親元にいるのが“普通”だろうし。

まあ、新しい人生始まったばかり、ゆっくりと頑張るか。

アイラ：「うちのお嬢様のすごい話」

私の幼い頃の記憶は、辛く厳しいものが多いです。

いや、その当時は辛いという感情すら持っていませんでした。

今だから、当時の辛さが理解できます。

6年前まで、私が生まれた村を含む近隣の村は、当時の領主によって厳しい税を課せられていました。

国の定めていた税金の割合よりも何倍も高いそれは、当時の領主が私腹を肥やすためのものでしかありませんでした。

税という名目で収穫物のほとんどが奪われ、私たちはわずかに残った作物や野山に生えている草を食べていました。

それは6年前、今の旦那様たちが小隊を伴って、領主の捕縛にやってくるまで続いていました。

そして、新しく領主に任命された旦那様の下、私たちの村に笑顔が生まれました。

最初の頃こそギクシャクとした関係だった私たちと旦那様たちでしたが、誠実な旦那様の人柄に触れ、徐々に両者の垣根は低くなっていったと思います。

事件が一段楽した後、なんと旦那様とロイズ様は、村々を回り、助けに来ることが遅れたことを謝っていたらしいです。

両者が打ち解けた最大の切っ掛けは、奥方様がお嬢様をご懐妊なさったことです。

奥方様をご懐妊されたと聞いた近隣の村の人たちは、普段からの感謝の気持ちを込め、自主的に旦那様に祝いの品を届けました。

それらの祝いの品を旦那様は断るわけではなく、やってきた人みんなにお礼を言うと、近隣の村の人たち全員を集めて、祝いの品のお礼としてご馳走を振舞ってくれました。

あの時は、会場に選ばれた私の村が、まるでお祭りのような賑わいを見せていました。

奥方様の出産にあたり、お屋敷のお手伝いさんという名誉ある役目は、最も近い村で育った私に白羽の矢が立ちました。

私が村長の家の第一子で、村で2人しかいない未成人の女性だったのもあります。もう1人は歯が生えたばかりの赤ん坊でした。

勤め始めたばかりの頃、失敗ばかりの私に、奥方様は怒るわけでも呆れるわけでもなく、むしろ、私の心配をするように接してくれました。

そんな奥方様に、1巡り（10日）も経たないうちに私はすっかり心酔してしまいました。

もちろん、旦那様やロイズ様も優しく素敵な方々ですが、奥方様は私にとって第二の母というべき存在です。

私もお屋敷での勤めも慣れ、時間ができると奥方様から「行儀作法を覚えてみない？」と尋ねられました。

最初は、恐れ多くて断っていました。が、何度も勧めてくれる奥方様や「生まれてくる子の手本になって欲しい」という旦那様のお言葉を受け、私は行儀作法を学び始めました。

行儀作法だけでなく、文字の読み書きや、簡単な計算などで、勉強も一緒に教わるようになりました。

教わることの全てが新鮮で、今まで歩いていた夜道に、突然ランタンの明かりをもらったような気分でした。

お嬢様は、生まれたての頃から、すごい方でした。

普通、赤ん坊は意味もなく泣き喚いたり、人の顔を見ては嬉しそうに笑うものです。

赤ん坊だったお嬢様は、無駄に泣いたりせず、私が何かを言ったりその言葉が分かっているかのように反応を示してくれました。

例えば、「おやすみなさい」と言えば、目を瞑つむって横になり、「ゴハンですよ」と言えば、静かに近寄ってきました。

3歳になり、ある程度言葉がハッキリと喋れるようになると、お嬢様のすごさが本格的に発揮され始めます。

以前から、奥方様に本を読んでもらっていましたが、ある日拙い言葉で「文字を覚えたい」と言ったのです。

それは「文字」というものが、何であるか分かっている様子でした。

お嬢様は、誰に教わるでもなく、「文字が言葉を表している」ということに気づいていたのです。

それは私が文字を教わりだした時、最初に戸惑った部分でもありました。

それを3歳になったばかりのお嬢様が理解されていることに、悔しさを感じる隙もなく、ただ驚きました。

文字の勉強を始めると、お嬢様はすぐに簡単な単語を書けるようになっていました。

村にいる子供たちとは、比べ物にならないくらいの聡明さです。

貴族のお子様というのは、これが普通なのかな？と、思い切ってロイズ様に尋ねてみました。

「いやいや、農民の子だろうが、貴族の子だろうが似たようなものだ。お嬢様は、きっと“地精霊の申し子”に違いない」

それで納得しました。

賢さを司る地精霊様の加護を得ているならば、幼くして賢くてもおかしくありません。

勇気を振り絞って、ロイズ様に質問したのは正解だったようです。

5歳：「お客様がやってきました(1)」「

今日は森の季節の4巡り目の第7日。

オレがこの世界に生まれてから、5年と2つの季節が過ぎた。

「わ。アイラさん、きれい」

「ユリイちゃんもそう思う？ やっぱ、女の子は着飾ってこそ華よねえ」

母親に呼ばれてきた部屋の中に、ドレスを着たアイラさんが立っていた。

アイラさんは線が細い綺麗系美人なので、深緑色の少し光沢がある布を使ったスラリとしたドレスが本当によく似合っている。

薄く化粧もしているみたいで、白粉おしろいをはたいて、口紅も少し塗っているようだ。

「お母さま、このドレスはどうしたのですか？」

「ん、わたしがあの人と結婚したばかりの頃に着ていたドレスよ」

「お、奥方様……やっぱ、私にはこのようなドレスは分不相応です……」

実は先ほどから、アイラさんが静かだなあ、と思ったら緊張で身体が強張こわばっていただけのようだ。

アイラさんは、キリっとした目つきとクールな雰囲気の外見とは裏腹ひらひらに、ときどき何もないところで転んだり、馬に触れるのに怖がったりと、内面はとても可愛い人であることが、最近分かってきた。

「そんなことないわ、とても似合っているわよ？ それとも、わたしのお下がりになんてイヤかしら？」

「め、滅相もあります。けど、普段からお世話になっているのに、こんな綺麗な服まで貸してもらって……」

「わたしたちの方こそ、日頃からアイラちゃんのお世話になっているんだから。」

それに貸すんじゃないくて、そのドレスはアイラちゃんに上げるの。いい、アイラちゃんは、今度のお祭りでは主役なのよ？ もっと胸を張って楽しまなきゃ！！」

母親はすっかりアイラさんに夢中のようだ。

その姿が人形の着せ替えごっこをする女の子みたいに見えるのは、どうかと思う。

ん？ 今のセリフに気になる点が2つほど。

母親は普段、アイラさんのことを「アイラさん」と呼び「アイラちゃん」と呼ぶことはない。

オレが知らない所で「アイラちゃん」と呼んでいたのだろうか？

確かに、母親にとってアイラさんは、妹のような存在かもしれないし。

それから「今度のお祭り」というのは、2巡り後の第6日（19日後）にある豊穰祭のことだろう。

近隣の村の人たちが一同に集まって行なわれる盛大な宴会だ。

けど、その祭りの主役とはどういうことだ？

「んつと、お母さま？ お祭りの主役って、どういう意味ですか？」

「あ、えつとね、ユリイちゃん。豊穰祭はね、コレから種をまく麦の豊作を祝うためのものなの」

「はい、知っています。地の精霊さまに、お願いをするお祭りです」
「その通り。あとそれから、この近くの風習で、その年に成人した新成人のお披露目も兼ねているのよ。」

新成人になった若い人は、その日のためにとっておきの服を用意するの。

女の子なら、やっぱりドレスよ。ユリイちゃんは、10年後の楽しみね」

なるほど、豊穰祭はいわゆる成人式も兼ねているのか。

.....。

……アイラさんで、今年で15歳っ!?

母親が「アイラちゃん」と呼ぶもの納得だ。歳が8つも違う。

いや、すっかり20歳はたちぐらいかと思っていた。

母親が童顔のせいか、以前からとても年上に見えていたし……。

5歳：「お客様がやってきました(2)」

「それじゃあ、今度このお化粧品も少し分けてあげるから、当日はアイラさんをお願いしてね」

「ありがとうございます」

「あゝあ、本当なら、わたしもお祭りでアイラさんの晴れ姿を見たかったんだけど」

「奥方様は、お体を大事にしてください」

残念そうにボヤク母親のお腹を、アイラさんが心配そうに見つめる。

「初めてじゃないんだし、大丈夫よお」

そう言いながら大きくなった自分のお腹をさする。

もうすぐオレに、妹か弟ができるらしい。

4歳の誕生日に自分の部屋をおねだりし、両親とは別の部屋で寝起きをするようになったのも、間接的な理由かもしれない。

前世では本当の兄弟姉妹に憧れていたけど、まさか、転生して弟か妹ができるなんて、夢にも思っていなかった。

妹なら可愛らしく、弟ならオレが立派な男に育ててやろうと密かに決意している。

「マリナ様ー、どちらにいらっしゃいますかー？」

「あら？ ロイズさん、何の用かしら？ はい、こっちですよー」

母親が返事をして、しばらくしてコンコンと扉をノックする音と共にロイズさんが入ってきた。

「こちらにいらっしゃいましたか。おや？」

入ってきてすぐにドレス服姿のアイラさんが目に入ったようだ。

「ふふふ、アイラさんのこの姿はどうかしら、ロイズさん？ 殿方を代表してのご意見を聞かせて」

「ん？ とても似合ってるんじゃないでしょうか。」

「アイラ嬢、まるでどこかのお姫様みたいだな」

「あ、ありがとうございますゆー！」

噛んだし、白粉をはたいた頬が真っ赤になっている。褒められ慣れてないんだらうなあ。

ロイズさんは臆面もなく褒めれる辺り、女慣れしてるって感じがして、男としては憧れるな。

「それで、何かあったのかしら？」

「あ、そうでしたそうでした。シズネさんが到着しましたよ。ひとまず、応接室に通しておきました」

「まあまあ、分かったわ。教えてくれてありがとう。」

「アイラさん、その服を着替えたら、お茶の用意をお願いします」
「かしこまりました」

それだけ言うと、母親はあわただしく部屋から出て行っていった。

「ロイズさん、シズネさんというのは、だれですか？」

「ああ、王都の病院に長年勤めている女医さん、えーと、女性のお医者さんだな。」

「今度のマリナ様のご出産のために、わざわざ屋敷までお出でくださってるんだ。」

「今日から出産までの間、うちに滞在していただけたことになる。」

「まあ、日頃の激務への休養も兼ねているみたいだから、持ちつ持たれつだけだな。」

「ちなみに、お嬢様が生まれた時も、シズネさんが立ち会われているぞ。」

「つまりは、産婦人科医みたいな人かな？」

「覚えていません……」

「そりゃそうだ。お嬢様もご挨拶しにいくか？」

「はいっ！」

少なくとも、母親だけでなくオレにとっても恩人である人だ。し
っかり好印象を与えておかねば。

5歳：「お客様がやってきました(3)」

コンコン、ロイズさんが応接室の戸をノックして、中に入っている。

ロイズさんに続いて、オレも応接室へと入る。

「失礼します」

「しつれいします」

入ってすぐに3人がオレとロイズさんの方を顔を向けた。

1つは母親のもので、残りは見知らぬ女性と男性のものだった。

女性は母親と向かい合わせにソファへ腰を掛けており、男性がその女性の後側に立っていた。

女医ということだから、女性の方がシズネさんだろう。

となると、男性の方は、医者としての部下とかお弟子さんか？

「お初にお目にかかります。ガーロオ・バーレンシアが第一子、ユリア・バーレンシアともうします。」

このたびの出会いに、精霊さまのしゆくふくがありますように」「
「おやおや、これは、ご丁寧に……：国立中央病院が産医、シズネ・セイロウインと申します。」

小さなご令嬢に、精霊様の祝福がありますように」「

やはり、女性の方がシズネさんであっていたようだ。
オレの挨拶に、わざわざ椅子から立ち上がったって挨拶を返してくれ
た。

黒髪の黒い瞳で、お医者さんというよりも、少しご年配の貴婦人
といった雰囲気品のいいおば様だ。口調は気風のいいざっくりと
した感じ。

歳は40代くらいだろうか？ ロイズさんより年上に見える。

「……………??」

そして、オレの視線と立っている男性の視線が合う。
お互いにキョトンとした視線である。

「おい、ハンス。お前も自己紹介しろ」

「へ？ あ、ああ！」

“地軍”十二番隊が副長、ハンス・イクルートスです。

今回はシズネさんの護衛として参りました。可愛らしいお嬢様と
の出会いに、精霊様へ感謝を」

「バカ、それじゃあ口説き文句だろうが……………」

ロイズさん声を掛けられて、初めてオレの視線の意味に気づいた
のか、ハンスさんがあわてて挨拶をする。

濃い金髪と深い青の瞳で、軍人らしく身体が全体的に引き締まっ

ており、父親とは違った感じの美青年といった所だろうか。

「あの、ハンスさま、質問してもいいでしょうか？」

「様付けはいりません。ハンスと呼んでください、ユリアお嬢様」

「じゃあ、わたしも、さまはいりません。ロイズさんとお知り合いなのですか？」

「ロイズ……？ あっ！ 以前、おれはコーズレイト隊長の部下としてお世話になってました」

「元隊長だ。というか、お前、軽く俺の名前を忘れてただろ？」

あはは……と、ロイズさんの冷たい睨みにらみを、ハンスさんは苦笑いで誤魔化す。

なかなか憎めない人のようだ。

しかし、ロイズさんは元軍人ってことか。そう言われると、そう見えてくるから不思議だ。

そんなオレたちのやり取りを、微笑みながら2人の女性が見ていた。

「失礼します」

と、ちょうどそこにアイラさんが入ってきて、お茶の用意が整ったことを知らせてくれた。

ちょうどお昼時だったので、軽食としてサンドイッチも用意してくれたようだ。

そのまま食堂に移動して、皆で昼食の時間となった。

いつもの昼食と違い、アイラさんは給仕に徹していたが。

5歳：「訓練の成果と加護の力（1）」

「フェイス
リアート
フェス・ド・レム《空を駆けるは翼の足》」

消費魔力を最大限に上げた出力で、自分の脚へ魔術をかける。

オレは、トントンと空気を蹴り、階段を上るように空中へと駆け上がる。

「ジス・ド・ダス
ウイス・ド・モトヤ
ティニヒアースペスール《地の枷、風の錘より軀を解き放つ》」

続いて、同じく消費魔力を最大限に上げた出力で身体にも魔術をかける。

魔術がかかると、自分の身体がフワリと体重がものすごく軽くなつたかのように感じる。

正確に言えば、オレの身体は今、重力の影響をほとんど受けていない極低重力状態になっているのだ。

「よっ、ほっ、はっ……」

そして、オレは“空中を蹴りながら飛び回る”という、魔術なし

では有り得ない動きをしていた。

今、オレがいるのは、3歳の時から通っている森の広場である。つまり、この曲芸のような動きも魔術の訓練なのだ。

これが空を飛ぶ魔術の開発と訓練なのか？ と聞かれれば、オレは否と答えなくてはいけない。

正直な話、空を飛ぶだけなら、もっと楽で簡単に自由に飛びまわれる魔術がある。

わざと複数の魔術を用いて空中を駆けている理由は、そっちの方が“必要となる消費魔力が多くなる”から、だ。

3歳の時から始めた「魔力上げ」の結果、オレの最大保有魔力は順調に増え続けた。むしろ、増え過ぎた。

消費魔力を最大限にした魔術を無駄に連続で使わないと、保有魔力が空にならない。

最近では、無理に「魔力上げ」をせず、気が向いた時にだけ「魔力上げ」を行なうようになっていた。

魔術の特訓を通じて、2つ覚えたことがある。

1つが同じ魔術でも、消費する魔力によって、その魔術を強める

ことができること。

これは単純に効果を強化するだけではなく、制限時間のある魔術の効果時間を延長することもできた。

相応の魔力を消費すれば、効果の強化をしながら効果時間の延長を同時に行なうこともできる。

それから、持続中の魔術は自分の意思で解除することはできるが、途中で解除しても、魔術を使うのに消費した魔力は戻ってこない。

魔術を使つてすぐに解除すると魔力は無駄になるが、実際にはその無駄が「魔力上げ」をするのには役立つていた。

それともう一つ、自分の中の保有魔力の残りが、大体どのくらい残っているかが分かるようになったこと。

これは、何度も保有魔力を空にしていた結果、身に付いた感覚だ。

まあ、かなり魔術を無駄撃ちしない限りは空にならないので、役に立たない感覚かもしれない。

と、オレの意識に広場へ誰かが近づいて来ている事を示すイメージが浮かんだ。

それは、オレが事前に使っていた魔術の効果だった。

オレは、この広場から大体50メートル以内に誰かが入ってきたら、

相手に気づかれぬようにオレにだけ知らせる結界魔術をかけていた。

結界魔術とは一定の空間を対象としてかける魔術で、魔術の形態の1つだ。

付与させる効果や条件を変えることができ、さまざまな応用が利く。

もっと強力な結界魔術を使えば、そもそも立ち入らせることもできなくなる。が、そんな結界魔術を使ったら、気づいた誰かが騒ぎ出し、面倒ことになるのは明らかだ。

最低限、誰かが近づいてくることが分かるだけで十分だった。

とりあえず、かかっていた魔術を全部解除し、オレは地面にゴロンと仰向けに寝転んだ。

しばらくして、森の地面を踏みしめる足音がした。

上半身だけ起こして、そちらを見ると、少し前に（オレにとって）初対面の挨拶をしたばかりの女性が立っていた。

5歳：「訓練の成果と加護の力(2)」

「あ、シズネさんだ」

森の広場にやってきたのは、シズネさんだった。

オレの掛け声で、向こうもこっちの存在に気づいたようだが、少し驚いていた表情をしている。

「おや、ユリアちゃん……ここで何をしてたんだ？」

「おさんぽ中です。今日はお天気がいいので日向ぼっこをしています」

「地面に直接座ったら、お尻が冷たくならない？」

「大丈夫です　シズネさんもおさんぽですか？」

ここに来たのは、たまた散歩の途中だったのか？　それなら問題ないんだけど……。

「ああ、散歩の途中で、何か強い力の気配を感じたので来てみたのだけど……ユリアちゃん、何か変なことなかった？」

……ヤバッ!?

もしかして、シズネさんで、そういうのが分かっちゃう人だった

り？

今まで、誰も気づいてなかったから油断してたかも……。

「強い力って、なんですか？」

「いや、あくまで勘というか……。あたしには【野兎の加護】があるからね。」

何か強力なモノが近くに現れたり、よくない出来事が起こる時は、何となく分かるのさ」

「ウサギさんのカゴですか？ ウサギさんがお野菜を運ぶのですか？」

「ああ、そっちの籠じゃなくて、加護ね……。ええっと、あたしのことを、ウサギさんが守ってくれるんだ」

「なるほどお……」

分かってないのを分かった振りをする子供の振りをして誤魔化す。ややかしいな。

ふと、シズネさんは、どうやって自分の加護を知ったのだろうか？ ……って、魔術か？

『グロリス・ワールド』でもモンスターのデータを看破する魔術があつたし、応用すれば人を調べることができそうだ。今度試してみよう。

しかし、【野兎の加護】を持っているのか。

確か『グロリス・ワールド』だと、近くにいるモンスターやトラップの位置が分かるという魔導だったはず。

低ランクながら使い勝手がよく、キャラクターに持たせているプ

レイヤーが多かったのを覚えている。

『グロリス・ワールド』の【先天性加護】は取得条件の難しさによってランクがあり、一番低いランクが【小獣の加護】、ついで【霊獣の加護】、最も取得の条件が厳しい【幻獣の加護】と3つに分かれていた。

この分類は、もしかするとこの世界でも通用するのかもしれない。

ちなみにシズネさんの【野兎の加護】は【小獣の加護】に、オレの【一角獣の加護】は【霊獣の加護】に分類される。

この分類に似たようなもので【精霊の加護】があるが、これは【先天性加護】とは別で、ほとんどが後天的に直接精霊から与えられる加護のことだ。

加護の力も、与えてくれた精霊の力が反映されるため、最も強い【精霊の加護】は、精霊王から与えられたモノとなる。

それはさておき
閑話休題。

シズネさんが感じた強い力の気配というのは、もしかしなくても、オレの魔術が原因だろうか？

ネットゲーマーの血が騒ぎ、ただひたすら「魔力上げ」をしていたが、今の時点でこの世界の平均的な魔術師より、オレの方が強い魔力をもっている可能性が高い。

5歳児で、今のオレくらい最大の保有魔力量があるのは、どの程度珍しいことだろうか？

1万人に1人くらい？ それ以上？ ……比較できる情報がない

のが悔やまれる。

「しかし、随分大きくなったな。それにしっかり者だ。

あたしが最後に見たユリアちゃんは、こくんなに小さかったのに」

そう言って、右手の人差し指と親指を広げてみせる。いや、そのサイズだと胎児では？

「お姉ちゃんになるから、しっかりしなきゃダメなのです」

「そっかそっか、お姉ちゃんになるんだもん。楽しみかい？」

「はい！ 赤ちゃんが生まれたら、たくさんかわいがってあげます」

これは本心からの言葉だ。初めて魔術が使えた時以上にワクワクしている。

「そろそろお屋敷に戻ろうか？」

「はい、わたしもいっしょに帰ります」

今日はこの辺でいいか。それにシズネさんがいる間は、あまり魔術は使わない方がよさそうだなあ。

いっそ、しばらく魔術の特訓はお休みということにするか。

5歳：「男たちの交流（1）」

裏庭に近づくと、前方から木と木がぶつかり合う音が聞こえてきた。

「何の音でしょうか？」

「おや、まだ続いていたのか」

シズネさんは、音の原因が何か分かっているようだった。

森の小道を抜け、裏庭へと出る。

「はあっ！ てあっ！！ …… はあはあ」

「最初の勢いは、どうした？ 息が上がってきたじゃないか」

「ちっ、腕が衰えたかもしれんが」とか言ったのはブラフですか、隊長っ！ とあっ！」

気合と共にハンスさんが、ロイズさんに切り掛かる。

2人の手には、木でできた剣が握られていた。つまり模擬戦みたいなものか？

「元隊長だ。俺は「かもしれん」と言ったんだ。そういうお前の方は、「昔の自分じゃない」と言っていたのは嘘じゃなかったようだな。

腕を上げたじゃないか」

「そんな余裕の顔で言われましても、凹むだけですけど、ねっ!!」
「そう言うお前こそ、まだ、喋る余裕があるだけ、立派になったもんだ、そらっ!!」

カコーン……トサツ。ハンスさんの木剣が地面に転がる。

左上段から右下へ振り下ろすようなハンスさんの一撃を、ロイズさんが斜めに構えた木剣で受け止めつつ、相手の振り下ろす力を利用し、木剣を吹き飛ばした。……と言うのは、後で教えてもらったんだけど。

ロイズさんが切り返す流れで、ハンスさんに剣を突きつける。勝負ありだ。

「まだまだだな、続けるか？」

「参りました」

「ふむ、お嬢様とシズネさんが戻ってこられたようだ。ちょうどいいから切り上げるか。おい、ハンス」

「ご指南ありがとうございます、なんですか？」

「滞在中は毎日稽古をつけてやる。王都に帰るまでには俺から一本取れるようになってみる」

その一言が止どめになったのか、ハンスさんががっくりと膝から崩れ落ちる。

「おかえりなさい、お嬢様、シズネさん」

「はい、ただいまもどりました！」

「うう、バカンスのつもりだったのに。ちょっと隊長の鼻を明かしてやろうという軽い気持ちで……」

「なあに、俺も相手がいなくて少しモヤモヤしてたんだ。感謝されるほどのことじゃない」

「……今のセリフのどこに感謝の言葉がありましたかっ？」

ハンスさんで、顔やがっしりとした肉体はカッコイイんだけど、中身が少し三枚目だなあ。

いや、ここは親しみやすくて好ましい人柄と言っておこう。ものは言い様だが。

「あの、お水飲めますか？」

「ありがとうございます。アイラ嬢、今の貴女は花の精霊様のようだ」

「え、あ、その……」

アイラさんがハンスさんにタオルと水を渡していた。

どうやら、近くで待機していたようだ。

そのアイラさんの手を握って熱っぽく見つめるハンスさん。

アイラさんの方は、少し困惑と言っか、恥ずかしがっている感じか？

「ほう、まだ物足りなかったか？ もう一本行くか、ん？」

「十分であります、隊長！」

「ロイズ様も、どうぞ……」

「ん、ありがとう、アイラ嬢。」

「というか、ずっと見てたようだが、つまらなかったらどう？」

「いえ、そんなことはありません！」

「そうか？ なら、いいが」

オレも途中からだだが初めて見た生の剣術は迫力があり、結構楽しかった。

素人目ながらハンスさんの動きも決して悪くなかったが、ロイズさんの方はまだまだ余力があり、何枚も上手って感じた。

しかし、こんな身近に剣の使い手がいるとは、……可愛く頼んだら教えてくれるかなあ？

5歳：「男たちの交流（2）」

「あつはっは、それはそれは、到着早々お疲れ様でした。いや、頑張ってください、かな？」

「ケイン、人事だと思って……」

「実際に僕ではなく、ハンスのことじゃないですか」

「せつかく他のヤツらを出し抜いて、この任務についたってのに……おれのバカンスが、憩いの日々が……」

「何を言う、充実した任務にしてやろうという俺の優しい心が分からないのか？」

「くそー、こうなりや、飯と酒だけが楽しみだ。飲むぞー！！」

「あつはっは、好きなだけ飲んでいってください」

父親が嬉しそうにハンスさんに酌をする。父親もハンスさんもお互い名前を呼び捨てだ。

身分を越えた友情ってヤツか？

なんだか父親の今まで見たことのない一面を見たな。

「まったく、男ってのは、いくつになっても子供だね。バーレンシア夫人やユリアちゃんもいるって言うのに」

「ふふふ、あの人はわたしたちに気をつかって、普段はあまり飲まないのです。」

軍に所属してた頃からの親友であるハンスさんがいらして、浮か

れているでしょう。

それにあの人の酔っ払った所も、なかなか可愛いと思いますの

「あたしは酔っ払いを可愛いとは思えたことはないけどね。ユリイちゃんは、今のお父さんをどう思う？」

「んつと、楽しそうなので、わたしも見ててうれしいです」

「はー、ほんとよくできた子だねえ……今年で5歳だっけ？」

「はいっ！」

食堂での晩ご飯が終わり、そのまま男3人は酒盛りに突入、女3人はその隣でお茶を飲んでいた。

横から聞いていた話をまとめると、父親は結婚する前に王国軍に所属しており、その当時の部隊で最も気があった同僚がハンスさん、隊長がロイズさんだったみたいだ。

ただ父親とロイズさんは、父親が王国軍に入隊する以前からの知り合いだったようでもある。

本来、ハンスさんは父親を呼び捨てにできるような生まれではないのだが、そこはそれ軍の中では身分より階級と実力が物を言う世界であり、今でもプライベートではお互いに名前で呼び合う仲らしい。

「少し薄暗くなってきましたね」

「あ、わたしが入れてきます」

食堂にはランプがあるのだが、その光量が落ちてきていた。

ランプに“石”を継ぎ足すために席から立ち上がるつとする母親を止め、代わり席を立つ。

そのまま、ランプの近くに移動すると、近くにあった皿から黒い小石を1つ取って、水が入ったランプの中に入れる。

ランプの中に入れた石は、すぐに白い光を放ち始めた。

ちくしつせき蓄光石 と呼ばれるこの石は、本来乳白色をしているのだが、太陽の光を浴びると黒く変色する。

そして、黒くなった蓄光石は、水などで濡れると発光し、しばらくすると光が収まり、元の乳白色に戻る。

直径が大体1イルチくらいの蓄光石を十分に太陽に当てると、水に濡らしてから1刻から1刻半（2〜3時間）くらいは輝き続ける。

その性質上、ランプの構造も単純で、水が漏れない透き通った容器があればよく、実際はただのガラスのコップで代用することも可能だ。

また、蓄光石の利点は何度でも繰り返し使えるだけでなく、比較的安価で手に入りやすく、ランプを倒しても火事になる心配はないと、いいこと尽くめの道具なのだ。

「ユリイちゃん、ありがとう」

「しかし、ユリアちゃんは可愛いなあ……」

「当然でしょう。僕のマリナが生んでくれた愛らしい妖精さんです。先に言っておきますが、ハンス、貴女にユリアはやりません」

「ふっ、こっちだってケインをお義父さんと呼ぶのだけは勘弁だか

らな」

「それこそ安心してください、そんな事態は絶対になりませんから！ というか、ユリアは嫁になんかだしません！（ダンダン）」

「あっはっは、親バカだ、親バカがいる！ ケインの親バカっぷりに、かんぷあ〜い！」

うん、いい感じに酔ってるなあ。

ロイズさんのほうはまだまだ平気みただけど、父親とハンスさんのほうは完全にできあがってる。

しかし、「お前に娘はやらん」を生で聞けるとは思わなかった。当事者的な意味で。

まあ、オレは可愛いお嫁さんもらうつもりで、お嫁さんになるつもりは……………あれ？

オレは前世では男だったけど、今の性別は女、つまり嫁はもらう方じゃなくて、なる方なのか？

……………これは盲点だった。

5歳：「男たちの交流（3）」

夜、オレはベッドで横になりながら、思考のループに陥っていた。原因は、今頃になって気づいてしまった事実のせいだ。

オレの記憶と嗜好しゅうこうは、主に前世の大杉健太郎、つまり男のものだ。

「そして、わたしの身体は、ユリア・バーレンシアという名がついた女のもの」

可愛らしい声が自分の口から零こぼれ落ちる。

将来、オレが取りうる道は3つある。

それは「精神的な男同士バラ」か「肉体的な女同士ユリ」か「孤高いちりんの独身」
かだ。

うーん、ハッキリ言って、こればかりは前世の記憶も頼りにならない。

なぜなら、前世はそれこそ生まれてから死ぬまで恋人というモノ
がいた例ためしがないからだ。

「精神的な男同士」は、最もオーソドックスな解決方法かもしれない。傍はたから見れば通常のカップルだからだ。

ただ、個人的には「肉体的な女同士」が捨てきれない。

今のオレなら、恋人にアイラさんかハンスさんのどっちかを選べと言われたら、迷いなくアイラさんを選ぶね。だって可愛い女の子の方が好きだし。

しかし、その場合、世間体に問題がでる。

まだこの世界の道徳観が分からないが、貴族とかは自分の家の血を残すことを至上としてそうだしな。

そして、最後の手段は「孤高の独身」、つまり一生涯未交際未婚を貫くというものだ。

……多分、人の暖かさを知ってしまったオレは、1人だけの暮らしには戻れないと思う。

そして、オレは……

「……………喉が渴いたな」

それ以上考えることをやめた。

結婚なんて、どんなに早くても10年は先の話だ……ビバ、問題

の先送り。

それにオレは、前世を含めて恋すらしたことがない恋愛未経験者なのだ

“オレの恋愛”が、心と身体のどっちに依存するのか分からないけど、今から悩んでも仕方がないと思う。

それに「楽しい人生を送ること」を目標にしたのだ。将来のことで、うじうじするのは面白くない。

なるようになるさの気持ちで、とりあえず割り切ってしまう。

「ん〜………《タル闇を見るは猫の瞳モアール》ヤッツ・下・モア》」

魔術を使い、自身の目に暗視能力を付与した。

台所で水瓶みずがめから水を飲んで、自室に戻る途中、両親の部屋の扉が開いた。

オレが隠れて様子を見守っていると、部屋からは、両親ではなくシズネさんが出てきた。

その表情は堅く、扉を閉めると小さく溜め息を吐く。

その様子を目撃したオレの中に、言い表せない不安と漠然^{はくぜん}とした恐怖が生まれる。

こんな時間になるまで、シズネさんと両親は何を話していたのだろうか？

それは、昼間の明るい時や食事をしながらでは、話せない内容なのだろうか？

……何がそんなにシズネさんの表情を堅くさせているんだろうか？

オレは、シズネさんがいなくなるのを確認し、急いで自室へ戻ると、そのまま毛布の中へと潜り込んだ。

そして、ギョツと眼をつぶり、眠気が襲ってくるのをジっと待った……。

5歳：「村の子供とオオカミの子供（1）」

それから3日間、特に変わったことはなく、あの夜の出来事は夢ではないか？ と思えるくらいに何事もなく過ぎた。

「それじゃあ、行って来ます」

「いつてらっしゃい、あなた。ユリイちゃんも気をつけてね」

「はい！ 行ってきます！」

今日はオレが屋敷から一番近くの村であるウエステッド村（アイラさんが住んでいる村）に行く日だ。

1巡りのうち、基本的に5日目と10日目は、昼間をウエステッド村で過ごすことになっていた。

最初は慣れなかった馬での移動も、最近は何となくコツが掴めてきた。と言っても父親が操る馬の前に座らされた2人乗りの状態だけで。

オレが馬を操るには少々背丈が足りない。

馬に乗って四半刻（30分弱）後、オレと父親は村の入り口に到着していた。

「おはようございます、ご領主様、お嬢様」

「ライラ殿、いつも出迎えありがとうございます」

「おはようございます。ライラさん」

「いえいえご領主様とお嬢様のためなら、お屋敷まで迎えに出ても苦になりません」

オレは父親に馬から降りしてもらい、ライラさんへいつもどおりの挨拶をする。

村の入り口でオレたちを迎えてくれた女性はライラ・ウエステッドさん。女性でありながら、この村の村長を務めている女傑だ。

元々村長だった旦那さんが数年前に亡くなり、一時的にと村長代理を始めたのだが、村の人たちの支えもあり、いつの間にか代理ではなく、本物の村長となっていたらしい。

「何か問題はあるかい？」

「問題と言っわけではないのですが、豊穰祭の件でいくつかご確認したいことが……」

ちなみに、アイラさんの実の母親でもある。なので、アイラさんの本名はアイラ・ウエステッドとなる。

アイラさんを産んだにしては、ずいぶん若く見えたが、母親と言マシナう例もあるので、そんなものかと思っていた。

アイラさんが15歳というならば、歳相応の女性だ。

髪の色は濃い茶色で、アイラさんの赤茶っぽい色は亡くなった父親からの遺伝なのかもしれない。

ただ、アイラさんと同じ少しキツイ感じの目付きと濃い茶色の瞳

が、2人が親子であることを示していた。

「それじゃあ、ユリア、他の村も回ってくるから、僕が帰ってくるまで我慢しておくれ」

「だいじょうぶです！ お父さま、行ってらっしゃい」

2人の相談が一段落つき、父親は再び馬に跨ると、馬上からオレへの別れの挨拶をする。我慢なんてしていません。

父親を見送ると、オレはライラさんに連れられて、ライラさんの家の近くへ移動する。

「それじゃあ、私は家にいますので、何かありましたら、すぐに声を掛けてください」

「はい、分かりました」

オレの返事を聞くとライラさんは家の中に入っていった。

ライラさんの家の横にある広場では、3人の子供がすでに遊んでいる。オレが近寄ると、向こうはオレが来るのを待っていたようだった。

「ようつ、今日こそは負けないぞ！」

「おはようです、ユリアちゃん」

「ゆうちゃん、おはよお」

いきなり勝負を吹っかけてきたガキ大将な少年がイアン。
ツンツンした赤髪に黄土色の瞳がヤンチャな性格を表している。
歳はオレの1つ上。

少しおっとりとして、どこか母親と同じ雰囲気を持った少女がサニヤ。
ニヤ。

絹のような黒髪に澄んだ青い瞳を持つ綺麗な少女だ。歳はイアンと同じで、オレの1つ上。

最後の少し舌足らずな挨拶をした小柄な少年がクータ、オレと同じ年ながらオレより頭一つ小さい。

赤茶の髪に焦げ茶色の瞳、いつも無邪気そうにニコニコしている小犬系癒し少年である。

「イアン、サニヤちゃん、クータ君、おはようございます」

今ここにいないが、この3人の兄貴分的な存在であるシュリという少年とその妹のシュナちゃんを含めた5人が、オレの幼馴染となる友達たちだ。

5歳：「村の子供とオオカミの子供(2)」

「よし、勝負だ！ 手を抜いたりするなよな！」

「もっちろん！」

「村外れの一本杉を回って、先に戻ってきた方が勝ち。いつも同じで、負けた方は勝った方の言うことを1つきく」

「おっけー」

2人で屈伸運動をしながら、勝負の条件を確認する。

この勝負は、オレがイアンと初めて会った時に、いきなり吹っかけられたのだ。新参者との格付けみたいなものだろう。

イアンは大人顔負けの速さで走ることができたため、駆けっこの勝負を申し出てきた。

初対面の相手に自分が得意なジャンルで勝負を挑むのは、あまりフェアとは言えないが……

「ウイス 《風と駆けるは馬の脚》リアート」
「ハンス・ド・レム」

オレは小さく“ルーン”を呟き、走力をアップさせる魔術を使う。

まあ、これも実力のうちってことで？

「ぜあはあ……くっそ、はあはあ……」

ふっ、結果の分かっている勝利とは虚^{むな}しいモノだな。

「お疲れさまです。ユリアちゃん、お水飲みます？」

「ありがとう、サニヤちゃん」

この駆けつこもすっかり恒例になっていて、サニヤちゃんの対応も慣れたものだ。

用意してあった木製のコップを渡してくれる。

受け取って、コクコクと一気に飲み干した。少し火照った体に冷たい水が美味しい。

「それじゃあ、イアン、わたしが勝ったから、今日も楽しくお勉強ですよ？」

「それが終わったら木の実拾いに行きましょう」

「またそれかよっ！？ たまには勉強以外にないのかよ！」

「いいにいい、まけたのにいい？」

「クータ！ おれはやらぬとは言っていないだろ！」

初対面の時に勝負に勝ったはいいが、何をすればいいのか迷った末に、オレはイアンに勉強を教えることにした。

この手の子供に勉強ほどキツイ罰ゲームは無いと思ったからだ。

「おはようございます、お嬢様。ちょうど良いタイミングだったみたいですね」

「ゆーゆー」

「シュリ、シュナちゃんも、おはようございます」

そこに赤ん坊を背負った少年がやってきた。

少年の方がシュリ、背負われている赤ん坊がシュナ、2人は兄妹で同じ茶色がかかった黒髪に濃い緑色の瞳をしている。シュリはオレより3つ上で、シュナはオレより4つ下の1歳児だ。

生真面目なのか、様付けをやめるにお願いしても、「お嬢様」と呼ぶことを譲らない頑固な所がある。

ただ、それは自分ルールらしく、イアンやサニャちゃんがオレのことをどう呼ぼうが気にしていないようだ。

「お嬢様、先日教えてもらった“3ヘイホウのルール”ですが、確かにそうなるのですが、何故そうなるのかは分かりませんでした」

「ん〜、答えが知りたい？」

「できれば、もう少し考えたいと思います」

「それじゃあね、ヒント。以前、教えた四角形と三角形の面積の求め方を使っただよ」

「ありがとうございます。それじゃあ、今日は何を教えてくださいませるのでしょうか」

「ボクね！ ちゃんと“ひやく”まで数えられるようになったよ！」
「わたしは、詩の書き方についての続きが知りたいです」

イアンに対する罰ゲームのつもりで始めた勉強会だが、それ以外の3人にはずいぶん好評だった。

簡単な読み書きと算数を教えたところ、シユリとクータ君は数学に、サニヤちゃんは詩歌の創作にハマっていた。

「順番にね。まずは、イアンに出していた“宿題”を覚えてもらおうかな？」

「今度のお祭りについて話せばいいんだよね？」

「あ、発表は地面に文字で書いてね」

「うげっ……話すだけじゃダメなのかよ」

「せっかく文字の勉強をしてるんだから、ちゃんと復習もしないとね？」

そして、イアンはブツブツ言いながらも、手ごろな杖を捨てて地面に文字を書き始めた。

イアンも真面目ないい子である。

5歳：「村の子供とオオカミの子供」(3)

彼らは気づいているだろうか？

貴族の子であるユリアにとって、彼らとの付き合いは一種の情操教育だろう。

農家にとって、5歳にもなれば十分に家の手伝いができる年齢だ。それを1巡りに2日、オレのために時間を裂いてくれるのだ。

両親は無意識かもしれないし、ウエステッド村の人たちからすれば、ユリアを持って成すのは当たり前のことかもしれない。

……ま、もっとも彼らも家の手伝いより、オレと一緒に遊んでい
る方が楽な仕事かもしれないけど。

オレが彼らに勉強を教えているのは、ちょっとしたお礼の気持ちもある。

前世の記憶を持つオレにとって、彼らは友達であると同時に守るべき子供、という意識があるのだ。

オレは、知識というものが、諸刃の剣であることを知っている。

知識は薬にも毒にもなる。

知っていることで救われることも、知らなければ救われることだ
つてある。

オレの教育によって得られる知識が、彼らを守るべき力となってくれることを願っている。

『しゅーにい！ ゆうちゃん！ こっちきてー！』

つらつらと考え事をしながら、林で木の実を拾っていると、遠くからクータ君がオレを呼ぶ声が聞こえた。

何かあったのか？ 声が聞こえると同時に、オレは走り出した。

「クータ君、どうしたの？」

「ゆうちゃん、あれ……」

「ぐるううるう……」

クータ君が指をさした先に茶色の子犬が、こっちを威嚇いかくしていた。

「あれは ブラウンウルフ の子供ですね。

お嬢様、クータ君、危ないから下がってください」

「しゅーにい、あのう、けがしてるの」

オレのすぐ後ろから、シュリとイアン、サニヤちゃんもやってきた。

さりげなくオレとクータ君を守る位置に立つ男の子2人、ポイント高いな、うん。

クータ君が指摘したとおり、ブラウンウルフの子供は後ろ右足から血が出ていた。

その足が木の裂け目に捕まっけていて、逃げ出すことができないよ
うだ。

「ここから石を投げつけて殺そうぜ」

「そうですね。それがいいかもしれません」

イアンとシュリの言うことは正しい、ブラウンウルフの子供ならば、ここで退治してしまうのが正解だ。

基本的に農村にとって野生の狼は害獣でしかない。

『！？』

こっちの意図を悟ったのか、ブラウンウルフの子供の目には怯えが見えた。

……あれ？よく見れば、綺麗な銀色の瞳をしている？

「《瞳モアが見るモアース獣を知るジュルテラール》」

シユリの背中越しに、魔術をかけ……あ、失敗した。魔術への抵抗力がかなり高いな。

消費魔力の出力を上げて、もう一回かける。今度は成功した、どれどれ……ふむ。

「……安心して、わたしたちは敵じゃないから」

「お嬢様!?」「おい、お嬢、近寄ると危ないぞっ」

かけた魔術の情報が正しいなら、この子はブラウンウルフの子供ではなく、霊獣である プラチナウルフ の子供だ。

霊獣の子供であるならば、人の子供と同じ程度の知性をもっている可能性が高い。もっとも人に対して友好的であるとは限らないが……。

「みんな、わたしに任せて……この子は、わたしが育てるから」

独善かもしれないが、知性の高い相手……それも子供を殺すことに、少し罪悪感を感じてしまった。

それにきちんと打算もある。

霊獣であるならば、うまく育てれば強力な“ファミリア使い魔”にできるかもしれないのだ。

5歳：「忘れられない夜の始まり」(1)「

「ジル、ご飯だよー」

「がっつー！」

結論から言えば、プラチナウルフの子供は、屋敷で飼えることになった。

名前はオレが付けた。「ジル」というのは、《銀》の意味を持つ「ルーン」から取ってみた。

オレがこっそり魔術で足の怪我を癒すと、ジルはとても大人しく、従順になった。

念のため、魔術でジルの瞳の色を毛皮と同じ焦茶色に変化させておいた。

霊獣であることは、いつかバレるかもしれないが、あまり簡単にバレない方がいいだろうと思ったからだ。

ウエスエッド村で戻ってきた父親に、オレがジルを飼いたいことを伝えると、あまり良い顔をしなかった。

想定内の反応だったため、すかさず《アルティメット・ウィッシュ愛娘の最終必殺技》で撃沈させておいた。親バカじゃなければ、悲しげな顔をした娘のおねだりを簡単に断られるだろう。

そして、父親は典型的な親バカです。

そのまま一度、屋敷に連れて帰った。母親はジルの可愛らしい仕事を見て一発で賛成。

ロイズさんは少し顔をしかめていたが、積極的に反対をすることはなかった。

こうして、母親の出産より先に、我が家に新しい家族が増えた。

「ジル、待てっ……、お座り……、伏せっ」

「がふっ……がうっ……」

オレの指示に従い、ご飯を前にうつ伏せの体勢になる。ばっちりオレのことをボスとして認識しているようだ。

目のご飯に釘付けなのはご愛嬌だろう。

やはり知性が高いからか、「待て」などの合図を一度教えただけで覚えた。

人の話だけではなく、オレが魔術を使えることも何となく理解しているようだった。

『グロリス・ワールド』における“使い魔”^{ファミリア}は、プレイヤーキャラクターの補助をしてくれる自立型キャラクターのことだ。動物や妖精、モンスターなどを手懐けて^{てなう}“使い魔”にする。

霊獣は、その特性として、魔力に対する感覚が鋭く、魔導を持つ

ていることが多い。

『グロリス・ワールド』では“使い魔”にした霊獣に、魔術を習得させることも可能だった。

ちなみにジルを魔術でチェックしたところ【身体強化】の魔導を持っていた。

その名の通り、意識するだけで自身の身体を魔力で強化する魔導だ。

「よしっ」

「がっつ！ あむあむ……」

霊獣が生まれるには2通りのケースがある。

普通の動物同様に、番つがいとなった親から生まれるケース。

ただし霊獣の場合は、番になるのは全く同じ種でなくても、種が近いモノ同士ならば子を生せるらしい。

もう1つが、世界を巡る魔力から自然と生み出されるケースだ。

多分、ジルはこっちのケースで生まれたと思われる。探せば同じ種である プラチナウルフ はいるかもしれないが、ジルと血の繋がった家族はいない。

「ジル……お前とわたしは同じなのかもね」

「がっ？」

「うっん、なんでもない」

心配そうなジルの頭を撫でてやる。

「ほら、わたしのことは気にしないで、たっぷり食べてね」
「がっ……はむはむ……」

オレには血の繋がった両親共に揃っているが、オレはその両親に嘘をついている。

それは必要なことだと、自分で理解しているし、納得もして割り切っていた。

ジクリ……と、胸の奥が微かに痛んだ。

5歳：「忘れられない夜の始まり（2）」

ジルを思う存分愛^めでて癒されてから屋敷の中に戻ると、母親が廊下で不審な挙動をしていた。

「あの？ お母さま、何をしてるんですか？」

「しー、ユリイちゃん、静かに」

窓からこつそりと裏庭の様子を眺めていたようだが……外からは、ロイスさんとハンスさんが稽古をする音が聞こえてくる。

2人の稽古を覗き見していたのだろうか？

「ほら見て、ユリイちゃん」

そう言っつて母親が指さす先には、アイラさんが立っている。

そういえば、アイラさんは2人の稽古が終わるくらいになると、毎日水とタオルを用意してるたみたいだな。

「あの顔つき、そして、毎日欠かさず稽古を見学している理由……これは恋ね」

むちゃくちや楽しそうな顔をする母親。

女性の「他人の恋話や噂話が大好き」という生態は、世界が変わっても変わらないようだ。

「ねえ、ユリイちゃん、アイラお姉さんとハンスお兄さんが恋人同士になったらイイと思わない？」

ふむ……？

シツカリ者に見えて、結構ドジっ娘な面があるアイラさん。体育会系に見えて、結構情けない所があるハンスさん。

微妙にチグハグじゃないかな？

いや、アイラさんがハンスさんに惚れているなら、オレがとやかく言う問題じゃないけど。

ハンスさんは、悪い人じゃなさそうだから、多分、良い旦那さんにはなるだろうし。

父親から聞いた話、“地軍”は主に王都の防衛を担っていて、軍の中でも比較的エリートな部隊だそうだ。

となると、ハンスさんの給料は一般の軍人よりもいいはずだし、経済的な面でも……、

「……悪くないです」

「でしよでしよ？」

こうなったら、ハンスさんにも豊穰祭に出てもらって、是非“花贈り”にも参加してもらわなきゃ！」

“花贈り”は、豊穰祭で自身の思いを花に託す風習だ。

花の色によつてその意味が変わり、黄色なら“日頃の感謝”、白色なら“友への親愛”、赤色なら“確かな愛情”となる。

三色とも、村の近くで自生しており、この時期なると咲く花の色らしい。

これは先日、ちょうどイアンの宿題から覚えたばかり情報だ。

どうやら母親は、アイラさんがハンスさんに赤い花を贈る姿を夢見ているようだった。

「けど、ハンスさんには王都に恋人とか、もしかしたら結婚したりするんじゃないですか？」

「うつつふつふ、大丈夫よ。その辺りはあの人経由でばっちり確かめてもらっているから。」

軍の仕事が忙しくつて、2年前に恋人に振られてから、独身でいるって聞いたわ」

この話に父親も一枚かんでいるのか……。

いや、母親に巻き込まれたって言うのが正しいと思うけど……と、いつかの酒盛りの席の与太話が、オレの頭をよぎる。

まさか……、ハンスさんがオレに手を出さないように、とか考えてないよな？

「ああっ、アイラちゃんがハンスさんに赤い花を送る光景を直接見たいけど、とても無理そうね。」

ユリイちゃん、わたしの代わりに2人の愛の行く末を見届けてきてね?」

真剣な眼をして、オレの両肩に両手を置く母親。

愛の行く末って、少し表現がオーバー過ぎな気が……はい、そんなキラキラした目をされたら断われません。いつも自分が使っている技だけにな!

オレが承諾の返事をしようとした時……

「あつ……ユリイちゃん、ごめん……シズネさんと呼んできてくれるかな?」

「!?!」

「お腹が、ちょっと痛くなってきたかも……」

そして、オレの新しい人生の中で、忘れることのできない一夜が始まった。

5歳：「忘れられない夜の始まり」(3)

その後、シズネさんの指示は素早かった。

「まず、コーズレイト殿は馬でガールオ・バーレンシアを呼びに向かってください。

アイラさんは、鍋でお湯を沸かす準備をしてちょうだい。それと何か手軽に食べれる物を用意して。

ハンスさんとユリアちゃんは、この部屋に洗い立てのシーツやタオルなど、布類を集めて……その前にハンスさんは、汗を拭ぬぐって体を清潔にするのが先ね」

その素早い指示が頼もしく、誰も異論を挟むことなく従った。

そうして、半刻（1時間弱）ほどで客室の一部屋が出産のための部屋として、準備が整った。

ハンスさんは、アイラさんの手伝いに台所に行っていた。

オレは、その部屋の前の廊下で、アイラさんが用意してくれた椅子に座って静かにしていた。

『バーレンシア夫人、具合はどうだい？』

『ん……今は痛みが少し治まっています』

『そうかい、まだ少しばかりそうだね……それで、………だね？』

『はい、先日……………通りをお願いし……………』

母親とシズネさんの会話が扉越しに少し聞こえてきた。

聴力を上げる魔術を使おうかとも思ったが、シズネさんの意識が乱れるとマズイことに気づき、自粛する。

さらにその一刻（2時間弱）後、表の方から馬の駆ける蹄の音が聞こえてきた。

その間も、部屋の中からはぼそぼそと話し声が聞こえてきたり、アイラさんやハンスさんが様子を見に来たりしていた。

父親がやってくるのと同時に、部屋の中からシズネさんが出てきた。

「今戻りました！ シズネ殿、マリナの様子は？」

「まだ破水は起こしてない。ただ陣痛の間隔が短くなってきている。これから一刻が山場になるだろうね」

「そうですか……………」

「……………ガーロオ・バーレンシア、バーレンシア夫人に最後の確認は取った。後は先日の相談通りに。」

ひとまず、台所でお湯を用意しているから、それで体を拭いて、それから清潔な服に着替えてきておくれ」

「分かりました。ユリア、一緒に来なさい」

「はい……?」

何故、オレが呼ばれたのだろうか?

「僕たちは今から、体を清めて、新しい服に着替える。

それが終わったら、2人で、シズネ殿の手伝いをするんだ」

「!?!」

え?

「そこまで、ユリアが出産を手助けになるとは、思っていないよ。ただ、今回の出産にユリアを立ち会わせるのは、マリナの希望なんだ」

「お母さまの?」

「ああ……ユリアは、女の子だから、いつか母になるために子供を産む。だから、その時のために、少しでも母としての思いを伝えたい……んだそうだ。

もちろん、ユリアが母になるには“まだまだ早過ぎる”と僕は思うけどね」

「……分かりました」

うん、セリフのアクセントの付き方が父親らしくて、不覚にも笑いそうになってしまった。

そして、母親が母である部分をしっかりと再認識させられた。

いつもは天然で少女っぽくも、子供を産んでくれた母であるのだ。

やっぱり、母は強しってヤツなんだろうか。

ココロが温かい気持ちに包まれる。

神様、ありがとうございます。

オレを送り出した元の世界の神様とオレを迎え入れてくれたこの世界の神様。

見たことも話したこともないけれど、オレをこの2人の下に連れてきてくれたことを感謝します。

5歳：「祈りにも似た強い願い（1）」

「むーっ！ んー！ んん〜……っ！……！」

「ほら、息を小さく細かく吸って……ゆっくり吐いて……！」

「んーっ、すっ、すっ……！」

膝立ちになり椅子の背を両手で強く握っている。

口にはタオルを咥くわえて、歯が痛むのを防いでいる。

オレと父親が部屋に入った最初のうちは、穏やかに話し合ったり、父親と母親が軽くキスをしたりしていた。

破水が起こり、徐々にその余裕がなくなり、そして……、

「もう少しだっ……ほら息いきんで……！」

「……んんっ……！」

「……んなあ！ んぎゃあ……！」

産声が聞こえた瞬間、とオレの体から力が抜け、隣に立っていた父親に寄りかかってしまう。

いつの間に手をつないでいたのか、父親の手がオレの手をギュッと握り締めていたのだ。

その握られた父親の手から伝わる緊張は……まだ、解けていなかった。

「ガーロオ・バーレンシア、この子をお願いします。次の子もすぐに見えてきますから!!」

次の……子？

「ええ、分かりました」

父親がシズネさんから、産まれたばかりの赤ん坊を受け取り、用意した湯で布を絞って、軽く拭いている。

拭き終わったら、バスケットに柔らかい布を敷き詰めた小さなベツドに横たわらせる。

「はあはあ……んーっ！ すっ、すっ……」

母親が再び息^{いき}み始める。まだそのお腹の中に産まれるのを待つ命を抱えているのだ。

つまり母親は双子を身籠っていた。

先に産まれた子がぐずる泣き声と母親の苦しそうな呻き声が部屋の中に響く。

「がんばれ、大丈夫、もう半分は終わったから、後半分だ」

「んっ、んっ、んあー！ すっ、すっ……ふっ……」

シズネさんが励ましの声をかけながら、母親の顔に流れる大粒の汗をぬぐう。

一人目の子が産まれてから、どのくらい経っただろうか。

体感時間に自信がったのに……時間の感覚があやふやなモノになっていた。

前世の記憶があっても、医学生でもなんでもなかったオレに出産に関する知識はほとんどない。

あつたとしても、ろくに役には立たなかったかもしれない。

ここは争いのない戦いの場であった。

ただ『命を継ぐ』という古く神話の時代から続いている終わりのない戦い。

情けない話、オレはすっかり緊迫した雰囲気にもまれ、ただ両手を堅く握り締めているだけだった。

反面、どこか客観的で冷静な自分もいた。

そう……なかなか産まれてこない2人目に対し、シズネさんの顔に焦りの表情が浮かんでいることに気づいていた。

5歳：「祈りにも似た強い願い(2)」

「限界だ……これ以上、時間を掛けるのは危険だね」

崩れそうな何かを必死に支えるような声で、シズネさんが静かに宣言をした。

父親と母親の視線が交差し、一瞬だけ、オレの方を向く。

「……ガールオ・バーレンシア、切開の準備は良いかい？」
「ああ……」

握り締めていた父親の手がするりと離れた。

切開……？ 切開とは、読んで字のごとく「切り開く」ことだ。
その準備？ ああ、父親が切れ味の良さそうな短剣を取り出した。

何を？ 何を切る？

言葉が、うまく、処理、でき、ない。

母親が小さくシズネさんに何かを呟いている。
と、シズネさんが、オレの目の前にやってきた。

「ユリアちゃん、お母様が近くに来て欲しいって」

オレはシズネさんの手に押されるがまま、母親の近くに寄せられる。

「はあはあ……ユリイちゃん……あのね……んっ……」

「なに？ お母さま？」

痛みを堪えながら、ジッとオレの眼を見詰める。何かを決意した強い眼差し。

「お利口さんのユリイちゃんに、こんなことは改めて言うまでもないけど……」

これからも、お父さんの言うことをよく聞いて、2人のいいお姉さんになってあげてね？」

「……」

「ユリイちゃん、返事は？」

「わ、分かりました」

「うん、ありがとう……」

どうして？ そう聞き返しそうになった。その言葉を今言う必要性は……必要性があるとしたら、それは……。

「あなた、子供たちをお願いね……？」

「ああ………マリナ、タオルを噛んで………」

ていおうせつかい
帝王切開。

簡単に言えば、母体ほたいを切って赤ん坊を取り出す外科的処置。

医療技術が発達した前世の世界においては、むしろ、自然分娩よりも安全な出産方法とされていた。

「んんんっ！！！！！」

麻酔は？ この世界の医療技術は、それほど発達しておらず、そんな薬は普及してないのかもしれない。

なら、魔術は？ ……オレは、生まれてから、自分以外の誰かが魔術を使っているのを見たことがない。

何らかの理由で魔術の使用が制限されているとしたら？

母親が必死に痛みを耐えている。

麻酔の代わりになるような魔術もない状況………その先にあるのは………？

………。

「………んぎゃあ、んぎゃあ」

沸きあがる新しい産声、それと同時に糸が切れた操り人形のように倒れこむ母親。

誰も血を流して倒れている母親に何の処置もしようとしない。父親は、ただ静かに意識のない母親の髪を手で梳すいている。

このまま、母親を放置していたら……………？

「ガナクト 大いなる力は……………」

周りに人がいることも忘れ、オレは無意識のうちに“ルーン”を紡ぎ始めていた。

5歳：「祈りにも似た強い願い(3)」

「ガイナクト
《大いなる力は手と心に宿る》アム・アイドゼーレール」

まずオレが使ったのは魔術の効果を増幅させる魔術だ。

保有魔力が活性化しているのが分かる。

その証拠に、両手が淡い白色光で輝き、身体全体が微かな高揚感に包まれる。

「お父様、少し下がってください……………
《癒しの風よ吹け》リザ・ド・フイムーリエレーヤ」

オレの気配に圧されるようにして、父親が母親から少しだけあとずさった。

父親が母親から離れたのを確認し、両手を広げて、魔術を使う。母親を中心とした暖かな風の渦が発生し、傷を治していく。

「リザ・ド・フォーラ
《癒しの水よ巡れ》ロフォーヤ」

身体から流した血液を戻すため、血などの体液を増やすための魔術だ。

もつとも、この魔術自体だけでも傷を治す作用があったから、これで大体の傷は治るはず……。

立て続けに3つの魔術を唱え少しだけ冷静さが戻り、同時に心に不安が膨れ上がる。

オレは、この約2年半でさまざまな魔術の訓練と実験を行なっていた。

攻撃魔術はもちろん使えないが、次に使えなかったのが対人を想定とした魔術だった。

対人を想定した魔術、その際たるモノが回復魔術系の魔術だろう。

『グロリス・ワールド』で使われる回復魔術の基本は、HPの回復と毒や麻痺、戦闘不能などのバッドステータスの解除である。

“ルーン”と魔術の設定により、それらの効果を重複させたり、消費魔力と効果の効率を考えたりして魔術を作ることはできるが、結局のところゲームにおけるパラメーターの変更の差ではない。

ゲーム中のキャラクターは、HPという数値と健康状態という文字列、その2つだけで表されていたからこそ、回復魔術の効果はそれだけで十分だった。

しかし、現実に生きている人とゲームプログラムは違う。

ここに1人で内緒の訓練をしていた欠点が出た。

回復魔術を使った実験をしようと思ったら、自分で自分の身体を傷つけるしかない。

いくら治せるからといっても、自傷はちょっと……。
もちろん、対象不適正で魔術は失敗するが、魔術の構成や“ルーン”の発声の練習だけはしておいた。
結果として、どの魔術でどれだけの怪我で治せるのかなどがハッキリしていない。

先日、ジルの怪我を治したのが、オレが初めて使った回復魔術だったのだ。

つまり……これが僅か2度目の経験となる。

風属性系と水属性系の“ルーン”による回復魔術は、しっかりとかかったはずだ。目に見える傷は塞がり、身体内部の傷も治っているとされる。

しかし……母親の顔に生気が戻らない。

「ええと、こういう時は……」
《瞳が見る軀を知る》！

人の状態を確認する魔術を思い出して、即座に使う。
オレの意識へ母親の状態が浮かんできた。

対象：20代女性体／意識：昏睡／怪我：なし／病状：軽度の貧血／異常：出産直後、血流停止、体温低下……。

意識がなく、血の流れが止まっている……心肺停止状態っ！？

「《時の流れに逆らず、……》」

死者の蘇生、そんな大それた魔術を使うつもりはない。

脈拍や呼吸が止まっただけでも、まだ死んでいないというのは、元の世界では常識として確立された事実だ。

本来は、人工呼吸や心臓マッサージを行なうのだが、今のオレには魔術がある。

「……戻るバグに在レらず、……」

もし、この魔術に意味がないというならば、オレはオレとして転生した意義を失うだろう。

いや、そんなモノはどうでもいいんだ……助かって欲しい。祈りにも似た気持ちで強く願った。

オレはまだ貴女に何も返せていないんだ。

「……命イフ・ド・ライラアニーヤの灯よ燃えろ」！！！！」

魔術の掛け声と共に、母親の頬に赤みが戻る。

それを見た瞬間、極限までに張り詰められていた緊張の糸が緩んだのか、オレは意識を失った。

健太郎：「前世の記憶／家族コンプレックス」

オレに残る最も古い記憶は、白い雪の記憶。

暗い夜空から次から次へと降ってくる氷の結晶。

その雪の冷たさに凍え、風の冷たさに震え、逃げ出したい気持ち
は多分親に言われただろう「そこにいなさい」という言葉に押さえ
込まれ、ただじっと立っていた。

次に気が付いた時は、病院のベッドに横たわって高熱にうなされ
ていた。

後に児童養護施設の職員から聞いた話。

オレは、雪が降る寒い夜に児童養護施設のドアの前で死んだよう
に倒れていたらしい。

たまたま夜中に起きてきた職員がいなかったら、そのまま本当に
死んでいた可能性もあったと言われた。

オレは親の顔を覚えていない。それどころか、本当の自分の名前
や幼い頃にどこで暮らしていたのかも覚えていない。

高熱を出したためか、心理的な作用があったのか、雪の日より前

の記憶は綺麗に消えていた。

オレを生んだ親が、オレを児童養護施設の前に捨てた。
それが白い雪の記憶が意味する真相だ。

警察が調査してくれた結果、オレの住民登録は見つからず、親どころかオレの名前も分からなかった。

大杉健太郎という名前も、色々あってオレを見つけてくれた職員の方が名づけてくれた名前だ。

「健太郎」と「元雪」のどっちにするかで悩んだという。
シンプルに健やかに育つ男の子という意味で「健太郎」か、雪にも負けない元気な子で「元雪」。

結局にオレにどっちがいいか聞いて決めたらしい。

「モトユキ」より「ケンタロウ」の方がかつこよく聞こえたんだよな、幼い頃のオレ。

オレが中学生の頃、職員の人がポツリと漏らした言葉を聞いてしまったことがある。

「なんで、自分の子供を捨てれるんだらうな……自分の血肉を分け

た愛しい存在じゃないんだろうか」

前日に門の前に捨てられていた幼児を抱きかかえていた光景は、
今も楔くわくのように心に残っている。

家族……特に親に対するコンプレックスなしには、前世のオレは
語れない。

前世の社会における子供は、異質な者を見抜き、それを仮想敵に
することで、自分の力を示そうとする性質があったと思う。

「情報社会の弊害」とか言われていたらしいが、詳しく知らない
し、調べようとも思わなかった。

ただ「親がない」ということで他の子供から差別のようなもの
を受けていた。

嘲あはられれば強い憎しみを覚え、優しくされれば同情かと疑っ
て不安や悔しさを感じた。

少しばかり被害妄想も入っていたかもしれないが。

高校生になり、そこで初めて「オレの事情を知らない」友人を作
ることができた。

その頃のオレは、ネットワークの世界にハマりつつあった。その

頃からネットワークは「第二社会」と呼ばれるほどに複雑化された世界を構成していた。

実際の個人情報、こちらから知らせない限り基本的に分からなし、誰も聞こうとしないという、昔からの暗黙の了解がオレの性に合っていたのだ。

その時から「自分の事情を隠す」という習癖ができていた。

高校の卒業と共に、児童養護施設を出て、高校時代にバイトで貯めたお金を元に1人暮らしを始めた。

そして、オレは『グロリス・ワールド』に出合った。

そこには価値あるオレの姿があった。

オレは自分自身の価値をもっと確かなものにしたくて、ゲームにのめり込んだ。

その後、何の因果か、ユリアという少女に生まれ変わった。

親の優しさというものを知った。

家族の暖かさというものを知った。

失いたくないと、壊れて欲しくないと願った。

オレが自分を偽り、黙っていたのが罪だというなら、オレだけを罰すればいいのに。

オレがいると両親が不幸になるといふならば、オレは両親の前から消えるから……………。

5歳：「陽光差す部屋で夢から覚め（1）」

悪夢だと言い切れないような、前世の記憶を追体験する夢を見た。その割には目覚めがよく、思いのほかスッキリとしている。

「……………朝、かな？」

窓から陽光が差ししてる。

ここは自分の私室だ。オレは慣れ親しんだベッドに寝ていた。眠っている間に家から追い出されていた……………みたいな事態にはならなかったようだ。

昨夜の記憶はシツカリと残っている……………オレは、父親とシズネさんの目の前で魔術を使い、そして気を失った。

身体を起こしたところで、コンコンと扉がノックされ、

「おはようございます。え、あれ？ ……シズネさん？」

いつもの様にアイラさんが入ってくるかと思いきや、シズネさん

が部屋に入ってきた。

「ああ、目が覚めたのが良かった」

「シズネさん？ …… あっ！ お母様と赤ん坊はどうなりましたかっ！？」

シズネさんが入ってきた理由よりも、まず確認すべきことはそれだ。

無事なはずだ、という思いの中に、万が一、もしかして、と言う不安な気持ちが少し混じる。

「母子共に3人と元気だよ。」

ユリアちゃんが使った魔術のおかげで……あの時使ったのは、治癒の魔術だよな？」

「はい。えっと、それで……お父様やお母様に話したいことがあるのですが……。」

それにシズネさんとロイズさんにも立ち会ってもらいたいと思います」

オレは覚悟を決めていた。その表れとして、普段よりもずっと大人びた口調で応える。

一人称が「私」なのは、もうクセみたいなものだ。思考は「オレ」なのだが、口に出る言葉は「私」、今更すぐには切り替えられない。

まあ「私」なら社会人（？）的にも問題はないわけだし、無理に切り替える必要は無いかもしれないが。

けど、良かった……生きていてくれた。これで心残りが1つ減った。

「その前に、今がいつだか分かるかい？」

「ええっと……昨日が森の季節の6巡り目の第2日だったから、第3日ですよね？」

「記憶はしっかりしてるようだね。けど、今日は第4日さ」

「……私は丸1日以上眠っていたってことですか？」

びっくりだ、そういえば、身体が少し重いような気がする。

気分は悪いどころか、逆に調子がいいくらいなんだけど。

「……………」

「……………なんでしょうか？」

シズネさんがオレのことをどこか探るような眼で見ている。

「いや、賢いにしても度が過ぎると思ってるね。」

答えた日付が1日ずれていると聞いて、すぐに自分が丸1日寝ていたという事実にとどり着いた。

あまりに5歳児らしくはないね」

「そうですね。私も自分が普通の5歳児と同じだとは思っていませんし」

「…………その口調が地かい？ 何も分からない子供の振りをしてたと

言う訳だ？」

「うーん、それは私にも分かりません。確かに外面は良くしていましたが、振りと言うか猫を被るくらい、誰でもやるでしょう？」

……ほら、外見的には可愛いらしい5歳の女の子なわけですし？」

オレが少しおどけて見せると、シズネさんは苦笑する。

「まあ、ともあれ、食事をして少し休んで、あたしの診察を受けてからだ」

なるほど、医者として倒れたまま眼を覚まさないオレの具合を看
ていてくれたというわけか。

自発的にか父親に頼まれたのか、の違いはあるかもしれないけど。

「分かりました。シズネさんの言葉に従います」

「ひとまず、水分と栄養の補給が先だな。すぐに食事を持ってくるから待ってな」

「はい」

オレの返事を聞くと、シズネさんは素早く部屋から出て行った。

5歳：「陽光差す部屋で夢から覚め（2）」

ポストと、倒れこんだオレをベッドがいつもと変わらない柔らかさで迎え入れてくれる。

少しこれからについて考えてみよう。

お父様とお母様にオレが生まれてから隠していたことを話す。これは確定事項だ。

魔術が使えることがバレてしまった以上、外見どおりの振りをし続ける必要もないし、両親に新しい嘘を塗り重ねるようなことはしたくない。

と言っても、誰彼構わず話す必要はないと思う。話すとして、両親以外なら、シズネさん、そして、ロイズさんがやっぱり妥当か。ハンスさんについては、父親やロイズさんの判断に任せよう。アイラさんは、正直、オレからすれば妹みたいな感じなので……ややこしい話に巻き込みたくはない。

この世界において、オレは異質な存在だと思う。そのことがいずれ両親の負担になるかもしれない。

やはり、姿を晦^くませるべきだろうか？

幸いなことに、両親はまだ若く、新しい子供が2人も生まれたのだ。

オレ1人いなくなっても困らないだろう。

5歳か……1人で生きていくのは難し……くもないか？

意識がある限り、致命的な怪我や病気は魔術で治せると思うし。
魔術があれば、食事も何とかかなりそうだ。

攻撃魔術は使えなくても、強化系の魔術で身体を強化すれば、投
石なり何なりで狩りもできなくはないだろう。

動物の解体はやったことはないが、何とかなるよな、多分。

うん……両親に全てを告白したら、そのまま旅に出よう。

子供が1人で目立たずに生きていくには、人の目がある都市や集
落だと難しい気がする。

少なくとも、身体が成長するまでは誰にも会わないような未開の
土地で隠棲いんせいしていた方がいいだろうな。

いつそ、温泉が沸くような場所を探してみるのはどうだろうか？
『秘湯を求めて〜異世界旅情〜』って感じで。

ふふっ、と思わずオレの口から笑い声が漏れた。

「……………なんだ、笑えるじゃん、私」

しばらくすると、お盆を片手にシズネさんが戻ってきた。
シズネさんが戻ってくるまでの間、オレは旅をするのに必要なものをあれこれ考えていた。

「お待たせ」

「いえ、全然待っていません。ありがとうございます」

オレは起き上がって、シズネさんからお盆を受け取り、そのまま自分の太腿ふとももの上に置いた。

お盆の上には白く煮込まれたカラス麦の粥、皮を剥いて食べやすい大きさに切られたリンゴ、透明な液体が入ったコップが乗っていた。

「いただきます」

コップの中は、多分水っぱい。一口飲んでみる。うん、水だ。

一口飲んで、自分の喉がすごく渴いていたことに気づき、コップの半分を一気に飲んだ。

コップをお盆の上に戻して、スプーンを手に取る。
粥をすくって口に運ぶ。

小人牛こびんごのミルクの甘みが口に広がった。

小人牛とは、普通の牛の半分ほどの大きさの牛で、そのミルクは

とても甘みが強い。

ミルクはそのサイズに比例した量しか取れないため、飲料としてはなく、主に料理の甘味料代わりに使われる。少し水っぽくした練乳が近いかな。

「食べながらでいいから聞いておくれ。

さっきも言ったとおり、この後、簡単な診察をさせてもらう。

それが終わり次第、ガーロオ・バーレンシアとバーレンシア夫人、コーズレイト殿と会えるように伝えてきた。

場所はバーレンシア夫妻の寝室になる。バーレンシア夫人は元気だとはいえ、出産したばかりだからね」

「分かりました」

そう一言だけ返答して、逸る気持ちを抑え、ゆっくりと食事を再開した。

5歳：「転生者の告白（1）」

朝食が終わり、シズネさんの診察を受けて、問題はないと診断された。

先を歩くシズネさんの後について、両親が待っている寢室へと移動する。

そして、オレは4対8個の眼差しを受け、真っ直ぐ前を見据^{みす}えて立っていた。

オレ以外の4人の様子を順に確認すると、父親はやや緊張していて、母親はいつも通りのようだが産後で疲労^{ひろう}しているのか、ベッドの上で座っている。

ロイズさんは少し戸惑っている感じだ。オレが魔術を使う所を直接見たわけじゃないからだろう。

シズネさんは冷静に事の成り行きを見守ろうとする顔つきをしている。

「お集まり頂きありがとうございます……これから、私が皆さんに内緒にしていた事実を公表したいと思います。」

と言いましても、私もうまく説明しきれないと思います。ですので、質問等がありましたら、遠慮なく仰ってください」

オレがまず口上を述べると、部屋の雰囲気が変わる。
父親、ロイズさん、シズネさんの表情が少し鋭くなった。唯一、
母親だけがあまり変わらない。

「まず、最初に申しておきますが……私は、ユリア・バーレシアで
す。」

ケイン・ガーロオ・バーレンシアとマリナ・バーレンシアの間に
生まれた第一子であることは間違いありません。

けれど、私は転生者、すなわち、死んでから再び生を受けた者な
のです」

「転生？ ……それは当たり前のことだと思っただけど？」

父親がさっそく質問を返してきた。

しかし、さっそく意見に齟齬そごが出たな。

言われてみれば、この世界では“転生することは常識的な現象”
なんだっけ？

確か人が死ぬと大地の下にある冥界に行き、そこで魂の穢けがれが浄
化され、浄化された魂は天界へを巡って、再び大地に生まれてくる
と、信じられている。

魂を浄化される時に、前世の記憶や能力なども一緒に失われる。
業りんねてんしょうみたいなのは残るらしく、前世の輪廻転生の考えにも通じる所
がある。

『グロリス・ワールド』でも、キャラクターが死ぬと地の精霊王
の立ち絵が現れて、「復活するかどうか」の質問をしてくる。

“YES”を選んでセーブポイントに戻って復活、さもないければ近くのプレイヤーに復活の魔術を使ってもらうまで倒れているかだ。

「簡単に説明するのなら、私は生まれる前からある人物の人格、つまりは記憶や知識、性格を持っていました」

「ん？ つまり、ユリアの魂は、以前の生を終えたときに冥界に行っていない、という意味かい？」

「うん、少しややこしいのですが、生まれる前の私は、この世界と異なる世界を生きていたと思ってください。」

その魂が、ユリアの魂としてお母様のお腹の中に宿ったのです」

そこで質問者がロイズさんに変わった。

「オレは「お嬢様が強力な魔術を使った」と言う話を聞いただけで、まだ少し理解できてないんだが。」

確かにお嬢様は幼い頃から大人びていた。本当に魔術が使えるのか？ 実際に見せてもらえないか？」

「いいですよ。そうですね……《輝ける六つの灯よ》コニス ロオン・ド・ライラ」
「「「「「「「「」

“ルーン”を唱えると、右手から6つの小さな光球が生まれ、それが宙に浮かびあがって、私の頭上でくるくると回りだす。まあ、ただ見栄えがいいだけの明かりの魔術だ。

皆、魔術で生み出された光を注目していたが、ロイズさんが小さく咳払いをすると、皆の視線がオレに戻った。

「……………つまり、お嬢様は、生まれながらにしてカルチュアとは違う世界の老魔術師の人格を持っていた。

なので、魔術を使えるし、大人と同等の知性を持っていると考えればいいのか？」

「あ、老魔術師というのは正しくはありません。

私が死んだ時は20歳の大学生^{はたち}　未熟な見習い学者のような身でしたので……………精神的な年齢でいえば、お父様より少し年下かお母様と同じくらいです」

「ちなみに他にどんな魔術が使えるんだ？」

「魔術でできることならば、多分一通りは……………ただし、他者を傷つけるような魔術だけは使えません」

「他者を傷つける……………攻撃用の魔術が使えないということか？　何故？」

「私がユリアとして生まれたときに得た【一角獣の加護】のせいではないかと思えます」

「……………！」

「……………一角獣ということは、【霊獣の加護】か？　お嬢様は、本当に【霊獣の加護】を持っているのか？」

なんか、魔術を使った時以上に驚かされているんだけど？

「はい、私の知識が合っていればですが……………」

「なるほど……………さすが^{はつちやく}発動具　もなしに魔術を行使するだけのことはある、か」

んん？ 発動具 って何だ？

「……私から質問してもよいでしょうか？」

「俺や旦那様で答えられることならな」

「【霊獣の加護】って、そんなにすごいものなのですか？ それと発動具 とは何でしょうか？」

あれ？ キョトンとされたんだけど……もしかして、変なことを
聞いちゃった？

5歳：「転生者の告白（2）」

「あゝ、魔法に関してなら、俺よりもシズネさんのほうが詳しいか？」

「あたしも専門家と言うわけじゃないけど、学院には通っていたからある程度はね」

「シズネ殿、説明をお願いしても？」

「あくまであたしが知っている範囲だけでの話だよ」

そう前置きをして、シズネさんが語りだした。

「まず、【霊獣の加護】についてだけど、あたしみたいな【小獣の加護】持ちが1年で数人、【霊獣の加護】持ちの場合は数年に1人見つかるかどうかで所だね。

【小獣の加護】持ちでさえ、加護を持っていることを国に申告して、その申告が正しいことが認められれば、いくつかの優遇措置を受けれるくらいに貴重な人材さ。

確か、今の王都にいる【霊獣の加護】持ちは11人、国内で20人程度かな？

いずれも王国や何らかの組織で重用されている面子ばかりだね。

王国の正式な保護下にある人口が3500万人、180万人に1人の才能と言えればどれだけ貴重かわかるかい？」

「はあ………」

やばい、凄いことなのは分かったんだけど、あまりに話が大き過ぎて、逆にピンとこない。

「それと 発動具 についてだっけ？」

そもそも、魔術自体は個人的に魔術師に弟子入りをするか、王国立の学院の門戸を叩くかして、習えばある程度使えるようにもの。ただし、普通の魔術師は 発動具 を持っていないと魔術を使うことができない。

その 発動具 は材料が貴重で高価だから、それを買えるだけの財力があるか、運良く 発動具 を手に入れてもしなれば、魔術を習う意味がないのさ。

ああ、それと魔術師兵として軍隊に入るみたいな場合もあるね。魔術師兵として軍に所属すれば、国から 発動具 を貸与してもらえる。

ただ、軍規で定められた以外で利用したりすると色々と処罰を受けたりするみたいだね。

例外としては、エルフの高位魔術師や王都の宮廷魔術師のじいさんは 発動具 なしで魔術を使えるらしいけど……」
「へえ……？」

けど、オレは、その 発動具 なしに魔術が使えるんだけど？ エルフということは【魔法適性】が 発動具 の代わりにしている？

ただ【魔法適性】って単純に最大保有魔力量が成長しやすく、保有魔力の回復に必要な休憩時間が短くなるだけの魔導だったはずだよな。

老練した魔術師も 発動具 なしで魔術が使えるというなら、どこかに抜け道がありそうだが……。

「結局、 発動具 とは、どんな形をしたもの何ですか？」

「杖、指輪や首飾りなどの装飾品なんかが一般的だね。」

そもそも、魔術を行使するに本当に必要なのは、ほうませき宝魔石 と呼ばれる宝石さ。 宝魔石 を嵌め込んだ道具のことを、便宜的に 発動具 と呼んでいるにすぎない。

魔術も使える剣士とかだと、剣の柄などに 宝魔石 を付けて、剣そのものを 発動具 にする人もいるみたいだね。あたしの知人にも何人か独特な 発動具 を持っているやつがいるよ。」

宝魔石 ……確か、『グロリス・ワールド』だと魔力によって変質した宝石という説明だったかな？ 補助系装備のマジックアイテムを作るのに必要となる材料だ。

つまり、 発動具 ってというのは、補助系装備のマジックアイテムみたいなものか？

あれ？ もしかして……、

「……普通の宝石と 宝魔石 って、そんなに値段が違うんですか？」

「段違いだね。同じサイズの宝石と 宝魔石 なら、 宝魔石 の方が何十倍も高価だし、そもそもめったに市場に出回ってくる品でもない。ほとんどの 宝魔石 は、国が優先的に差し押さえちゃうからな」

「……あの、私は多分、普通の宝石から 宝魔石 を作る事ができると思っていますけど」

『グロリス・ワールド』では、モンスターが落としたり、鉱山で採掘することで入手できる素材の中に「宝石」という分類があった。

その宝石に特定の魔術を定期的にかけることで、宝魔石 へと加工することができる。宝魔石 への加工とマジックアイテムの作成を専門に楽しむプレイヤーも少なからずいた。

「本当にそんな技術があるのかい？」

「あくまで多分ですので、試してみないことには絶対とは言えませんが」

「もう何でもありだね……」

呆れるシズネさんを横で、父親とロイズさんが難しい顔をしている。

「それで、ユリア……君の望みはなんなんだい？」

「望みですか？」

「ああ、到底とつていすぐには信じられないような話だけど、僕にはユリアの話が嘘だとは思えない。

そして、僕たちにそれだけの真実を語ることで、僕たちに何を望むんだい？」

「何も……何か欲しくて話そうとしたわけではありません。

前世の私は、親に捨てられた孤児みなしこでした。ですから、お父様とお母様のような両親に憧れていたのです。

最初は黙っただけかとは思いました。けれど、今回の件がなくとも何時かは話していたと思います……単純に、お父様とお母様に、嘘をつき続けていることに耐え切れなかっただけです。

ただ、あえて言うのであれば……近いうちに旅に出ようと思いますので、多少の賤別せんべつをもらえると嬉しいですね」

一気に自分の気持ちを吐露とろして、ストーンと重しが外れ、オレの口が軽くなつたような気がした。

「ユリイちゃん、旅行に行きたいの？」

そして、オレがこの部屋に入ってきて、初めて母親が口を開いた。

5歳：「ワガママと家族の形」(1)

「旅行に行くなら、わたしはジューグ湖への行楽がいいかしら？
いっそもーまんまで遠出しての観光もいいわね。」

ユリイちゃんに、海を見せてあげたいわ」

「ええつと、お母様そうじゃなくて……」

「あら？ わたし、何か変なこと言ったかしら？」

「私は私一人で旅に出ようと思っているのです」

キツパリと言い切った。ここで母親のペースに巻き込まれるわけにはいかない。

「そんな、ユリイちゃん1人じゃ心配だわ……それに、わたしも旅行は大好きなのよ？」

「私には魔術がありますし、大丈夫です。そもそもお母様と一緒にただの旅行なら、意味がありません。」

私はこの家から出て行きます、と言っているんです」

「……ユリイちゃんは、この家にいるのがイヤになっちゃったの？」

「それは……」

イヤじゃありません。そういうのは簡単だ。けれど……なんと言えば納得してもらえるのだろう。

オレが答えに困っていると、母親が父親に向かって相談を始めた。

「ねえ、あなた、これが噂の反抗期なのかしら？ ユリイちゃんが、尖った短剣みたいになって、盗んだ馬で走り出しちゃう？ あらあら、どうしましょ」

困った風に全然見えないのが母親の性格なのか表情のせいなのか……。

「マリナ、僕には全然困ってないように見えるんだけど」

ああ、やっぱり父親も同じような感想なんだ。

「え？ 別に困ってないもの。だって、ユリイちゃんて赤ん坊の頃からいい子過ぎて、ちっともワガママとか言ってくれないのよ？ むしろ、ちよっと嬉しかったりして？」

親として構ってもらえないのは寂しいじゃない」

……。

「わたしが小さい頃なんてね、お父様にもお母様にも、お兄様にもいっぱいワガママを言ったのよ。」

大きくなって、あなたに出会ってから、あなたにもたくさんワガママを言ったじゃない。

ねえ、あなた？ わたしのワガママがイヤだったかしら？」

「そんなことはなかったね。マリナのことは昔から好きだったから、むしろ、ワガママを言われると元気が出てきたくらいだよ」

「ふふっ、わたしも、あなたのことがずっと前から好きだったわ……」

……さりげなく惚気てるぞ、その似た者夫婦。

そして、母親の眼差しはいつの間にか、父親からオレの方に戻ってきている。

「さつきから、皆が話してるのは難しく全部はよく分からなかったけど、ユリイちゃんが凄いつつことだけは分かったわ。

だから、一人で旅に出ても困らないのかもしれない。けどね、ユリイちゃんが1人で旅に出ちゃうのはイヤよ。だって、もう二度と戻って来ないみたいない方だったもの」

うん、その通りです。戻ってくるつもりは……ありません。

「ユリイちゃん……。ユリイちゃんが、自分の為にこの家から出て行くっていうなら、わたしは止めないわ。

旅に出るのは、ユリイちゃんのワガママなの？」

「えっと……私がいると、きつとお母様やお父様が……」

「わたしたちの話を聞きたいんじゃないの。わたしの“ワガママ気持ち”は、わたしのものよ？」

ねえ、ユリイちゃん？ ユリイちゃんの本当の“ワガママお願い”を教えてください？」

「……………」 「……………」 「……………」

父親も、ロイズさんも、シズネさんも、黙ってオレと母親のやり取りを眺めている。

母親の視線がオレの瞳の奥を刺し貫いて、オレの弱い所を責め立てる。

「……………」 ずっと家族で居たいです。お父様やお母様と一緒に……………」 居たい、です」

「ふふっ、可愛いワガママね。ほんとユリィちゃんてば、いい子なんだから」

……………」 一緒に居て、オレは此処に居て、いいのだろうか？

「けど、それじゃあダメね」

……………」 え？

5歳：「ワガママと家族の形(2)」

ダメ。

……………駄目？

それは否定や拒絶を表す単語？

家族と一緒に居たいという願いを受け入れてもらえた、と思った。この両親ならば、無条件にオレを受け入れてくれると言う願望は、独り善がりな妄想でしかなかったのか？

「ねえ、ユリイちゃん、こっちに来てくれる？」

「はい……………」

母親に手招きされるままに、母親が座っているベッドに近づく。

足元がフワフワとして、あまり現実味がない。

「ユリイちゃん、ほら、見てちょうだい」

母親が示す方を見ると、2人の赤ん坊が柔らかな布にくるまれて静かに眠っていた。

ああ、あの時生まれた子たちか……………。

双子だからか、それとも赤ん坊だからか、2人はそっくりだった。けど、なんていうか一言で言うなら、ブサイク？ 髪の毛は変に薄いし、肌が赤っぽいし、全体的にクチャクチャだし。

赤ん坊で、もっとこう、可愛らしいもんだと思ってただけ……。

「名前は、リックとリリアよ。ユリイちゃんが、わたしを助けてくれたから、2人とも無事に生まれてきたし、わたしもこの2人に会うことができたの。」

すっかり言いそびれちゃったけど、助けてくれてありがとう、ユリイちゃん」

「いえ……私がもっと早くに魔術を使えることを明かしていたら、もっと簡単に助けられたかもしれません」

母親からの感謝が素直に受け取ることができず、顔を俯うつむけてしま

「ユリイちゃんは、魔術が使えることを知られなくなかったのよね？ わたしには、その理由が思いつかないけど、ユリイちゃんにとっては、きつと大事なことだったんでしょ？」

でも、わたしのために、その決め事を破ってくれた。それって、ユリイちゃんの大事にしていたことより、わたしのことを大事に思

つてくれたのよね？」

別に、あの時はただ無我夢中で……。そう言おうとして、言葉が止まる。

オレは、確かに自分の秘密と母親の大事を天秤に掛けたのだ。

そして、天秤の皿が母親に傾いただけの話。

それを上手く説明して、母親の言葉を否定することができない。

「それでね。さっきのユリイちゃん言葉なんだけど……リックちゃんとリリイちゃんも、ちゃんと入れてあげないとね。

わたしとあの人とユリイちゃん、それからリックちゃんとリリイちゃんの5人で家族なのよ？」

えっと、それはつまり………？

「ずっと家族でいるのなんて、当たり前じゃないの。

ユリイちゃんは、わたしが頑張って産んだ子供なんだから」

顔を上げると、いつもと変わらない母親の笑顔があった。

少し童顔で、出産の影響かやつれて見えるけど、綺麗で優しく全てを受け入れてくれる笑顔。

ジワリと、母親の姿が歪む。

「あらあら……ユリィちゃんてば……」

オレの涙を隠すように、母親が身を乗り出して両腕でオレの顔を抱きしめてくれる。

抱きしめる力は強くないのに、オレはその両腕から逃げることはできず。

さっき食べたお粥と同じ甘い香りが、ほのかにオレの鼻をくすぐった。

5歳：「ワガママと家族の形」(3)

死ぬ！

オレはこのまま死ねる！

「あの、お母様、そろそろ……」
「もうちょっと……ね？」

母親がベッドの端に腰を掛けて、オレを太腿ふとももの上に乗せて、後ろから支えている。

まあ、客観的に言うとおレは母親に抱っこされている。主観的に言っても同じだけど。
ついでに頭なでなで付き。

「うふふ、ユリイちゃんてば、真っ赤になっちゃって可愛かったわあ……」

「うーわー、恥ずかしいー、恥ずかし過ぎるっ！ もうオレの恥死ちしり量はオーバーよ！」

「さて……マリナ、ユリア、そのままでもいいから、僕の話聞いて欲しい」

「なにかしら？」

「うっ……？」

そのままっ！ まだこの恥ずかしい体勢でいるとっ！！

オレの必死の眼差しは父親には届かなかったようだ。うん、抱っこで照れるような両親じゃないのは知ってたさ。オレが恥ずかしがっているだなんて、父親の想定外なんだろう。

「ロイズさんとシズネ殿も聞いて下さい。僕は、ユリアが告白してくれた内容をこの場にいる者だけの秘密にしようと思います。」

特にユリアが【霊獣の加護】持ちであることが広まると、色々面倒なことになりますから」

「俺もその意見には賛成だ。」

子供なので養子に、未婚の女性だから婚約者にと、【霊獣の加護】持ちであるというだけお嬢様を求める家は多いだろうな」

「……そうなのですか？ 普通は自分と相手の家柄とかを気にしないのですか？」

「家柄を気にするからだ。身内に【霊獣の加護】持ちがいるというのは、それだけで名誉なことなんだよ。」

過去に【霊獣の加護】持ちというだけで、王家に嫁いだ農民出身の女性がいたくらいだ」

「ええ、バーレンシアの本家は位こそ高くないですがこの国では名門と言えます。」

しかし、僕とマリナはバーレンシア家の中でも傍流になりますか

ら、ユリアが【靈獣の加護】を持っていることを誇るよりも、断わり切れない養子縁組や縁談を持ちかけられないように動くべきです。少なくとも、ユリアが成人するまで10年の間は、公表は控えた方がいいでしょう。シズネ殿も秘密を守っていただけますか？」

「ああ、ルナ 小さき月精靈 の名の下に口外しないと誓うよ」

父親の顔がホッと緩み、再び引き締めた後で、オレの方を向いた。

「ユリア、ああ、えっと、ユリアではなく転生前の名前で呼んだほうがいい？」

「いえ、今の私はユリアですから……むしろ、ユリアの名で呼んでください」

「ありがとう……。それでね、ユリア……君は、君の力を、君自身のために使って欲しいんだ。」

例え、僕やマリナが何かを頼んだとしても、君は自分の意思できちんと決断をして欲しい……ユリアなら、それができるだろう？」

オレは、父親の突然の質問に、少し戸惑ってしまった。

けど、冷静に考えれば……今のオレは……

「さっき聞いただけでもユリアの力と影響力は計り知れない。」

宝魔石 をほぼ無制限に作れるのが本当ならば、それだけで国の軍事や経済に混乱を招きかねないんだ」

と、なるのだろう。

魔術だけに限ったことではない。
オレの記憶の中には、あらゆる先人の“発明”が詰まっている。
そして、発明というものは、それだけで財力にも武力にもなる。

例えば、この世界でマルチ商法を行なったらどうなるだろうか？
前世の世界では、とっくの昔に違法とされた行為であるが、この
世界においてはまだ禁止されていないだろう。
なぜなら発明されていないからだ。

もちろん、悪意のあるケースだけではなく、予防接種に代表され
るような人の命を救う発明だって多くある。

「もし、気になったことがあれば、今でなくてもいいから、遠慮な
く此処にいる誰かに相談して欲しい。

僕は君の父親だし、ロイズさんやシズネ殿だって、君の事が好き
なんだから」

「はい」

オレの表情を見て、こっちが不安を感じたことを悟ったのだろう。
先に手を差し伸べてしまった。

ああ、やばい、また涙が出そうになった。
少し涙腺が緩んでるのかもしれない。

「ところで、他に僕たちに話しておきたいこととか内緒にしている

「ことはあるかい？」

「えーと、あ、村の子供たちにお勉強を教えました。その、前世では小さい子供が勉強するのが当たり前だったので、つい」

「まあ……魔術とかを教えているわけじゃないんだよね？ それならあまり問題はないかな」

「あとは大したことじゃないと思いますけど、剣術を学びたいですとか、お風呂を造って欲しいですとか、書斎の本を自由に読みたいですとか、ジルが霊獣ですとか、さっきからこの体勢が恥ずかしいですとか」

「ん……？ ジルが何だって？」

「え？ ジルは プラチナウルフ なので、ちょっと珍しいですよね？」

……このセリフで、もう一悶着があったけど、詳細は割愛する。

5歳：「豊穰祭と贈る花の色」(1)「

「それじゃあ行ってきます」

「ユリイちゃん、ロイズさんの言うことをシツカリと聞いてね？
それとハンスさんとアイラさんをくれぐれもよろしくね」

馬の上から母親とシズネさんに出発の挨拶をする。

しかし、お母様の目がマジ過ぎる。とりあえず、肝心のシーンを
見逃したりしたら、後が怖いな……頑張ろう。

オレは、ウエステッド村で行なわれる豊穰祭に参加するため、ロ
イズさんと馬で向かうことになっている。

1人でも大丈夫だと言ったのだが、「心配だから」と涙を流しそ
うな顔をされたら、断わるわけにもいかない。

「ロイズさん、ユリイちゃんをお願いします」

「^{かしこ}畏まりました、マリナ様」

「バーレンシア夫人のことは、あたしに任せて2人とも楽しんでお
いで」

「はい、お母様をよろしくお願いします」

「あははは、あの話聞いた後でも、変な感じだね」

あの告白にもかわらず、あまり皆の様子は変わることがなかった。

ただ、シズネさんだけは、オレの大人びた口調に慣れないのか、今も笑いながら誤魔化していた。

母親とシズネさんは手に2輪ずつ黄色の花を持って、オレたちを見送ってくれている。

“日頃の感謝”を意味する黄色の花は、オレとロイズさんがそれぞれ1輪ずつ贈ったものだ。

豊穰祭は、日が沈むと同時に始まり、火を一晚中焚いて夜通し騒ぎ続けるらしい。

今から移動すると、大体日暮れ前に村につける予定だ。昼間はバツチリお昼寝をさせられた。

母親は、魔術のおかげで体調は悪くないが、念のために祭りへの参加は見合わせ、シズネさんも参加せずに母親の付き添いで屋敷に待機しておいてくれることになっていた。

父親は朝早くから出かけて行って、細々とした祭りの最後の調整こまごまをしているらしい。

普通、領主が率先して地元の祭りの調整をすることなんてないらしく、うちの父親がレアケースなのだ。

ただ、絶対的な裁定者がいるというのは便利らしく、父親が赴任

してきてから祭りの進行が滞ったことはないらしい。多少の問題ならば、父親の下す裁定一つでほぼ解決するからだ。

ちなみに、父親が裁定によって誰からか恨まれたことはないという。

実力なのか人徳なのか、あるいは両方なのだろう。

アイラさんは3日前（出産の翌日）からお屋敷の仕事はお休みして、祭りのメインイベントの予行練習みたいなことをしていると聞かされた。

母親と出産の途中に緊張で倒れた（ということになっている）オレのことをかなり気にしていたらしいが、父親が説得したらしい。

ちなみにハンスさんの姿を見かけないなあと思ったら、アイラさんと同じく3日前から村に泊りがけで祭りの準備に手を貸しているそうだ。

ロイズさんの扱きに比べれば、遙かにマシだと喜んで手伝いに向かったようだ。

ウェステッド村では村長宅、つまりアイラさんの実家で寝泊まりをしているらしく……母親の策謀を感じなくもない。

順調にアイラさんとの親密度を上げているに違いないだろう。

そんなわけで、アイラさんは元より、ハンスさんにもオレの話はしていない。

父親からは、ハンスさんに秘密のことを話すかどうかはオレに判

断を任すと、先に言われてしまった。

オレの秘密はあの場にいた者同士の秘密にすると言ったが、そもそもがオレ自身の問題だから、オレが決断するべきだと言うのだ。

ただ、ハンスさん以外の人物に秘密を明かす場合は、できることなら事前に相談して欲しいとも言われた。

今日の豊穰祭が終わって、母が落ち着き次第、シズネさんとハンスさんが王都に戻るようになっていて。

その前に決断しなくてはならない。

話すにしろ話さないにしろ、焦らずに対応しようと思う。

5歳：「豊穰祭と贈る花の色（2）」

村に到着すると、あちこちに篝火の準備がされており、広場の中央にはキャンプファイヤーのような大きな焚き火をおこすための薪が積み上げられていた。

「さて、俺はまずライラさんの家に行って、ハンスの様子を見てみようと思うが、お嬢様はどうする？」

「うん……」

「ユリア！」

「あ、お父様？ 祭りの準備はもう大丈夫なのですか？」

ロイズさんと一緒に行くか、別行動をとるかで悩んでいた所に声をかけられた。

「うん、まあ大体一段落してね。今は近隣の代表の方と“花贈り”の花を交換していた所さ。

そろそろユリアが到着すると思ってね。様子を見に来た所だったんだよ。ユリアとロイズさんもどうぞ。

それとは別に、ユリアはこれを“花贈り”用に持って行きなさい」

そう言ってオレの右手に赤い花を1輪と黄色と白色の花束を、ロイズさんには黄色い花を1輪渡す。

黄色の花が“日頃の感謝”なら、白色の花は“友への友愛”だ。うん、渡してくれた花束の中に“確かな愛情”を意味する赤色の花がないのは、わざとですね？

まあ……贈る相手がいるわけじゃないけどさ。

ちなみに受け取った花は茎の真ん中を一度折るのが作法だ。これは、贈った花なのか贈られた花なのかを見分けるための決まりごとである。

そのため、花を摘む時には茎が折れないように丁寧に扱わなくてはいけず、馬での移動中に花を集めておくことは断念していた。

父親が花束を用意してくれなかったら、豊穰祭が始まる前に、花を集めに行く必要があったから助かったんだけど。

結局、村長の家に向かうというロイズさんと一緒に付いていくと言う父親と別れ、オレはいつものメンバーを探すことにした。

「あ、いた」

イアン、サニヤちゃん、クータ君、シュリとシュナちゃんの5人は、村の外れでなにやら短い松明みたいなものを作っていた。

「こんにちわ、みんな。もうそろそろこんばんわだけどね。なに作ってるの?」

「こんにちわ、ユリアちゃん」「ゆうちゃん、こんにちわあ」

「ゆーゆー」「お嬢様、待っていましたよ」

「よっ。コイツは“包み薪”^{つつみまき}ってヤツさ。篝火の火力が足りなくなってきたら、これを焼^くべるんだ。

ところで……そ、その赤い花はどうしたんだ?」

皆の視線が、黄色と白色の花束の中に咲く1輪の赤い花に集まる。

「あ、これは、さっきお父様からもらったやつです。はい、皆にもべじぞ」

正直に話すと、皆の顔が「ああ」という納得の顔つきになる…

…父親の親バカっぷりは、この面子にも共通認識のようだ。

花束の中から白色の花を取り出して、皆に1輪ずつ手渡す。シユナちゃんは持っているのが難しそうなので、シユリに2人分を渡した。

お礼にと、皆も1輪ずつ、私に白色の花を渡してくれる。

「あれ? この花、ちょっと形が違うよ?」

「別に同じ花だけだとつまらないだろ? それだって、白っぽい花なんだから、いいじゃん」

「ふ〜ん」

オレが皆に渡した花やイアン以外の皆がくれた花は全部同じ形だったのだが、イアンがオレにくれた花だけ形が違っていた。

「あのねあのね、ゆうちゃん、その花の色はほとんど白なんだけど、ほんのりピン……あたたっ!？」

「うわっ!？ イアン!! クータ君に何してるのっ!？」

オレに何かを伝えようとしてたクータ君の頬をイアンが抓つかっていた。

「ふんっ」「……うう、いたかったあ」

「イアン、今クータ君が、私に何か言おうとしてたのに」

「内緒だ! クータも喋るんじゃないぞ! だからお嬢は別に気にするな。」

それより“包み薪”を作るのを手伝ってくれよ

「うーん、いいけど……」

少し釈然しやくぜんとしないけど、まあ、男の子同士の秘密ひみつってヤツか？

ちよつと羨ましいなあ。

そんなオレたちのやり取りをサニヤちゃんとシユリは、分かっています。そんな顔をして眺めていた。

5歳：「豊穰祭と贈る花の色（3）」

今年の祭り会場となったウエステッド村の代表であるライラさんの宣誓の下、豊穰祭は落日と共に滞りなく始まった。

広場は中央に焚かれた祭り火と周辺の篝火によって昼間の如く照らされている。

近隣の村人たちが各々で持ち寄ったご馳走に舌鼓を打つ。

中でも圧巻なのが、老いた小人牛の丸焼きだろう。焚き火で炙って、火が通った部分の肉を鋭利な短剣でそぎ落とし、それに軽く塩を振って、ハーブと一緒に豪快に口に入れる。

脂の乗った肉は祭りの空気も相俟^{あいま}って、生まれ変わってから食べた物の中で2番目に美味しかった。

他にも、各村で作った秘蔵の地酒が惜しげもなく振舞われ、皆の喉^{のど}を潤す。

女性や子供など、お酒が飲めない人用には木苺や山葡萄などのジュースがちゃんと用意されている。

「ほら、お嬢っ、芋とベーコンのスープだ。熱いから気をつけるよ」
「ユリア、キノコのオムレツがありましたよ。これは好物でしょう？」

「イアンもお父様も、ありがとございます。けど、そろそろお腹イッパイです」

……お父様、お願いだから、イアンと張り合っつのは止めて下さい。

祭りの佳境に入り、メインイベントである地の精霊王の祝福の儀式が始まった。

この儀式は、例の成人のお披露目も兼ねている。

祭りの参加者全員が静まり返る中、パチパチと薪の爆ぜる音だけが響き、厳粛な雰囲気^{げんしゆく}を醸し出す。

そこへ緑色のドレスをまとい、美しく化粧を施した1人の少女
アイラさんが、焚き火へと近づき、地の精霊王へ豊穰の祈りを捧げる。

地の精霊王の扮装をした村人が現れ、アイラさんに祝福を与える。
同時に夜空が割れんばかりの拍手が起こった。

オレも父親やロイズさん、ハンスさん、イアンたちと一緒に惜しげのない拍手を贈った。

祝福の儀式の余韻よゐんが一段落すると、オレたちの方へアイラさんが、こっちに向かってきた。

その手には赤い花が1輪。

思わず横にいるハンスさんの様子を伺うと、ハンスさんもこっち
にやってくるアイラさんに気付いたようだ。

心なしか緊張しているようにも見える。

「えと、その、この花を受け取ってください、か……」

アイラさんやハンスさんの緊張がオレのほうまで伝わってくる。
そして、アイラさんは、意を決したように花を差し出す。

「……………ロイズ様っ!」

……………えっ?

「「「は……………?」」」

その言葉に、近くにいたアイラさん以外の全員の表情が固まる。

というか、一番慌てたのはロイズさんだろう。ほとんど条件反射的に差し出された花を受け取ってしまっていた。

アイラさんが咲き誇る花のような笑顔を浮かべる。

「う、受け取ってくれて、ありがとうございませゆ!!」

あ、噛んだ。……うん、恋する乙女とは良いモノだ。

そっぴや剣術の稽古をしていた時、裏庭にいたのはハンスさんだけじゃなかったなあ。

「え？ え？ なんで俺えっ!？」

ロイズさんの絶叫は、様子を見守っていた全員の心の声を代弁していた。

さて、母親には、なんて報告しようか。

シズネ：「ユリアちゃんからのお土産」

「シズネさん、これはプレゼントです。お土産に、持って帰って下さい」

ユリアちゃんがこっそり渡してきたのは、直径が2イルチ位の翡翠の玉だった。

ただ普通の翡翠とは違い、緑に薄いピンク色の層が入っている。そして、あたしの【野兔の加護】が、この石が強い力を放っていることを教えてくれる。

「これは、もしかして……」

「はい、宝魔石 化させた 花乙女の翡翠 です。」

その石なら、多分、シズネさんと相性がいいはずですから、是非使って下さい」

翡翠やエメラルドといった緑色の 宝魔石 は、治癒の魔術と相性がいいと言われているので……医師であるあたしにとっては、この上ないお土産だ。

「川原に落ちている 花乙女の翡翠 を探して作ったので、お金はかかっていません。遠慮しないで下さいね？」

まったく、金貨何十枚になるか分からないモノを、すぐそこで拾ったように言うとはね。まあ、言葉どおりの意味で本当に拾ったんだらうけど。

宝魔石 が作れると言ったとき、物欲しそうにしてしまったあたしの反応に気付いていたんだらうな。

しかし、こんなギリギリまで渡してこなかったのは……

「ビックリしました？」

「ほんの少しだけな」

イタズラが成功した悪餓鬼わるがきの笑顔に、あたしまで嬉しくなる。

あの日の告白はとても信じられないものだったが、認めてしまえば、秘密を共有する仲間だ。

見た目と違って子供らしくはないだけで、お茶目だったりお人よしだったり……一回り年下の友達として考えれば、悪い気も少ない。

「ありがたくもらっていくよ。もしユリアちゃんが王都に来るか、またあたしがこっちに来る時に御礼をさせてもらうからね」

「はい、楽しみにしています」

「コーズレイト殿は、婚約者殿と仲良くな」

バーレンシア夫妻とは、既に館の方で挨拶を済ませている。

この村（確かウエステッド村だったか？）まで見送りに来てくれ

たのはユリアちゃんとコーズレイト殿だ。

ハンスさんは、お世話になった村長さんへ挨拶に行くために、四半刻（30分弱）ほど別行動を取っていた。

「シズネさん、勘弁して下さい」

コーズレイト殿が心底嫌そうな顔をしている。

「いやー、ユリアちゃんから豊穰祭の話聞いた時は開いた口がふさがらなかったが……よくよく考えてみれば、アイラちゃんの見る目を評価してやるべきか。」

「半分は冗談だけど、もう半分は本気だよ。あんたほどの男が独り身だったことの方が冗談みたいなもんさ」

「褒め言葉として受け取っておきます」

「けらけら、まあ、甲斐性を見せるんだね」

バーレンシア夫人も、ユリアちゃんの話の途中から乗り気になっていたしな。今は赤ん坊の面倒にかかりきりだが、それが一段落すれば、コーズレイト殿とアイラちゃんをくつつけるべく暗躍するだろう。

前向きに善処します、とどこぞのお役人みたいな返事をするコーズレイト殿にちよっぴりだけ同情してやる。

それ以上に「さっさと受け入れてしまえばいいのに」と言う気持ちの方が大きい。

「お待たせして、すみません」

「いやいや、それで挨拶回りは終わったのかい？」

「おかげさまで一通りは……あと、お弁当ももらってきました」

別れる前には持っていなかった袋を掲げてみせる。

「それじゃあ、ユリアちゃん、コーズレイト殿、また会おう」

「ユリアちゃん、隊長、お見送りありがとうございます。また遊びに来ます！」

「シズネさん、ハンスさんまたー」

「2人ともお元気で」

滞在したのは2巡り（20日間）と少しか、長いようで短かったな。

バーレンシアの一家とは未永く付き合いたいと思う。長生きしないとな。

さて、王都に帰りますか。

10歳：「月明かりの下での密会」

今日も夜空で双^{ふた}つの月が、美しい輝きを放っている。

小さい月をルナ、大きな月をディナと呼び、それはそのまま双子である月精霊の名前となる。

私は高度を調整し、最近すっかり降り慣れてしまったベランダへと着地した。

そして、飛行と姿隠しの魔術を解除する。

いつもならば、彼の方が先にいて、私のことを待っているのだが……。

カチャリと扉が開いて、雪のような白い髪が特徴的な少年がベランダに現れる。

その片手に茶器を乗せたお盆を持っていた。

「もう来てたのか、ユーリ。すまない、待たせてしまったか？」

「いや、丁度今到着した所だよ。それよりもそれは？」

「そうか、それは良かった。ああ、珍しい茶の葉をもらったから、ユーリと一緒に飲もうと思ってるな。」

この間、美味しいと言ってくれた菓子も用意しているぞ。だから機嫌を直してくれ」

「別に少し待たたくらいで怒ったりしないよ。そもそも、そういうのを気にする集まりでもないしね。」

ところで、君は私のことを食いしん坊だと思っていないかな？」「違うのか？」

「一度、フェルとは私のイメージについて、じっくり話し合う必要がありそうだね」

今ここにいるのは、ユリアでもないし、フェルネでもない。

ユーリと呼ばれている私とフェルと呼んでいる彼による2人だけの秘密の会合。

この奇妙な会合も今回で5回目になる。1日置きに開かれているから、フェルと知り合って9日目か。

それが、もう9日目なのか、まだ9日目のかは微妙なところだ。

「だって、ユーリの話題は、今日は初めて何々を食べたとか、屋台で買った何々が意外と美味しかったから始まるじゃないか」

「うっ、最初は無難な話題を選んだけだよ」

「そうか？ その割には食べ物の話の時は、いつも熱心じゃないか」

「……食べ物を美味しく食べれるのは、幸せなことなんだよ？」

「ぷっ……あははは、まさに食いしん坊の言葉だよ、それは……あははは……」

私の言い方がツボにハマったのか、ふてくされる私に遠慮なく笑う。

その笑顔が、歳相応の10歳の少年のものに見える。

私とは別の意味で、大人にならざるを得なかった少年の笑顔を見て、怒る気持ちにはならず、まあ、いいかと言う気分になる。

「それで、そのお茶はご馳走してくれないのかな？」
「くくくっ、まあ、今淹れるから少し待ってくれ」

ヤカンからティーポットにお湯を移し、待つこと2分ほど。フェルがティーポットを傾けて、お互いのカップに琥珀色の液体が注ぐ。辺りにお茶の芳香が漂いだす。

「高そうなお茶だね……」
「さあ？ 値段は気にしたことがないから分からないな。でも、美味しいお茶であることは保証する」

飲むように視線で薦められ、一口すすする。
お茶の良い香りをがそのまま口に広がり喉のどに滑り落ちていく。口の中に変な後味が残るわけでもなく、すっきりとしている。

「美味しい……」
「そうか良かった。お茶の葉もたくさんもあるから気にせず飲んでくれ」
「さて、一昨日は何の話をしてたっけ？」
「使用人に剣術の使い手がいて、弟子入りをしたと言う話だったな。今日はまず、その稽古内容について話してもらおうか」
「あんまり面白い話でもないと思うけど？」
「ユーリの話なら何でも面白い、話してくれ」

大人びていると言っても男の子なのだろう、剣術に憧れがあるよ
うだ。分からなくもない。

テーブル越しに、光の加減で白いオパールのような色合いを魅せ
る瞳が私を見つめる。

さて、2巡り(20日)前は、こんなことになるとは思ってもし
なかつたな……………。

10歳：「森の屋敷との別れ」(1)

「せやあつー!!」

「ふっ……はっ!!」

身体を右に半分捻り、イアンの上段から鋭い振り下ろしをかわし、返す動きで左から右へと剣を薙ぐ。

それをイアンはバックステップで避ける。私は剣の勢いを殺さないように、右から右上に剣筋を回して追加の一撃。鈍い金属音と共に振り切る前に剣が止められる。

「イアン、年下の女の子相手にちよつとは手加減しようとか思わない?」

「うっさい。そんなもんは4年前に捨てたっ!! 今日こそは勝つ!!」

「それ言うの何十回目だっけ?」

私の挑発に、いつも通りのってきたイアンが競り合っている剣に力を込めてくる。

チラリとロイズさんの方に目をやると、苦笑いを浮かべているが特に指摘するつもりはなさそうだ。

このまま単純な力では敵わない。一瞬強く力を込めて力勝負に応戦し、急激に抜く。それでバランスを崩させて、

「ふっ、いつも同じ手に掛かるか、よっ！！」

……さすがにもうこの手は食わないか。だったら……

「あっ！」

「へ？」

一瞬だけ視線を逸らして、意味ありげに叫んでやる。

その瞬間にできた隙を狙って、剣を軽く叩き込む。剣は絶妙な軌跡を描き、アインの右脇腹に当たった。

「……そこまでっ」

勝負の決着が付いたことを宣言するロイズさんの一声。

「だあっ！ 卑怯者！ 最後まで正々堂々戦えよな！」

「私は使える技を使って、全力で戦っただけだよ」

憤慨するイアンを軽く流す。剣術の訓練を始めた最初の頃は拮抗していた力もここ1年ですっかり差がついてしまった。女の子の方が成長が早いといわれるが、1年分の歳の差と性別は覆せなかった。

私は速度と小手先の技でなんとか勝ち星を奪っているだけだ。

「まあ、そうだな。今やっていたのは実戦訓練なんだから、相手の動きや言葉に惑わされた時点で、イアンの負けだ。」

ただし、お嬢様も今のはイアン位にしか通じないからな。あと、左側からばかり攻める悪い癖が出ていたぞ。そのせいで攻撃が単調になってた」

「うっっ……」「はい」

「さて、今日の稽古はこれまでにしようか」

「ご指導ありがとうございました」

イアンは今の勝負について、ロイズさんに諭されるが、納得できていないようだ。まあ、いつものことだから、明日になれば、またケロリと忘れて……ああ、そうだった。

「ロイズ様、今までおれに剣を教えてくれて、ありがとうございますごいまして！」

「4年か、過ぎてしまえばあっという間だな。」

本当なら、まだまだ色々と教えてやりたいことがたくさんあるが……まあ、少なくとも基礎はきちんと教えてやったつもりだ。これからも頑張ってくれ」

「はいっ……！」

イアンがロイズさんに深々とお辞儀をして、稽古のお礼を言う。

明日から、こうやってイアンと一緒に早朝の稽古を行なうこともなくなるのか。

「ねえ、イアン、お風呂を沸かしてもらっているから、村に帰る前に一緒に入って汗を流してく？」

「え、あ、お、おれは訓練に走って帰るから！！ 風呂は村で入るぜ！！」

練習用に刃を漬した剣をいつもの場所に立てかけると、逃げるようにして走り去っていく。

その様子が可愛らしくて思わず笑ってしまう。

「……悪女め」

私たちのやり取りを見ていたロイズさんが、ポツリとそう呟いた。

……そんなことはありませんよ？

10歳：「森の屋敷との別れ(2)」

湯船から桶で湯をすくい、頭からザパーッと掛ける。

もう一度、桶で湯をすくって、手ぬぐいを濡らして、ゴシゴシと身体を磨くようにして洗い、桶の湯で濯いで、また洗う。

前世と違いボディーソープなどは使わなくとも、これで十分綺麗になるのだ。

何回かそれを繰り返して、また頭から湯を浴びてから、湯船へ入り手足を伸ばす。湯船は大人が3人並んで一緒に入れるくらい広い造りになっている。

「はあ……」

稽古で疲れた身体に温かい湯が染み渡る。筋肉を軽く自分でマッサージするように解ほくしていく。

この5年弱で、変わったこと、判明したことが色々ある。

まず、私自身のことと言えば、あの告白から両親の理解を得ることができた。

お陰で自分を偽ることが減り精神的にもずいぶんと楽になった。

6歳になった頃から、自身を守るためにロイズさんから剣術を習い始め、本格的に身体を鍛え始めた。

私には強力な魔術があるが、いざという時にできることは多いに越したことはない。

おかげで身体は引き締まり、父親似の容貌もあいまって、美少女と言うよりも中性的な美少年という外見になった。稽古の邪魔にならないように短くした髪型のせいもあるかもしれない。

10年も経てば女の子の振りをするのもすっかり慣れたが、男であつた頃の意識は未だに残っている。

服装もスカートよりズボンの方が気楽だし、今でもスカートを履くと変装しているような気分がどうしても抜けないのだ。

そのうち胸とかが育ってくれば、少なくとも外見的にはもっと女らしくなると思う……多分。

お父様が買い与えてくれるのをいいことに、魔術書を始めとし、国の歴史や風俗など、雑多な書物も読み漁ってみた。

結果として分かったことは、私の魔術師としての素養が異常であること、活版印刷を初めとし未だに発明されていないものが多くあること、私の中にある『グロリス・ワールド』の知識は、この世界において200年以上前のモノであることなどが判明した。

お父様が所属しており、私が住んでいる国はラシク王国と言い、大陸の東部にあり、豊かなキャノン草原や大森林の全てを治め、大陸では3番目に大きな国らしい。

しかし、『グロリス・ワールド』でラシクと言えば、草原の中に

ある小さな村であった。王国の歴史を紐解けば、約250年前に初代建国王ラシク1世とその仲間は、ラシクと呼ばれていた村で育つたとされている。

本のお礼と言っては何だが、父親やロイズさんと相談して、私の記憶の中にあつた幾つかの発明も形にしてみた。

主に農具や上下水道の設置、衛生の概念だ。

農具は牛鋤ウシウシや千齒チシこきといういずれ誰かが思いつきそうなものとどめた。

上水道といつても、粉挽きに使う水車小屋を利用して村の中央を流れる水路を作っただけだ。もつとも上下水道は国内でも大きな都市では、昔から導入されているらしい。

衛生の基本として、屋敷と村ごとに風呂小屋を造り、入浴の仕方を広めてみた。

父親やロイズさん風呂のことを提案するまでは、お湯を沸かすための薪をどうするか悩んでいたが、ロイズさんのアイデアで 黒熱コクネツ鋼コウ と言う金属を用いることで対処することになった。

黒熱鋼 は 蓄光石 と幾つかの鉱石から作られる合金で、これを使い日光でお湯を沸かすことに成功した。初期投資はそれなりに掛かるが、繰り返し使えるので長期的には経済的であり、とつてもエコだ。

ただし、その性質上、晴れた昼間にしかお湯を沸かすことができず、長雨の時は結局薪で湯を沸かす必要がある。

「おはよござます、おねえさま！ リリアです、リックもいます！ はいってでもいいですか！」

「……いいですか？」

「おはようございます。いいよ、2人とも入っておいで！」

脱衣所の方からゴソゴソと服を脱ぐ音がして、可愛い妹と弟が入ってくる。

リックの方が少しだけ先に生まれたのでリックが兄で、リリアが妹だ。

ただ、リックは赤ん坊の頃から病弱気味で少し大人しく、リリアは積極的に物怖じしない性格なので、リリアの方が姉に見える。

「ほら、目を瞑つぶって」

「はい！」「うん……」

私は湯船から上がり、ぎゅーっと目を閉じる2人に頭から湯を掛けてやる。

リリアは自分で、リックは私が手ぬぐいで身体を洗う。リリアも背中など、うまく洗えない所は私が洗う。

その後、3人で湯に浸かる。

母親が「ユリイちゃんは、本当に手間の掛からない子だったのね」とボヤくくらい赤ん坊と言つのは手が掛かるものだった。それも2倍だ。

特にリックは赤ん坊の頃から、よく熱を出す子で、いざという時だけだが、私が魔術を使って治すこともあった。

それ以外にもオムツやミルクなど、私も手伝えることをできるだけ手伝った。

そんな感じに私は2人が赤ん坊の頃から面倒を見ており、よい姉をやっているのです、2人ともすっかりお姉ちゃん子になっている。

この間など、2人して「おねえさまのおよめさんになる！」と微笑ましいことを言ってくれた。

ふふふ、育成の成果が現れてきたようだ。

その時、私の横で寂しそうにしていたお父様が、ちよっぴり鬱陶うつとうしかった。

10歳：「森の屋敷との別れ」(3)

お父様の所属先が変わり、私たち一家は王都へと引越すことになった。

元々そついう話になっていたのか、特に理由は聞いていないし、聞きたいとも思っていない。

イアンたちと別れるのはちょっと寂しいが、今の私にとって、家族と一緒にいたい気持ちの方が大きかった。

領主としてお父様の後任には、お父様の従兄弟で私も2度ほど会ったことのあるナシスさんが着くことが決まっている。

ナシスさんは、お父様よりも3歳ほど年下で未婚だが、子供好きのいい人でリックやリアも懐いていた。

2度目にきた時など、ウエステッド村の収穫期で村人に混じって麦の収穫を手伝っていた。このエピソードだけでも、気さくな人柄が分かるだろう。

「ジルは右から先回りっ、私が左から追い込むから！」
「がっつ！」

私の横を走っていたジルが身を翻ひるがえして、右の茂みの中に消える。

イアンとの最後の稽古の後で朝食が終わり、私はジルと裏の森へ狩りに来ていた。

こうしてジルと森で狩りをするのも珍しいことではない。今追いかけている フォレストラビット も何度も狩ったことがある。

フォレストラビット は普通の兎より少し大きいが逃げ足が早く、私では魔術抜きに追いかけることはできない。まあ、もっと派手に魔術を使えば楽に狩れたりするが、身体的な訓練も兼ねて、今は必要以上に魔術を使っていない

なお、フォレストラビット の肉は、柔らかく淡泊な味で非常に美味しい。

引越しの前日だが、最後だからと、夕食用のご馳走を狩りに来たのだ。

そう、今回の引越しはイアンたちだけでなく、ジルとの別れも意味していた。

「王都にジルを連れて行くことが難しい」と言うのが、お父様とロイズさんの結論だ。例え連れて行っただとしても、屋敷の中から出すことができなくなるらしい。

それならば、ナシスさんに預けて、私が成長し次第引き取りに来ることにした。

……私は、未だにジルを“ファミリア使い魔”にすることができていない。

最初は魔術を使えば何とかかなると思っていたのだが、それらしき成果をあげることができなかった。

いくつかの魔術書を読んだところ、“使い魔との契約”は魔術師の秘技の一つであり、ラシク王国では魔術師組合で認可を受けた魔術師しか“使い魔”を持つことが許可されていないらしい。

その上、魔術師組合で認可を受けるためには、王国立の学院できちんと魔術を学び卒業する必要がある。学院で魔術を学ぶためには成人（満15歳）になっていないといけなくて……と、何重にも問題が積み上がってしまった。

ジルは普通のオオカミとは違い、寿命は人間よりも長く、それならば、私が正式な魔術師になるまで、一時の間別れて暮らすことにした。

もつとも、家族に隠れてちよくちよく遊びに来る予定だが。

そのことを説明した最初のうちはジルもイヤそうな顔をしていたが、何度か説得すると何とか納得してくれたようだ。

それからは今日まで、できるだけジルと一緒に遊んだり、構ってやるようにしていた。

ガサツと上の方で枝の揺れる音が聞こえ、白銀色の美しい毛並みのジルが飛び降りてきた。フォレストラビットは、一瞬の虚を突かれて、ジルの体当たりの直撃を食らう。

「ジル、ナイスッ！」

「がおんっ！」

私の横の大木まで吹き飛ばされた フォレストラビット の首に、
剣を鞘から抜き打ちの一発を放つ。

その攻撃が致命傷となつて フォレストラビット は、グツタリ
と動かなくなつた。

『南無、美味しく頂きますから、成仏してください』

どこか間違えているかもしれないが、まだ覚えている日本語を使
つて、兎の冥福を祈る。

私の精神が、まだ男性のものであるように、こういつときには、
どちらかといえば日本人だった時の気分が抜け切らないようだ。

手早く フォレストラビット の処理を行うと、意気揚々と屋敷
へと戻つた。

その夜、晩ご飯に食べた野兎のソテーとスープに満足し、私は深
い眠りについていた。

私のベッドの中に、こつそりと忍び込んだモノがいたことも気づ
かずに……。

10歳：「森の屋敷との別れ」(4)

朝起きると全体的に柔らかく温かなモノが、私と一緒に毛布に包まれていた。

特に頭部の辺り、モニュモニュと粘液状樹脂枕を思い出す柔らかさだ。

人肌くらいの温もりがあり……ぶっちゃけよう、目の前に程よい大きさのオツパイがある。左右きちんと2つ。

おうけえ、冷静になろうか、私。

ひとまずベッドから出て観察する。間違いなく私の部屋で、私のベッドだ。

滑らかな白銀色の髪、陶器のような白い肌をした美女がそのベッドですやすやと寝息を立てている。

身長は170イルチくらいだろうか、お父様とお母様の中間くらいで、140イルチの私よりも頭1つ分以上大きい。毛布の上からでも分かる全体的に均整の取れた、とても素晴らしいプロポーシヨンをしている。

どうやら、私が眠っているうちに毛布の中に潜り込んだと思われる。

成人男性なら泣いて喜ぶか、昨夜の記憶を必死になって思い出すとするシチュエーションに違いない。

しかし、女湯に入れる私は、今更、女性の生裸でうろたえたりはしない！

……でも、こんな美女の全裸はちよつとク。る。

ひとまず、謎の美女を揺り起こしてみようか。害意がある人物だとしたら、間抜けすぎだし……。

「うーん、むにゃむにゃ………ん？ くあぁ〜！」

全裸の美女が寝ぼけ眼に起き上がり、ベッドの上で四つん這ばになり、グーとお尻を突き上げるようにして伸びをする仕草がとてもなまめ艶かしい。

目が覚めてきたのか、キョロキョロと辺りを見回し、私の姿を見つけて、にっかりと嬉しそうに笑った。

「ボス、お早うゴザいます！」

「はい？ 誰がボス？」

「ボスがボス？」

いまいち会話がかみ合わないが、セリフから推測するに、彼女は私のことをボスと言っているよう聞こえる。私には会社や悪の組織を結成した覚えなんか無い。

「ええと、貴方は何で、ここにいるの？」

「ボスと一緒にオートに行く！ だから、ジルは人の姿になるレンシュウした！」

「……………もう一回言ってくれろ？」

あれ、聞き間違えかなあ？

「ボスと一緒にオートに行く？」

「その後」

「ジルは人の姿になるレンシュウした！」

「エラい？ ホめて？」と言わんばかりに、立派な胸を張って宣言する。私の聞き間違えではなかったようだ。

確かにオオカミは王都に連れて行けないと説明をした覚えがある。なるほど、人の姿に変身すれば連れて行ってもらえると、完璧な理屈だね。

「ジル？」

「なにボス？ 狩り行く？」

「いや、しばらくは狩りに行かないよ。ということは、やっぱり、貴女はジルなんだ？」

「ジルはジルじゃないの？」

おうけえ、冷静になるうか、私。

って、さっきもそんなことを考えたような。これは結構動揺しているようだ。

「ジル、抵抗しないでね……」
《イド心テレースがドエ・クト感じる其の力テラールを知る》

あー、【身体強化】と【人型化】の魔導を持っているんだ。

【人型化】っていうのは、後天的に成長によって取得するタイプの魔導なのかな。ははは……目の前の美女がジルであることが、ほぼ確定しましたよ？

その日の出発が予定より一刻半（3時間弱）ほど遅れ、王都に向かう馬車の中で、銀髪の美女が嬉しそうな笑顔を浮かべていたことを端的に説明しておく。

10歳：「王都到着、新しい屋敷（1）」

王都までは、馬車で5日間の旅程だった。

出発したのが、火の季節の1巡り目の第5日、一年で最も陽気が強くなる時期だ。

今回の旅に用意された馬車は1頭引きの幌馬車が2台。1頭引きといっても、グラウンドホースという普通の馬車馬の馬より、1・5倍ほど大柄の馬が引く馬車で、荷台は普通の2頭引きと変わらない大きさらしい。

旅のメンバーは、お父様、お母様、私、リック、リリア、ロイズさん、アイラさん、ジル、そして王都から迎えにきてくれたハンスさんとその部下のゲイルさんの10人だ。

お父様、ロイズさん、ハンスさん、ゲイルさんが交代で御者をしている。

初対面のゲイルさんだが、なんと黒い犬耳犬尻尾の持ち主だった！
初めての異種^{きばぞく}種族遭遇だ。

ゲイルさんは獣人種で牙族^{きはぞく}と呼ばれる、犬に似た特徴を持つ種族で20歳の男性。髪は尻尾と同じ黒、瞳は黒に近い灰色。

初対面の私や双子に尻尾を触らせてくれた。モフモフだった。

旅行中は和やかに……

「ボスのトナリはジルが座る！」

「おねえさまのとなりは、わたしとリックなの！」

「え、えつと、ぼくはべつに……」

ジル、見た目は妙齡のレディなんだけど、中身はリリアと一緒にんだ。

しょうがないから、リックを膝の上に乗せて、ジルとリリアは左右に配置……リックはいい子だから、サービス！ 2人とも羨ましそうに見ない！

お父様も羨ましそうにこっちを見ないで、きちんと御者をしてください……。

「ジル、何してるのっ!？」

「服着てるのジャマだし、アツい、又げばジャマにならない」

「ハンスさん、ゲイルさん、こっち見ない!!」

「ロイズ様……見てましたね？」

「いや、見えただけ、俺は別に……なんでそんなに泣きそうな顔になる!？」

私とお母様とアイラさんで、ジルに常識を教え込むという名の調教をしたり……。

ちなみに、ロイズさんは昨年の豊穰祭の後、とうとう観念^{かんねん}して、アイラさんと結婚をした。4年連続で赤い花を贈られて覚悟を決めなきゃ、男じゃない。

もちろん、私もお母様と一緒にロイズさんを追い詰める手伝いをしたのもいい思い出だ。

基本的に騒動の中心はジルだった。

人間の姿になれたのが嬉しかったのか、慣れてない身体で色々とやるうとするから問題を起こす。

結局、内緒にしてもらうことを十分に言い含めて、アイラさん、ハンスさん、グイルさんに「私が魔術が使えること」と「ジルの正体」を暴露した。

ハンスさんとグイルさんは、私が魔術を使えることを信じていないようだったから、実際に魔術を使って見せた。事前に用意していた宝魔石をあしらった腕輪を発動具としてみせた上で、だけど。

「お嬢様、流石です」

「あんな美人なのに……霊獣なのか。もったいない……グイルいってとく？」

「い、いつとくって、何がですか、ハンス副長!!」

「ハンスさん、さいてえ……」

「はっ!? い、いや、ユリアちゃん、オレは出会いが少ない部下のことを思ってたな!!」

まあ、ハンスさんの気持ちも十分に分かる。

ジルは黙って座っている分には貴族の令嬢か一流の踊り子と言われても信じられる容姿だし。

ちよつと言動を見てると、少し残念な子っぽいのがすぐに分かるけど。

王都に着いても、ジルは当分外出禁止だな。

女性陣による淑女としての教育が必要だろう。それが終わるまで屋敷の外に出すのは心配だ。

「うわぁ……お父様、あそこが王都ですか？」

「うん、そうだよ」

馬車を少し小高い丘で止め、私たちは馬車から降りて、巨大な街を一望していた。

「北側に見える一番大きな白い建物が王城、周りにあるのが行政施設で、その周りにあるのが貴族街。僕の実家、ユリアのお祖父様の屋敷もある区画だ。」

そこから東西南に延びる街道沿いが主な商業区画。街を流れる河と大きな水路に沿った辺りが工房区画。それ以外は大体が住宅区画となっているね。

僕らの新しい家は街の北西側にある新しく開発された区画で、ま

だ緑が多く残っている場所だよ」

お父様が指をさしながら、街の大雑把な説明をしてくれる。

こうして、私たちはラシク王国の王都ラシクリウスに到着した。

10歳：「王都到着、新しい屋敷（2）」

新しい家は、前の家よりは少し小さくなったが、8人で住むには十分な広さだった。

というか、前世の日本で考えると豪邸と言える広さなんだけどな。すつかり、10年間住んだ屋敷の広さに価値観が狂ってしまったていたようだ。

剣術の稽古をしても、隣家に迷惑にならないくらいの庭もちゃんがある。

家の中は、いかにも新築ですという新しい香りに満ちていた。

柱や家具に使われている木材、乾いたばかりの土壁、石のタイルや暖炉のレンガ、油で磨かれた金属……人がまだ住んでいない家の匂いがする。

「とりあえず、一通り荷物を降ろして休憩したら、日が落ちる前に本家に顔を見せに行こうと思う。」

多分、食事は向こうで取ると思うから、そのつもりで……まずは家の中を説明しようか」

お父様が、それぞれの部屋を説明していく。1階には大広間と応接室、食堂、厨房、使用人用の私室。

ロイズさんとアイラさんが中くらいの部屋を1つ、ジルが小さな部屋を1つ与えられる。

そして……、

「「「おお〜」」」

なんと前の家と変わらない、いや、むしろ洗い場が一回り広くなった浴室が完備されていた。

グッジョブ、お父様！ しばらくは甘えたい盛りの娘モードになつてあげよう。

2階は、両親の部屋と寝室、お父様用の書斎、子供それぞれの部屋、物置、それ以外が客室のようだ。

双子は、今まで両親と一緒にの部屋で寝ていたから、初めての1人部屋に興奮していた。

「お父さま、カーテンはピンクがいいな」

さつそくりリアがお父様におねだりをする。

リックは、ドキドキとワクワクともじもじが混じった様な反応。う〜ん、可愛いんだけど、いつまでも甘やかしてばかりじゃなくて、もうちよつと男の子らしく育てなきゃダメか？

私の部屋は、双子の部屋にはない大きな机と本棚が備え付けられ

ていた。

好みが分かっているのだろう、全体的にシンプルで機能性を重視したタイプだ。うん、悪くない。

新しい家を一通り探索し終わった後、食堂で遅めの昼食とお茶で一息つくことになった。

さっそくアイラさんが新しい厨房で用意をしてくれたようだ。なんでも、竈かまどが使いやすくて、外の井戸まで行かなくても上水道が厨房の真下を通っていて、内井戸のようになっていようだ。便利になったと喜んでいた。

上水道か……今度、その辺りもちよつと調べてみよう。

「あれ？　ゲイルさんは？」

「ああ、借りてた馬車を返しに行かせた。ついでに辻馬車を呼んでくるってさ」

「じゃあ、なんでハンスさんがここにいるの？　馬車は2台あったけど、ゲイルさんを2往復させてるの？」

「ユリアちゃん……一応、おれって部隊の副長で、ゲイルをパシリに使っても怒られないくらい偉かったりするんだけど？」

「おうばーなじょーしは、女の人にもてませんよ？」

覚えたての言葉を使ってみたい子供っぽく、可愛らしさ満載な声で言ってみました。

ハンスさんが精神的にショックを受けているようだけど、人間て

心に疚^{やま}しい所があると真実を受け入れがたいんだよな、うん。

さて、出発しようとした時、またジルが一悶着^{ひともんちゃく}を起こした。ジルも本家に連れて行ってもらえると思っただけならいい。

「だから、ジルはロイズさんたちと一緒に留守番！」

「やだ！ ジルはボスが1番好き！ ボスとイッショに行く！」

「ジルちゃん、お腹すかない？ 良い子でお留守番するなら、すぐにご飯の用意をしますよ？」

「……アイラは2番に好き！ ボス、ジルはおうちで良い子でマッてる！」

アイラさんがジルの扱いに慣れたのか、ジルが単純なだけなのか……。

結果オーライなんだけど、こっ、少し釈然^{しやくぜん}としない何かがあった。

10歳：「バーレンシア家の事情（1）」

実は、双子は元より私もお祖父様と会うのは、初めてだったりする。

お父様の話を聞くに「仕事人間」という言葉が当てはまるタイプで、ウエステッド村を往復するほど長期の休みが取れないのだろう、と言っていた。

お祖父様のことを語るお父様の表情は、何か色々な想いを含んでいるように見えた。

バーレンシアの本家で最初に私たちを出迎えてくれたのは、執事のおじいさんとルヴィナ・バーレンシア、つまりお祖母様だった。

白が混じり始めたブロンドに青の瞳、ふっくらとした体型はウエステッド村のおばちゃんたちを思い出させる普通の感じの女性だった。ただ、言動の端々に品の良さを感じる。

両親が再会の挨拶をし、私と双子が初対面の挨拶が終わると、テラスへと通された。

その外見どおりに、お祖母様は次から次へと話が転がる。最初は真剣に聞いていたが、途中からはお母様に任せて、双子と一緒にお茶菓子について話し合っていた。

そこでお茶を楽しんでいると、お父様のお兄さん夫妻、私にとって伯父と伯母にあたる男女が現れた。カイト・ミムスエ・バーレンシアとフラン・バーレンシア。

ミムスエは、“ルーン”的には《小四》^{ミムスエ}を意味する。

ラシク王国の貴族の地位について簡単に説明すると、基本的に家長が持つ称号が家の格となり、上から順に王を表す《大一》^{ガイイア}、王家の《大二》^{ガイルウ}、次いで《大三》^{ガイシャ}、《大四》^{ガイスエ}、《大五》^{ガイウエ}、《大六》^{ガイロオ}、《七》^{チエ}となる。

《小四》^{ミムスエ}のように《小》^{ミム}がつくのは、正式な後継者や次期当主を意味し、例えば王太子ならば《小一》^{ミムイア}と呼ばれる。

ただし、《七》^{チエ}だけは《大》^{ガイ}も《小》^{ミム}も付かない。これは、《七》^{チエ}が個人に贈られる一代限りの名誉的な称号であるためだ。

身近な例で言えば、実はロイズさんがこの《七》^{チエ}の称号を持ち、正式にはロイズ・チエ・コーズレイトとなる。が、本人はあまり気に入っていないらしく、名乗る時にチエをつけない。

伯父様は、確かお父様より3つ年上だったはずだから、今年で34歳か。淡いシルバーブロンドと青い瞳、全体的なパーツはお父様と似ているが、体付きはお父様をさらに細くして、目を細く吊り上げてキツめな感じ、一言で表すと神経質そうな高級官僚^{キャリア}？

その奥さんの方は、見た目は20代後半くらい。美しいブロンドの長い髪に、神秘的な濃紫の瞳をしている。

よく言えば儂^{はかな}げでいかにもな深窓の令嬢、悪く言つとオドオドとした態度がまるで人見知りをする子供のような人だ。

伯父は楽しそうにお父様と政治の話をしているし、しばらくして伯母も緊張が解けたのか双子の話をも根気強く聞いて相手してくれるあたり、私の伯父夫婦への印象は良い。

1刻半（約3時間）ほどして、日が暮れ始めた頃、屋敷の当主の
カインド・ガースエ・バーレンシアが帰宅した。

整髪料でバツチリ固めたシルバーブロンドと深い青の瞳。お父様
や伯父様が歳を取ると、そうなるだろう姿だった。お父様に似てい
るということは、私にも若干似ているということでもある。

「父さん、久しぶりです」

「ご無沙汰しております。お義父様」

「初めまして、お祖父様、ユリアと申します」

「リックと申します」「リリアともうします」

「うむ、よく来た」

お祖母様とは逆でお祖父様は口数が少なく堅苦しい人、というのが
第一印象だった。

そして、その爆弾は、食事の途中にお祖父様の口から投下された。

「ふむ……少々もの大人しいがなかなか利発そうな子だ。文官と
してなら大成するだろう。」

カイト、リックを本家に養子として迎える。ケインもいいな」

「……!?」「」

「なっ!?!? 父さん、その話は既に断わったはずですよ!」

静かだった食堂が一気に騒然とする。

「ケインが否と言おうが、私が下す決定とは別だ。そもそもがこの話を断わるヤツがどこにいる。」

「ガールオではなくガースエを継げるのだから、リックの将来にとつて悪い話ではなかるう?」

「兄さんからも、言ってやってください! 確かにまだ兄さんたちには子はいないかもしれないけど、まだ兄さんも義姉さんも若いじゃないですか」

「……………ケイン、しかし、父さんの意向はバーレンシア家の意向だぞ」

「兄さんっ!?! 当主の意見が最重視されるのは古くからの伝統ではありませんが、それが絶対であったのは戦乱の時代、2000年も前の話ですよ!?!」

珍しく大声を張り上げたお父様を内心で応援する。細かい話は分からないが、お父様の意思を無視しているのならば、お祖父様の味方をする義理はない。

当事者であるリックは、急に自分が注目されて怯えてしまった。

私はその手をそつと握ると、リックが私の方を振り向いたので、微笑んでやる。それで少しは怯えが和らいだ。

「まあまあ、ケインが大声を出すなんて珍しいわね。……………あなたも、そんな食事が楽しめなくなるような話は控えてください」

「ふむ……………まあ、いい、この話はまた今度だ」

「……………」

その場はお祖母様の一言で収まったが、食事後、出されたお茶を一口も飲まずに私たちは本家の屋敷を後にした。

10歳：「バーレンシア家の事情（2）」

王都に到着してから、5日間が経ち、新しい生活に徐々に慣れてきた。

お父様は新しい職場が忙しいのか、以前よりも帰宅が遅くなったが、晩ご飯までにはきちんと帰宅していた。

森の中の屋敷で暮らしていた頃と変わりのない日常が過ぎている。

そう、せっかく王都にやってきたというのに、街の探検どころか、門から外に出ることは禁止されていた。

お父様は、あの日のお祖父様の発言について、何もなかったかのように振る舞っている。

私は、その間に分かっている情報を元に推測と現状の整理をしてみた。

まず、あの時の会話から思いつくこと。

伯父夫婦に何かしらの問題があつて子供がいない、もしかするとできないのかもしれない。これが今回の問題の前提だ。

子供がいないとバーレンシア家の直系が途絶えてしまったため、伯父夫婦は養子を迎えると言う手段を取らざるをえない。

そこへ、傍流に男児が生まれたという話があつた。叔母夫婦にとつても直接繋がっていないとはいえ、血を分けた弟の子供だ。家の継承を目的として養子にするとしたら、これほど良い条件はないか

もしれない。

貴族の位について、ちょっと調べてみたがガースエとガーロオでは、待遇も権力も格段に違う。

一例を挙げれば、継承権の有無。

ガースエだと王国の認可を受けずに個人の意思で後継者を選ぶことができるが、ガーロオの場合は自由に選ぶことができない。

他にも統治権の違いと収税権の有無。

ガースエには王国から領地を割り振られ、その土地を統治することで、その土地から出る税の何割かを直接収入として得ることができ。

ガーロオは土地を統治する権利はあるが、税の全てが一度王国のものとなり、王国から俸禄ほうりくという形で収入を得ることになる。もちろん、ガースエでも自分の領地の統治以外に、王国の政務に携わっていれば、王国から俸禄を受け取ることもある。

この際、父親の感情とかは無視するとして……いや、分かっている情報からなんとなく推理するに、父親の愛妻家で子煩悩な性格は、あのお祖父様の性格や言動の裏返しなのだろう。

前世の頃に読んでいた小説や漫画からの知識を含めた上での推理だけど、当たらずとも遠からずって感じだと思う。

まず、どの形であれ、どうすればリックが幸せになれるかが問題だ。

そこが一番大事であることを忘れちゃいけない。

この話を受けた場合のメリットは、リックの将来が安泰であろうこと。

ただし、私たちと一緒にいる時間は確実に減るだろう。今でも十分に勉強しているが、ガースエを継ぐとなったら、また別の勉強が必要になるかもしれない。

伯父夫婦には大事にしてもらえと思う。それにお互いが生きている限り、本気で会おうと思えば、いつでも会えるはずだ。

「お姉さま、ぼくはよその家の子になるんですか？」

「他所の家と言っても、お父様のお兄様の子供だよ。」

向こうの家の方がお金持ちだから、色々美味しい物を食べれて、好きな本とか買ってもらえるかもね。リックは、どう思う？」

「お父さまやお母さま、お姉さま、リアと分かれるのはいやです。でも、おじさまとおばさま、おばあさまは、きらいじゃありません。」

おじいさまは、……ちょっとこわいです」

私は思わずリックの頭を撫でてやる。いや、ほんといい子に育つたな。

幸い部屋の中には私とリックしかいない。だからこそ、このタイミングで話を切り出したんだろうけど。

「まず、私はリックがどうしたいのかを一番大事にしようと思ってる。次に、お父様の気持ちかな」

「お父さま……」

リックは聡い子だから、食事の時のお父様の言動が気になっているのだろう。

普段、お父様はめったに声を荒げない人だから、あの夜のことには私の印象にも強く残っている。

「これだけ言っておくけど、私以外の家族もリックの事が大事だと思っっているよ。」

お父様だって、リックが本気でそうしたいと思うなら、迷わずに送り出してくれる。

分かってるよね？」

「うん……でも、ぼくは、どうしていいのかわからない……」

「ああ、ごめん。今すぐ答える必要はないから、リックが十分悩めるだけの時間は私がどんな手を使ってでも作らせるから、大丈夫だよ。」

そもそも、伯父さん夫婦に子供ができれば、なくなっちゃおうような話なんだから。

リックはそこまで気にしなくなっただっていいんだよ。また気になることがあれば、私に相談しなさい」

「はい。お姉さま、話を聞いてくれて、ありがとうございます」

そう言いながら、照れくさそうな笑顔を見せる。

私が思わず抱きしめて、可愛がりまくったのは仕方ない行動だと思っ。この姉殺しめ。

の。
と、まあ、リックには心配掛けないようお姉さんぶってみたもの。

私自身のモヤモヤはスッキリしないわけ……

「ティニ《モアムナ軀は見えざる皮を纏う》、ゼエス《テアール風を駆けるは空を舞う竜の翼》ウイス
…よしっ」リアート
フィス
ロアースドレイク・ド・フェス
…

では、ストレス解消にちょっぴり夜遊びへ行ってきます！

10歳：「虹色石の瞳を持つ少年（1）」

自由意志による単身飛行。

前世の世界で最もそれに近づけたのは、古典的ではあるがハングレライダーだったのではないだろうか。

この世界は違う。魔術と言う名のルール破りの技がある。……いや、魔術がある世界で魔術を使ってやっていることだからルールには従ってはいるのか？

ともあれ、私は地上から3キルテ（≒約300m）付近を飛んでいた。

姿隠しの魔術も併用しているため、普通の人には気付かれない自信がある。

この魔術は、過去の実験ではロイズさんの目の前を歩いても一応バレなかった。

一応とつくのは、その時は普通に忍び足で歩いていたため、足元の微かな凹みのせいでバレてしまったからだ。姿が見えていたわけではない。

飛行の魔術を初めて使った時はかなり緊張した。

この世界にいる有翼人種は例外として、普通の人は空を飛べる生き物じゃない。

最初の頃は、大丈夫だと思いながらも僅か1メートル(≒約1m)ほどをフヨフヨと浮いていただけであった。

それが、今では地上から3キルテ離れた空を飛びながら、のんびりとリラックスしている。飛行することの恐怖も、繰り返し慣れてしまった。

飛行には慣れたが、この空を飛ぶ爽快感は、何度やっても飽きないくらい気持ちがいい。

前世ではスカイダイビングのことをなんてマゾな趣味だと思っていたが、ハマる人がいる理由が今なら分かる。

夏で気温が高く、それほど速度を出していないが、寒い時やもっと高速度で飛ぶ時は、防寒や風圧対策の魔術も使う。

今は少し強めの風が頬に当たるくらいなのが、また気持ちいい。

しばらく飛び続けた私は、空中に止まり、浮かびながら寝転がった。

眼下に王都の夜景が広がっている。ポツポツとした明かりは民家の物だろう。

ところどころで、明かりが強く輝いている場所もある。

貴族街の明かりが集まっている場所では、夜会が行われているのだろうか？

後2年もすれば、私もデビューをはたすことになるだろう夜の宴は、面倒そうではあるが少し楽しみだ。

それから、商業区画の何ヶ所かが派手に明かりがついている。

多分……酒場やそういうお店が軒を連ねる盛り場だろう。

仰向けになれば、夜空に数多の星が散らばっていた。

排気ガスや工場の煙の汚されていない澄んだ空気。この世界の夜空は美しい煌きに満ちている。

空中飛行は、水中を泳ぐのと似ていると思う。あくまで似ているだけで、空には水のような重たさはない。

水ならばプカプカと浮くが、魔術による座標固定はシツカリしているでそれほど揺れることはない。

えーと、布製のハンモックの感覚が近いかもしれない。布製のハンモックが分からないなら、太陽にたっぶり干した羽毛布団に横になったような、そんな感じだ。

さて、十分気分転換になったし、そろそろ戻るか。

私はゆっくりと高度を落としていく。

私が違和感に気付いたのは、屋敷の屋根の高さまで下りてきた時だった。

2階に見覚えのないベランダがある。そもそも、家の形がちょっと変形したような？

……そんなわけではない。つまるところ、家に向かっていたつもりが、見当違いの場所に下りてきてしまったようだ。

これはいわゆる迷子だな、はっはっは……しょうがない、探知の魔術を使うか。

対象は、ジルが分かりやすいかな。

「キミは、そこで何をやっているんだ？」

は？ 声が聞こえてきたベランダの方を見る。

と、いつからそこにいたのか、最初から私に気付いていなかっただけなのか……闇からうつすらと浮かび上がるように立つ、白い影みたいな少年と目があった。

……姿隠しの魔術はまだ解除していないよな？

思わず、自分の後ろを振り向くが、わたしの後ろには星以外に誰もいない。

「なるほど。姿隠しの魔術を使っているのか……残念ながら、それはボクとは特に相性の悪い魔術だな」

今、なんて言った！？

もしかして、こっちの心を……

「別に心を読んだわけじゃない。キミが隠そうとすることがボクには分かるだけだ」

10歳：「虹色石の瞳を持つ少年（2）」

隠し事がバレる？　おいおい、ジョニー、それは本当かい、困っちゃうよ、私は隠し事の塊じゃないか？

いや、誰だよ、ジョニーって……前世でたまに見てた古い料理番組のアシスタントだったけ？

魔術？　だとすれば、私の抵抗値を突破できるほど強力な魔術の使い手？

同じ年くらいに見えるが……むしろ、魔導か古代帝国のマジックアイテムを警戒した方がいいか。

マジックアイテムだとすれば、こんな子供に持たせておく可能性が低い。となると、【先天性加護】の一種？　該当するようなあったかな。

さて、変なことがバレる前に逃げるか……。

「待ってくれ!？」

私が逃げ出す雰囲気を感じたのか、ん？

なんで「逃げるな」じゃなくて「待ってくれ」なんだ？

少年の方を見ると、なんだか必死そうな顔なんだけど……。

「途中からキミのことが分からなくなった。キミはいったい何者な

んだ？」

「別に怪しい者じゃない、って言う方が怪しいよね。えっと、……迷子？」

「ただの迷子なのか？ ボクを暗殺しに来た刺客とかではなく？」

「あ、暗殺……？」

物騒な単語が聞こえたよ。うわ、関わりたくないな。

「ふむ、面白い……キミ、ボクと友達になってみないか？」

「なんでっ!？」

「うん？ あえて言うなら、キミがボクのことをよく知らないみたいだからか？」

「というか、隠し事ができないとか、そんな相手と一緒にいたいと思っ？」

「そのことなら、安心しろ。途中からキミが、何を隠しているかが分からなくなった。

だから、興味深い……なぜ、ボクのが能力が通じなくなった？ 魔術か？ それとも何か特殊な技か？」

「いや、そもそも、キミの能力なんてよく知らないし……急に隠し事が分からなくなったとか、言われても判断に困るよ」

「うん、面白いほどに君の隠し事が分からないな。キミの名前は？」

「え？ ユ、リ……っ」と

「ユーリ？ 本名なのか？ 女みたいな名前だな」

「いや、本名じゃないけど。というか、私は女の子なんだけど」

「本名じゃない？ つまり、偽名か……面白いな、それ。こう秘密っぽくていい。それじゃあ、ボクのこととはフェルと呼んでくれ。

ちなみに、わざわざ女の子だなんて下手な嘘を付かなくてもいい

ぞ」

「いや、この服は男モノだけど、動きやすいからで……なんなら、脱いで見せようか？」

「え？ほんとに女の子なのか？ って、脱ぐな！ 分かった、信じる、信じるから！」

ふっ、勝った……って、なんで、私は見ず知らずの少年の前で服を脱ごうとしているのかな。

「キミには羞恥心というものはないのか？」

少年……フェルだっけ？ が呆れたような目をしている。
いいじゃないか、別に減るもんじゃないし、脱いで困る歳でもあるまいし。

「と言うか、キミって何歳？ なんだか、妙にませてるけど」

「今年で10歳になったな。というか、キミも人のことは言えないと思うが」

「え、嘘、同い年なの？ 君って苦労しているでしょ？ だから、そんなにませてるんだ、きつと」

「苦労か……まあ、苦労しているといえばしているな。この能力のせいで、知らなくてもいいことばかり知ってしまう」

「その能力って、結局なんなの？」

「ん？ ボクが教えると思うか？」

だよね。なんか、ノリで答えてくれるかなとか思ったんだけど。

「【夢夜兔の加護】……瞳に映した相手が隠していることを知る魔導だ。」

欠点は夜の間にしか効果がないこと。それから能力は無差別に発揮されるため、同時に多くの人を見てしまつとヒドイ眩暈めまいと吐き気を起こす」

「え？ 答えてくれるんだ？」

【夢夜兔の加護】、聞き覚えがないけど…… ドリームナイツラビット って霊獣じゃなかったっけ？

うわ、私と同じ【霊獣の加護】持ちってことか！？

「ああ、友達になった記念だと思ってくれ」

「ふん……って、いつのまに友達になったのかな？」

「ボクが友達になってくれ、と言った時に断わらなかったじゃないか」

「君さ……ワガママだって言われるだろう」

「今まで言われたことはないな……面と向かつてはだが。」

ところで、そろそろ降りてきてくれないか、この体勢で話をしているとちよつと首が疲れる」

「……………」

なんだか、警戒してたのがバカらしい気がする。私はベランダに降りて、掛けていた魔術を解除した。

フェルに近寄って気付いたが、彼は髪だけでなく瞳の色も白っぽく、オパールのように光の加減で色合いが変化していた。

10歳：「虹色石の瞳を持つ少年」(3)

フェルに言われるがまま、ベランダに備え付けられたテーブルの椅子に向かい合わせで座る。

「ところで、さっき暗殺とか言ってたけど……いいの、私みたいな怪しい人物と一緒にいて」

「構わない。暗殺というのも軽い冗談だ、もっともいつ起こってもおかしくはないと思っているがな」

うーん、なんだろう。

10歳にしては貫禄がありすぎるといふか、性格が渋いといふか、……ああ、枯れてる、が一番しっくりくるな。

「それで？ 友達になるのはいいけど、何がしたいのかな？」
「そうだな……まずは、お互いのことについて質問するというのはどうだ？ もちろん、質問に拒否をしてもいい、その場合は別の質問をする」

お見合いか、これ？

いや、お互いのことを教え合うというのは、対人関係の基本だし、お見合いに似てくるのかもしれないけど。

「それじゃあね……」

「待った。ボクのチカラを教えたんだ。こつちに先に質問をさせてくれ」

「それもそうか。何が知りたいの？」

「さつき空中浮遊といい、姿隠しといい、ユーリは魔術師なのか？」「魔術を使えるのが魔術師と言うなら、私は魔術師だよ」

うん、ここが微妙なんだよな。ラシク王国には、職業としての魔術師がある。

分類としては「限定魔術師」と「公認魔術師」の2種類に分かれる。両方とも一定以上の魔術的な技能を有し、魔術師組合に所属していることが条件だ。

両者の違いは何かというと、簡単に言えば 発動具 の所持の有無となる。

前者は自前の 発動具 を持つておらず、国や組合などの団体と契約して所属することで 発動具 を借りて業務に就く。そのため、契約をしている団体に対する強い義務や制限が色々と発生する。

逆に後者は、自前の 発動具 を持つており、魔術師組合には籍を置いているだけの魔術師だ。必ず魔術師組合に所属する必要はないが、所属をしている方が何かと便利らしい。特に身分や身元の証明になる。

公認魔術師でも限定魔術師のように国や組合と契約して業務にしている場合が多い。

ただ、限定魔術師よりも公認魔術師の方が自由度が高く、また条件も良いので、多くの魔術師は自分の 発動具 を手に入れること

を目標とするそうだと。デメリットは自前の 発動具 を壊したり紛失した場合、全てが個人の負担になってしまふ点にある。

そして、私のような魔術を使えるが、魔術師組合に所属していない者は「魔術使い」と呼ばれるらしい。

魔術師組合に所属しないのは、別に違法ではないが、所属していない魔術師は無法者や厄介者という目で見られがちである。実際にそういう魔術師が多いのも事実で、「魔術使い」というのは蔑称（くっしょう）に近い。

ちなみに、魔術を習っている身分は、ただ単に「魔術師見習い」と呼ばれる。

「少し含みがある言い方だな」

「じゃあ、次は私の番だね……えっと、好きな食べ物は何かな？」

「……なんだ、それは？」

「え？ やっぱりここは、ご趣味は？ とか聞いたほうが良かった？」

フェルからの追求を誤魔化すために、思わず適当な質問をしたが、変人を見る目をされてしまった。お約束は通じなかつたか。

まあ、なんだか、長い付き合いになりそうだし、別にいいじゃん。

「答えてくれないの？ それともこの質問は拒否？」

「特に好きな食べ物はない、あえて言うなら飲み物だが香草茶が好きだ。趣味は魔術学」

と思つてたら、律儀に返答してくれた。
趣味は魔術学か。それもあつて、魔術師である私に興味を持ったのか？

「次はボクからだな。ユーリの好きな食べ物と趣味は？」

「おおつ、質問返しをされた。好きな食べ物はお肉とお菓子。小
人牛のステーキとかプリンが特に好きだね。

趣味は魔術と剣術と料理を少々？」

「いや、ユーリの魔術って趣味なのか？ それとプリンって？」

「さりげなく質問を増やしてない？ 次は私の番だね？」

「面倒になった。普通に話をしよう」

「……………まあ、いいけど。」

魔術については、別に魔術でお金を稼ごうとは思っていないから、
そういうのを趣味と呼ぶんじゃない？

ちなみにプリンっていうのは、ミルクと卵と砂糖を混ぜて加熱し
たお菓子のことだよ」

フェルとは半刻（約1時間）ほど話したが、なんだかんだで盛り
上がった。結構楽しかったのかもしれない。

特にフェルのこの世界の魔術に関する知識は、大人顔負けで、た
めになる。私の知識は、なんていうか、解答本を見て答えだけが分
かっている状態なので、常識的な情報は重要だ。

その後、フェルの都合に合わせて2日後に再び会う約束を交わし
て、私は家に戻った。

どつやら、抜け出したのはバレていなかったようだ。
翌朝になっても何も言われなかった。

10歳：「活動資金を稼ごう(1)」

「ふあ〜……、んんっ！」

あくびをもたらした眠気を、背伸びで追い払う。

昨夜はフェルとの3度目の密会だった。お互いに慣れてきたのか、フェルが用意してくれたお菓子をつまみながら、最初から最後までダラダラと色々な話をしていった。

バタークッキーのようなお菓子で、木の実の粉が練り込まれているため、とても香ばしくサクサクで美味しかった。

今回の密会で一番印象に残っているのが、あの屋敷が言葉どおりの意味で、フェルの物であることだ。

両親は貴族街にある屋敷に住んでおり、つまりはフェルは一人暮らしというか、隔離されているらしい。

原因は多分【夢夜兔の加護】のせいだろう。

人は生きていく中で大なり小なり嘘をつくし、隠し事をする。例えばそれが血のつながった親兄弟でも話したくない、隠したいことがある。

【夢夜兔の加護】は、隠そうと強く思えば思うほど、そのことがはっきり分かってしまうものらしい。

結果として、フェルの両親は「【霊獣の加護】持ちの親」というステータスを大事にしながら、フェルを飼い殺すようにあの家に閉

じ込めているというわけだ。

その親はさらに報酬をもらって、フェルの能力を使っていると聞いた。

最近では、様々な人物の秘密を暴くことも少くないそうだ。

フェルが大人びてしまった理由が分かってきたかもしれない。と言って、2日に1度の話し相手になるくらいしか、私が彼にできることはないけど。

そして今、私は王都の雑踏の中にいた。

数度に渡るおねだりの結果、やっと屋敷の外に出る許可をもらえた。門限付きだが、お供もなしに1人で王都を自由に散策している。

私は上質な男物の服を着ており、腰には短めのショートソードを差している。一見するとどこか貴族の子息に見えるはずだ。

この外見なら、よほどの相手でなければ、なめられることもないという考えもある。念のため外見の印象を変える魔術もかけている。

王都を上空から見ると、上を北として『』のように大きな道が走っている。上の丸い部分の中に王城をはじめとした行政施設や貴族街があり、壁で囲まれその周りに横幅が平均40メルチ（＝約40メートル）の道がぐるりと周回している。

下の十字の部分は王都を突き抜ける大きな街道であり、横幅が平均70メルチ（＝約70メートル）ある。

貴族街の周りにある道が宝環通り、東西に走る道が馬車街道、貴族街から南に走る道が王湖街道と呼ばれる。

道の中央は馬車が行き交っており、道の端には主に商店や工房、真つ当な宿屋が軒を連ねている。道の幅が広がる場所は広場のようになっている。露店が構えている。

店のランク的には、宝環通りにある店は貴族や豪商などの富裕階級向けの店が多く、王城から離れるほど徐々に庶民向けの店になっていく。

ただし、馬車街道と王湖街道が交わる十字から宝環通りまでの道は王湖街道の一部だが、そこが最も王都で高級な一角とされており、宿屋や衣服商、装飾具商、レストランなど、それぞれの分野での一流店のみが店を構えることができる場所になっていた。

さてと、まずは鉱石商かな？

以前の屋敷で、鉱石のなかでも輝石に分類される翡翠や水晶などを集めていた。機会があれば、ぜひ換金しようと思っていたのだ。

魔術のおかげで、輝石そのものは簡単に見つかったので、その中でいくつかを見繕^{みつくろ}って持ってきていた。残りは私室のチェストの中だ。

親におねだりすれば、お小遣いをもらえそうだが、自分で見つけた石を売ったお金の方が気兼ねなく使えるしな。

目的の店はすぐに見つかった。一見して店内は清潔感があり、ここそこに儲かっていそうな店を選んだ。

「失礼、どなたかいらっしゃいますか？」

「はい……お客様、本日は何をお探して？」

「いや、この店は石の買取りはやっていきますか？　いくつか売りたいのですが」

「やっております。こちらにおかけになってお待ちください」

服のおかげか、店員の私に対する態度も悪くない。店員が奥に入
って、しばらくすると片眼鏡を着けた男が私の前にやってきた。

「本日は石をお売り頂けるといことですが」
「ええ、こちらです……」

ポケットから取り出した小袋の口を広げて、中に入っていた石を
テーブルの上に広げる。

「拝見いたします」

片眼鏡の男は、石をひとつずつとって丁寧に眺めていく。
私はその顔をじっと見つめていた。ある石を見たときに男の動き
が一瞬だけ止まった。よく見ていなければ気づかなかったくらいの
反応だ。

「ありがとうございます。それで、いかほどでお売りいただける
のですか？」

「なにぶん、私はこの手の相場に関しては素人も同然ですので、そ
ちらの、えっと……」

「ああ、これは申し遅れました。『セールテクト輝石店』の店主を
しております。ホラン・セールテクトと申します」

「ご丁寧にどうも。私のことはケインとお呼びください。」

値段について、ホランさんの査定額をお聞きしてもよいですか？」
「畏まりました。粒の小さな翡翠と水晶は1個100シジルとして、

6個で600シリル。こちらの花乙女の翡翠は2個で1500シリル。泉乙女の紫水晶は3個で5千シリルでいかがでしょうか？」

「ええと、これは？」

今の話の中で値段を指定されなかった赤い色の石を指差した。

「真に申し訳ありませんが、そちらは当店で買い取ることが難しく、今回は遠慮ください」

10歳：「活動資金を稼ごう(2)」

これはいきなり当たりを引いたかもしれない。

ホランさんが買取を除外した石は 星紅玉石 と呼ばれる宝石だ。前世でもスタールビーという宝石があったが、それに近いかもしれない。ロイズさんに確認したが、4〜5千シリルくらいで買い取ってもらえる宝石らしい。

なお、一般的な成人男性が休みなしに1巡り(10日分)働いた場合の給金が約5〜8千シリル、年に何日か休むことを考慮した年収だと約15〜25万シリルとなる。

お父様はガーロオとしてはかなり高給取りな方で、昨年の年収が約150万シリルだったらしい。1シリルが日本円で100円くらいだと考えると分かりやすい。

そうなると買い取り額が数千シリルもする宝石は安いものではないが、さっきの取引からするにこの店なら決して買い取れない金額ではない。

「買取ができない、ですか？ 理由はお聞きしても？」

「 星紅玉石 でしたら、当店でも扱っておりますが、 宝魔石 の原石となりますと、当店の予算では、即買い取りというのは難しくなります」

おおっ！ 言い切った！

そう、この 星紅玉石 の原石は、私が事前に 宝魔石 化させておいたものだ。

今回の散歩において目標の1つであった「信用できそうな鉱石商を見つける」がいきなり達成できそうだ。

条件は3つ「宝魔石 を見抜く力があること」「客を騙そうとしないこと」「有名な店ではないこと」だ。

この店とホランさんならば、3つともクリアできそうだ。

「ええ、そこまで気づいていただけたら話は早い。この石に関しては即金は求めませんので、上手く売り捌いていただけませんか？売却できたら、そちらの手数料を引いただけの金額でかまいません。安心して下さい。決して王国の法に触れるような品ではないことは保証します」

「……………」

ホランさんの顔色は表面的には変わらないが、唐突に破格の交渉に相当悩んでいるようだ。

それはそうだろう、相手は一見して成人にもなっていない少年だ。

「もし、その話を断りましたら、どうなさいますか？」

「縁がなかったものとしてあきらめます。あ、他の石は買い取っていただけると嬉しいですが」

こちらは事も無げな様子でサラリと答える。いや、内心は結構ド

キドキしてるんだけどな。

「失礼ですが、ケイン様……当店をお試しになられていますか？」
「ええ、私はこの石と同じような物を、後いくつか持っています。
この街には先日着いたばかりで、長めに滞在することになりそうなの
です。」

ですから、末永く付き合えそうな店を探していたんですよ」

ホランさんの目を見据えて、ニコリと笑みを浮かべる。

この場面においての笑顔は相当な精神攻撃になるだろう。
別にホランさんと戦っているわけじゃないけど、こう、気分的な
ものだ。

「2割、いえ、手数料として売却額の1割5分を頂けますか？」
「構いません。むしろ、手数料は2割でいいです。その代わり契約
書などは作らず、口頭での契約としたいのですが、よいでしょうか
？」

「えっ、あ、畏まりました」

「それで、この石はホランさんにお預けするとして、他の石の代金
を頂いてもよろしいですか？」

ああ、できれば少し小銭も混ぜてもらえると嬉しいです」

「はい、どうか少々お待ち下さい」

石を丁寧に仕舞い、一度奥へ行って戻ってきて私の前に硬貨を数
枚並べる。

「買取の代金で、7,100シリルとなります。 星紅玉石 の代金は後日ということ、売れた場合のご連絡先などは？」

「1巡りに1度くらいは様子を見に来ますので、売っていたらその時に代金を下さい」

「畏まりました」

軽銀貨が10枚、半銀貨が8枚、銀貨が6枚、小金貨が6枚だ。

金貨以外の硬貨を輝石が入っていた小袋にまとめて入れる。小金貨は別々のポケットにしまう。金属製の硬貨だから結構ずっしり重い。

硬貨の価値は、それぞれ1枚で小軽銀貨が1シリル、軽銀貨が10シリル、半銀貨が50シリル、銀貨が100シリル、小金貨が1千シリル、半金貨が5千シリル、金貨が1万シリルとなっている。

金貨以上の価値を持つ宝石貨というものがあるが、普段からは使わず、国や大きな組織の運営や貯蓄に使われることを目的とした代理硬貨だ。

「ありがとうございました。これから、よろしくお願いします」

「いえ、こちらこそ。今後ともご贖戻の程を宜しくお願いいたします」

ホランさんの90度の最敬礼に見送られ、私は意気揚々と店を出た。

うん、今の商談はかなりの好感触だった。ホランさんも第一印象

では商売に対しては真面目そうな人だ。

途中から、私のほづを値踏みしようとしていたけど、ボロが出てないといいなあ。

10歳：「王都を歩こう（1）」

「あつつ……はむ、もぐもぐ……」

味はホタテのバター焼き、食感的にはヒレ肉みたいな感じかな。
私は串焼きにした グラススネイル の肉を噛み締めながら、街道を行く人たちを眺めていた。

「だめだ、ちよつと塩っ気が強い。おじさん、そのピンク色の液体って何？」

「これか？ これはいくつかの果物の果汁を絞って混ぜたもんだ」

「お酒？」

「違う違う、むしろ、酒が飲めないヤツが頼むもんだな」

「じゃあ、それを……いくら？」

「はいよ、半カップで3シリアルだけど」

「なら、1カップ分で……」

財布にしている小袋から軽銀貨を1枚渡して、おつりに小軽銀貨を4枚もらう。

大雑把に露店を見ていた感じ、食品や日用雑貨の類は比較的安く、逆に嗜好品や金属類は割高のようだ。

嗜好品には香辛料や煙草などが含まれる。お酒はピンキリっばい。

食べるだけなら、1食辺り軽銀貨で4枚、40シリアルもあれば成

人男性でもお腹が膨れるだろう。

自炊をすれば、もっと安く抑えられると思う。

カップを傾けて、一口飲むとオレンジ系をベースにマンゴーとスイカが混じったような味がする。

サツパリとした味で飲み易い。ちよつとぬるいのが残念だけど、こんな人前で大っぴらに魔術を使うわけにも行かないよなあ。

冷したら、もっと美味しそうなのに。

ウェステッド村とは違い、王都では様々な種族を見かけることができる。

ローブを着ていかにもといった杖を持っているエルフ、両手剣を背負った鱗族と真剣に話をしている爪族、露店でアクセサリを売っているドワーフ、布教をするマーマンの司祭などなど。

以前読んだ『人類とその大いなる特徴』と題された研究論文の中で身を思い出しながら、串焼きとジューズの残りをお腹の中に収めていく。

この世界の人類は大きく、人間種、亜妖精種、獣人種の3種に分けられる。

人間種は生活圏によって髪や瞳、肌の色が異なるが1種族とみなされ、ただ人間と呼ばれる。

亜妖精種は主として、森のエルフ、山のドワーフ、草原のポツク
ル、海のマーマンに分かれ、獣人種は主として、牙族^{きはぞく}、爪族^{つめぞく}、翼族^{つばさぞく}

鱗族うろこぞうに分かれる。

各種族とも、基本的には人間とあまり変わらないが、人間との相違点は大体が次のようになる。

・エルフ：背が高く痩せ型で耳が長い。魔導の【魔法適性】により魔力の効率が総じて高く、魔術に長けている。

・ドワーフ：背が低くがっしりとして、魔導の【炎熱耐性】により火や熱に強い。暗視が利く。鉱石や金属の扱いに長けている。

・ポックル：平均身長が最も低い種族で、成体になっても人間の子供と間違えられるくらい。手先が器用で、耳が半円のように丸い。

・マーマン：身体の一部に魚のようなヒレや小さい水かきがあり、魔導の【水中適応】により水中でも呼吸ができる。ただし、普段は陸で暮らしている。また他種族に比べ、圧倒的に水の精霊に気に入られやすい。

・牙族きはぞく：犬のような耳と尻尾を持っており、筋力や持久力に優れている。嗅覚がもつとも鋭い。

・爪族つめぞく：猫のような耳と尻尾を持っており、瞬発力や敏捷力に優れている。ドワーフと同じくらい暗視が利く。

・翼族つばねぞう：背中に鳥のような翼を持っており、魔導の【飛空の翼】により空中を自在に飛ぶことができる。エルフ族ほどではないが、魔術との親和性が高い。

鱗族（トカゲ）：トカゲのような尻尾を持っており、人間で言う毛深さのよ
うに個体差はあるが、顔や手足などの皮膚の一部がウロコ状になっ
ている。生存力や耐久力に優れており、食事や睡眠が不足しても長
く活動できる。

ここまでは『グロリス・ワールド』で作れるキャラクターの種族
ともほぼ一致する。

違っているのは、この世界にはそれ以外にも細かい種族がいるら
しい。

残念ながら、そういう希少種は人が大勢集まる場所に出てくるこ
とは少なく、まだ見たことがない。

串焼きとジュースを食べ終わったところで、店のおじさんにお礼
をいって、軽食の露店を後にした。

懐も暖かいし、私は可愛い弟妹とジルのためにも何かお土産を買
うべく露店チエックを再開する。

本当なら武器や防具の店も見て回りたかったが、今日の所は店の
場所を確認するだけに留めておいた。

今度、余裕があるときに覗いてみる予定だ。

10歳：「王都を歩こう」(2)「

「毎度あり〜」

「どもー。さて、こんな所かな」

代金を払って、紐で括って繋げられた干し肉を受け取る。これはジルへのお土産だ。

いくつか露店を見て回った結果、土いじりが好きなリックにはハープの苗を、おしゃれに興味がでてきたリリアにはリボンを買って帰ることにした。

それほど大きな買い物はしなかったので、今日売り払った輝石の代金は、ほとんど残っている。

さて、そろそろ帰ろうかなと考えていると、見覚えのある耳と尻尾を見つけた。

「ゲイルさん、こんにちわ」

「ん？ ……もしかして、ユリアちゃん？」

「正解です。よく分かりましたね？」

私の姿を見て一瞬悩むような顔をしたが、すぐに私だと分かったようだ。

「いや、雰囲気全然違うから自信はなかったんだけど、声の質とかで何となくかな。」

「そんな格好をして何してるの？」

「お買い物とお散歩です。そういうグイルさんは？ お仕事ですか？」

グイルさんの服装は、旅行中のラフな格好とは違い、かっちりとした堅い感じの服を来ている。

「多分、王国軍の制服、軍服ってヤツだろう。」

「ああ、オレの方は巡回中だな。オレやハンス副長が所属する地軍は、こうした王都の治安維持も仕事の一環だから。」

「この付近は十二番隊の担当地区なんだ」

グイルさんて、口調や軍人をしている割には人の良さそうなオラが出ているんだよな。大人しい大型犬というか

……あつ、犬のおまわりさん！ 軍人とか警察官というより、おまわりさんだ！

個人的に、すごく納得してしまった。

「まあ、ユリアちゃんなら大丈夫だとは思うが……裏通りとか、あんま危険な場所には行かないようにな。」

いくら腕に自信があるといっても、まだまだ小さいんだし、それに“魔術”^{アレ}は秘密なんだろ？」

「もちろんです」

本当に心配そうな顔をされては、下手に反論もできない。

実は、ゲイルさんより私の方が強いんだけどな。

王都までの旅の途中に、ロイズさんの提案でゲイルさんにも稽古の相手をしてもらったのだが、魔術なしで引き分けくらい、魔術ありなら私の圧勝だった。

前の屋敷では稽古の相手になるのが、ロイズさんとイアンしかいなかったから、今一分からなかったけど、私は新米の一般兵並には素でも戦えるようだ。

ちなみに、ハンスさんには魔術なしには勝てず、強化系の魔術を2つほど使って引き分けくらい。

ロイズさんとは、かなり卑怯っぽい魔術を使わない限り1撃も与えられないほどの実力差がある。

「あ、ゲイルさんこの格好の時に街であつたら、ケインと呼んで下さい」

「ケイン？ ……了解。ケイン君は、これからどこに行くんだ？」

ノリがいいというか、子供のお遊びに付き合ってくれている感じが。

「ん、もう帰ろうかと思っていましたところでした。それじゃあ、ゲイルさん、お仕事頑張ってください」

「気を付けて帰るんだぞ」

そう告げて、グイルさんと別れようとした時、

「わっ!」「おっと」

「っと、お兄さんゴメンなさいー!」

私より少し小柄な少年とぶつかってしまい、倒れそうになった私をグイルさんが慌てて支えてくれた。

「ユ……………じゃない、ケイン君、大丈夫か?」

「ええ、お蔭様で転ばずにすみました。ありがとうございます」

「怪我はなくてよかったけど、そうじゃなくて……………今のってスリじや?」

「……………えっ? ああっ」

硬貨を入れた小袋が、ズボンのポケットから煙のようになくなっていった。

10歳：「王都を歩(3)」

「で、ゲイルは、その掏すられたのを黙もくって見逃すしたと」

「うつつ……面目ない」

「ハンスさん、それは倒れそうになった私を助けようとしてくれたから！」

と、ハンスさんのからかいに本気で頂うなだ垂れるゲイルさんのフォロ
ーをしておく。

スリの少年を追いかけようにも、人ゴミにまぎれてあつという間
に見えなくなってしまった。

それからゲイルさんの提案で、私はゲイルさんと一緒に地軍の詰
め所にやってきた。

ちょうどハンスさんが待機中だったので、詰め所の個室を借りて、
現状の説明をしたところだ。

「で、被害はどのくらいなんだ？」

「んー、硬貨で800シリル位と小袋が1つかな……お金のほうは
いいですけど、小袋はお母様にももらったやつなので取り戻し
たいです」

「……800シリルかあ、おれらが動くにはちよつと微妙な額だな。
もちろん、ユリアちゃんのお小遣いとしてはすごい額んだけどさ」

「ん？ お小遣いじゃないですよ？ 私が見つけた輝石を売ったお
金ですから、ある意味自分で稼いだお金です」

「ほ……一応、その少年の特徴を聞いておこうか」

ハンスさんは、机の引き出しから紙を取り出すと、ペンをインク壺につけながらさらさらと書き出した。

事情調書みたいなものか？

「少年で私より少し背が低いくらい、それ以外はよく分かりません」
「オレが見た感じだと身長は大体130イルチ、やや細身で、髪は茶色で肩下くらいの長さ、人間にしては珍しい透き通るような緑の眼をしていました。」

言い訳っぽいですけど、あつという間に裏道に逃げ込んだのを見るに、それなりに土地勘がある常習犯かもしれませぬ。

服はあまり綺麗ではなかったので、街頭孤児の可能性が高いかと」

「孤児ね……一応、軽犯罪対策班に連絡を入れとくか」

「……ハンスさん、この場合の罪ってどのくらいの罰になるんですか？」

「金銭の窃盗は総額1万シリル以下なら額に応じた鞭打ち、1万を超えていると強制労働所送りだな。」

まあ、被害額なんか結構曖昧だったりするから、裁判官の酌量しゃくりょうによつて変わる部分も大きいが」

政治と商売に関する法律は読んでいたけど、刑罰の部分は読み飛ばしてたんだよ。しかし鞭打ちか。

「それじゃあ、今回の私の分はなかったことにしておいてもらえま

す？」

「……いいのかい、それで？」

「どうせお金は戻ってこない可能性が高いでしょうし、私もいい勉強になったと思えば安くついた方です」

「相変わらずユリアちゃんは考え方が子供離れしてるなあ」

「ハンスさんは、30歳には見えないくらい子供っぽいですね」

「……ユリアちゃん、それ褒めてないぞ」

別に褒めてないからな！

まあ、別のポケットに入れておいた小金貨は無事だったし、宝魔石 が上手く売れば、かなりの収入が見込める。

遊ぶ金ほしさではなく、生きるための行為だと思うとあまり責めたいとは思わない。

もちろん、前世の道德観と自分が裕福だからこそその偽善かもしれないが。

「しかし、あの手際だと組合所属でしょうか？」

「所属しているにしても、してないにしても面倒な話だけだな」

「組合？ 何の話ですか？」

「ん、まあ、ユリアちゃんならいいか。ユリアちゃんは、連盟れんめいって分かるか？」

少し王国内の組織について、勢力別に大きく分けると3種類の団体がある。

1つが、王宮議会、王をトップとする代表貴族による団体で王国の統治を司っている。王国軍もここに所属していて、もちろん国で

一番力がある組織と言っていいただろう。

2つめが、宗教関係で大きな団体が5つ。四大精霊王を信仰する各教に、眠れる神を信仰する唯神教だ。

いずれも国に縛られず、勢力を大陸全土に広がる組織である。

もちろん、ラシク王国の支配下の地にある精霊院や教会は、名目上だがラシク王国の認可を受けているという立場にある。

3つめが、連盟と呼ばれる各分野によって分かれる王国内の職業組合の集まりだ。

これは王国の保護下にある組織とされるが、連盟の幹部に与えられる権力は下級貴族のそれを上回る。

そのため、自身の関係者を連盟の幹部にしようと画策する貴族も少なくはないらしい。

「えっと、商人連盟、職人連盟、学者連盟、冒険者連盟の4つのことですよね？」

例えば、商人連盟ならば行商組合や鉱石商組合、冒険者連盟ならば探索者組合や護衛組合を傘下に行っている。

私に一番関係がありそうな魔術師組合は学者連盟の下位組織となる。

ちなみに1人の人が複数の組合に所属することは問題なく、各組合の所属条件にさえクリアすればいいらしい。

この連盟と組合は、ラシク王国で生まれた社会的なシステムであるため『グロリス・ワールド』の設定にはなかった。冒険者連盟とか、ゲーマーとしては、すごい心惹かれる名前なだけだな。

「そう表向きはその4つだな。ただ、王国には5つ目の連盟と呼ばれる組織があつて……通称、罪人連盟さいにんれんめいと言つんだ」

「もちろん王国がつけた公式な組織名じゃなくて皮肉を効かせた自称だけだな。ちょっとした有識者なら、誰でも知ってるくらい巨大な組織だ。」

そもそも必要悪みたいなもんで王宮議会も潰すに潰せず、ほどよく共生している。そして、その下位組織に拘すり師組合っていう、まんなな団体があつてな。

例の少年が、そこに所属しているなら小袋位は取り戻せるかもしれないが……それはそれで面倒なんだよ」

ハンスさんが難しい顔をする。

ん、つまりはマフィアとか暴力団みたいなものの親玉って感じか。悪人には悪人の秩序があるから、その均衡きんこうを下手に崩すと蜂の巣を突付いたような事態を引き起こすってことだな。

「その罪人連盟には、ほかにどんな組合があるんですか？」

「はつきりと分かってないが、荒事師組合、泥棒組合、諜報員組合、闇商人組合あたりは有名だな。」

噂だと暗殺者組合ってのもあるって言われているが、これは真偽は不明だ」

「仮にあの少年がその罪人連盟に所属しているとして、少年を捕まえて取り返した場合、その連盟はどうですか？」

「ああ、別に犯罪者を捕まえたからといって、抗争たいこうが起こったりは

しないさ。それが下っ端であれば特にな。

罪人連盟にとつて、王国軍に捕まるような構成員は本人の腕が悪
いってことになってるからな。別に罪人連盟は、国家の転覆てんぷくや支
配を狙っているわけじゃない。

変な話だが、王国が平和だからこそ、罪人連盟なんて名乗ってい
られると言っわけだ。

もちろん、連盟の幹部クラスを捕まえようとする、かなり大変
なことになるらしいがな。

その少年が罪人連盟にもすごい貢献をしている場合、裏で減刑
の手回しとかをしてくる可能性はあるが、たかだか下町のスリ少年
だしなあ」

少し人事のように言っているが、まあ、管轄が違うのかもしれない。
たまに見ていた刑事ドラマのマル暴みたいな部署があるのだろ
う、きつと。

こうなると、小袋は直接取り戻したほうが早いかな。

「それで、ユリアちゃんどうする？」

「あ、ハンスさんも、この姿のときはケインって呼んでください。

一応、お忍びなのです」

「ぶっ、りょーかい」

「で、まあ、今日はもう帰ります。弟たちへのお土産がありますか
ら」

「今日は、か……ケイン、1人でスリ少年を捕まえようとか思っ
てないよな？」

「うわっ、ハンスさんのくせに鋭い。
そんな勘はもつと女心を知るために使えばいいのに。まあ、私も女心なんてよく分らないけどな。」

「捕まえようだなんて思っていないません。今回のことはいいい勉強だったと思ってる、って言ったじゃないですか」

「ふむ……ならいいけどな」

「……………ケイン君、あのさ、捕まえないけど、自分で小袋を取り戻そうと思ってるのか？」

「げっ……………」

「ゲイルさんめー、余計なことをー。」

「ケイン、女の子が『げっ』とか言わない……………で、ゲイルの言うてることは当たり前なんだな」

「まあ、ちよつと会ってお話し合いで解決できればいいなー、とか」
「でもどうやってあの少年を見つけ……………ああ、魔術か」

「はい、正解ー。」

「小袋は元々私のものなので、多分探知の魔術の対象になると思っ
んだよな。」

「今試してもいいけど、荷物があるから今日は家に帰って、明日に
でも改めて探すつもりだった。」

「ケイン、このことをお父様に報告してほしくなければ、その少年

に会いに行くときにグイルを連れて行くこと」

「えっ？ そんなグイルさんのお仕事の邪魔は……」

「平気平気。ケイン君、治安維持はオレらの仕事だって言っただろ？」

「そういうこと。約束できるか？」

2人が私を見る目が、何だろう、こっ、「しょうがない子だなあ」
っていう目だ。

ここで約束しないと両親に全て暴露されて、今後の活動に支障が出ることは間違いない。内緒にしたいのも変に心配させたくもないからだ。

「うっ……約束、します」

「よし、いい子だ」

ハンスさんがガシガシと私の頭をなでる。完全に子ども扱いだな。

いや、私は子供なんだからハンスさんの対応は間違えてない。私がハンスさんの立場でも同じようにやるはず。

最近、ちよっと自分が子供だということを忘れがちだ。気をつけねば、うん。

さて、可愛い弟妹とワンコが待つ我が家に帰ろうか。

フェル：「焼き菓子と夜の友達」

「それでね。その丸焼きから、切り取った肉に塩を振りかけて、ハ
ーブとかと一緒に食べるんだけど、これが美味しくて。

ただ、注意しないといけないのが、脂が熱くなってるから慌てる
と口の中を火傷……ちょ、何笑ってるの？」

ん？ 笑っているつもりはなかったんだが、ボクは笑っていたの
か。

やっぱりユーリはすごいな。ボクはここ数年の間は笑ったことな
らなかつたのに……。

「いや、ユーリが嬉しそうだから、ボクまで嬉しくなっただけだ」

「気障きざんっ！ フェル、君さ、将来女めつたらしになりそうだね」

「女めつたらしか……ボクみたいな不恰好な容貌を好きになる人間な
らないさ」

「それは嫌味？ そんな綺麗な髪と目、整った輪郭をしていて、不
恰好とか、どんだけ美意識が高いんだよ！！」

いや、ナルシストはナルシストでウザいかもしれないけど、フェ
ルはもっと自分を大事にするべきだと思うよ」

……綺麗な髪と目か。

ユーリ、夜のボクを前にそう言ってくれるのはキミだけだと知ら
ないだろう？

「それに女はあんまり好きじゃない」

「またまた、好きになった人とかいないのかい？ 年上のお姉さんとか」

「仲がよくなつたと思つた使用人の娘に、いきなり寢床へ押し倒されそうになってみる、恐怖が先に来るぞ」

「わぁお、禁断の恋？」

「ならまだマシだな。こつちの意向なんか関係なく、ボクとの子供なら【霊獣の加護】持ちが生まれる可能性が高いと思つての行動だ。どこかの家にそそのかされたらしいな。」

【霊獣の加護】持ちの子供がいれば、その親は国が一生面倒を見てくれるからな。事実【霊獣の加護】持ちを何代かさかのぼると【霊獣の加護】持ちは早々生まれるものじゃないのにな」

「あゝ、なんて言つたらいいのか……」

「別に気にしないでくれ。珍しいことじゃない。相手もボクが子供だから、上手く丸め込めると思っているんだろう。」

両親がボクをこの屋敷に閉じ込めているのは、そういった連中を近づけないって言う名目だしな」

ユーリは不思議な人だった。

まず、隠し事を暴くボクの【夢夜兎の加護】が通じない。

だから、お互い偽名で密会をするなんて初めての経験をしている。

次にボクの能力のことを知っても、何も聞いてこない。

ほとんどの人がボクの能力を知ると、その能力について様々なこ

とを知りたがった。

それなのに、ユーリがボクに聞くのは、好きな食べ物や趣味など、まるで能力などない少年のように扱う。

それがすごく新鮮だ。

「そつえば、今日はユーリのために珍しい菓子を用意したんだ。食べてってくれ」

話の気分を変えようと横においてあったバスケットを取り出す。

バスケットから焼き菓子の入った木彫りの深皿を取り出して、テーブルの上におく。

くっ、危ない、吹き出すかと思った。ユーリ、深皿を真剣に見すぎだ。

「ほら」

ボクが薦めるとユーリが深皿から焼き菓子を一枚とって口に運ぶ。サクサクと焼き菓子を噛む音が聞こえ、しばらく口をもぐもぐさせて、ごくりと飲み込む。

「むむ、クッキーっぽいけど、これは木の実を粉にして作っているのかな。焼き菓子と木の実の香ばしさ、それにホロリと口溶ける甘さが後を引く……、もう一枚もらっていいかな？」

「ユーリのために用意したんだ。残さず食べてもいいぞ」

幸せそうな顔をして、もう一枚を手取る。

「…………お茶がほしいな…………」

「うん？」

「ん？ どうしたの？」

ユーリは、自分がポツリといったことに気が付いていないようだった。

なんでもないと答えて、ボクも焼き菓子を1枚食べてみる。

ふむ、確かにお茶が欲しくなる味だ。

今度は、お茶を用意して、このお菓子を出してやるう。

夜の空を切り取ったような美しい黒の髪と瞳を持つ友達のために。

10歳：「居住自由区の姉弟（1）」

「えーと、反応はこつち側ですね」

「やっぱり、この区画か……着替えてきて正解だったな」

スリにあつた翌日。私はグイルさんを連れて、魔術の反応を頼りに王都を歩いていった。

徐々に大きな通りから離れて、周りの建物が汚く、辺りの雰囲気
が街の中央部とはかけ離れたものになってきていた。

事前に説明された通りに、十二番隊の詰め所にグイルさん呼び
に行った私をハンスさんと軍服を脱いだグイルさんが待つていてく
れた。

今のグイルさんは、動きやすそうな上着に厚手のズボン、身体
の要所だけを守るような堅い皮の部分鎧を着けている。一見すると旅
の護衛か傭兵のような感じだ。

私も詰め所に用意されていた格好に着替えている。安い布製の上
着とズボンを着て、擦り切れた外套がいたうを羽織りはお、ハンスさん曰く、貴
族っぽい髪と顔を帽子で隠した。

2人とも、腰に剣を吊り下げている。

着替えが終わって、私は小袋を対象とした探索の魔術を使った。

前日の夜のうちに問題なく使えることは確認しておいたが、今回
も問題なく魔術は成功した。小袋があるだろう方向がきちんと分か
る。

詰め所からその魔術が示す方向に動いていた結果、荒れ果てた建物に辿り着いた。

「この建物の周りを一周してみましたけど、反応はこの建物のちょうどあの辺りからします」

私はグイルさんに2階の一箇所を指さして、反応のある場所を示す。

「一見廃屋のようだが、人が住んでいる気配はあるな。もっともこの辺りは、似たような建物ばかりだが」

「そもそも、この辺りの建物の所有者って、どうなっているんですか？」

ふとした疑問が浮かんだので、グイルさんに訊いてみる。

「あ、オレも詳しくは説明できないから、簡単に言うとな。一定の区画は“居住自由区”という名称で管理されているな。

基本的に都市に住む場合は、家の大きさに応じた住居税を払う必要があるんだが、“居住自由区”に住む場合は、その税金を払わなくてすむんだ」

「でも、そうしたら、全員、その区画に住もうとするんじゃないですか？」

「ただし、その場合は、都市の居住者としての身元の保証がされな

い。そうになると仕事を探したり、組合に所属するのが難しいというデメリットを受ける」

「なるほど。ん？ それだと、この都市に住んでいない旅人とか行商人はどうなりますか？」

「組合の宿泊施設に泊まる場合は、そこで身元の保証はされるし、えーと、確か宿などに止まる場合は……そうだ。

宿の代金の中に逗留税とうりゅうぜいつてのが含まれてて、それが居住税の代わりになる……はず」

ああ、そういえば、商売の法律の中に、宿屋の項目にそんな単語があったな。宿屋に対する税かと思っていたが、名目上は宿泊者が支払う税なのか。

「ともかく、相手のアジトは突き止めたけど、どうする？」

「そうですね。とりあえず、私は小袋を返してもらいたいですから、普通の態度で真正面から行きましょう。

逃げたとしても、小袋を持っている以上、逃げ切れませんし」

忍び足などをせず、堂々とした足取りで私は廃屋の中に入っていく。

突入する前に魔術で調べたが、建物の中には人らしきの反応は小袋の近くにある1つだけだった。

多分、例のスリの少年だろう。

建物の玄関から入り、階段を上がって、目的の部屋の前までサクサクと移動する。ゲイルさんは、私の後ろを警戒しつつ後を付いて

きてくれた。

「失礼、どなたかいますか？」

コンコンと扉を叩いて、比較的落ち着いた声で丁寧に呼びかける。私の声に反応したのか、部屋の中で誰かが動いている音が聞こえた。

しかし、しばらく待ってみるが中からの反応は返ってこない。

「どなたもいらっしやらないなら、中に入らせてもらいますが？」

再び扉を叩いて、その声を上げると、

「あ、あの……ペート君のお友達ですか？」

今度は扉の向こうから少女の声が聞こえてきた。

「………さて、どうしようか？」

10歳：「居住自由区の姉弟(2)」

ペート君というのは、例のスリの少年の名前だろうな、多分。

「私はペート君とは友達というか、知り合いだよ。昨日の仕事の件で、少し話したいことがあってね」

さも以前から彼の名前を知っていましたよ、という雰囲気を感じて、まえて曖昧に答えた。

「…………お仕事先の方ですか？」

「ん、まあ、仕事先で知り合ったという感じ、かな？ ペート君は？」

「今日は朝からお買い物に行っていて、多分、お昼になるまで帰ってきません…………その、えっと…………」

扉の向こうで、何かためらっているような感じがした。

グイルさんが私に「どうする？」という視線を送ってきたので、軽く右手を広げて「少し待って」という合図を返す。

と、そこで少し扉が開いて、1人の少女がその隙間からこちらを覗いてきた。

茶色の長い髪と美しい緑の目をしており、歳は私より年下に見える。グイルさんが見たスリの少年と容貌が部分的に一致する。多分、肉親だろうか？

ただ、その瞳を私とは合わせようとしなない。

「お初にお目にかかります、お嬢様。私のことはケイン、連れはグイルと呼んで下さい」

「どうぞよろしく」

私の挨拶に合わせ、廃屋に入ってきて初めてグイルさんが声を出す。

そこで初めて私の横に立っているグイルさんの存在に気づいたのか、少女の方がビクリと少し震えた。

「安心して下さい。私たちは別に貴女とペート君を害するつもりはありません。お嬢様のお名前をお聞きしても？」

「ペルナです。……ケインさんとグイルさん？ その、ペート君が帰ってくるまで、中で待っていますか？」

いくら相手が丁寧な物腰で接してきたとしても、無用心だなあ……ペルナちゃんの行動に、思わず心配をしてしまう。いや、私が言うことじゃないけど。

まあ、ペート君とやらとは、少々お話し合いがしたいし、ここは遠慮なく中で待たせてもらおう。

そして、扉を開けて、その姿を見せたペルナちゃんは、服や顔は少々薄汚れているが、なかなか可愛い容姿をしている。磨けばうちのリリアに負けないくらい的美少女になるだろう。

そして、特徴的なのは細長い耳。ペルナちゃんの種族は、どうや

らエルフのようだ。

「どうぞ……」

「お邪魔します」「失礼します」

グイルさんと一緒に部屋の中に入る。

部屋の外に比べて、中は幾分かモノが整っており、人が住んでいる生活感があった。ペルナちゃんとペート君、その両親が暮らしているのだろうか。

「え、ええつと、そ、その辺りに腰をお掛けください。あの、飲み物はいかがですか？ その、水しかありませんけど……」

「お構いなく……そうだ、グイルさん、しばらく待つみたいですし、飲み物を買ってきてくれませんか？」

「ん、了解」

私は財布から軽銀貨を取り出して渡そうとしたが、「それくらいオレが出す」と、断られてしまった。

そして、グイルさんが出て行くと、部屋の中には私とペルナちゃんが残る。

お互いテーブルを挟んで向かい合わせに座っているのだが、先ほどから、ペルナちゃんが私の方を向いては、何かを言いかげようと
して、再び顔を背ける。

「あの、ちよつと聞いていいかな？」

「は、はいっ！」

「ペルナちゃん。ペルナちゃんとペート君以外に、ここに住んでいるのは？ ご両親もお仕事かな？」

「ペート君とわたしの2人だけです。その親は……いません」

やばっ、地雷を踏んじやったかも。

「ごめんなさい。悪いことを聞いちゃったね」

「ううん、いいんです。あの、わたしからも訊いていいですか？」

「何？」

「ペート君は、どんな仕事をしているんですか？ 何か危ない仕事をしていますか？」

本当なら、姉であるわたしがペート君の面倒を見てあげないといけないのに、その、わたしがこんなだから……」

ペルナちゃんが、自分の力足らずを悔やむような、ペート君を心配しつつ悲しむような表情を浮かべる。

……その彼女の目は光を映していなかった。

10歳：「居住自由区の姉弟(3)」

参ったな……というのが、正直な感想だ。

例えて言うなら、学校の帰り道に川原でダンボールに入った子猫を見つけてしまった時と同じ気分だ。

無認可の愛玩動物類の放棄は条例に引っかかるから面倒だ、とか、そういう方向ではなく。主に感情的な面で。

科学技術が進歩し文明が発展した前世の世界でも、人から情というものが無くなることはなかった。

感情操作なんていうのは、漫画や映画だけの話であって、日々を平和に暮らしている人間ならば「川原で見つけた子猫に情が移る」という状態になるのだ。

結局、施設に連れて帰って皆で里親を探したんだっけかな。

「あの、ケインさん？」

「え？」

「急に静かになりましたけど、その、やっぱり……ペート君は危険な仕事を……」

「ごめんなさい。その、ちょっと、考え事をしてしまいました」

うつかり前世の思い出に没頭してしまっていた。

ペルナちゃんは、私の沈黙を悪い意味で受け取ったらしく、ものすごく悲しそうな顔をしている。

「ペート君の仕事ですが……実は、私のほうも詳しくは知らないのですよ。」

その、昨日初めて、彼の仕事場で会ったばかりなので「

できるだけ曖昧あいまいな言葉で、質問をはぐらかす。

ここで「弟さんはスリをしています」とか、物事をキツパリ言えない日本人の心は、まだ私の中に元気に生き残っている。

「そう、ですか……すみません、変なことを訊いてしまって」「いえ、私の方こそ、ごめんなさい」

その謝罪に二重の意味を込める。

一つはペート君のことをよく知らないこと、もう一つは彼女の目のことだ。

私が魔術を使えば、ペルナちゃんの目は、治療することができるかもしれない。

けれど、その治療を施すことを、私は即断できないでいる。

寝ていれば治るただの怪我や病気ならば、何も感じずに放っておけた。

家族が失明したならば、私は迷わずに魔術を使っただろう。

けれど、ペルナちゃんは違う。どれだけ月日が経とうがその目は光を映さないし、今さっき知り合ったばかりの友達ですらない。

第一印象としては悪くはないし、少し話しただけでも彼女のこと
はかなり気に入っている。

もし、私が彼女の治療をしたとしよう。彼女は、そのことを感謝
するだろう。秘密にしてくれと頼めば、秘密にしてくれるかもしれ
ない。

ただ、私は今後、彼女と同じような少女を見かけるたびに同じこ
とができるのか？　と思うとためらってしまうのだ。

いずれも、IFが付く可能性の話だが。

そもそも……私がここにきたのは、お母様が作ってくれた小袋を
取り戻しにきただけのはずだったのに……。

「あの、また私から訊いていいかな？」

「はい……なんでしょう？」

「昨日さ、ペート君が小さな布の袋を持って帰ってこなかった？」

「あ、はい！　お土産につて、わたしは分からないのですが、とっ
てもキレイな色の袋だよって、教えてくれました。

それがどうかしましたか？」

……………諦めよう。グイルさんが帰ってきたら、小袋のことは忘
れて今日は帰ろう。

こうね、見た目は年下なエルフの美少女（幼女？）が、ちよつと
大人びた雰囲気を漂わせながら、男（ただし弟）からのプレゼント
に、照れくさそうな笑みを浮かべている。

そこに「その小袋は私のもので返してください」と、^{せま}迫れるほど

空気が読めない私じゃありません。

と、私が色々と決心をした時、部屋の扉が開いて、

「姉ちゃん、ただいまー……あれ？ お客さん？」

「おかえりなさい。ペート君のお知り合いが来て待っているの」

「……昨日はいつも」

内心で小さくため息をついて椅子から立って、軽く会釈をした。

「えっ……？」

私が昨日の仕事相手だったことに気づいたのが、ペート君の顔に動揺が走った。

どつやら記憶力は悪くないようだ……タイミングは最高に悪いが。

10歳：「居住自由区の姉弟」(4)

「ペート君、昨日の仕事について、少し話があったんで寄らせてもらったんだ。

突然訪問して、ごめんね」

私の存在に気づいて戸惑うペート君の先制を取り、争う意思はないことを伝えようとしたが、無理かなあ。

まあ、このまま押し切るか。

「ペルナちゃん、申し訳ないけど、彼と重要な話があるから、ちょっと彼を連れていくけど、いいかな？」

「あ、はい！ 弟をよろしくお願いします！」

「じゃあ、ペート君、下で話そうか」

私はペート君が持ち直す前に彼の片手を掴むと、部屋から出て、階下に向かう。

彼は私に引きずられるまま、おとなしく付いてきた。

階段を下りて、そのまま一階の適当な部屋に入る。

「……………」

「さて、まずは自己紹介をしようか。私のことはケインと呼んで欲しいな。君の事は、ペートと呼んでいいかな？」

「……好きにすれば？　それで、金を取り返しにきたのか？」

少し事情が理解できたのか、私に剥き出しの敵意をぶつけてくるけど、まだ理解が足りないな。

「んー、まあ、最初はそういうつもりだったんだけどね。諦めて帰ろうかって、思っていたところかな」

「どういうつもりだ!？」

「ペート、私が君に説明する必要はあるかな？」

「っ!?!」

私は生きていくためにお金を奪うことは「純粋な悪」だとは思わない。

何らかの理由で、そうせざるを得なかった結果ならば、の話だ。

「カルネアデスの板」という話がある。古代の哲学者カルネアデスが出した問題だ。

船が難破し、1人の男が溺れないように板切れに掴まっている所に、溺れている別の男が近づいてきて、同じ板にしがみつこうとする。しかし、その板に2人がしがみついたら、板が耐えれずに2人も溺れてしまう可能性が高いとする。

その場合、元々板に掴まっている男が、近づいてきた男の手を振り払い、結果として近づいてきた男が溺れ死んでしまっても、罪にはならない、と言う話だ。

確か、これは前世の日本でも法律で保護されていた行動だと思う。

ペートの話と「カルネアデスの板」は厳密には違うのだが……。

「ペルナちゃんには、仕事のことを話してないんだって？ 君のこと、すごく心配していたよ？」

「別に、それこそお前には関係ない話だろ！！」

「そうだね。本来なら、関係のない話だったと思うよ……でも、私はペルナちゃんのことを気に入ったからね。」

「ペートとペルナちゃんだったら、彼女の味方をするよ」

「姉ちゃんに、スリのことをバラすつもりか？」

「それとも姉ちゃんを気にいったから、メカケにする気か？ ガキのクセに、これだから金持ちは！！」

声を荒げて威嚇いかくしてくるが、乱暴してくる様子はない。

多分、私が腰に差している剣を警戒しているのだ。ペートの視線が時折、腰の辺りを向いている。

しかし、ペルナちゃんを妾めかけにするには、お互いにちょっと歳が足りてないよねえ。

ああ、今から私好みのレディに育てるとか？ 私がそれをやるのは、かなり悪趣味っぽい気がするけど。もちろん、冗談だ。

「言葉づかいに気をつけたほうがいいと思うよ？」

私を怒らせても、君は何も得をしない。それどころか、危険な目に合うかもしれないね」

「お、おどす気か？」

「安心して……。心優しいペルナちゃんに免じて、2人の害になるようなことをするつもりはない。」

ここに来たのもお金じゃなくて、布の小袋だけを返してもらおう

かと思つてたんだ。

でも、それはペルナちゃんの手元にあるらしいし、無理に取り返すつもりも無くなつたからね」

「はっ……お情けありがとうございます。とでも答えれば満足かよ」

うーん、嫌われてるなあ。まあ、当たり前か。

自分がちよつと悪役っぽいことを言っている自覚はある。

「忠告するけど、今回は私だったから良かったよつなものの、スリを続けるといつか辛い目にあることになるよ？」

「うるさい、余計なお世話だっ！！」

「もつときちんとした職を探るか、孤児院にお世話になつたりするつもりはないの？」

「はっ、分かつたよつな口を利くなよな。おれみたいな子供がまともな職を見つけられるわけないだろ！」

それにおれと姉ちゃんは、孤児院から逃げ出してきたんだよ！」

うわ、なんだろう……、泥沼にハマつた気がする。

10歳：「居住自由区の姉弟(5)」

「あれ、ケイン君、こんなところで……ああ、彼が例の少年か？」

と、ちょうどそこへグイルさんが顔を出す。廃屋に戻ってきたら、この部屋から人の声があったから様子を見に来たのだろう。この状況を見て一目で察するあたりは、さすがだ。

その両手に クエシヤの実 を抱えていた。正確に言うと実じゃなくて茎なんだけどな。

クエシヤは、棘のないウチワサボテンみたいな植物で、硬くて薄い皮の中に甘みのある液体を大量に蓄えている。節の1つがちょうどヤシの実くらいサイズでそれが何個かくっつけた感じで生えている。

味もヤシの実ジュースに近く、清涼飲料水のないこの世界においては、子供に人気の飲み物だ。

グイルさんの登場でペートの緊張が増す。

まあ、私は剣を持っているとはいえ、同い年くらいの子供だけど、グイルさんは立派な剣士に見えるしな。

牙族の見た目も大きい。中身は犬のおまわりさんだけど。

「グイルさん、ちょうどいいところに。この子が例の少年のペートです。ペート、こちらはグイルさんです。」

今から、詳しい話を聞こうと思ってたんで、ゲイルさんも一緒にいて下さい」

「これ以上、おれに何のとももない話することなんてあるもんか！」

どうやら、まだ立場が分かってないみたいだな……正直、この悪役っぽい思考がちょっと楽しくなってきた。

ゲイルさんは、クエシヤの実 を持ったまま、黙って私のやることを見守ってくれている。

「そうだね。それじゃあ、私の質問に1つ答えてくれるたびに、これを1枚上げよう」

「!？」

私はポケットから銀貨を取り出して見せる。

「質問は5つ。だから、全部で500シリル分だね。悪くない取引でしょ？」

「……何がききたいんだよ？」

「まずは、君たちの両親について……父親は人間、母親はエルフで、その男の妾だった？」

これは単純な推理だ。ペルナちゃんはエルフなのに、ペートの見た目は人間である。

この世界の異なる種族で子供を設けた場合、子供は、両親のどちらかの種族的特徴しか持たない。髪や瞳の色に関しては、種族に関

係なく両方から受け継ぐ可能性があるらしく、ペートは人間には珍しいが、エルフの特徴としては珍しくない透き通るような色の瞳を持っていた。

もちろん、異父兄弟や魔法によって変化しているという可能性があるが、ペートが憎々しげに言った「メカケ」という言葉も理由の一つだ。

そこから、彼らの母親がどこかの金持ちの妾めかけだったのでは？と考えたのだ。

「……そうだよ」

「なるほどね。それで、ペートたちがいた孤児院の名前は？」

別に両親がどうなったか、とまで問い詰めるつもりない。

銀貨を一枚渡ししながら、次の問いをする。

「名前は知らない、ただ街の南西にある赤い屋根の建物だ」

「その孤児院は……どんな所だったの？」

「ふんっ、最低なところだぜ。メシは少なくてまずいし、職員の機嫌を損ねると殴られる。もっとも機嫌がいい大人なんて1人もいなかったけどよ」

差し出してきた手に銀貨を2枚乗せる。ペートはそれをすばやく懐に仕舞った。

孤児院か……私も人事じゃないんだよな。いや、同じ孤児としても、前世の私はペルナちゃんやペートの境遇と比べれば平穏な境遇

だったのだから、一緒にしたら申し訳ないだろうか。

「ペルナちゃんの目が見えないのは、生まれつき？」

「っ！ さつきから、何のつもりだよ！ 変な質問ばかりじゃがっつて！」

「ペートは私の質問に答えれば、お金がもらえる。そういう約束でしよう？ 答えるの？ 答えないの？」

「……違う。孤児院にいる頃から徐々に悪くなっていったんだ」

やっぱり、先天的なものじゃなくて後天的なものか。それなら、何とかなりそうだ。

また1枚を渡そうと思つて、やめて、最後の質問の分と合わせて2枚を渡す。

ペートが変な顔をしているが、別に構わない。

「ペルナちゃんの目が、また見えるようになると言つたら、ペート、君はどうする？ 代わりに何を差し出せる？」

「っ！！ どういう、意味だ……」

「私の見た感じだと、ペルナちゃんの目は魔術で治すことができると思う。それとその魔術が使える魔術師にも心当たりがある」

というか、私自身のことなだけだな。

私がこの質問をしたのは……彼の覚悟を知りたかつたからだ。あの時、私は隠していた事実を捨ててでも、お母様を助けたかつた。

ペイトにとってペルナちゃんは欠かすことのできない大切な人だ
らう。

だから、私はその覚悟を聞き出そうと思った。

さあ、ペイト、君の答えは？

ペートはしばらく考え込んでいたが、ゆっくりと私に向かって口を開いた。

「お金なら、いくらだって払う。一生をかけたっていい！」

「……そのお金はどうやって稼ぐの？ スリで稼いだお金なんて、欲しくないね」

「まじめに働かせよ……」

「でも、私は別にお金が欲しいわけじゃないよ。」

それにペート、君がまじめに働けるなら、そもそもスリなんてやってないでしょ？」

悔しそうに歯を食いしばる。それでも目は諦めていない。必死に私を納得させるための答えを考えている。

「ケイン……さんの言うことなら何でも聞く、死ねと言うなら死んだっていい」

言い切ったなあ。けど、もう少しだけ試させてもらおう。

「私にとって、ペートを殺すだけの価値があると思う？」

それにペートが死んだら、ペルナちゃんは悲しむでしょ？ 私には、意味もなく女の子を悲しませる趣味はないね」

私がここまでペートを試す資格があるのかと問われたら、あるとは言いきれない。

多分、私がペルナちゃんを助けるための、最後の踏ん切りにはペートを使おうとしているだけだから。

「……………」
「……………」

「…………… 姉ちゃんの目が悪くなったのは、おれのせいなんだ。自分がるくに食べずに、おれにゆずってばかりで…………… だから…………… 姉ちゃんを……………」

…………… おねがいします！ 姉ちゃんの目を治してくださいっ！…！」

「うん、分かった。私ができるだけの協力を約束しよう」

私の軽い返事にペートが呆気に取られた顔になる。その顔は涙と鼻水とかでグチャグチャになっていた。

ちよつと意地悪しすぎちゃったかもしれない。

「もちろん、ペートがスリをやめて真面目に働くのも条件だよ。

仕事に関しては、ちよつと試してみたいことがあるので、うまくいったら仕事を紹介できるかもしれない。失敗する可能性もあるから、そんなに期待はしないで欲しいんだけどね。

それと、これだけあれば、数日は持つでしょ？
しばらくの間、ゆっくり考えを整えた方がいい……そもそも、私
のことを本当に信頼していいのかも含めてね」

ペートの手に小金貨を2枚を手渡す。

「……………なんで、こんなに、おれたちに良くしてくれるんだ？」

ずずっと鼻をすすって不思議そうな声を漏らした。その疑問はも
つともだろつ。

「しいて言うなら、自己満足かな。それと私は子供が好きで、子供
を見捨てる大人が大嫌いだから」

「……………自分だって子供のくせに」

ははっ、泣いたばかりで、もう皮肉が出るのか。

私には助けられることができるだけの力とお金があつて、気持ちだけ
が追いつかなかった。

だから、助けることに大した理由があるわけじゃない。そうした
いと思えたから、ただそれだけ。

親のいないペルナちゃんとペートの姉弟に前世の自分を少し重ね
合わせたのも否定しない。

うまく言葉にならないから、これ以上の説明しないけど

「さてと、そろそろペルナちゃんのところへ戻ろうか。」

ペート、今、ここで話したことはペルナちゃんには、まだ話さないでね」

「何でだよ？ いや、何ですか、か？」

「ぶっ……無理に丁寧な話し方をしなくてもいいよ、別に」

「……そうなのか？」

「ああ、ペートが私に恩を感じるのは自由だけど、私はそんなことは望んでいない。名前もケインって呼び捨てで構わないから。」

それとペルナちゃんに今の話をしない理由だけど、私の方で色々準備があるから、それが整うまでは黙っていて欲しいんだ」

「ケインがそう言うなら……」

「よろしくね。ペルナちゃんに強く訊かれたら答えてもいいけど。とりあえず、戻ろうか」

部屋に戻った私たちをペルナちゃんが、何か訊きたそうにしていたけど、あえて気づかない振りをした。

ペートも、私に言われたことを守って静かにしている。この分なら、私の気持ちももう少し整うまで、黙っていてくれるだろう。

10歳：「居住自由区の姉弟(7)」

2階に戻って、クエシヤの実を飲みながら、ペルナちゃんとおしゃべりを楽しみ、しばらくして私とグイルさんは自由居住区を後にした。

今いるのは、すっかり常連となりつつある詰め所の個室だ。

「グイルさん、何か聞きたいことがありますね」

「あゝ、ん〜……」

ペートとの話し合いからほとんどしゃべらずに、帰ってくる途中もずっと何かを聞いたげな様子のグイルさんに声をかける。

ちなみに、私は屋敷を出たときに来ていた元の服を着替えてたが、グイルさんは私服のままだ。

「その……だな、ケイン君はなんで彼らを助けよう？」

「ペートにも言ったけど、ただの自己満足ですよ？」

それと子供は好きなので、結婚したら子供は5人くらい欲しいですね」

あ、でも、産むのは私か？ ……深く考えないようにしよう。

「相変わらず子供っぽくないというか……ケイン君と話していると年上の人と話している気分になるな」

「ちよつと大人っぽくなりたいお年頃なんです」

まあ、精神的にはゲイルさんとは一回り違うけどな、私が年上の方向で！

「それよりも……孤児院のことについて、どう思いました？」

「ああ、なんていうか気分の悪い話だな」

「そうじゃなくて、えっと、私もあまり詳しくは知らないんですが、孤児院はどこが運営しているんですか？」

「運営？ 孤児院は、お店じゃないだろ？」

「経営じゃなくて、運営です……つまり、よく知らないんですね」「うっ……」

まあ、ゲイルさんが孤児院の運営のことを知っているとは思ってなかったけど。

この世界に、社会福祉って言う概念があるかは分からないが、孤児院の運営は国の政策の一環という可能性が一番高いだろう。

「おっ、帰ってきてたのか？ スリ小僧は見つかったか？」

「あ、ハンス副長、ちよつどいいところに！ 孤児院の運営って、どこがやってるんですか？」

「は？ いきなり何の話だ？ それよりスリ小僧はどうなったんだ？」

「ええと、話すと長くなるんですが……」

グイルさんが説明しようとするのを遮るように、口を挟んだ。

「ちゃんと話をつけてきましたよ。とりあえず、私は見逃すことにしたけど、問題ありますか？」

「は？ いや、一応犯罪者は取り締まるのが、おれらの仕事なんだけど……」

「スリなんてせこい犯罪者を追いかけないで、もつとドーンと悪いことをやってる人を捕まえて下さい」

「そんな悪人は早々見つからないって……おれらの仕事は、大体が酔っ払い同士のケンカの仲裁やチンピラの逮捕くらいだ。たまに殺人犯の捜索をしたりするけどな」

ハンスさんが苦笑しながら手を左右に振る。

「ところで、軍の担当区域ってどのくらい厳密に決まっているんですか？」

例えば、ある地区内の犯罪者を捕まえるのは、何番隊みたいに決まっているとか」

「担当区域は、あくまで巡回の地区であって、どの地区の犯罪者だろうが犯罪者を確保するのには関係ないぞ？」

「例えば、国家予算の横領とかは？」

「そうなると王宮の文官や十二番隊以外のヤツらとも色々協力する必要が出てくるな」

「私の予測が正しければ、組織ぐるみでの横領が行なわれていますよ」

「は？」「へ？」

ペルナちゃんとペートがいた孤児院の運営費を国が出しているとして、食事の様子から横領がそれに近いことを行なっているとみて間違いない。

そうでなくとも、孤児を虐待しているのだ。

この世界に児童虐待を取り締まる法律はないが、彼らが虐待されてもいい理由もない。

いや、もしかしたらこういう場合も傷害罪は適応されるのかな？

ともあれハンスさんたちには頑張ってもらわねば。

「あ、それと グラススネイル の肉って、市場に行けば売っていただけますか？」

「売ってると思うけど……」

「今度はいつたい、何の話だ？」

「美味しい料理の話でしょうか？」

人間、たくさん動いて、たっぷり食べて、ゆっくり寝れば幸せなのにな。

10歳：「ユリアの料理（1）」

市場で グラススネイル の肉と、他に必要なものをいくつか購入した。

解体される前の グラススネイル を見れたが、殻の直系が1メートル（約1m）近いカタツムリだった。

お店のおばちゃんの話では、水辺の近くに木を打ち付けて柵を作り、養殖しているそうだ。

柵を乗り越えようとしても、ある程度の高さまで行くと自重で落っこちるらしい。その様子を想像して、ちよつと笑ってしまった。

「ただいまー」

「おかえりなさい、おねえさま。おいしやさんが来てるの」

「え？ お医者さん？ 誰か怪我したの!？」

「だれもけがしてないよ？」

「でも、お医者さんが来たって」

「……あの、お姉さま、お医者のお客さんです」

私の帰宅を双子が出迎えてくれた。リリアの言葉に不安を感じたが、リックが補足してくれる。

医者が来たと言われたから少し焦ったけど、お客さんとしてくるなら問題はない。

……………ん？

「そのお客さんは応接室？」

「うん、おかあさまとおしゃべりしてるー」

「ありがとう」

私は双子の頭を荷物を持ってない手で交互に撫で、厨房に荷物を置き、私室でいつもより女の子らしい普段着に着替えて、足早に応接室へ向かった。

「失礼します。お母様、お客様がお見えと聞いて挨拶に参りました」

「あら、ユリイちゃんお帰りなさい」

その人は黒かった髪にほんの少し白髪が混じり、5年前にはなかったシワが見え隠れしている。

「……お久しぶりです。シズネさん、お元気そうですね」

「ああ、ユリアちゃんも元気に大きくなって何よりだね。なんでも男装して王都を探検しているんだって？」

予想通り応接室にいたのは、約5年ぶりに会うシズネさんだった。快活な口調とピシリとした姿勢は変わっておらず、なんだかホツとしたような気持ちになる。

「お母様から聞いたのですか？」

「それと双子ちゃんたちからもな……しかしまあ、お父様に似てす

「つかりハンサムになっちゃって」

「ありがとうございます」

「さぞかし男の子の格好も似合うだろう？ 後で見せて欲しいね」

「ええ、良ければ、ぜひ」

下手に可愛いと褒められるよりも嬉しかったりする。

「ところで、ずいぶん急でしたけど、何かあったのですか？」

「いや、急に休みが取れてね。本当はもっと早くに顔を見に来たかったんだけど、おかげで仕事が忙しくなってな」

「使ってくれてるんですね。あれ」

別れの際に渡した 宝魔石 化させた緑の石のことを思い出す。

完成品の第一号だったので色々と心配していたが、無事に機能しているようで、ほっとした。

「ま、あたしは簡単な魔術しか使えないけどね。おかげで公認魔術師になれて、仕事面も充実している。」

「ユリアちゃんには感謝しているよ」

「私は石を用意しただけです。後はシズネさんの力ですよ？ でも、その気持ちは受け取ります。」

「あ、そうだ、シズネさん、今日は晩ご飯は一緒に食べていけますか？」

創作料理の参考意見は多い方がいいからな。

料理に関して言えば、前世の知識をフル活用しても、危険性が少ないだろうことが嬉しい。

「さつき、バーレンシア夫人にも誘われて、ご一緒させてもらう」となっていたけど？」

「それは良かったです！ ちょっと珍しい料理を作るので、ぜひ食べて感想を聞かせてください」

「うん？ ユリアちゃんが料理するのかい？」

「たまにお母様やアイラさんのお手伝いもしてるんです」

「ええ、ユリイちゃんてば、器用だし、変わった料理の作り方も色々と知っているみたいなの」

「ほく。そりゃ楽しみだ」

「楽しみにしていて下さい、頑張ります！」

よし、気合は十分。頑張ろう。

10歳：「ユリアの料理（2）」

ラシク国では、料理の技法は「焼く」「炒める」「茹でる」「煮る」の4種類が一般的だ。

「焼く」は、主に鉄板、網、串、オーブンなどを使って調理される。

「炒める」は、主に 曲がり底鍋 と呼ばれる、前世でいう中華鍋みたいな器具を使って調理される。

「茹でる」と「煮る」は似ている。違いとしては「茹でる」が水で食材を加熱するだけなのに対して、「煮る」は液体で加熱する際、液体に味をつけたるところだ。例外として、「塩茹で」なんていう技法もあるけど。

他にも「揚げ」で作る料理もあるにはあるが、揚げ芋 という芋を一口サイズに切って揚げたフライドポテトみたいな料理とか、ほとんどが「素揚げ」である。

私が知っている限り、まだこの世界で「蒸す」料理は見えていない。

ついでに調味料の話をする、この国では塩や砂糖はわりと豊富に流通していると思われる。

前世の価格比と考えると食材の値段に対して調味料は若干割高ではあるが、一般的な家庭でも普通に購入できる価格だ。

子供のちよつと贅沢なおやつとして飴やジャムなんかが出される位、だと考えれば分かりやすいか？

香辛料について、胡椒こしやうや辛子からしなどは外国から輸入に頼らざるを得ないらしく、かなり高価だ。魔術を使って、国内で栽培も試みられているが上手くいってないらしい。

ニンニクやシヨウガ、ハーブ類の一部は国内でも作っており、砂糖や塩と同じ程度には手に入る。

それはさておき
閑話休題。

「お嬢様、今夜のメニューは串焼きですか？」

「ちよつと違うんだ。まあ、できてからのお楽しみで」

アイラさんに手伝ってもらいながら、晩ご飯の準備をしている。2人で一口サイズに切つて下味をつけた グラススネイル の肉とタマネギを交互に串に刺していく。

それ以外にも、魚の切り身や野菜だけが刺さった串も用意する予定だ。

「でもって、小麦粉に溶いた卵と水を入れて……」

フォークを使って混ぜて、大きめのボウルにねっとりとした泥み
たいなモノができる。

水を少しずつ足して、程よい固さになるように調整する。

「お嬢様？ パンケーキを作るなら、もっと水は少なめじゃないと」

「大丈夫、これはこれでいいの……ん、こんなもんかな？
で、これをさっきの串につけて、前もって用意しておいたパン粉
をまぶす」

「なんか、ボコボコしてて、変わった形になりましたね。コレが料
理なんですか？ 肉とか野菜は、まだ生のような」

「もちろん、この後で熱を通すよ。私が串にこれをつけるから、ア
イラさんは、こんな感じにパン粉をまぶしてくれる？」

「分かりました……こんな感じでよろしいですか？」

「うん、いい感じ。用意した串を全部、コレをやるからよろしくね
「はい」

しばらくの間、黙々と串に“衣”をつける作業をする。

ここまで来るとあとは揚げるだけなんだけど……。

「ひとまず、下準備はコレくらいかな？」

この料理はできたてを食べて欲しいから、先に他の料理と食堂の
準備をしよう」

「分かりました」

お父様も先ほど帰ってきて、お母様や双子と一緒にシズネさんと
歓談中だ。

“衣”をつけた後は、あまり時間を置きたくないので、食堂の用
意が整いしだい移動してもらおう。

アイラさんは、事前に作っていたシチューの鍋を竈に乗せて温め
直す。

私は、パンやチーズを適当な大きさに切って食堂のテーブルの上

に運ぶ。

一通りの準備が整ったなら、竈かまどに鍋を乗せて、たっぷりの油を入れる。

ここからは火傷に注意しないとな。火傷をしても魔術で直せるけど、わざわざ痛い思いをしたいわけじゃない。

あ、そうか、魔術で火傷をしないように保護すればいいのか。念のため、身体が高熱によって怪我をしなくなる魔術を使っておく。

「お嬢様、今日の料理は揚げるのですか？」

「うん、串揚げって言う料理だよ」

確か関東だと串揚げ、関西だと串カツって呼ぶんだよな。

カツの語源は英語だし、多分、こっちの方が直感的に分かりやすいだろう。

10歳：「ユリアの料理（3）」

「精霊様に大地と河川の恵みを、日々の糧として、頂いております
ことを感謝いたします」

お父様の声に合わせて、食堂にいる皆が「感謝いたします」と各々に言葉を続けた。

食事に関して、王都に来る旅の途中から森の屋敷と比べて大きく変わったことがある。

それは、食事の席にロイズさんとアイラさん、それからジルが同席するようになったことだ。

ロイズさんに関して言えば、チエの称号を持っているため、父親とは身分の差はあまりない。

元々お父様が小さな頃から色々と世話を見ていたらしく、心情的にも年の離れた兄のような存在らしい。

アイラさんは、昼ご飯などはお母様と席を共にして食べていたが、お父様がいる席では、決して一緒に席に着こうとはしなかった。

しかし、ロイズさんと結婚したことにより、コーズレイト夫人という立場になったため、席を共にしても問題はない、とお父様がアイラさんを説得した。

……今になって思うにお父様は「みんなと一緒に食べることに

少し拘り過ぎているような気もする。

多分、この事もお祖父様との関係に影響を受けているのではないだろうか。

この世界でも、食事の間に座る席順の作法などはきちんと決められている。

まず、食堂は上から見ると長方形の部屋で、長方形のテーブルが長い壁と平行になるように設置される。

そのテーブルの入り口がある壁から反対側の長い辺の中央が、一番上座の席となる。その対面の席は主賓、もしくは二番目に偉い立場の人が座る。

反対に、前世の作法と同じく部屋の出入り口の近くが一番下座の席となるようだ。

今日の食事の場合は、奥側がテーブルに向かって右から順にジル、私、お父様、リック、リリア、テーブルを挟んで反対側がアイラさん、ロイズさん、シズネさん（お父様の前）、お母様の順となっている。

ちなみに、ロイズさんとアイラさんの間の後ろ側に、食堂の出入り口がある。

「アチャッ!？」

「わわ、ジル大丈夫？」

「あうあう、ボス……シタがイタイ」

「ほら、水で冷やして……」

食事が始まり、さっそく串焼きにかぶりついたジルが悲鳴を上げ

た。

その悲鳴に、みんなが一斉にこちらを向いた。

「ええつと、これは串揚げと言って、お肉や野菜を串に刺してパンを細かくしたものをつけて、油で揚げた料理です。この“パンの皮”の中は熱くなっていますので注意して下さい。

このまま食べてもいいですが、食べにくいようなら、フォークを使って、先に串を抜いてから食べて下さい」

コクコクと水を飲みながら舌を冷やすジルの横で、串を片手にとつて、食堂にいるみんなに注意を促す。

「この“パンの皮”とやらがサクサクとしているのに、中は柔らかく茹でた感じに近いな……ん？」

お嬢様、これは グラススネイル の肉か？」

串を一口かじったロイズさんが、早速中身を言い当てる。

「ロイズさんは知っていましたか？」

この間、露店で串焼きで売っていたのを見て、今回の料理を思い出したんです」

「俺は王都の下町で育ったからな。王都に住んでいた頃はよく買って食べたよ。」

本来は塩を少し強めに振って、直火で焼いただけの料理だけどなこんな感じに手の込んだ料理になると、ちょっと上品な感じがして、

「美味しいな」

「気に入ってもらえたなら嬉しいです。」

「アイラさんも一緒に作ったから、今度からはアイラさんが作ってくださいよ」

「そうか、期待している」

「はい、頑張ります！」

「ほら、リックくん、リリアちゃん、串を抜いてあげましたよ」

「はい」

「お母さま、ありがとうございます」

テーブルの逆の方では、お母さまに双子が串揚げを取り分けてもらいながら食べている。

直接は見えないが、聞こえている感じでは双子にも好評のようだ。

「ふーむ、あたしもこんな揚げ料理は初めてだよ」

「大体、揚げ料理は、素材をそのまま揚げて、後で塩や香辛料で味付けする物くらいですからね。」

茹でた芋を潰して混ぜて味付けして、この“パンの皮”で包んで揚げたりしても美味しいですよ」

「ただ、最初の一口は良かったけど、少し油っぽいね」

「あ、それでしたら、横にあるレモン汁を掛けて見て下さい。サッパリとしますよ」

「ぱく……もぐもぐ。なるほど、あたしはレモンを掛けた方が好きだね」

「本当だったら専用のソースとかも欲しいんですが、作り方が分からないんですよね」

私も一口食べる。うん、揚げたてはおいしい。

塩を少し強めに下味をつけたから、味は問題ない。

だけど、トンカツ用のソースが欲しくなるなあ。あの猛犬マーク
みたいなやつ。

香辛料は高いから 宝魔石 がうまく売れてから考えてみよう…。

10歳：「お父様の事情（1）」

「ところで、シズネさん。王都には【霊獣の加護】持ちが何人かいるんですよ？ その中で、私と同じ年頃の男の子って知ってますか？」

すっかり冷めたお茶を飲みながら、私はシズネさんにフェルのことを訊いてみた。

お父様は書齋に、お母様は双子を寝かし付けに、アイラさんとロイズさんは晚ご飯の後片付けにいたりっており、食堂にはちょうど私とシズネさんだけが残っていた。

一応、ジルもいるが、テーブルに突っ伏して眠っている。……後で、起こすか、ロイズさんに部屋まで運んでもらおう。

「ましろのつかさ真白の司”のことか？ いきなりどうしたんだ？」

「ええと、外に出かけたときに、少し話を聞いたので気になって……。その“真白の司”って何ですか？」

シズネさんが不思議そうに顔をしたので、咄嗟に誤魔化す。嘘はついてない……。出かけているのが夜で、本人から聞いたということ言葉をしていないだけだ。

「ああ、【靈獣の加護】持ちは国に認定されると、能力に応じた通り名のようなものをもらうんだ。大体が“くの司”^{つかさ}で揃うようになってる

本名はフェルネ・ザールバリン、確か3年前だったか？ この国でもっとも新しく【靈獣の加護】持ちであることが判明した少年だな。

なんでも相手の嘘を見抜くチカラを授かっているらしい」

あ、世間的にはそういうことになっているのか。

確かに嘘は何かを隠すために起こす行動だから、客観的には嘘を見抜いているように見えるのかもしれないな。

「そのザールバリン家って有名なんですか？」

「有名っちゃ有名だな。ここ数年の話だけだね。

当主でフェルネ・ザールバリンの父親、フェクス・ガーウエ・ザールバリンは元々商人だったけど、短い期間で一気にガーウエまで成り上がった男だね。

その成り上がりには“真白の司”の影響が大きいと言われているし、それは事実だろう」

「家族に【靈獣の加護】持ちがいると、そんな簡単に称号がもらえるものなのですか？」

「【靈獣の加護】持ちの場合は、国に忠誠を誓った時点で、ガーウエの称号をもらうか、それに準じる待遇で迎え入れられる。

それと【靈獣の加護】持ちが未成人の場合、称号は後見人である親に与えられることが多い……ただ、それでもガーウエになったのには、ガーウエ・ザールバリンは交渉事に関する才に長けていたんだろう。

あたしは噂を全部を信じるわけじゃないが、ガーウェ・ザールバリンには良くない噂が多いけどな」

あんまり聞かせたい話じゃないから、とそれ以上は話してくれなかった。

まあ、フェルから聞いた話と今のシズネさんの話をまとめるに、聞いて面白い話ではないのは確かだ。

「ところで、ガーロオ・バーレンシアは何があったのか？」

「あー……やっぱり、気になりましたか？」

「最初は、仕事で疲れているのかと思っただが、時折な思いつめたような表情をするから、なんとなくな」

流石だよな。【野兎の加護】とか関係なく、鋭い観察眼みたいなものはシズネさん自身の特質なんだろう。正直、フェルよりシズネさん相手の方が隠し事をできる気がしない。

ここで、お祖父様やリックの話をするかどうか、少しばかり躊躇ためらいもあつたが、結局話すことにした。

バーレンシア本家であつた食事の話、リックの気持ちと、私の推測も一緒に全部を語る。

「なるほどね。厄介な話だ……」

「シズネさんは、お父様やお祖父様のことは何か知っているんですか？」

「あたしもバーレンシア家とは、関係浅からぬってところだからね。当人たちの気持ちは別として、知っていることもいくつがあるが……」

それをユリアちゃんに教えていいものか、悩むところだね」

私とシズネさんの間に、僅かな緊張感が漂う。

空っぽになったカップをテーブルにおいて、お茶請けとして出されていた干しブドウを3粒口に入れて、よく噛む。

私が干しブドウを呑み込む音が静かな食堂に響いた。

「シズネさんが、さっきの話を聞いて、私が知るべきことじゃないと思うなら聞きません。」

少しでも知っておいた方がいいと思うなら、ぜひ教えて下さい」

「まあ、ユリアちゃんを見た目通りの10歳の子供として扱うのは間違えだよな。」

一応先に言っておくが、あたしはできるだけ主観を交えずに話すつもりだ。ただ、どうしても、あたしの感情が混じると思うから、そう思って聞いとくれ。」

あたしは、ガールオ・バーレンシアの母親とは幼馴染でね。同じ学院にも一緒に通ったんだよ。」

元々彼女は体が強い方じゃなくてね。ガールオ・バーレンシアが物心つく前に病気で亡くなっているんだ」

「でも、お祖母様とはこの間お会いしましたけど……」

「それは、ガールオ・バーレンシアの母親が亡くなってから、迎えた後妻さんだね。」

人当たりが良くて優しい人だし、ガールオ・バーレンシアを実の息子と同様に可愛がっていたらしい。性格的には問題はないんだけどね。」

問題なのは、結婚する時に連れ子がいたということさ」

「あんなにそっくりなのに伯父様とお父様は血が繋がってないの
ですか？」

「いや、つながっているさ、半分はね」

半分……？ それは、つまり……そういうことなのか？

10歳：「お父様の事情（2）」

「ガースエ・バーレンシアは、当時まだガーウエでね。ケネア……
ああ、ガーロオ・バーレンシアの産みの母親の名前だよ。」

ケネアの父親が当時のガースエ・バーレンシアの上司だったんだ。
で、当時の出世頭であったガースエ・バーレンシアに娘を嫁がせた。
確かに昔から仕事ができる人だったからね。」

「そのケネアお祖母様？ のご実家は？」

ある意味で政略結婚と言えるのかな、そういうのも。

シズネさんが冗談っぽく「少し年寄りの長話を付き合ってもらおうか」と言って話を続けた。

「結婚してしばらくしてケネアの家族はケネア以外は全員、事故にあって亡くなってるね。」

唯一生き残った血縁者がケネアのみで、ガースエ・バーレンシアがケネアの実家の称号を引き継ぐ形でガースエになったんだ。元々ガーウエだったし、ケネアの配偶者だったから条件は良かったんだよね。

当時は色々言われたみたいだよ。ただ純然たる事故であることがきちんと調査されていたし、そもそもガースエ・バーレンシアは、その手のやつかみを跳ね除けられるだけの實力のある人だった。

ただケネアの落ち込みようだったらすごかったよ。幸い、お腹にガーロオ・バーレンシアがいることが判明して、それを希望に立ち直

つてくれたんだけどね……。

そして、ガーロオ・バーレンシアが産まれから、ケネアは体調を崩してね。元々線の細い子だったけど、一日のほとんどを寝室で過ごすような状態になってたんだ。

その頃、すでに王国立中央病院に勤めていた私は上司の往診に付き合っつて、何度も彼女に会いに行っつたよ。徐々に彼女は容態は悪くなっつていき、魔術を使った治療をもっつてしても回復しなくてね。

美人薄命とはよく言っつたもんだ。ガーロオ・バーレンシアを産んで2年ほどで亡くなっつた。

ケネアが亡くなっつてすぐだっつたかね。ガースエ・バーレンシア夫人を後妻に迎えたのは……しかも、ガーロオ・バーレンシアよりも3つも年上の子供がいるっつていうじゃないか。

当時、その話を聞いた、あたしは悔しくっつてね。

まるでケネアがいなくなっつても、すぐに代わりがいるような気がして……仕事のことがなかつたら、ガースエ・バーレンシアの屋敷に怒鳴り込んでいたかもしれぬよ。

今なら、幼かつつたガーロオ・バーレンシアにとっつては、母親は必要だっつたのは認めるし、ガーロオ・バーレンシアも後妻さんに懐いていたみたいだしね。

結果だけを見れば良かったんだろっつと思えるけどさ」

整理をすると……。

お父様には、今のお祖母様ではない、産みのお母さんケネアがいてお父

様が物心がつく前に亡くなっている。

後妻の連れ子である伯父様とお父様は、半分血が繋がっているということは2人ともお祖父様の実の子供であり、異母兄弟となる。

しかも、後妻のはずのお祖母様の子供である伯父様の方が3歳ほど年上ということは、お父様が生まれる前に、今のお祖母様と関係を持っていたということになる。

もしかすると、お父様の母親と結婚する前の話だったのかな？

そこは、結婚して何年目にお父様が生まれたかによって変わってくるか。

「しかし、まるで昼ドラマみたいな話だ……」

「ヒルドラ？ 戯曲か何かかい？」

「え？ あゝ、そんな感じです。つまり、今のお祖母様は、お父様が産まれる前にお祖父様が子供を産ませていた女性というわけですね？

……あれ？ でも、そうになると、お祖母様に子供を産ませたけど、お祖父様とは結婚しなかったのですか？」

む、ちよつとこの辺りの貞操観念みたいなのが、今一分からないんだよな。

できちゃった結婚みたいなのはないのだろうか？

「ケネアが亡くなってからは、バーレンシア家とは疎遠になっていたから、その辺りの詳しい事情は知らないんだ。噂には色々と聞いたけど、分かるとすれば、コーズレイト殿が知っているかもしれないね。」

ああ、一応補足をしておく、結婚生活はケネアにとっては幸せなものだったと思うよ。

一日のほとんど寝たきりだった時でも、ガーロオ・バーレンシアに母乳を与えているケネアの顔は幸せそのものだったからね。

それに彼女の口からガースェ・バーレンシアの悪口を聞いた覚えはない。惚気みたいな愚痴は聞いたことはあるけどね」

一応、話を聞く限りだと、不幸になった人は ケネアお祖母様の家族の事故は別として いそがないんだよな。

だとすると、お父様がどうして、あそこまでお祖父様を嫌っているかだけど……うーん???

ロイズさんにも話を聞いてみるべきかな、と言っても、私にできることなんてないような気もするんだけど。

リックのためだと、割り切って、少し調べてみるべきだな。

と、話が一区切りついたところで、お母様が食堂に戻ってきた。

「あ、おかえりなさいませ、お母様。2人はちゃんと眠りましたか？」

「ええ、良い子で眠りましたよ。ユリイちゃんも、そろそろ眠りなさい。」

それとシズネさん、席を離れてしまって申し訳ありません。今日はこのまま泊まられますか？ もし、お帰りになるようでしたら、ロイズさんに馬車を連れてきてもらいますが」

「こちらこそ長居をしまして申し訳ないね。コースレイト殿には悪いけど、馬車を用意してもらっていいかな？」

「はい」

短く返事を返して、ロイズさん呼びにお母様は出て行った。
シズネさんが、私の方に笑顔を向けて、

「まあ、ユリアちゃんも頑張りな。あたしもできることなら応援するし、期待をしているからね」

……期待、されてますか？

10歳：「お父様の事情（3）」

ロイズさんに用事を頼んで食堂に戻ってきた母親に就寝の挨拶を、シズネさんに別れの挨拶をして、自分の部屋に向かった。

そして、寝巻きではなく、いつもの男物の服に着替え、ベッドに大きなクッションを2つ並べて、その上から毛布をかぶせる。

本気で偽装をするつもりなら、魔術で幻影を作れば完璧なのだが、そこまでする気にはなれなかった。

客観的に見れば、ずいぶんと矛盾した行動だと思うが、これは私にとつての甘えなんだろう。

この夜遊びがバレて欲しいような、欲しくないような……構ってもらいたがる子供のようだ。

精神年齢だけを見れば、今年で30歳みそじなんだけどなあ、心はどれくらい肉体に依存するのんだろうか。

飛行と姿隠しの魔術を使い、フェルの家へと飛ぶ。

わずか5分ほどで、いつものベランダに到着をした。

「やあ、こんばんわ、フェル」

「こんばんわ、ユーリ」

テーブルに座って、蓄光石のランプで読んでいた本を閉じる。

タイトルが一部しか読み取れなかったけど、魔術書か？

「なんてタイトルの本を読んだの？」

「ん、『魔術の行使と想像力』という実践書だな。呪文を詠唱するさいに、その呪文に対して明確なイメージを持つことが魔術の効果を増幅させるという内容だ」

「あー、あの本か。フェルは、どう思った？」

「文章は分かりやすく読みやすいが、実証例として『20人中13人の魔術師に効果があった』とあったけど、それだと誤差と言える範囲じゃないか？」

半分まで読んだが、実際に自分で試して見ないことには何とも言えないな。

ユーリも読んだことがあるんだろう？ 魔術師としての意見は？」

「あー、んー……私の場合はちょっと特殊だからね。ただ、その本に書かれていることは、結果としては間違えていないと思うよ」

「ふむ、相変わらずユーリは得体が知れないな。そこが楽しいのだが」

「それって、褒めてるの？ からかっているの？」

「もちろん褒めているに決まっている」

まじめに言い返されると、それ以上反論できないけど……。

「ところでさ、フェルって結婚ってどう思う？」

「また唐突な話題だな。なんだ、好きな娘でもできたのか？」

「違うから！ 二重の意味で違うから！

別に好きな人ができたわけでもないし、とりあえず、私は女の子

だって、何回言えば！」

「言われたのは、まだ2回目だな……ちょ、待てっ、おもむろに服を脱ごうとするな！」

女の子だと言っなら、はしたないだろうがっ！！」

「ふっ、女には引けないときがあるのさ」

ここで女の子と認められないと負けたような気がするんだよな。理由はよく分からないけど。

「……で、まあ、結婚の話だったな。ボクとしては協定の手段つていうところじゃないか？」

特に貴族の結婚なんて、主に家と家の繋がり強化が主な目的と言ってもいいだろうしな。

例外としては、恋愛感情と呼ばれる一種の精神的依存関係による結婚もあるみたいだけど……」

「ナチュラルにスルーしたか、まあ、いいけど……フェルは結婚とができそうにないよね」

フェルの場合、女性嫌いというか、ほとんど人間嫌いの域だもんな。

まして結婚なんて、紐なしでバンジージャンプして怪我をせずに着地するくらいの難易度じゃないか？

人はそれをただの飛び降りって言っけど。

「そんなことはないぞ？ これでも婚約者がいるからな。もちろん、

親同士の契約みたいなものだ」

「あゝ、そうなんだ。相手はどんな子なの？ もう2人で愛を語り合っちゃったり？」

「ふむ。ガースエの家の末娘で前の季節で3歳になったはずだな。

まだ1度しか会ったことはないが、ろくに言葉も喋れないのに愛は語れないだろう？」

「そっか、7歳差かあ。フェルが15歳のときに相手は8歳、ちょっと犯罪臭いな」

「ユーリ、ボクにかなり失礼な想像をしてるだろう？」

「紫の上計画だね。がんばれ、私もフェルの人間嫌い改善には協力するから！」

「そのムラサキノウエ計画とやらは、よく分からないのだが……」

「ん？ 小さい女の子を捕まえて自分好みの女性にしちゃうよ計画、みたいな？」

「……………」

「……………」

「……………」

「ごめん、謝るから、笑顔のまま無言で見つめるのは止めてくれる？」

「分かればいい」

いや、怖いんだよ。表情は笑顔なのに、目が一切笑ってないのって……10歳児にできる顔じゃないね。

10歳：「お父様の事情（4）」

「それで、いきなり結婚だなんて、どうしたんだ？」

「ん〜、あ〜……」

お父様の両親の話をフェルにするかどうかを悩む。

フェルは私の素性を知らないけど、私はフェルの名前をシズネさんから聞いている。

話したところで、私の素性がバレるとは思わないし、フェルにならバレても問題はないと思うんだ。

出会ったばかり相手を何でそこまで信頼しているのかと問われても、上手く言葉にはできないけど。

あ、そうか……私がフェルを気にしている原因の1つがわかったような気がする。

前世の私が育った施設にもフェルやペートのような子たちがいた。小さくして大人になることを選ばざるを得なかったような、そんな子たちだ。

だから、私は彼らのことが気になっているのだろう。

いわゆる 昔の自分を見ているようで、ってヤツだ。

すごくしっくり来た。が、ひとまずこの思いは横においておこう。フェルに気軽に話せる内容でもないし。

さて、フェルは結婚について小難しい言葉を並べていたが、結局のところ、仕事の契約と同じような感覚なのだろうか？　それが貴族らしいってことなのか？

なんとというか、理屈としては分からなくないけど。

「話してみる。力になれそうなら力を貸すぞ。ユーリと私は友達だろっ？」

「ぶっ……」

「む？　ボクは何かおかしなことを言ったか？」

私が静かに黙っていたせいで、かなり深刻な話題だと思ったようだ。気づいたら、フェルがすごく真面目な顔をしてこっちを見つめていた。

この間から思っていたけど、けっこう友達っていうのに拘るよな。ちよっと可愛いとか思ってしまう。

「そうだね……フェルに聞いてもらおうかな」

「ああ、聞くから話せ」

フェルに促されるまま、私はお父様の両親の話から弟を養子の件まで、個人名ではなく私との関係性を代名詞に、自分の価値観や考え方を交えつつ、ざっくりと説明する。

「ユーリは貴族の生まれだったのか……」

「いや、今の話を聞いての感想がまずソレって、どうよ？」

「すまない。少し意外な気がしてな。よく考えれば魔術を習うには、それだけ余裕がある家でないと無理だったか……」

「まあ、うちは両親とも庶民的だから、その影響もあるかもね。それで他には？」

魔術は誰に習ったわけじゃないけど……。それを指摘すると色々面倒な説明が必要になるため、あえてフェルの勘違いを否定しなかった。

「そうだな……ボクとしては、そのお祖父様の件とやらで、少なくとも誰かが不幸にはなったようには思えないけどな。もちろん、産みのお祖母様が若くして亡くなったことは別として、な。」

それにユーリも言っていたが……お父様とお祖父様の間で、何かがあったのか、何もなかったせいなのか、そこが分からない」

「やっぱ、そこに行き着くかあ……」

「しかし、ユーリの髪と瞳は父親譲りなのか。ボクのは“正反対の美しい色”だな」

ん？

「あのさ、訊くけど……フェルから見た私の髪と瞳の色って、“何色”なの？」

「は？ 両方とも黒だろう？ だから、ボクの白とは正反対だと……」

……

「……それって、見間違えとかではなくて？」
「そんなハッキリした色を見間違えるわけないだろう？ それとも、もっと詩的に艶めく宵闇のような色だ、とでも言えばいいのか？」

どういうことだ？

仮説として、フェルの言う黒と私が知っている黒は別物とか？

「えっと、フェルが言う黒っていうのは、こんな色？」

「それ以外に黒があるのか？ もちろん、同じ色でも少しの違いで呼び名が異なる事があるというのは知っているが……」

丁度履いていたズボンの布が黒だったので、つまんで見せてみたが、私と同じ色をフェルはきちんと黒だと認識してるようだ。

そもそも私の髪と瞳が同じ色と言った時点で変か？

私の髪は淡いシルバーブロンドだし、瞳の色は青だ。

………と、ここでもう一つの仮説が生まれた。

もしかして、フェルには前世の私の姿が重なって見えて………いる、とか？

10歳：「お父様の事情（5）」

昨晚は不思議そうにするフェルをはぐらかしながら、いくつかのことを聞き出せた。

どうやらフェルから見た私は「黒い髪と瞳をした彫りの浅い性別が分かりにくい顔」らしい。

彫りが浅いというと、西洋人から見た日本人の印象を思い出す。やはり前世の姿が関係していると見ていいだろう。

確かに私の身体と私の意識や前世は異なっている。つまり、前世を“隠している”とも言えなくもない。

もしかすると、これが理由でフェルの能力が私に通じなかったのでは？ という可能性も出てきた。

前世という最大の隠し事を見破っているために、フェルの能力が他の隠し事を暴けず、結果として通じないという可能性だ。

そうなるとフェルの能力が通じない条件は“異世界からの転生者”となるが……検証材料が足りなすぎる。というよりも、ほぼ不可能だろう。私がレアケースなのだ。

フェルの能力のことを推測していて気づいたのだが、魔導は魔法の一種である以上、その働きには魔力が介在していると考えられる。私が魔術で姿隠しているところを見つけたのは、フェルの能力が私の使っていた姿隠しの魔術よりも強力な魔導であったのだろう。

そこで実際に“瞳に映した相手”というのは、どのくらいを差す

のだろうか？

今度、視線を物理的や魔術的なフィルターを通したらどうなるか？
この辺りの興味が尽きない。

フェルのことはさておいて、お父様とお祖父様の件について今後
どうしようか。

シズネさんにも期待されたことだし、やはり動くころと思う。

とりあえずは、できることは情報収集か……お父様やお祖父様の
真意が気になる。

お父様やお祖父様、もしくはお祖父様の屋敷に古くから勤めてる
人に話を聞いた方が早いだろうか。

ただ、あまり馴染みのない人と話すとしても、私の年齢が問題に
なりそうだし……せめて、15歳で成人になっていれば違ったんだ
ろうけどなあ。

339

「お嬢様」

「はい、なんででしょうか？」

「何か気になることでもあるのか？ 剣先が鈍っている」

「うっ、ごめんなさい」

素振りの最中に考え事しちゃっていたのが思いつきりバレたか。

あう、ロイズさんに視線が痛い。私が全面的に悪いので、謝罪の
言葉以外は何も言えない。

「剣術の稽古は、慣れてきた頃が一番危険だ。今日はここまでにし
ておこう」

「分かりました。ありがとございました」

一礼をして、稽古に使った用具を横に片付け、用意していたタオルで汗をぬぐって、水筒から水分を補給する。

早朝とはいえ、気温は高く、滴り落ちるほどの汗をかいていた。

一度、稽古に夢中になって水分を取り忘れていたら、倒れそうになってしまった。

それから、稽古中には水筒の用意を欠かさないようにしている。

「それで何を考えてたんだ？」

「ええと、お父様とお祖父様のことを少し……昨晩、シズネさんから、お父様の産みのお母様であるケネアお祖母様の話を聞いたんです」

その告白に、ロイズさんが少し眉をひそめた。

「ロイズさんは、お父様のことは古くから知っているのですよね？」

「そうだな。かれこれ20年近い付き合いになるか？」

一時期、俺がガースェ・バーレンシアの警護役になってお屋敷に通っていたのが知り合っかけだな」

「それじゃあ……昔、お父様とお祖父様の間になにかあったのか、知っていますか？」

シズネさんが、ロイズさんなら知っているかもと教えてくれたのですが」

「残念ながら、俺も詳しくは分からない。ただ、成人してすぐにケ

インが軍に入りたい、と俺を頼ってきてな。

本人の意思が堅かったし、ガースエ・バーレンシアも本人の自由にさせて欲しいと言われて、そのようになったんだ。逆にオレが軍を辞める時に拾ってもらったんだから、人生何があるか分からないな」

「ええ、若いお嫁さんをもらったり、ね？」

「ぶっ。お嬢様……………」

「お茶目な冗談ですよ。しかし、うん……………」

お父様が15歳の頃に何かあったのか？

こうなると、直接聞いた方が早いか……………どこかにお父様を古くから知っている人はいれば、その人に聞くんですけど。

「……………そうだな。お嬢様、良かったら、事情に詳しくそうな人に連絡を取ってみようか？」

「おおっ？ ロイズさん、お願いできますか？」

「了解。それじゃあ、連絡が取れたら知らせる」

「ありがとうございます」

「いやいや、まあ、頑張ってくれ」

それは年下の少女ではなく、同じチームの仲間^{げき}に告げるような^{れい}励の言葉。

シズネさんもそうだったけど、ロイズさんも私に何かを期待しているんだろうか。

10歳：「お買い物しよう（1）」

「お待たせしました。今回の査定額は合わせて7,500シリルとなります。

詳細としましては、粒の小さいモノが合わせて1,300シリル、泉乙女の紫水晶 が1,200シリル、星紅玉石 が5,000シリルとなっております。

こちらは前回同様に一部で小銭で用意いたしましたがつたでしょうか？」

「お気遣いありがとうございます」

ホランさんから今回分の代金として、軽銀貨が10枚、半銀貨が2枚、銀貨が3枚、小金貨が7枚を受け取る。

財布代わりの小袋に硬貨をしまう。

一応、前回の反省を踏まえて、小袋はズボンと紐でつなげて、いざというときのために前もって魔術も掛けていた。

「ところで、例のものはどうなりましたか？」

「はい、売却を当店にお任せ頂けるといふことでしたので、オークションにかけさせてもらうことにしました。

そのため事前に魔術組合の保証書を用意させてもらう予定ですが、よろしかったでしょうか？」

「その辺りはお任せします」

「畏まりました」

「ところで、そのオークションって、いつ、どこで行なわれるので

すか？」

「1巡り後に宝環ほわかん通りにあります『グラフィーム競売場』にて出品いたします」

「それって見学できますか？」

「入場料として100シリルを払えば、見学することは可能です。ただし、その場合は見学のみで落札はできません」

見学だけで100シリルというのが、安いのか高いのかちょっと分かりにくいな。

娯楽の一種だと思えば、それなりの値段か？

私としては、見学はしてみたいけど、お金を払うとなると少し抵抗はある。

「見学できるのは分かりましたが、落札したい場合は？」

「『グラフィーム競売場』のように一流の競売場となりますと、出展者は最低限商人連盟に所属している者、落札者はその競売場に年会費を払っている会員でないといけません。」

ただ、商品1つ2つ落札するために会員になるのは面倒ですので、その場合は、会員の誰かに代理で落札してもらうことも多いです。

中には、代理落札のためだけに会員になっている者もおります「なるほど」

たまたまかもしれないが、『グロリス・ワールド』でもオークションに参加するためにオークション会員証という特殊なアイテムが必要だった。

「それともう一つお聞きしたいことが、ホランさんが着けている片眼鏡は、どちらで扱っているのですか？」

「こちらは『クムの細工店』という店で扱っております。当店と懇意にしている店です、必要でしたら店の者に案内をさせましょうか？」

「あ、いえ、大体の場所を教えてもらえれば、それでも」

「口頭では説明しにくい隠れた名店です……おい、誰か手の空いている人はいますかー？」

ホランさんの呼び声で、若い男性の店員がハイと手を上げる。

確か、一昨日この店で最初に取り合ってくれた店員さんのような気がする。

近づいてきた店員にホランさんが一言、二言ほど話し、店員もその言葉にうなづいていた。

「では、ケイン様、このものに案内させますので」

「あ、ありがとうございます。では、今日はこれで」

「はい、またのご来店をお待ちしております」

『セールテクト輝石店』の店員は、私の歩幅に合わせて案内をしてくれた。

店を出てから馬車街道を少し歩き、細い道に入り、そこから2回ほど曲がって、3回目に曲がって入った細い路地の中に『クムの細工店』の入り口があった。

確かに口頭で説明されただけでは、この店には到着できなかった

だろう。

「失礼します。クムさんいらっしやいますかー？ 『セールテクト輝石店』の者ですがー」

「はいはい？ ごめん、今日って何かの納品だったっけ？」

その店員の呼びかけに応じて、店の奥から私よりも背が低い少年がひよっこりと顔を出してきた。

子供のように見えるが、人間とは少し違う真ん丸な耳をしている。クムさんの種族はどうやらポツクルのようだ。

「いえ、納品の催促ではありません。

今日はうちの店長から、重要なお客様をクムさんの店まで案内するように申し付かってきました……ええと、ケイン様、こちらが細工師のクムさんです」

「初めましてケインと申します」

「クムです」

「それじゃあ、私はこれで」

「あ、はい、ありがとうございます。ホランさんにもよろしく言っておいて下さい」

私とクムさんの挨拶が終わり、顔合わせが済んだのを見届けて、店員の人は店に戻っていった。

10歳：「お買い物しよう(2)」

店の中に入ると、中は店というよりも作業場にテーブルと椅子が置いてあると表現した方が正しい雰囲気だった。

部屋の中央にはドーンと大きいが高さのない作業台が鎮座ちんざしており、その上に様々な道具や材料らしき金属や鉱石が転がっている。

壁際にはたくさんさんの引出しがついたダンスがずらりと並んでいる。

「えーと、この部屋はお店……なんですか？　なんか工房みたいに見えるんですが」

「うん、オイラの作業室兼お店だから問題なし！」

作業に集中したい時は、表の扉を閉めてるし、開いてる時はお店だから、誰でも勝手に入ってきてオツケーなんだよ」

「へ……」

「ま、普通のお客さんは滅多にこないけどね。大体どこかのお店の人が下請けの依頼も来たり、たまに常連さんが来るくらいかな？」

あとは、お嬢ちゃんみたいに誰かの紹介ってことが多いね」

ポツクルの年齢は、見た目からは分からないと本に書いてあったが、まさにその通りだった。

目の前にいるクムさんは、外見だけならリックと同じくらいに見えるし、セリフだけなら子供っぽく感じる。

そのあたりは種族の特徴もあるだろう。

それとこの部屋に入った辺りから、不思議なプレッシャーを感じ

ていた。決して不愉快ではなく、神社や寺院の境内のような神妙な場に入り込んだ時に感じるのと同じものだ。

何となくだけど、お父様の書斎の空気にも似ている？

……ああ、そうか、これはきつと仕事場の空気なんだ。

テーブルの上に置かれた道具はどれも「ただ古い」というより「使い込まれた」という言葉がしっくり合うし、クムさんが作ったと思わしき指輪はどれも見事な細工が施されている。

部屋を見れば、その人となりが分かるというが、クムさんは見た目とは違って、実直な職人である印象を部屋から受ける。

「ねえねえ、お嬢ちゃん、良かったらこっちに座ってお茶飲まない？」

「え？ あ、はい、いただきます」

部屋の様子に見蕩れていた間に、お茶を淹れてくれていたらしい。私は遠慮なく、椅子に座ってお茶のコップを受け取った。

「うっ……このお茶ってラルシヤの葉が入ってますか？」

「へっ、よく分かったね？」

「この独特の香りはすぐに分かります……」

ラルシヤの葉は煎じると生に比べれば格段に苦味が減るもの元々の苦味がものすごいため、少し混ぜるだけでも薬みたいな味

になる。

それなのに、このお茶からはラルシャの葉の香りが強烈にするんですけど……。

「身体に良いんだよー。ほら、飲んで飲んで」

「うっ……ぐく、っん……苦っ!？ 甘っ!？」

なにこれ、苦くて甘いんですけど。

苦いのは覚悟していたけど、予想外の甘さに吹き出しそうになったのを慌てて飲み込んだ。

どつきり？ いたずら？ 嫌がらせ？

……かと思ったら、クムさんは普通に飲んでるし……。

「なんでこんなに甘いんですか、これ？」

「そのままだと苦いから、ハチミツと砂糖をたっぷり入れてるんだ」

ポツクルって人間と味覚が違うの？ それとも、クムさんが変なだけ？ そこはかとなく後者な気がする。

「すみません、お水をもらえませんか？」

「はい、どうぞ。」

お嬢ちゃんもダメだったかあ。なんで皆飲めないのかなあ。こんなに美味しいのに……」

……いやさ、お水がすでに用意してあるのって、どうよ？ クム
さんはこの特製茶によって数多く犠牲者の出してきたに違いない、
絶対。

「それで、お嬢ちゃんが欲しいのは何かな？ 指輪？ 腕輪？ そ
れとも髪飾り？」

「はい、えつとですね……あれ？」

さつきからずつと“お嬢ちゃん”て呼ばれてないか？
あまりに自然だったからスルーしてたな。

10歳：「お買い物しよう」(3)

「あのすみません、さっきから、私のことを“お嬢ちゃん”と呼んでいますが……」

「ん？ あ！ ごめんごめん！」

お嬢ちゃんじゃなくて、お嬢さんって呼んで欲しいんだね？」

「いえ、そうでなくて」

「お嬢様？」

「そうでもなくて……なんで、私が女性だって知ってるんですか？」

「え、だって、女の子でしょ？ そうだね、歳は12歳くらい？」

ちよつと大人っぽくなりたい年頃だよね」

うんうんと自分の言葉に大きくうなづいている。

年齢こそ2歳年上に間違われているが、私が女性であることを一目で見破ったようだ。

元々の私を知っていて、私の方から声をかけたグイルさん以外にはバレていなかったのに。

「……クムさんて、【先天性加護】持ちなんですか？」

「へ？ なんで？ そんなもの持ってないよ？」

質問の意味が分からない、というキョトンとした顔をされてしまった。

魔術でも誤魔化しているとは言え、通じない人には通じないのかな。

何事も過信しすぎは良くないってことか。

「お嬢ちゃんて構いません……それで、作ってもらいたいものなんです。眼鏡を作って欲しいんです」

「眼鏡？ お嬢ちゃんは、目が悪いの？」

「そうじゃなくて、えーと、伊達眼鏡って分かりますか？」

それとレンズの代わりに薄く削った なんすいしょう 軟水晶 をはめて欲しいんです」

「ふむ……？ 伊達眼鏡って言うと、レンズの部分が平らで曲面になつてない眼鏡のことだね。」

ガラスを使わずに 軟水晶 を使う理由ってあるのかな？」

私の注文に鋭い目つきで、今度はクムさんの方から質問をしてきた。

「伊達眼鏡なら、レンズのように精密な曲面が必要ではないので軟水晶 でも十分ですし、その分ガラスを使うよりずっと軽い眼鏡が作れるからです。」

あと 軟水晶 は、魔力との親和性が高いので、そこも重要なんです」

「ふむ。パツと聞いた感じだと、結構お金が掛かりそうだよ？ お嬢ちゃんが払えるのかな？」

クムさんがちょっと考えて、わたしの顔を見ながら悩ましげに提

案をしてきた。

ホランさんの店でこっさり確認したところ、軟水晶は普通の水晶と比べて安いかわりに同じくらいの価格で手に入る素材みただから、多分、それほどではないか思っていたけど。

「ええと、いくらくらいになりますか？」

「実際に材料を集めてみないと分からないけど、軟水晶をレンズ代わりにすると……最低でも2千シリルから、予想だと4千シリルは必要かな？」

宝魔石の売却を待たずに、何とか手持ちの資金だけで払えそうだな。

「分かりました、ひとまず4千シリルなら払えますから、お願いします。」

それと眼鏡の設計に関して、こんな感じの機構は作れますか？

鼻当ての部分をこんな感じにして……ここには緩衝材として、樹脂を固めたものをつけて……」

「ほづ……ふむ……」

私ที่บ้านで書いてきた眼鏡のイラストをみせ、簡単に説明をする。

別に特別な仕組みではなく、鼻当ての部分に前世の知識を流用して、耳に掛けて鼻当てで支えるタイプの眼鏡の構造を提案しているだけだ。

「なかなか面白いね。」

別に突飛な発想っていうわけじゃないけど、この絵の眼鏡の仕組み

みは上手くできてるよ」

「それで？　いつぐらいにできあがりですか？」

「今から作業を始めれば、明日の今ぐらいには試作品ができそうだな。また明日来てもらっていいかい？　それと、この絵はもらっていいのかな？」

「それは大丈夫ですけど……えっと、前金とか必要ですか？」

「いや、この依頼に関しては、後で一括で払ってくればいいよ。久々に面白いものが作れそうだしね」

「ありがとうございます」

「それじゃあ、悪いけど、今日はもうお店を閉めるから。また明日ね」

そう宣言するが早いか、クムさんは、私から眼鏡の絵を受け取ると、作業台に向かって何やらごそごそと作業をし始めた。

しばらく様子を見ていたが、どうやら作業に熱中しているらしく、私の方を一瞥いちべつもしない。

クムさんの仕事の邪魔にならないよう、私はこっそり店を後にした。

10歳：「お買い物しよう」(4)「

クムさんの店を出て、私は一昨日していたように露店や通り沿いの店を見て回っていた。

「まいどありー」

古着屋で昨日グイルさんたちから借りたような私の身体が丸々隠れるくらいがいたうの外套を一着購入した。

熱い季節であるのを考慮して地は薄いが中が透けないようなつくりのものを選んだ。

そして、店を出たときに、気になる看板を見つけた。

この国では義務教育などもなく文字が読めない人が少なくない。もちろん、王都では文字が読める人の割合の方が多いらしいのだが、それでも文字が読めなかつたり人が存在する。

そのため、店や施設の看板には工夫がされている。

まず、暗黙のうちに連盟ごとに基本となる看板の形が決まっている。

商人連盟ならば硬貨を表す「円形」、職人連盟は作業台を表す「台形」、学者連盟ならば調和を表す「六芒星(三角形を2つ重ね合わせた星型)」、冒険者連盟は武勇を意味する「トラペゾイド菱形」だ。

国の施設などはシンプルに「長方形」の看板となる。

罪人連盟のことはよく分からないので置いておく、そもそも看板を出すような施設があるとは思わないけど。

それから、看板にはそれぞれの店の店名や扱っている商品などの絵が描かれる。

例えば、『セールテクト輝石店』では、円形の木板に「セールテクト輝石店」という店名と宝石や石の絵が描かれた看板を店の入り口に吊り下げている。

『クムの細工店』の看板は、台形の小さな木板に店名の「クムの細工店」と落書きみたいな指輪（腕輪？）と細工道具のノミが描かれている。

武器屋を探す場合は、菱形で剣や槍、盾や鎧などが描かれた看板を探せばいい。

また露店の場合は、店と違い看板を下げる店は少なく、主に布でできたのぼりを看板の代わりにしている店が多い。

例えば、串焼き屋の屋台の場合、「串焼き」と串焼きの絵が描かれたのぼりが掲げられている。

一番上の「」は、商人連盟、この場合は料理人組合に所属しているというアピールであり、信用の目安になる。

もちろん、連盟やその組合に所属していない場合は、それらのマークを乗せることはできない。所属していないのにも関わらず、不正にマークを利用していた場合は該当の組織から罰則金などを請求される。

さて、問題の看板だが、台形の木板に花とガラス瓶の絵が描かれている。店名は『ルラルルラ調香店』となっていた。

調香ってことは、香水の店かな？

気になってその店に入ると、店内は甘い香りが充満していた。

「いらっしゃいませ。お坊ちやま、何をお探してでしょうか？」

店員と思わしき間延びした口調の女性が、私に近寄ってくる。

濡れるようなオレンジ色の長い髪とパツチリとした髪と同じ色をした眼、さらに耳の辺りに熱帯魚のような美しい黄色のヒレを持ったマーマンの女性だ。

「女性へのプレゼントでしょうか？ 気になるあの人へ、なぐんて〜」

ニコニコと私の接客を始める女性の店員。

なんだろう、お母様と仲良くなれそうな感じがするよ、この人。

「えっと、通りを歩いていて、ちょっと看板が気になったので入ってきただけです」

「冷やかしですか？」

「……気に入ったものがあれば買って帰ります。この店は香水のお店ですか？」

「はい。香水が中心として、ポプリや洗髪料なんかも扱っていますよ。」

丁度新作の香水ができたところだったので。よかったら嗅いでみてください。」

そう言うと女性の店員は、青と緑のガラス瓶を2本取り出して、私に手渡した。

せっかくなので、瓶の口に鼻を近づけて嗅いで見る。

青の瓶の方は、サッパリとした感じで、爽やかな石^{せっけん}鹸みたいなよい香りがする。

緑の瓶の方は、野草っぽい感じで、ウェステッド村にいた頃に摘んだ小さな花のような匂いがした。

「青い方は清潔感のある爽やかな香りですね。緑の方は野生の花に近いような感じがします」

「ふふふ。青い方は 星空の風 という名前で大人の女性をイメージしています。」

逆に緑の方は 新緑の春花 という名前で少女をイメージしたものです。」

店員の解説で、私の脳裏に2人の女性の姿が思い浮かぶ。

ふむ。せっかくだから、お土産に買っていこうかな？

10歳：「花の香りとエルフの少女」(1)「

「というわけで、上手くいったらいいから、考えておいてくれる？」

「そんなこと言わないで、夕方前にも連れて来い」

「え？ いいの？ 上手くいった場合、おれいがわりに頼むつもりだったのに」

「ああ、坊ちゃんが教えてくれたものは、かなり革新的だったからな、きつと上手くいくさ。だったら、早いうちから慣れてもらった方がいいだろう？」

「ははは、そうだといいいけど。ありがとう」

今日の目的であった串焼き屋のおじさんとの交渉が無事にまとまった。

実は店がどこにあったかすっかり忘れてて、店を探すのに時間が掛かってしまったんだが。

『ルラルルラ調香店』で香水を2瓶買ってから、半刻(約1時間)ほど、市場をぐるぐる歩き回ってしまった。

疲れて、別の店で妥協しようかと思った所、運良く串焼き屋のおじさんの方から「お、こないだの坊ちゃん」と声を掛けてきてくれた。

探している途中で何度も通った場所だったんだけど、見落としていたようだ。なんか悔しい。

せつかなので遅めの昼食として、串焼きと例のミックスジュースを頼んだ。

その後、お客が少なくなってきたのをいいことに、串焼き屋のおじさんに前世の料理の知識を提供を試みた。

始めこそ子供の遊びに付き合っているような態度だったが、話が進むにつれ、串焼き屋のおじさんの表情が徐々に真剣なモノになっていた。

「ごちそうさま。それじゃあ、よろしく願いします」

「まいど、待ってるからな」

上機嫌になった串焼き屋のおじさんから、昼の余り物だからと、串焼きにしたグラススネイルの肉を大きな葉で包んだお土産までもらってしまった。

腹ごしらえが済み、買ったばかりの外套がいてうを羽織はおって、私は居住自由区の廃屋に向かった。
今度は道に迷うことなくペルナちゃんとペートの部屋まで到着する。

「失礼、ケインだけど、ペルナちゃんかペートはいるかな？」

「はい」

ノックをしてそう呼びかけると、ペートの声で返事があり、扉が中から開いた。

「ケイン、何かあったのか？ 例のことと関係があるのか？」

「関係があるといえばあるけど、ないと言えはないかな」

「どっちなんだよ！」

相変わらず気が短いな。まあ、タメ口で良いと言ったのは私なんです、そのあたりは気にしないけど。

この性格で接客業が務まるかなあ？ いや、案外物怖じしなくていいのか？

「とりあえず、立ち話もなんだから、中に入って良いかな？」

「別に構わないけど」

「それとコレはお土産、夕食にでも食べて」

串焼き屋でもらったお土産をペートに押し付けるようにして渡す。部屋の中に入ると、昨日よりもずっと綺麗な服を着たペルナちゃんかペコリと出迎えてくれた。

「えっと、ケインさん、いらっしやいませ……」

「おや？ ペルナちゃん、今日はずいぶんと可愛らしい格好だね」

「あり、ありがとっござい……ます……」

私の褒め言葉に真っ赤になって照れる。その様子もとっても可愛い。

「その……ペート君が、お賃金をたくさんもらえたからって、昼に買って来てくれたんです」

ちよいとペートの方に視線をずらすと、どこか誇らしげに、ただ感謝の視線を返してきた。

あ、なるほど、私が昨日渡したお金で買って来たというわけか。

ペートの服は昨日と同じだから、ペルナちゃんの分だけに買って来たのか？

「ちょうどよかった、私もペルナちゃんに渡したい物があったんだ」

10歳：「花の香りとエルフの少女」(2)

「わたしに渡したいもの……?」

「うん、私からのプレゼント。はい、これ」

私は外套の内側に作られた大きなポケットから緑色の瓶を取り出して、ペルナちゃんの両手にしっかりと持たせる。

ペルナちゃんは、そろそろと手探りで瓶を調べる。

「ガラスの……瓶ですか？ あれ？ ふたが、ついてる……?」

「そう、中には液体が入ってるから、こぼさないようにゆっくりと開いてね」

私の言葉にしたがって慎重な手つきでゆっくりと瓶の蓋ふたを取る。

「……わっ。お花の匂いがします。なんですか、これ!？」

「香水だけど、もらうのは初めて?」

「こ、香水ですか？ え、あれ、わたしがもらっちゃっていいんですか、これ!？」

今更になってプレゼントの意味を理解したのか、慌てふためくペルナちゃんが可愛くて癒される。

元気っ子なりリアも可愛いけど、ペルナちゃんみたいなゆるふわ

も悪くない。

「いいも何もペルナちゃんのために買ったんだから、もらってくれないと私が困るな」

「あ、ありがとうございます！ ああ、ふたしないと香りがもったいないです。」

香りが逃げないようにしっかりとふたをして、開けないようにします！..!」

ペルナちゃんがわたたと瓶の蓋を閉める。

開けないようにって、いや、香水の使い方って知ってるのかな？

あ、そうか……香水なら匂いで楽しめると思ったけど、つけるとなると目が見えてないとやり難いそうだ。失敗した。

「ん〜。一度私に瓶を貸してもらえる？」

「あ、はい？」

「それと両手をちよつと前に出して、少しつけるけどいいかな？」

「え？ えつと、いいですけど？」

なんかちよつと理解できてないっばいけど、まあ、いつか。

「香水はね。化粧品の一種なんだよ。」

使い方は例えば、こつやつて手首とかに数滴だけ垂らして……両手首を合わせて馴染ませる」

「あつ……あう……」

ペルナちゃんの手を取って、香水の瓶を傾けて中身を数滴、ペルナちゃんの右手首の内側に付ける。

香水の瓶を一旦机の上に置き、ペルナちゃんの手を取ってバツテを作るように両手首の内側を重ね合わせ、きゅっと軽く押して匂いを皮膚に馴染ませる。

「はい、こんな感じかな？」

「……あ、ありがとうございます。わっ、わたしの手からお花の香りがします！」

両手を振り回しながら、驚きと喜びを表す仕草をする。

ペルナちゃんが手を振り回すと、手首につけられた香りが部屋に拡散していく。

「次から香水を垂らすのが難しかったら、ペートに頼んでね」

「あうう……すみません！」

「いや、別に謝るようなことじゃないからね？ ペートも今を見てたからやり方は分かったでしょ？」

「……お、おうっ！」

ん？ なんだろう、2人ともちよつとギクシャクしてない？

ペルナちゃんは、身体の向きをなんだか変な方を向けているし、ペートはそんなペルナちゃんと私を見比べてる、みたいなの。

どうしたんだろ？

「えーと……ああ、ペート、この瓶はガラスだから割れないに注意して、どこか倒れたり落ちたりしないような場所に置いといてくれない？」

「わ、分かった！」

私から香水の瓶を受け取り、瓶をボロ布で巻くようにして一緒に筆筒の小さな引出しにしまう。

筆筒自体は頑丈だし、布で保護しておけば、早々に瓶が壊れたりしないだろう。

「それからペート、このあとで私と一緒に出かけたいところがあるんだけど、大丈夫かな？」

「ケインが言うなら、どこへでも付いてくさ！」

「ペルナちゃん、来て早々で悪いけど、ペートを借りていくね？」

また今度時間があるときに遊びに来るから」

「は、はい、お待ちしております！」

10歳：「花の香りとエルフの少女」(3)

「なあ、ケイン……」

「ん？ ああ、どこに向かってるか話をしてなかったね」

ペルナちゃんの前で細かく説明するわけにはいかなかったから、曖昧にしたまま連れ出しちゃったんだよな。

一応、事前に説明しておいた方がいいか。

「いや、それも気になるけど、それより……ケイン、姉ちゃんのと幸せにしてやってくれよ？」

「ぶっ！ い、いきなり、何を言うの？」

「姉ちゃんならケインときっとお似合いだと思っからさ！」

え〜と？

何、この“うちの娘をよろしく頼む”的な雰囲気は？

「ペート、ちょっと落ち着こうか。私も落ち着くから」

「別におれは落ち着いてるよ？」

「それで、なんで私がペルナちゃんを幸せにするのかな？」

いや、もちろん、ペルナちゃんのことを不幸にしたいってわけじゃないからね」

「だって……さっきのプレゼントはアレだろ？ 女を口説くための

プレゼントだろ？

姉ちゃんだって悪い気はしてないみたいだったし……」

いや、私もペルナちゃんも、そんな歳じゃないでしょ！ と言いかけてやめる。

……15歳で成人なら遅くもないのか？ いや、そもそもペートが勝手に妄想しているだけだよな？

ペルナちゃんが悪い気はしてないって、そりゃ香水を喜んでくれたからだろうし。

「私はペルナちゃんに喜んでもらいたかっただけで、そんな気持ちは一切ないよ！」

「姉ちゃんじゃ不満なのかよ？」

今はまだ成長途中だけど、きつとすぐにきれいな大人の女性になるからさ！」

「不満とかじゃなくて〜！ そもそも私は女の子」

「女の子？」

「 や小さい子が喜んでくれるのが好きだけなの！ 別に見返りとか求めてないから！」

せつかく変装しているのに、うっかり喋るところだった。

いや、女の子は嫌いじゃないけど、身体は女の子だし……まだ色々と割り切れてないし……。

この2人には、もう正体とか喋っちゃってもいい気はするんだけどな。

ただ、謎の少年のケイン君のままでした方が良さそう気もするだよなあ。

特にペルナちゃんの治療の都合も考えると、どうした方がいいのか悩ましい。

「とりあえず、今からペートを雇ってくれる人のところに紹介しに行くから……の前に、ペートも新しい服を買った方がいいかな？」

それから、髪も少し整えた方がいいね……職場は食べ物屋だから、見た目は重要だよ」

「うん……ケインが言っなら従っよ」

渋々ながらといったペートを近くの宿屋に連れ込み　この字面だけ考えると怪し過ぎるが　裏庭と鉢はちまを借りて私が簡単に散髪する。

しばらくの間、ジヨキジヨキと髪を切る鉢の独特な音が鳴り響く。

「まあ、こんな所かな？」

「……………」

「大丈夫、その髪形も似合ってるって！」

「……………そうか？」

「うん、ペートっばいよ？」

鏡を見て、言葉をなくしたペートに慰め、もとい、言い訳……じやなくて、新しい髪型を褒め称える。

ちよっぴり切り過ぎちゃった気もしなくてもないけど、勝気そうな目つきによく似合ってると思うんだ。うん。

その後、古着屋に連れていき、今後の仕事を視野に入れ、汚れても目立ちにくい色で動きやすそう服を買わせる。

着替えが終わって、通りの屋台まで連れて行き、トルバさん（屋台のおじさんの名前）とペートを対面させる。

それから、私を混ぜた3人で明日からの新作メニューについての相談をする。

最初は緊張していたようだが、しばらく話していると、徐々に打ち解けたようだ。

しばらくの間は試行錯誤をするだろうが、そこはトルバさんもプロの料理人だ。頑張ってもらおうしかない。

上手くいけば、王都で行きつけのお店になるだろう。ぜひ成功させてもらいたいところだ。

10歳：「月明かりの下でのお茶会（1）」

「……とまあ、基本は走り込みと柔軟運動、剣術型の素振りと実戦訓練、これらの繰り返しかな？」

「まだ身体が育ちきっていないから、それほど無茶なことはやってないけどね」

私は喋って渴いた喉を、冷めて飲みやすい温度になったお茶で潤す。

少し香りは薄れた気がするが、その分お茶本来の味が分かりやすくなっているかな。

お皿に盛られたクッキーもどきを1枚つまむ。木の実の味が舌の上に広がり、呑み込んだ後に残る砂糖の甘さを、お茶のほのかな苦味で洗い流す。うん、美味しい。

「は……幸せだねえ……」

「ずいぶん安い幸せだな」

「この焼き菓子とお茶は安くないからね、絶対！」

それにフェル、そもそも幸せを感じることに貴賤きせんとはないんだよ？」

「名言つばいけど、ユーリが言うと、ただの食い意地が張った言い訳にしか聞こえないな」

「……フェルはどうしても私のことを食いしん坊キャラにしたいようだね」

「気のせいだ。ん、空になったようだがお代わりはあるか？ 湯を取ってこよう」

私のカップが空になったのを見て、ティーポットをもってフェルが部屋に向かおうとする。

「あ、フェル、ちょっと待って！ そのティーポットを貸して？」

「ん？」

「お湯が必要なだけなら、私が……」
《ノア熱の セレス宿る ウォーラ滴よ》

チヨロリ私の両手の間から流れ出た熱湯でティーポットが満たされる。

お茶を淹れるのに丁度いい温度になっているはずだ。

「今のは魔術か？ 水を作り出す魔術は知っていたが、熱湯を作るとは……」

「火球を作り出す魔術があるんだから、それをちよつと応用するだけだよ」

「……………」

2杯目になるので、少し長めに蒸らしてから、自分とフェルのカップに注ぐ。

フェルはその様子を静かに眺めていて、注ぎ終わると「ありがとう」と小さく返事をした。

「……………ユーリは、魔術に対して少し常識外れなところがあるから言

つておくが、そんな日常生活っぽい魔術は珍しいぞ？

魔術書はいくつか読んだが、熱湯を作り出す魔術が記述されていた覚えはない。

つまり、その魔術はユーリが研究して作ったオリジナルだろう？」

「あー、そうなるね」

「そもそも日常生活と魔術は、基本的に相容れないものだからな。

理由は簡単。魔術を使う際に必要となる 発動具 が珍しいため、誰でもできることを魔術で行なおうと考える人は少ないんだ」

「……………なるほど」

つまり、名剣を使って料理をしようと考える剣士や主婦がいないのと同じ理屈だな。

お湯を沸かすなら鍋で沸かせばいいし、料理をするなら包丁があればいいというわけだ。

「うん、私の魔術は変だね」

「いや……………そこで納得されても、返答に困るぞ」

過ちを認められる大人になりたいと思うのですよ？

……………しかし、フェルの前だったからよかったものの、やっぱり人前じゃあ迂闊うっかつに魔術は使えないなあ。

どこでどんな問題が起こるか予想もつかない。

「とりあえず、使えるものは使えるし、便利なときは便利なんだし
な」

「それもユーリらしいな」

自分のカップをふうふうと吹いて、お茶を冷ましつつする。
んー、1杯目よりも蒸らし時間を長くしたので、味が濃くはつきりとしている。

ただ蒸らす時間はもう少し短くてもよかったかも、お子様の舌は苦味をなかなか美味しいと感じてくれないからな。

「そうそう今日はフェルに試してもらいたいことがあったんだ？」

「試してもらいたいこと？ ユーリの頼みなら、できる限り協力するが……それは、何だ？」

「レンズに少し特殊な鉱石を使った眼鏡だよ。名付けて“マジカル暗視眼鏡”って所かな。

さ、つけてみて？」

今日の昼間に受け取ったばかりの試作品の眼鏡を魔術で加工したものをフェルに渡した。

10歳：「月明かりの下でのお茶会（2）」

「……どうすればいいんだ？」

「あれ？ つけ方が分からない？」

「ボクが知っている眼鏡とは少し形が違うからな……取っ手が変な向きに2つ付いているし」

「取っ手？ ああ、ローネットのことか」

多分フェルが知っている眼鏡はローネット、いわゆる柄付眼鏡えつきめがねで、棒やフレームを持って使う眼鏡のことだろう。

私がクムさんに作ってもらったのはつる付眼鏡だ。

前世の世界では、近視や乱視などの視覚障害は簡単な外科手術で治るため、眼鏡が必要な人というのはいなかった。

ただ、眼鏡そのものはファッションアイテムとして残っていたし、私が死ぬ直前は第何次眼鏡ブームとかで、ファッションブランドの伊達眼鏡やサングラスが流行っていた。

「ちょっと貸して……コレをこういう向きで、ここを耳に引っ掛ける感じで……」

眼鏡を受け取って、フェルの顔に眼鏡をつけてやる。

「どうかな？」

「少し窮屈な感じが、それに視界が急に明るくなった……」

「……キミは誰だ？ どこから入ってきた？ 今の今まで、そこにはユーリが座っていたはずだが」

「その様子だとうまくいったのかな？」

「声は……ユーリだな。」

「この眼鏡はマジックアイテムか何かなのか？ 周りが明るくなつて、ユーリが別人のように見えるぞ」

「まあ、マジックアイテムと言ってもいいかもね……そのレンズの部分に明かり系の魔術が付与されているんだ」

「はっ？」

フェルの魔導は、私がたまに使う鑑定系の魔術と似た原理で動いているのだと推測した。

例えば、《瞳が見る軀を知る（モア モアース テイス テラー ル）》は、私が見ている対象の身体的な状態を鑑定することができる魔術だ。

多分だがフェルの能力も同様に、対象を見ることで発動し、対象の隠し事を読み取っている。

魔術と魔導の違いは、任意による習得以外にも、汎用性に違いがある。

簡単に言えば、魔導は応用が利かない分、効果の威力が強い。一点特化型という感じだ。

また強力な魔導ほど、使用に制約が掛かる。

私の制約は「攻撃魔術が使えなくなる」だし、フェルの制約は「

夜間に相手を直接見ないといけない」だ。

ただこの制約はきちんと理解すれば、問題は十分緩和される。

例えば、さつき使った熱湯を作る魔術も、一度コップなどを経由さえすれば、相手にぶっかけても、それは攻撃用の魔術ではなく、あくまで熱湯を作る魔術なのだ。

さて、夜間にしか使えない魔導に対して、昼間のような視界を与えたらどうなるか？

結果は大成功。

制約を逆手に取ったようなものだが、フェルの目には正しい私の姿が映っているのだろう。

「その眼鏡をかけていれば、フェルが人を見ても能力に反応しないようにしたってところかな？

ついでに暗い場所でも明かりなしに読書ができる優れもの！

個人的にはうまくいったらラッキー程度だったんだけどね」

「……………」

「ねえ、フェルには、今の私の姿がどう見えてる？」

「あ、ああ……白っぽい金髪に青い目の少年っぽい女の子に見える

……………」

「よし。あとは窮屈さをなくすために、形とかを微調整する感じかな」

「……………この眼鏡を作ったのはユーリなのか？」

「いや、細工師の人に頼んで作ってもらったけど？」

「そうじゃなくて、このレンズの部分の仕組みについて、考えたのは……………ユーリなのか？」

「ああ、うん、ただの思いつきだったけどね」

思いつきで作っただけに上手くいって良かった。勢いで頼んじやっただけど、伊達眼鏡の制作費が結構高額なんだよな。

クムさんが面白いアイデアをもらったから、と言って代金を割引してくれるらしいのは助かったけど。

「……ユーリ」

「ん？ 何？」

「キミは、いったい何者なんだ？ ボク有能力について、何度か学者連盟の調査に付き合ったが、ここまでボク有能力を把握していなかったぞ」

「え〜と、何て説明すればいいかな……本当に思いつきなんだよ？」

「それに！ ボク有能力を無効化したことで、なんでユーリの姿が変わって見えただんだ？」

「それじゃあまるで、ボク有能力のせいでユーリの“隠している姿”が見えていたように聞こえるよな？」

フェルの……いや、フェルネ・ザールバリンの真剣な目が私を射抜く。

その瞳の中に、切望や困惑などの揺れ動くフェルの気持ちが見え透けて見えた。

まあ、しょうがないか。私は心の中で小さな溜め息を吐く。

「それじゃあ、改めて挨拶から始めようか……」

何となく、何となくだけど、私もこうなることを望んでいた気が

するしな。

10歳：「月明かりの下でのお茶会（3）」

「フェイス リアート 《風を駆けるは空を舞う竜の翼》」
フェイス ロアースドレイク・ド・フェス

私は飛行の魔術を使って、ベランダから空へとその身体を浮かべ、フェルを見下ろす位置まで上昇した。

その私を黙って見上げるフェルの顔には、私が用意した眼鏡が掛けられている。

双つふたの月が作り出す淡く優しい光に照らされ、フェルが私を見つめ、私がフェルを見つめた。

フェルは私の唐突な申し出をゆっくりと噛み砕いて、そして呑み込んだ。

「お初にお目にかかる、夜空を舞うお嬢さん。
ボクの名はフェルネ・ザールバリン。よかったら友達になつてくれないか？」

まるで淑女を踊りに誘う騎士のように、誘惑をささやく悪魔のように、果物をねだる子供のように……私を求め伸ばされる右手。

「初めまして、アラバスター 雪花石膏の如き“ましろのつかさ 真白の司”。

私の名はユリア・バーレンシア。貴方が友を望むのならば友となりましょう。誓いは ディナ 大きし月精霊 の名の下に」

そして、私はベランダに降りて、差し出されたフェルの手をそっと掴む。

「……………」
「……………」

一瞬の沈黙。

「……………」
「……………」

「あははははは……………」

どちらともなく吹き出し、2人の笑い声が二重奏を奏でる。いや、本気でツボにハマった。笑いすぎで息が少し苦しい。

「……………」はーはー。何が、夜空を舞うお嬢さんだよ。似合わないことするね〜」

「ふー、そう言うユーリだって……………」いや、ユリアだったか？」
「別にユーリでもいいよ。」

本名とそんなに違ってないし、愛称で済む程度でしょ？」
「そうか？」

なら、ボクもフェルのままでいいな。ユーリにフェルネと呼ばれると思うと、少し変な感じがする」

なんか少しすっきりした、かな。

「しかし、何でまた……こんな恥ずかしい真似を？」

「何でも何も、私の正体を知りたいと言ったのはフェルだよ。それにずいぶんノリノリだったじゃない」

「いや、まあ、それはそうだが……」

フェルがぶつぶつと、何かを呟いている。

私は彼が何を言いたいのかは分かっているけどな。

「そうだね。すぐには信じられないような話だけど……」

「今更の話だな。ユーリの非常識っぷりには慣れたつもりだ。ユーリの言うことなら信じるさ」

むう、相変わらず10歳児らしくない言葉だ。ちょっと嬉しいけど。

「私はね、前世の記憶が残ってるんだ。」

そのお陰で幼い頃から魔術の修行をしてきた。だから、こんな年で魔術を使えるんだ。

それから、フェルが能力で見ていた黒髪黒目の顔だけど、それは前世の影響だと考えてる」

「……思ったよりは普通だな」

「その返答は、かなり気が抜ける……、人の告白を普通の一言で済ませないでよ」

普通って、ボケ殺しな単語だよな。

いや、別に今の流れでボケるつもり、ボケたつもりもないけど…

…。

なんか、ほら「もっと別に反応があるだろう」みたいな気分になっってくる。

10歳：「月明かりの下でのお茶会（4）」

「つまり、まとめると、ユーリの前世はカルチュアとは異なる世界の間で、そこにあった遊びのルールと、この世界の法則がそっくりであり、生まれた時から記憶があったために魔術の知識があった。ということか？」

「……………」

賢いとは思っていたけど、フェルの理解力の高さに思わず絶句する。

もちろん、できるだけ分かりやすく簡潔に説明したつもりだけど、途中からフェルの方からの確な質問を始めて、私はそれに答えるだけになっていた。

「ん？ どこか間違えてたか？」

「いや、あつてるよ。あつてるから驚いてたんじゃないか。フェルも私と一緒に転生者だったりしない？」

「そうだったら面白かったがな。」

実は聞いていても、分かってないことの方が多い。ただ演劇なんかと一緒に、そういうものだと思っただけだ」

その受け入れただけ、って言うのは十分すごいんだと思っけどな。子供らしくないのか、子供だからできることなのか。

「ただ1つ気になるんだが……なんでユーリはこの世界に転生してきたんだ？」

「そんなことを訊かれても、私には分からないけど……むしろ私が知りたいくらいだし……」

「いや、言い方が悪かったかな。」

この世界の常識として、ボクは魂の転生自体は当たり前のことだと思っていたから、前世の記憶を持っているのは珍しいけど、そういうこともあるかもしれない位にしか感じていない。

けど、ユーリの前世はこの世界の人間じゃないという……が、ここまでがいい」

「いいんだ……」

「ああ、ボク自身の能力にも関わることだからな、多少は信じやすい。」

その上で、ボクが気になっているのは……なんで、ユーリはこの世界のことを知っていることができた？」

「それは、たまたまこの世界とゲームの設定が似ていたからで……それこそ、偶然としか言えないんじゃない？」

私の答えに満足がいかないのか、フェルが少し難しい顔をする。

いや、転生者であることを暴露した以上、私の方が精神的にはずっと年上なんだけど……なんかこう、フェルの大人っぽさは筋金入りなのか、精神的にも私と同年ではないかと感じるときがあるからすごい。

「偶然で済ませるには、不自然さが残るんだ……」

「不自然さ？」

「ユーリ、想像してみてください。」

ボクたちが暗号遊びをしていたとしよう。例えば、お互いだけに通じるような文字を作るんだ」

「うん」

「朝起きたら、別の国でもいいけど、どこか知らない場所に連れ去られていた。」

そして、その場所では、ボクたちが使っていた暗号が当たり前に使われている文字だった。

……な？ 変な感じがしないか？」

「……………」

フェルに言われて、私も初めてのそのことに違和感を覚える。

いや、むしろ敢えて考えないようにしていたことなのかもしれない。

私がこの世界に転生したのは偶然なのか、それとも誰かの意図が働いているのか。

もし、誰かの意図だとしたら、私はひとまず感謝をしよう。

少なくとも、この世界に生まれて大切な人たちを得ることができた。

その誰かによって、私や大切な人たちが傷つくならば、私はその誰かを許しはしない。

もちろん、私ができることなどささやかな抵抗にしかならないとしても、だ。

「とは言ったものの、そもそも何の理由も根拠もなく、ただボクの考え過ぎって可能性が高いな」

「あう……………」

フェルが無責任なことをさらりと言い放つ。
いや、フェルは責任を負う必要なかこれっぽっちもないんだけ
どな。

私が決意を新たにしたところで、いきなり水を差された気分だ。
熱血しそうになってた自分がちよつと恥ずかしい。

でも、私の想いは揺らぐことはない。

世界を救う勇者になるつもりも、目の届く範囲全ての人を救う聖
者になるつもりもない。

ただ、手の届く触れる範囲で大切な人を大事したいだけのこと。

「さて、今日はそろそろ帰るとするよ」

「そうか。それじゃあ、また明後日の晩に」

「……ああ、明後日の晩に」

残っていたお茶を飲み干して、席を立つ。

「フェル、ありがとう……」

「ん？ どういたしまして？」

突然の私の感謝に、意味も分からずその言葉を受け取る。

フェルへの気持ちを言葉にしたら「ありがとう」の言葉を紡いで

いた。

というか、私も何に対しての感謝だか分からないんだけどな。

10歳：「お祖父様の事情（1）」

「なんか艶々だねえ」

王都への旅の途中でハンスさんたちに正体を明かした時を除いて、ずっとジルは人間形態のままだった。

夜寝る時も与えられた私室で人間形態のまま眠っているらしい。ふと思いついて、オオカミ形態に戻ってもらい、久しぶりにジルの毛皮をブラッシングを始めたが、毛皮は美しく艶々で少しも汚れていなかった。

人間形態のときはお風呂に入れているけど、やっぱりそれが影響してるんだろうか？

ジルは床に寝転んで、気持ち良さそうに伸びている。

「うーん、不思議だ」

「がう？」

「や、なんでもない」

「くうん」

続けて欲しい、とねだるようにペロペロとジルが私の頬を舐める。その催促にしたがって、私はジルのブラッシングを再開。

……って、ジルが頬を舐めるのって、もしかしてアウトじゃね？人間形態を想像すると、どこか背徳的なものを感じちゃうんだけ

ど。

あ〜、できる限り、そのへんのこととは考えないように無心になつてブラシを動かす。

「おっと、お嬢様、ここにいたか」

「ロイズさん？ 何かありましたか？」

ブラッシングが一通り終わった頃に、ロイズさんがやってきた。

「ああ、先日話していた件で先方と連絡が取れた。急な話だが本日の真昼過ぎに外で待ち合わせる事になったが、大丈夫か？」

「先日の話と言うと……」

あつ、バーレンシア家の事情通（仮）さんの話か？

「はい、私の方は大丈夫です。何か用意しておくものとかありますか？」

「そうだな。普段着で構わないので、男物ではなく女物の服に着替えておいてくれるか？」

「わかりました。着替えておきます」

ロイズさんと一緒なら、変装していく意味もないだろうしな。

ジルを人間形態に戻って服を着るように指示してブラッシングを終える。

最近はすっかり人間形態にも慣れ、ちゃんと自分で服を着替えられるようになったし、基本的な常識も覚えてきた。そろそろ、外に連れ出しても平気かな？

待ち合わせの場所は、都市の中心だが、通りからやや離れた場所にある軽食屋だった。

なんでも王都に昔からある店で、こじんまりとしているが地元の人々に愛されている穴場らしい。

建物自体からは年季によってにじみ出る貫禄を受ける。店内は掃除が行き届いているのか清潔感があり、物静かなお客が多くて、とても落ち着いた雰囲気だ。

約束の時間よりはだいぶ早く着いたようで、バーレンシア家の事情通（仮）さんは到着していないようだだった。

ロイズさんが、対応に来てくれた店員に店お薦めのビスケットとお茶を2人分、それと個室を借りれるように頼む。

借りた部屋の中でロイズさんとビスケットを摘みながらお茶を飲んで、適当な雑談をしていると、扉が開く音がして誰かが部屋に入ってきた。

「じいさん、遅かったな」

「ふん、わしを呼びつけるとはコーズレイトの若造もずいぶんと偉くなったもんじゃ」

ん、この声は？ と思い、振り向くとバーレンシアの本家に行つた時にお世話になった執事のおじいさんが部屋の出入り口に立って

た。

「ほっ？」

これは、失礼いたしました。ユリアお嬢様がいらしてるとは……
… コーズレイト殿、わざと黙っておられましたね？」

「いやいや、訊かれなかつたから答えなかつただけだが」

「ふん、今回はわしの不注意もあるし追求はせぬ。」

それで、わしに話を聞きたい方がいると呼び出されましたが……

それはユリアお嬢様でよろしいのでしょうか？」

「えーと……」

私に丁寧な口調で問いかけてくるおじいさん。

名前は確かササニシキじゃなくて……なんだっけ。

「ああ、改めまして、自己紹介させていただきます。

ガースエ・バーレンシア家が執事アギタ・オーバコマチと申しま

す」

そうそう、アキタコマチさん、もといアギタさんだ。

10歳：「お祖父様の事情(2)」

アギタさんを一言で表すなら、老紳士だろう。

白髪と黒髪が半々ほどのかつちりした髪型に黒い目、容貌だけを見れば50歳くらいだろうか。

背筋の伸びたシャンとした姿勢と体格を見ると、それより5歳は若く言っても通じそうだ。

パリっとしたシャツに黒のスーツのような服を着こなし、白手袋を着け、右手にステッキ、左手に外で被っていただろう帽子を持っている。

動作は機敏なので足腰が悪いわけではなく、お洒落の一つとしてステッキを持ち歩いているのだろう。

個室まで案内してくれた店員に、私とロイズさんが飲んでいたものと同じお茶を頼み、席に座った。

「本日は、お忙しいところお呼びしてすみません」

「いえ、ユリアお嬢様の御用とあらば、すぐさま馳せ参りましたのに……」

ジロリとロイズさんを軽く睨みつけ、すぐさま私の方に視線を戻す。

「しかし、わざわざ、わたくしを外に呼び出さずとも、本家の方に来ていただければ、大奥様もお喜びになられますのに」

「そうですね。ちょっと内密に話があったので」

「内密の話、ですか？」

「はい……ええと、質問の内容をまとめたいので、少し時間をください」

「ふむ。分かりました」

アギタさんは、私の態度に少し戸惑いつつも、静かに私の様子を伺っている。

ロイズさんは、場を完全に私に任せるつもりなのか、腕組みをして私とアギタさんのやり取りを見守っている。

さて、問題はどうかやって切り出すかだ……別にお祖父様を害するつもりはないが、アギタさんは立場的に言えば、お祖父様寄りだろう。

そうなると下手な質問はできないか？

ただロイズさんが、その辺りのことを考えずにアギタさん呼び出したとは思えない。

うーうー。とりあえず、アギタさんのことを信じて、真正面からぶつかってみるか？

店員さんが持ってきたお茶を、アギタさんが一口飲み、カップをソーサーに戻したところを見計らって口を開いた。

「失礼しました。アギタさん、いくつか教えてもらいたいことがあ

るのです」

「ええ、わたくしめでお答えできることでしたら、何なりとお訊きください」

「お祖父様ですが、リックの件をどう考えているのか、分かりますか？」

「リックお坊ちやまの件と申しますと、若旦那様の養子にすることですね？」

「はい……」

「どう考えているも何も、リックお坊ちやまを本家の跡取りにしようと考えていらっしゃる、ということでしょう？」

さも当たり前のように言われてしまった。何も裏がないのか、知っていて黙っているのかが分からない。

……というか、ここで疑心暗鬼になってもしょうがないな。

「カイト伯父様に子供がないのには何か理由が？」

「……ユリアお嬢様の前では、少々申し上げにくいのですが……」

ん？ 保健体育的な意味で、かな？

「どうすれば子供を授かるか位は知っていますし、それくらいでは困りません。」

そうですね。伯父様と伯母様のどちらに問題があるのでしょうか？」

「失礼いたしました。」

わたくしは、若旦那様、すなわちカイト様のほうに問題があると

……大胆那樣と若旦那様ご本人より伺っております」
「ふむ……」

魔術で、そういうのは治療できないのかな？

先天的なものは難しいけど、幼い頃に病気でとかなら、何とか治せる気がするんだけど。

まあ、今はひとまず置いておこう。

「私のお父様は15歳の頃、軍に入りましたよね？」

「ええ、もう15、いや16年前の話になりますね。つい先日のことのようですが、いやはや、時の流れとは早いものです」

「どうして、お父様が軍に入ったか、その理由は知っていますか？」

「ケイン様が軍に入られた理由ですか？ それでしたら、ご本人に直接お聞きすれば早いのでは？」

微妙にはぐらかせようとしている？

ここは押してみるか？

「私が気になっているのは、そのことにお祖父様がどう関わっているかが、知りたいのです」

10歳：「お祖父様の事情（3）」

「ケイン様の軍への入隊と大旦那様の関係ですか？」

アギタさんは、困った質問をされたという感じの雰囲気になる。
ちよつと微妙な反応だな。

「ん〜と、アギタさん」

「なんででしょうか？」

「お父様とお祖父様の不和の原因を知ってますか？」

私が聞いた話だと、お父様が15歳の時に何か仲たがいするよう
なことがあつて、それでお父様は軍に入隊したと聞いているんです
が、本当ですか？」

「……………」

ここで変に駆け引きをしても通じなさそうだし、ならば正面突破
しかないだろう。

せつかく時間をもらつて質問をまとめたんだけど……意味がなか
ったな。そういうえば、こういう目上の人との対人スキルって低いん
だ、私。

ただ奇襲は上手くいったのかアギタさんの表情がちよつと変わつ
た。

「……ユリアお嬢様は何を考えていらっしやるので？」

「今回は、一番がリックの幸せ、二番が家族を大事に、三番目に私らしくです」

「ほ？」

迷いなく言い切る。先日リックと話したときに決めた基準だ。

「って、あれ？ 私おかしなことは言っていないよね？」

その割にはアギタさんとロイズさんの表情が笑いを堪えているよ
うな。

アギタさんは手元のお茶を口に含んで、笑いと一緒に飲み込む。

「いや、笑えばいいじゃん、笑いたいなら……ついでに笑いたくな
った理由も話してくれると嬉しい。」

「いや、失敬しました……それで、二番の家族の中には大旦那様や
若旦那様も入っているのです？」

「む？ 家族の条件か……」。

「血のつながり？ でも、同じ家に住んでいる人たちはもう家族と
言っていると思うし。」

「私にとっては、お母様、お父様、リック、リリア、ロイズさん、
アイラさん、ジル、お祖父様、お祖母様、カイト伯父様、フラン叔
母様……までが家族でしょうか。アギタさんもこれからの対応次第

ですよ？」

こんなところかな？ 指折り数えて11人、賑やかだ。

最後に小首を傾げながら、上目遣いでアギタさんに微笑む。

ふっ、これぞユリア流少女術七奥義の一つ《デモニックテンプレーション小悪魔の誘惑》だぜ

！！

軽い冗談だけだ。

「ほっほっほ……ユリアお嬢様は大家族でいらっしやる」

「ええ、ですから、お父様とお祖父様にはぜひ仲良くして欲しいのです」

「さて……そういうことでしたら、微力ながらお手伝いしたいところですが、わたくしも大したことは知らないのです」

「小さなことでもいいので、教えてください」

「ケイン様が15歳の軍入隊前の話と言いますと……大旦那様が、ケインさまを時期当主として任命しようとしたことがありました」

「え？」

それは、お祖父様がカイト伯父様ではなく、お父様をミムスエにしようとした、と言うことですか？」

「仰るとおりです。ケイン様はその直後に軍に入隊し、バーレンシアの屋敷から軍の寮へと移られました。」

その時、大旦那様とケイン様の間に何があったのか、それはわたくしも存じておりません」

一応、色々と想定はしてたんだけど、なんだろう、この情報は？
時系列順に並べると、

お祖父様はお父様を後継者にしようとした。

お父様はそれを嫌って家を出た。

お祖父様はお父様の入隊をロイズさんに頼んでいる。

となる。

こうパズルのピースは最後のピースが見つかって、全部揃ったんだけど、実は別のパズルのピースが混じってるような。

う〜ん？

10歳：「お祖父様の事情（4）」

「ユリアお嬢様、もうご質問はよろしいですかね？」

「あ、はいっ！」

しまった、考えに没頭してアギタさんのことを放置していた。気を悪くしていないようだけど、わざわざこっちの都合で呼び出したのに申し訳ない。

質問はもうないかな。聞いて置きたいことは聞いたし……ん、あれ？

「……それじゃあ、最後に一つだけ」

「なんででしょうか？」

「ええと、どうして、私の質問に答えてくれたのですか？」

アギタさんは知らない、答えられないと黙秘することもできた。

もちろん、アギタさんの答えが全て真実だとも、知っていることをすべて語ってくれたとも限らない。

ただ今の私からすれば、信じられるだろう情報 謎は深まったけど をくれたのも確かだ。

「ほ？ 答えなかった方がよろしかったので？」

「いえ、答えてもらったのはありがたいがたく思っています。」

けどアギタさんは、勝手にお祖父様のことを語っても良かったのですか？」

「ふむ……」

アギタさんが軽く顎に手を添える。

その仕草が様になるな。数瞬悩み、おもむろに手を外すと私の目を見つめて、口を開いた。

「確かに主従関係において、勝手に主のことを話すのは不敬だという輩もおりますでしょう。」

けれど、わたくし一人人としての判断で、ユリアお嬢様には話した方が良くと愚考いたしました。

ちなみに今日の会談については大旦那様にご報告させていただきましたので、ご了承ください」

「そうですね……口止めをしても意味がないし、する意味もないでしょうし」

それこそ「死人に口なし」とでもやらない限り、完全な口止めなんてできるわけじゃない。

いや、魔術がある以上、この世界で完璧な口止めはかなり難しいだろう。

一応、アギタさんから、お祖父様に私の話が伝わることは覚悟していた。

別に悪いことをしているわけではないが、お祖父様のことを勝手に調べ回っているのは事実だ。

むしろ、アギタさんはわざわざ報告すると言ってくれたことを感謝するべきか。

本来なら、わざわざ私に言う必要もない。

「さて、わたくしはそろそろお暇いたします。

それではユリアお嬢様、頑張ってくださいませ。コースレイト殿、この借りはいずれ返してもらおうぞ」

「へいへい、借りを返せる時まで、じいさんもせいぜい長生きしてくれ」

「ありがとうございました」

いかにも老紳士っぽい仕草で一礼をすると、個室から悠然と退出していった。

ロイズさんは軽く手を振り、私は席を立って深々とお辞儀をしつつ見送る。

「はあ〜……緊張した」

扉が閉まって、しばらくして私は深く息を吐きながら、椅子に座り込む。

そして、すっかり冷めてしまったお茶を飲み、残っていたビスケットを1個かじって気分を落ち着ける。

というか、また応援されてしまったような気がするんだけど。

皆、私に何を期待してるんだろうか。
いや、問題の解決を期待してるっばいけど、と自分で自分につっこむ。

「お疲れ様。で、どうだった？」

「問題の答えを聞くこうとして、余計複雑になった感じですよ。」

アギタさんを疑うわけじゃなくて……、ロイズさんはアギタさんの話はどう思いました？」

「素直に考えれば、旦那様がガースェ・バーレンシアを継ぐのを嫌がって、軍に入隊したってことになるだろうな」

「なんででしょう？」

「さあて、面倒な貴族暮らしに嫌気が差したとか？」

ロイズさんが手を広げて降参のポーズを取る。

さて、どうしたもんかなあ。

10歳：「見守られているというのと(1)」

「お嬢様、さっきの言葉は横で聞いててちょっとジーンときたぞ」
「へ？」

さっきの言葉？
私なんか言っただけ？

「俺とアイラも家族なんだって？」
「あー？ あ〜ッ！？」
いや、それはその勢いというか、ね？ あるじゃないですか、そういうのがっ！」
「なんかこころが温かくなるというか……」

ふ、ふふふ……一部の体温が上昇しているっぽい。
ああ、これなら、鏡を見なくてもわかるな。今、私の顔が真っ赤
になっているだろう。

「……くくっ」

紅潮している私を見ておかしそうに喉の奥で笑う。
私がそういうのに弱いと知ってて、わざと言ったな。

「ええ、アイラさんもロイズさんもジルだって、大事な私の家族ですから！」

「それはそれは、光栄の至り……ところで、俺からも一個訊きたいんだが」

「何ですかっ？」

少し口調が荒くなってしまつのは仕方ないだろう。
照れ隠しつてやつだ。

「どうも、旦那様や俺に隠れて危ないことをしてるんじゃないか？」

「……ハンスさんめ、私を売ったかっ!？」

って、あ……言ってから冷静になる。

ロイズさんのしてやつたり顔が悔しいというか悲しいというか。

「なるほど、ハンスも何か関係してるんだな」

「ロイズさんの卑怯者……」

「何を言う、相手を動揺させて隙を作らせるのも立派な戦術だろう？
というか今のは、ただの自爆だと思っただが」

墓穴を掘るって言葉は、こういう時に使うんだっけかな。

さて、これ以上、下手なことはバレないように気を引き締めて…

…

「まあ、ハンスの件はあとで追及するとして……お嬢様、夜中に部屋を抜け出して、何やってるんだ？」

「えー？ 何のことでしょーうかー？」

「アイラが心配していたぞ。」

服や部屋の汚れとかで気づいたらしいが……ちなみに旦那様やマリナ様には、知らせてない」

推理小説で名探偵の話を書く犯罪者って、こういう気分なのではないか？

気を引き締めたばかりなのに、もうくじけちゃいそうだよ。

「夜のお話相手になってくれる友達ができて、決して危ないことをしているわけじゃありません」

「ふむ。真実のようだな」

「……………信じたんですか？」

「お嬢様のことは、小さい頃から知ってるからな」

それは答えになってない気もするけど、その返事がちよっぴり嬉しかったり。

なんだろう、私からするとロイズさんは、少し年上の頼れる兄貴って感じなんだな。

精神年齢的に考えると、そんな関係でも間違えてないか。

「それじゃあ続いてハンスが関わっている話とやらを聞こうか？」

……ちっ、ちっ、ちっの件はどうまで話せば許してもらえるかな？

10歳：「見守られているというのと(2)」

「つまりは、まとめると……。

1つ、スリ少年の姉の目を治す約束をしている。

2つ、そのスリ少年の話を聞いて孤児院の悪事を知り、それをハンスたちに任せた。

3つ、スリ少年の新しい仕事場として、露店のおやじさんと新しい料理の店を出そうとしている」

「露店のやり方とかについては、まだ少し検討中ですけど」

結局、ずるずると一連の流れを全部聞き出される羽目になりました。

「とりあえず、危険そうなことはハンスたちに任せざるみたいだし、細かいことはお嬢様の意思を尊重してとやかくは言わんが……」

「な、なんでしよう?」

「つくづくお嬢さまの周りには騒動が絶えなくて飽きないな、と思つてな」

「楽しんでいただけているなら幸い、です?」

ロイズさんが、生暖かい目で私を見ているような気がするが、気のせいだということにしよう。

「俺からはいくつか質問と助言がある。

とりあえず、目の治療はどうするつもりだ？ なんなら魔術師の代役は俺がやるうか？」

「いえ、近いうちに私が魔術を使えることを話して、直接治療します」

「……大丈夫なのか？」

「恩を仇で返すような子たちではなさそうなので……ただ、できればロイズさんにも立ち会ってもらえると嬉しいです」

「了解」

フェルに私の正体をばらしたから度胸がついたのだろうか。

それとも、私の見通しが甘いだけなのか。

出会ったばかりだけど、あの2人を見捨てることはもうできないし、こうなればとことん付き合うつもりだ。

「それと、料理の方の話だけど……バーレンシア家の名前を使っても、軽食組合の方に話を通しておいた方がいいと思うぞ」

「そうなんですか？」

「あえて言うが、お嬢様の料理は“金のキノコが生える丸太”みたいなもんだぞ？」

「????？」

「分かってないみたいだから、例えばの話で言うが、もし新しいメニューが流行ったとしよう。

そうしたら必ず他の店も真似してくるよな？」

「そうですね。そうしたら、店ごとに色々なアレンジがされて楽しいかもしません」

「……はあ」

あれ？ 溜め息を吐かれちゃった？

「真似ってという言葉が綺麗すぎたか。早い話、レシピを盗まれるんだぞ？」

それだけじゃない、もし、盗んだ相手がうちのオリジナル料理を真似するなと言いがかりをつけてきたらどうする？」

「ええつと……でも、こっちの店が先に作った料理ですよね？」

「でも、それを証明するのは難しいんだよ。証拠がないからな」

その場合はお客さんに証言してもらえば……とは思ったけど、きつと向こうも偽者のお客とかを用意してくるか。

そうなるとお互いに「相手が嘘つきだ」と言い合いの水掛け論だな。

「じゃあ、どうすれば……」

「そこでバーレンシア家の名前を使って、組合に保証させるんだよ。お嬢様がレシピを教えた店がその料理の元祖ですって」

「へえ……そんなことトルバさんは言ってたけど……」

「そりゃそうだ。組合の保証もタダじゃないからな」

「え？ お金がかかるんですか？」

簡単に言えば、商標登録や特許みたいなもんか？

確か両方ともなんだかねで登録料みたいな費用がかかるんだよな。

「ああ、保証させるには組合の幹部に審査してもらわないといけないからな。その審査料というか手間賃として、いくらか請求されるぞ。

ただその審査料は、組合の幹部の気分次第だったりするからな。最悪審査料だけとられて保証はできない、とこねられる可能性だってある。

そこで、バーレンシア家の名前を使うわけだ……そうすれば、向こうも無碍にはできず、公正な審査と保証をしてくれる」

「あゝ、つまりはお金と権力……」

世知辛いねえ、まったく。

しかし、レシピの保証か……ん？ んんんん？？？
なんだろう、何かちょっと思い当たることが……。

「あつ！ フラチャイド！」

……だっけ？

10歳……見守られているというのと(3)「

「うう、微妙に違うような、フランチヤイルド？

えーと……フライチャンズ、なんか離れた」

ああー、喉元まで出掛かっているんだけど言葉が出てこない。
くしゃみが出そうで出ないみたいにつきりしない。

「ふらちや……なんだ？」

「いや、私もよく思い出せないのですが、確かチェーン展開なんです」

「ちえんてんかい？」

前世のコンビニとかファーストフードなどで使われていた古典的
経営手段の一つだったはず。

こんなことなら、前世の大学の講義で一般教養の経営学もきちんと
受講しておくべきだった。

人生何が役に立つかわからないよな、ほんと。

「簡単に言つと、あるお店があつたとして、そのお店と同じ商売を
する権利を別の人に貸すんです」

「つまり、弟子の1人立ちさせるみたいなものか？」

「似ているようで、ちょっと違うかもしれせん。」

権利を借りている方は売り上げに対していくらの割合で、貸している方に報酬を払うんです」

確か、そんな感じの方式だったと思うんだよな。

あとは営業区域を分割するんだっけ？

「それじゃあ、借りている方は損じゃないか？」

「もちろん権利を貸すだけじゃなくて、お店の運営についてのテクニクや新商品ができた時には全店をサポートなんかもします。

えーと、本店と支店みたいな関係でしょうか？ だけど、各店舗は店長が責任を持って運営して、売り上げが上がっただけ店長の報酬も増えるんです。

あとは、同じ名前の看板をつけることで、全店のブランドイメージを持たせます」

「ん〜？ いまいちパツと分からないな」

「ええ、私の方もちょっと整理する時間が必要っばいです」

説明している私の方もいっばいっばいだからな……。

「お嬢様、簡単に言うと新しい商売の形なのか？」

「そうですね……まだこの世界には馴染みのない方法だと思います」

「そうになると、組合レベルじゃなくて商人連盟に直接話をする必要も出てくるかもしれないな。

となれば、これ以上の話は旦那様も交えた方がいい」

「はい、そうします」

まず、トルバさんにも話を通さないとな。
ちよっと新作メニューの開始をつまぐ調整しないとまずいか。

しかし、話が大きくなってきたな。まあ、やれるところまでやってみよう。

「さて、長居をするのもあれだな……そろそろ屋敷に帰るか？」

「はい……それと、一度家に帰って着替えたら、行きたい場所があるんですが」

うん、心は決まった。

こづいつのは勢いがあるうちにやっつけてしまおう。

「行きたい場所？」

「ええ、居住自由区へ……目の見えない少女を救いに」

ペルナちゃんとペートに、私が魔術を使えることを告白する。

そして、そのままペルナちゃんの目を治そう。

私は確かにこの世界で魔術というすごい力を手に入れた。

けど、私1人でできることなんて、本当にちっぽけなことだけで。

私には見守ってくれている人、受け止めてくれる人たちがいたか

ら。

ペートを頑張らせているんだ、それを約束させた私もちょっとは格好付けないとな。

ペルナ：「光の消えた世界で（１）」

朝起きて目の前が真っ暗だった時は、まだ夜なのかと思った。

そして、ペート君の反応で、自分の目が完全に見えなくなったことに気づいた。

ああ、ついに来たな……そんな感想を抱いた。

わたしの目が見えなくなったことを知り、不機嫌になる職員。

嘘を吐くな、とわたしの腕をねじりあげる別の職員。

痛みに悲鳴をあげなら、本当です、と言い続けるわたし。

わたしを守ろうとして、職員にぶつかって、殴り飛ばされるペート君。

そのペート君を守るため、ごめんなさいと何度も何度も必死に謝るわたし。

そして、目が見えなくなったことが演技ではないと気づき、舌打ちをして、わたしを突き離す職員。

目が見えなくて怖いという気持ちはない。

目が見えなくなって困ったのは、色が分からなくなったこと。

不思議なことに歩くことに問題はなかった。

なぜなら、自分のすぐ近くには何かが在るということとはちゃんと分かったから。

お母さんが亡くなった頃からだろうか、わたしが耳を澄ますと、何を言っているのか分からないくらい小さい声が聞こえるようになっていた。

それから、階段だったり、壁だったり、椅子だったり、壺だったり……身の回りにある様々ものがそこにあることを感じ取れるようになっていた。

ただ、中にはフォークやナイフなど位置の感じ取れないものもあった。

職員たちが去り、泣きじゃくるペート君を慰めながら、これからのことに考えを巡らせる。

そんな中、今すぐにも逃げ出したい焦りのようなジリジリとした気持ちが胸の中に渦巻いている。

ここにいては危険だと、確信に近い直感。

わたしは孤児院からの脱走を決意した。

事前に、ペート君に脱走について噛み砕いてゆっくり言い聞かせる。

目が見えなくなった翌日の夜……わたしとペート君は、孤児院から逃げ出した。

夜の闇はわたしの味方で、何も怖くはなかった。

本当に怖いのは、脱走がバレて、職員に見つかってしまうこと。

怖がるペート君の右手を握り、夜の街を歩き続けた。

幸運なことに、脱走は無事成功した。

夜明けの前に誰も住んでいない家を見つけ、わたしたちの新しい家になった。

今が寒い冬ではなかったことも幸運だった。

気温が暖かく、服一枚でも困らない。

こっそり隠し持っていたお母さんが残してくれたお金を使って、日々を食いつないでいた。

最初のうちはそれでも何とかだった。けれど、お金は勝手には増えず、減っていくだけ。

早いうちにお金を手に入れる手段を探す必要があった。

そして、取れる手段はペート君が働くということ……情けない、わたしはお姉ちゃんなのに……。

わたしはペート君なしには生きていけないんだ……目が見えないということとは、そういうこと。

わたしは悪い子です。

ペート君は、わたしを見捨てたりはしないということを知っていました。

わたしはズルイ子です。

孤児院が危険ならば、一緒に逃げずに、ペート君だけを逃がせばよかったのです。

そうすれば、役立たずなわたしを気にすることなくペート君は生きていきました。

お母さんの残してくれたお金だって、2人で使うより、全部ペート君に渡してペート君だけを逃がせば良かったのに。

わたしは目が見えなくなることは怖くなかった。ただ、1人になるのが怖かった。

あのまま孤児院にいたら、ペート君と離れ離れになる気がして、それがきつと焦りの正体だと思う。

お母さんの残してくれたお金が、少しずつ無くなっていく。

ペート君が不安定な気持ちを口にする。だいじょうぶ、と優しく慰める。

ペート君の仕事が見つからないと悩む。明日またがんばろう、と明るく励ます。

ペート君を心配させないよう、心に蓋をして優しく明るい姉ちゃんだと、自分に言い聞かせる。

ある日、ペート君が仕事が見つかってお金が手に入ったと言った。

どんな仕事を？ わたしは、そうペート君を問い詰めることができなかった。

そして、その翌日……わたしたち姉弟の人生を変える人と出会った。

ペルナ：「光の消えた世界で（２）」

ケインさんは、なんていうか、すごい人でした。

ケインさんの喋り方はとても柔らかくて、きつと良い家の生まれなんだと思います。

けれど、わたしたちが両親のいない孤児だと知って、さらりと謝ってきてくれました。

本当に悪いことを訊いてしまったとっていて、謝ることが普通のことだと考えている謝り方でした。

それは、とてもすごいことです。

わたしが知っている生まれが良いとされる人たちは、わたしたちのことをまるで野良犬のように扱います。犬ではありません、野良犬です。

ケインさんからは、わたしたちを普通の人として見てくれていることが伝わってきます。

ペート君の仕事について尋ねたのですが、うまく誤魔化されてしまいました。

次になぜかペート君が買ってくれたお土産の話になり、ケインさんが変に動揺していました、どうしてでしょう？

その後、ペート君が帰ってきて、大事な話があると2人で部屋から出て行ってしまいました。

1 人部屋に残ったわたしはケインさんのことを考えます。

部屋の出入り口での会話、気がつけば、ケインさんを部屋に招き入れていました。

普通、知らない人はもつと警戒するべきです。

けれど、ケインさんに対しては、そのような気持ちが一切湧きませんでした。

一目惚れというやつでしょうか？

いえ、見えてないのでから、一聞き惚れ？

ん〜……しつくりきません。ちょっとなにか違います。

好きとか嫌いとかじゃないのです。

あえていうなら “安心感” でしょうか？

そこにいて当たり前で、この人はわたしたちを害することはないという、そんな気分にさせてくれる人です。

ケインさんが、わたしを騙そうとする詐欺師なら、わたしはすっかり騙されてしまったことになります。

けど、それでもいいかなという思いもするのです。

不思議な気持ちです。

しばらくして、ケインさんはペート君とグイルさんを連れて戻ってきました。

グイルさんが買ってきてくれた クエシヤの実 を飲みながら、ケインさんと色々なお喋りをします。

戻ってきたペート君は妙にケインさんになつていました。

その2人の様子を聞いていて、なんだか、ちょっとムツとしてしまったのは内緒です。

なぜなら、ペート君とケインさんのどっちにムツとしたのが、わたしもよくわからなかったからです。

その翌日、ペート君が、わたしに新しい服を買ってきてくれました。

嬉しそうにするペート君に伝えるべく、早速その服を着ていて、ペート君にお礼を言います。

わたしが喜ぶことで、ペート君が喜んでくれます。だから、しっかり喜びます。

と、そこにケインさんがやってきてくれました。

さらりと服のことを褒めてくれましたが、嬉しいと言う気持ちよ、なんだか恥ずかしい気持ち先に来てしまいました。

ケインさんは、きつと、もっと綺麗な服を着て可愛らしい格好の女の子をもっと知っているはずですよ。

それなのに、わたしを見て当然のように褒めてくれることが、申

し訳ないというか、いえ、嬉しいことは嬉しいのです。自分の気持ちがあまくまとまりません。

その上、ケインさんは、わたしに香水をプレゼントしてくれました。

以前、わたしが小さくお母さんがまだ元気だった頃、お母さんはお父さんと会う時にだけ香水を使っていました。

なんだかそれが大人の女性という感じがして、すごく憧れていたのを思い出します。

色々緊張して、ケインさんに何度もお礼を言っていました。

……けど、香水をくれたのは、もしかして、遠まわしに変な匂いがすると言われたのでしょうか？

ペート君には悪いけど、今日から、できるだけ身体を水で綺麗に洗いたいと思います。

ペルナ：「光の消えた世界で（3）」

香水をもらった日から数日後。

ペート君は最近、軽食の屋台で働いているようです。

最近よくいい匂いをさせて、お土産をもらって帰ってきます。

ひさしぶりにわたしたちの部屋にケインさんが来てくれました。

ちようど遅めの昼食としてペート君がもらってきた屋台の残り物を食べ終わったところでした。

ケインさんは、グイルさんではなく、ロイズさんという人を連れていました。

そのロイズさんが、部屋に入ったとたん、わたしはゾクリと寒気がしました。

ケインさんと初めて会った時は逆で、ロイズさんは、なんだか怖い、というのが最初の印象です。

「ケイン、その人が魔術師か!？」

軽く挨拶が終わり、ペート君がケインさんに向かって興奮気味に質問をしています。

魔術師？ ロイズさんが魔術師なのでしょうか？ だとしたら、

寒気の原因はそれでしょうか。

けど、その考えは、ケインさんの次の言葉で否定されました。

「うん、この人はただの立会人かな。」

ペートに「つ謝らないといけないことがあるんだ」

「どついうことだよ？　いまさら、約束はなかったことにしろとか言う気か！？」

約束？　ペート君が悲しそうな声を上げます。

「えつと、ごめんね……」

「あやまつたつて許せるかよ！　姉ちゃんの目を治してくれるつて言つただろ！」

「ん？　あつ、そうじゃなくて！　その、私が魔術師なんだ……」

「え？　へ……？」

「あの、ケインさん……どついうことですか？」

「うん、ペートとね、約束をしたんだ。ペルナちゃんの目を治す魔術師を紹介するつて」

ケインさんが魔術師で、ペートとわたしの目を治す約束を……？
つまり……。

「本当ですか？　ケインさん、わたしの目は、治るんですか？」

「信じられない？　私もやってみないと分からないけど……任せてくれる？」

「いえ、信じます。ケインさんに任せます」

仮に失敗しても、嘘でもいい。

それはもうケインさんだから……としか言いようがないですよね。

ケインさんの指示に従って、椅子に座って、ぎゅっと目を瞑ります。

わたしの瞼まぶたに、ケインさんがそっと指先を添えました。

「《リザ・ド・コニーラ ダル ラーヤ……》」

ケインさんが、わたしのわからない言葉を歌うように呟きます。多分、魔術の呪文だと思います。お母さんが夜に明かりを作る時に話していた言葉に似ています。

目の奥がじんわりと暖かい熱が生まれます。

「……モア ピアース ペスール」ペルナちゃん、目をゆっくり開けてみて」

「んっ！」

久しぶりの光に目が痛みます。そう、わたしの目が光を映していません。

「大丈夫？ ロイズさん、ちょっと窓の光をさえぎって……落ち着いて、どう？」

わたしのことを心配そうに見つめる澄んだ空のような青い瞳。

薄く銀色がかった金髪が薄暗い部屋の中で輝いている。

あ、この人がケインさんなんだ……初めて見るはずなのに、すんなりと納得してしまいました。

「姉ちゃん、ほんと？ ほんとのほんとに見える？」

「うん、ペート君が泣きそうにしている顔もばっちり見えます」

10歳：「ペルナちゃん秘密（1）」

発動具の腕輪をつけた右手の指先でペルナちゃんの瞼を触れる。

ふう……私は軽く呼吸を整え、“ルーン”を唱える。

「リザ・ド・コニラ癒しの輝きよ、ダルライヤ闇よりモア瞳をヒアースベスール解き放つ」

右手の指先が乳白色に輝き、その光がペルナちゃんの瞼の奥へと吸い込まれていく。

「ペルナちゃん、目をゆつくり開けてみて
「んっ！」

久しぶりの光に目が眩くらんだのか、ペルナちゃんが目を抑える。

「大丈夫？ ロイズさん、ちょっと窓の光をさえぎって……落ち着いて、どう？」

ふらつくペルナちゃんをそっと支えて、ロイズさんに光を弱めるようにお願いする。

ロイズさんがボロボロなカーテンを何とか広げ、窓からの明かりをさえぎると、室内は薄闇に包まれた。

と、ペルナちゃんとしつかりと目があった。どうやら上手くいったようだ。

「姉ちゃん、ほんと？　ほんとのほんとに見える？」

「うん、ペート君が泣きそうにしている顔もばっちり見えます」

今にも涙を流しそうだったペートをペルナちゃんがからかう。

「あの、その……ケイン、ありがとうございます！」

「ありがとうございます、ケインさん。」

このお礼はどうやって返せばいいかわからないけど、絶対に返させてください」

「どういたしまして、そのお礼の代わりに言うては何だけど、約束してもらいたいことがあるんだ」

「なんだよ？　ケインのためなら、何だってするぞ！」

「わたしもです」

2人とも真剣な目で、私に詰め寄るようにして、了解の意を伝えてくる。

そこで初めて、私は2人から強く感謝されていることを実感した。治って良かったという安堵感ともっと早くに治せば良かったという少しの罪悪感が心のうちに湧き上がる。

……まあ、結果よければすべて良し、と考えよう。

そして、今後のために必要なことを2人に示すために口を開いた。

「私が魔術が使えることは秘密にして欲しいんだ」

「なんでだ？」

「簡単に言えば、色々と面倒なことになるからかな？」

「ケインさん、それはケインさんが男の人みたいだな名前でも格好も男の人みたいになっていることも関係してますか？」

オズオズと質問を返してきた。

……あれ？ 私の変装って、もしかして変装になってない？

「ペルナちゃん、その、私が女性だって言うのはいつから気づいた？」

「え？ その最初の中から女の人だと思っていましたけど？」

ケインさんの名前は、男の人っぽい名前だな、と少し気になっていましたけど……」

つまり、ペルナちゃんは、私が女性でケインという名前だと信じていたのか。

そりゃあ、自己紹介でわざわざ自分の性別を「男です」みたいに言うことはないけど。

「へ？ え？ えっ！？ だって、ええっ！？」

ペートが私とペルナちゃんを交互に見比べ、私のほうを指差して驚きの声を上げる。

まあ、そうだよな。

ペートは私の性別に気づいていたら、あんな「姉ちゃんをよろしく」なんてことは言わないだろうし。

しかし、ペルナちゃんも私のことを男性だと思っていると思っていたのに。

目が見えなかったせいか、それとも他に何か才能があるのか？

10歳：「ペルナちゃん秘密(2)」

「ペルナちゃん、ちょっと魔術を使うけど、心を楽にして受け入れてくれる？」

「はい、わかりました」

相手の能力を詳しく探る魔術は、対象が私を信頼してくれていないと【一角獣の加護】によって効果が発生せずに失敗となる。

対象の名称や体格を知るくらいなら大丈夫なのだが、相手の力を強制的に暴こうとすると攻撃の1種として判断されてしまうようだ。

「《イド心テレースを感じる其ドエ・クトの力テラールを知る》」

まず、【魔法適正】、これはエルフの種族的な魔導だな。それから……。

「【精霊の加護】持ちだね……」

「ほう、それはすごいな。何の精霊の加護を受けているんだ？」

「えっと、石精霊と樹精霊ですね」

「はっ？」

「石精霊は地精霊の1種、樹精霊は森精霊の1種ですね」

特定の精霊を除いて、精霊とは同じ種類の精霊に対する分類であり、わかり易く言えば種族のようなものである。

精霊は大体が6体の精霊王の配下であり、精霊王の配下とその他のそれ以外の精霊に分類される。

石精霊や泥精霊は広義の意味では地精霊とされるが、石精霊と本来の地精霊は存在理由の異なる存在だ。

地精霊が地面を司るのに対して、石精霊は石や岩などの塊を司る。そこに優劣はなく、地精霊も石精霊も等しく地の精霊王の配下となる。

同様に森精霊は森林を司るのに対して、樹精霊は樹木そのものを司っており、両方とも森の精霊王の配下となる。

その他に分類されるのが、月精霊や太陽精霊などの、精霊王以外で唯一の存在である精霊たちといえる。

さて、ここからは推測となるが、街の中でもっとも溢れている物資といえば石材と木材だろう。

つまりは、石と樹なのだ。

これがペルナちゃん、目が見えなくて周りのものが見えた理由ではないだろうか？

私の性別がばれた理由にはなっていないから、それはもう天性のものなんだろう。シズネさんの観察力と同じだ。

「いやいやいや！？ それは本当か！？」

ああ、お嬢様が嘘つく必要なかどこにもないのはわかっているが……」

「えっと？ もしかして精霊の名称って、そんなに広まっていないのですか？」

「や、そつちじゃなくて……2種類の精霊から加護を受けてるって？」
「はい」

『グロリスワールド』に登録されている全種類の【精霊の加護】を取得しようとして頑張っていた先輩がいたなあ、就活しなきゃとか言いながらゲームをしてたけど、あの人は無事に就職できたのだろうか……。

こんな風にとりともなくふつと前世の記憶がよみがえると、同時に胸が締め付けられるような気分になる。

最近が起こっていなかっただけに油断していた。

「あゝ、うゝ……もう、お嬢様だからとしか言いようがないな……」

なんか軽くひどいことを言われているような気がする。

「お嬢様、それとペルナちゃん……【精霊の加護】持ちは【小獣の加護】持ちと比べれば、数は多い、それでも1〜2,000人に1人くらいと言われている。普通の人間が精霊と交信できる機会は珍しいからな。」

けどな。2種類の加護をもっているとなると、【精霊の加護】持ちの中でも4〜500人に1人、一説によれば、精霊同士の影響力が関係しているらしいが詳しいことはよくわかってない。

確かラシク王国の人口3,500万人の中で確認されている2種類の加護持ちは、50人もいなかったはずだ」

「もしかして、【霊獣の加護】持ちと同じくらい稀少な存在だった

りします?」

「大雑把に言えば同じくらい珍しいな。もつとも【精霊の加護】持ち自体が珍しいわけじゃないから、騒がれにくいけど……」

「え、えつとえつと……どういうこと、ですか?」

ペルナちゃんが自分のことを言われているのにもかかわらず、ロイズさんの慌てっぷりがピンときてない様子だ。私も同じだから、気持ちはよくわかる。

ペートの方も、私が女性だと知ったあたりから、話の展開についてこれていないようだ。

「ロイズさん、つまり、どういうことですか?」

「……端的に言えば、こうなったも何かの縁だ。この2人はバーレンシア家で保護した方がいい」

10歳：「ペルナちゃん秘密(3)」

「さて、大まかな話はロイズさんから聞きました。えーと、お姉ちゃんもペルナちゃん、弟君がペート君で良かったかな？」

「はい」「お、おう」

お父様を前に2人とも緊張した面持ちだ。

ペルナちゃんの目を治療したあと、ほとんど有無を言わせない状態のまま、2人を屋敷まで同行してもらい……一言の合意がなければ、ほとんど拉致に近い形で。

ひとまず入浴させ、ペルナちゃんは私が、ペートはロイズさんが入れた、服を浄化の魔術で綺麗にし、着替えたところで、お父様が帰宅した。

先にロイズさんがお父様に事情を説明に行き、その間私と2人は応接室でアイラさんが入れてくれたお茶を飲みながら待機。

私が少女用の服に着替えて、改めて自己紹介をしたことで、ペートもやっと私が女性であることを認めたようだ。

誰も、変態みてえとか言われたので軽く脅したりなんかはしていませんよ？

最近自分が男でいたいのか、女になりたいのかがあやふやで困

る。

正直なところ、男としての心を意識するあまり、身体が女であることを否定できないという、自分でもよくわからない状態だ。

そんな私の内面的な葛藤は横に置いておくとして、ちょうど1杯目のお茶が飲み終わったタイミングで、3人揃ってお父様の書斎に呼ばれた。

そして今、部屋の中には、お父様、ロイズさん、ペルナちゃん、ペート、私の5人がいる。

「2人が望むなら、僕が君達の後見人になるし、この屋敷に部屋も用意しよう」

その言葉にペルナちゃんとペートが、それぞれの視線を私に向ける。視線の主な内訳は、戸惑いと興奮と不安が5対3対2つとこるだろうか。

少し助け舟を出そう。

「お父様、急な話で2人とも驚いていると思います。そもそも今日は一度に色々ありましたから。

ひとまず、しばらくうちに滞在してもらって、後見とか今後の話は追々決めていく感じでどうでしょう？」

「ふむ、ユリアがそう言うならそうしようか。2人ともそれでいいかな？」

「は、はい！ありがとうございます」「あ、ありがとうございます」

お父様の提案に頭を深く下げて、お礼を言う。
そのあと軽く私のほうに見てきたので微笑みを返す。

「ところで、マリナやリックとリリアに2人は紹介したのかい？」
「えっと、一応簡単に自己紹介だけは、詳しい話はしていません」

とりあえず、お父様に事情を話すのが先だと思ったからな。

リリアやジルがすぐくこっちの方を気にしていたけど、あえて無視した。

「それなら、ロイズさん2人を居間に連れて行って、簡単に紹介とこれから滞在することを、皆に説明してきてくれますか？」

「ああ、わかった」

「ユリアは残りなさい、少し話したいことがある」

「はい」

ん？

別に怒っている雰囲気じゃないけど、なんだろう？

ロイズさんが2人を連れて出て行き、ワンテンポをおいてお父様が口を開いた。

「まあ、ユリアのことは信頼しているし、危険なことと悪いことさ

え、しなければいいと思っている」

放任主義と言う言葉があるけど、お父様の私に対する扱いは、それに近い。

私は肉体こそ子供のものだが精神が成熟した大人であると認められている。

簡単に言うなら、1人の成人として見られている。

それもこれも、私が前世の記憶があるということを感じてもらえたからだ。

確かにそれを証明するために、農具の改良なんかもやったけどな。

「はい。とても嬉しいです」

何度が言ったことだが、改めて感謝の気持ちを伝える。

この人の子供として生まれたことを幸せだと思っている。

10歳：「お父様の本音（1）」

「なるほど、ふらちやるど?」

「フランチャイルドです。ひとまずは、多店たてんどうひん同品販売方式と命名しようと思っています」

言い切ったはいいけど、多分間違えているんだよな。結局正しい名称は思い出せなかった。

そのうち思い出すかもしれないけど、喉の奥に何かがつかえてい
るようなむずがゆさが残る。

まあ、思い出せたとしても、こっちの世界では聞きなれない言葉
だから、わかりやすいネーミングにつけた方が話が早いけど。

「料理の下ごしらえを一ヶ所でやって、それを必要に応じて各支店
に配る。各支店は、それぞれ本店と契約している料理人が店主とな
り、各店の売り上げの何割かを本店に収め、残りがそのまま店主の
収入になる。」

また各支店ごとに一定のエリアを任せることにして、同じ区画内
には同じ料理を出す店を建てさせない……か。

面白いと言うか、これは王国が領主に領地を任せて管理する形を
真似たのかい?」

「いえ、私の前世において古くからある商売の方法です。それに王
国がそのような形とっているのは、それが組織の運営に当たって効
率的だからです」

「なるほど。言われてみれば、その通りだね」

「今でも複数の店を経営する商会では似たような形になっていると思いますが、この方式の場合、最初から支店を持つことを前提に組織の運営をします」

お父様の話というのは、昼間にロイズさんと話していた、バーレンシアの名前を借りて商売をすることについてだった。

ペルナちゃんとペートの話のほかに、ロイズさんが先に簡単な説明をしてくれたらしい。

「それと、この話を商人連盟に持っていく際にバーレンシアの名前を使いたいのですが、大丈夫でしょうか？」

「んー、構わない」

少しだけ考えるそぶりをして、その話に軽く了承する返事をするお父様。

「ただ、その商売の方法は画期的であるがゆえに、色々と問題が起ころうかもしれないね」

「ですから、できるだけ事前に計画をきっちり固めておこうかと」
「ああ、逆の考え方をした方がいい。」

仕事をする上で、事前にできる限りのことを決めて準備するのも重要だけど、計画にはある程度余裕を持たせておいて、いざと言ったときに柔軟に対応した方が結果として上手くいくよ」

むう、ほんとにもう、お父様には敵わないと思う。ロイズさんは別の意味で。

正直、前世を含めてアルバイト以上の社会経験がない私にとって、仕事に対する認識が少し甘いのかもしれない。

精神的には同じ年なんだけど、今回みたいな話になるとお父様が仕事ができる大人なのだと思います。普段は、ただの親バカなんだけどなあ。

「わかりました、きちんと余裕は持たせるようにします」

「それと商談についてだけど、ロイズさんに僕の代理人として委任させるから、上手くやりなさい」

「はい、ありがとうございます」

ん……？

何か言いたそうにしているけど、話は終わりじゃないのか？

「あの、お父様、話はまだあるのですか？」

「ロイズさんからね。もう一つ聞いてるんだ……ユリアが、昔の話を知りたがっていると」

「え、ええとそれは……」

私が奇襲を受けてどうするんだ！？

そういうことなら前もって教えといてよ、ロイズさんめ！！

私とお父様の間に、若干気まずい空気が流れる。腫れ物に触るよ
うなと言っか。

「ふう……それで、何が聞きたいのかな？」

止まっていた空気を動かすため。お父様の方から口火を切った。その顔は、いつもの柔らかなものでなく、先日のバーレンシア本家からの帰宅の際に見せたような、少し困ったような顔つきだった。

「まず、お父様はお祖母様と血が繋がっていないと言うことを、いつ知ったのですか？」

「今のユリアと同じくらい頃に、何となくかな。貴族同士の交流の中には、親子連れでというのものもあるからね。」

子供だと思って、あれこれと言って聞かせる訳さ。

特に醜聞しゅうぶん染みた話は、本気で隠そうとしない限り人の口を介して勝手に広がるものだから」

と、言うことは……成人する前に自分の産みの親と育ての親について、知っていた、ということか。

となると、どうしてお父様は家を飛び出たんだろうか？ やっぱ家を継ぎたくないから？

「お父様は、どうして軍に入ったんですか？」

10歳：「お父様の本音（2）」

「簡単に言えば、家出……かな」

「家出？」

ああ、とお父様が照れ恥ずかしそうに苦笑しながら頷いた。
なんていうか、イケメンってどんな表情をしてもイケメンなんだ
よな、動作がいちいち様になるし、と場違いな感想が思い浮かぶ。

「それはお祖父様との喧嘩が理由ですか？」

「あゝ、ユリアはどこまで知っているのかな？」

「う……お祖父様にガースエを譲られそうになって家を出たと言う
ことまで聞いています」

「そうだね……。ああ、立ったままだと疲れるだろう、ここに座り
なさい」

そう言って、書斎の隅にあつた椅子を、執務用の机の横に置く。

これは、長い話になる、と言うことだろうか？

「まず、僕と父さんが喧嘩したというなら、違っただろうね」

「それじゃあ、なんで家出を？」

「そもそもだけど、喧嘩って言うのは一人じゃできないんだ。

喧嘩をするには相手が必要だよな？」

「はい」

独り喧嘩、という言葉はあまり聞いたことがない。

人が争うとしたら、2つ以上の異なる立場が必要だ。

喧嘩ならば、少なくとも対立し合う2人が必要になる。

「僕が父さんにガースエを継ぐように言われた時、その場ですぐに断ったんだ」

「どうしてですか？」

「兄さんは昔から真面目で勉強も僕よりずっとできる人でね。自慢の兄なんだよ。」

だから、家は兄さんが継いで、僕はその補佐をする。幼い頃からずっとそう思っていた。

そのために色々兄さんに負けないよう勉強をしたり、ロイズさんに頼んで護衛用の剣術を教わったりしてね」

なんていうか、兄弟の仲がいいのは喜ばしいことだ。

私もすっかり家族愛に目覚めているな。

「けど、父さんは僕の成人を前に、いきなり僕にガースエを譲ると言う話をしてきたんだ」

「でも断ったんですよね？」

「僕が断ったところで、父さんは僕にガースエを継がせるという考えを変えなくてね。」

そこで、家を飛び出るようにして軍に入ったんだ。軍に入れば、

最低限見習いでも衣食住は保証されるからね。

それに正式に兵士になって、能力さえあれば十分にお金を得ることもできたからね」

「うん……」

「さっきも言ったように喧嘩と言うのは2人いないとできないんだ。つまり、僕がお祖父様に喧嘩を売ったつもりでも、お祖父様が買ってくれなければ、それは喧嘩じゃなくて、ただ僕が1人で騒いだだけだよ」

お祖父様は、どうも人の話を聞かない頑固ジジイのイメージになりつつある。

「お父様はお祖父様が嫌いなのですか？」

「同じ王国に忠誠を誓った身としては、父さんの仕事振りには尊敬はしているし、嫌いではないよ。」

ただ、ちよつと寂しかった、かな」

「寂しい？」

「ああ……まあ、子供っぽい理由だけだよ。」

父さんは、僕が幼い頃から仕事ばかりで留守がちで、一緒の食事なんて、年に何度もなくてね。たまに一緒にいる時でも、他家への挨拶のついでだったり。

そんな感じでさ。小さい頃の僕は思ったんだ。父さんから見れば僕なんていてもいなくても変わらないのかな？ って。

そんな時に僕のことを慰めてくれる割合は兄さんが3、母さんが1くらいかな。

それもあって将来は兄さんの力になると、意気込んでいたんだよ

ね。結局、軍に入っちゃったら兄さんの補佐どころじゃなくなっちゃったんだけどさ」

けど、

「でもお祖父様は、ロイズさんに頼んで、お父様が軍に入れるよう後押ししてくれた……のですよね？」

「……………え？」

あれ？ 何で驚いてるの？

10歳：「お父様の本音（3）」

「ユリア、今なんて？」

「え、お父様が軍に入ることをロイズさんをお願いした時、お祖父様はお父様のことをよろしく頼むと、ロイズさんに言ったと聞いています、けど」

「それは誰から聞いた話？」

少し真剣な目をして、私に問う。

「ロイズさんから、直接聞いた話ですけど……？」
「……………」

お父様は机の上に肘をつき、組んだ手に軽く顎あごを当てる。
色々な思いが渦巻いているみたいなの悩ましい面持ちで、考え込みながら遠くを見詰めるような眼差し。

「…………た」
「え？」

お父様が、訝しげにボソツと呟く。

「う、ん……その話は初めて聞いた、と言ったんだ」

んん？ だつて？ あれ？

私はロイズさんから聞いた。

けど、お父様は知らない話だった。

ということは、ロイズさんはお父様には話していなかった、むしろ黙っていたということ？

それじゃあ、なんで、私には話してくれたんだ？

「……………」

今、この書齋に満ちている空気を調べたら、困惑成分が大量に検出されるだろう。

う、ん、違うパズルのピースが混じっているという感覚があったけどな。

そもそもどこかで前提が間違えている気がする。

というか、すぐ最近似たような思いをしたような気がするんだけど、なんだっけ。

多分重要なヒントになるはずだ。思い出せー……………思い出せー……………。

「あっ！」

「ユリア、どうしたんだい？」

「ああ、いえ、すみません……ちょっと、喉のつかえが取れたもので」

「のど???.?」

「フランチサイズだ!!」

「いや、今はもう、これは心底どうでもいい。

なんでこのタイミングで……結構悔しい……」

ひとまず、フランチサイズのことは忘れろとして……せっかく思い出したのに。

お父様の疑問だらけの視線も軽く無視する。

「気になったのは、私の変装とペルナちゃんだ。」

「私は変装が上手くいっていると思っていた。」

「けど、ペルナちゃんは、私のことを最初から女の子だと思っていた。」

「2人とも自分の考えが当たり前だと思っていたから口にしなかったし、とくに問題にはならなかった。」

「だから、今日、ペルナちゃんに最初から私の性別を知っていたと言われた時……私は驚いたし、ペルナちゃんは不思議そうな顔をしていた。」

それと同じことなんじゃないだろうか？

「お父様、お話をしましょう！！」

「ユリア？ いったい何の話をするんだい？」

さて、お父様と今後の計画について相談しよう、そうしよう。

10歳：「お祖父様の本音（1）」

カチャリ。

青い染料で野鳥が描かれた美しい白磁器のカップが、私の前に置かれる。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

使用人のお姉さんは、軽くお辞儀をして部屋から出て行った。せつかくなので、カップを取ってお茶をすする。

あ、この間フェルに飲ませてもらったお茶と同じ味がする……むう、やっぱり高いお茶なんだろうな。

高いといえば、この茶器を壊したらいくら弁償しなきゃいけないだろう、って、私が壊しても別に損害請求をされたりはしないか。うむ、まだちょっと他人行儀な部分が抜けないんだろうな。

つらつらと取り留めのないことを考えていると、扉がノックをされ「失礼します」と毅然きぜんとした声と共に、アギタさんが入ってきた。ここはお祖父様、ガースエ・バーレンシアの屋敷だ。

「突然のご訪問、申し訳ありません、お祖父様」

「いや、よく来た。ケインは知っているのか？」

「ええ、お祖父様の家に行くといつて参りましたから」

私は席を立つて、淑女らしい挨拶と、突然訪問した無礼を詫びる。ふふふ、淑女的マナーは完璧だ。

お祖父様は私の向かいに座り、私に座るよう手振りで促す。

席につくと、横でお茶を淹れたアギタさんがお茶が注がれたカップをお祖父様の前に置く。

あ、いまカップをテーブルに置く時に音が一切しなかった、アギタさんすげー……………緊張のあまり、ほんと、どうでもいいことに気が散ってしまう。

「それで話があると聞いたが、いったい何の話をしようというのだ？」

お祖父様は、カップに手を付けずに、いきなり本題を切り出してきた。

「ここはもう一気にいくしかないよな。」

「いくつかありますが、主な目的はお祖父様の真意を確かめに」

「真意？」

「はい、お祖父様が、どうしてリックにガスエ・バーレンシアを継がせたいのか？ そそもリックはまだ5歳にもなりません。確

かに良い子ですが、まだまだ両親と一緒にいたい年頃です」

「それが、将来的にリックのためになるからだ。両親ならばカイト夫妻が代わるだけだろう」

「はい、確かに伯父夫婦ならば、リックを可愛がってくれるかもしれませんが。けど、リックがお父様とお母様の元にいたいのに、無理に引き離そうというなら、私は反対します」

初めてお祖父様の顔に感情の色が浮かんだ。

その感情を一言で言うなら、怪訝かな。私のことは、大人しい孫娘くらいにしか知らなかったのだろう。

少し悲しくなるが、それを变えるためにやってきたのだ。

「反対と言っても、どうするつもりだ」

その口調は疑問ではなく、問い掛けというよりも、確認、断定に近い。

「どうすることもできないだろう」そう言っているのと同じだ。

「成人をしたら、軍に入るよう入れ知恵をします」

「ッ!!」

お祖父様の顔に新しい感情の色が浮かんだ。僅かながらだが、明らかに動揺が見えた。

ここまでは、事前の予定どおり進んでいる。この台詞を言ってもお祖父様の態度が変わらない場合も考えていたが、今の表情を引き

出せたなら成果は上々だ。

「それでもリックを、伯父夫婦の養子にしますか？」

できる限り何事でもないような笑顔を貼り付けて、お祖父様の返答を待つ。

いや、心臓はバクバク言ってるんだけどね。手とか少し汗ばんできている。

もちろん、暑さではなく緊張の汗だ。

「何が言いたい？」

「その質問はどういった意味でしょうか？」

「……昔の話を調べてきたんだろう？　そもそもこの会談はケインの指示か？」

「はい、昔の話を色々聞いてきました。

けど、この会談はあくまで私の考えであり、お父様の指示ではありません」

裏で、お父様が糸を引いてると思われたようだ。これはまあ、想定内の反応だ。

10歳：「お祖父様の本音(2)」

「そもそも、お祖父様は、なぜ伯父様ではなくお父様にガースエを譲ろうとされたのですか？」

「それは……」

会談が始まってから初めて、お祖父様が返事を言いよんだ。

「ケネアお祖母様と、いえ正確にはケネアお祖母様の生家と関係がありますか？」

「……ケネアを知っているのか？ その上で彼女をお祖母様と呼んでくれると？」

「ええ、お父様を産んだ方ですから、私にとっては血のつながったお祖母様になりますよね？」

もちろん、ルヴィナお祖母様のことは、ただお祖母様とだけ呼びますけど」

そういえば、お母様のご両親については会ったことも話を聞いた覚えもない。

王都ではなくて、別のところに住んでいるのだろうか？

「ふう……そんなことまで調べてきた。ならば、想像はついているんじゃないのか？」

深く溜め息を吐いて、お祖父様がどこか挑むような眼差しで私を見る。

そこはすでに孫を見る優しい目ではなく、対等な立場を持つ相手との会談に臨む目。

本人は気づいていないが、椅子の肘掛に置いたお祖父様の手が強く力が入っていることがわかる。

「ガースエを正当な血筋に……ケネアお祖母様の家に戻すため、ですか？」

「その通りだ……」

お祖父様の眼差しが柔らかくなり、両肩から力が抜ける。

シズネさんから教えてもらった情報によれば、お祖父様はケネアお祖母様の生家が途絶えたことにより、地位を継いだ形になる。

「ガースエを継いでしばらくは、慣れない仕事で作業は遅く、人からのやつかみなどで心身ともに消耗しては、さらに仕事が滞る……家に帰らず仕事場に泊り込むこともままあった」

客観的には人の不幸で蜜をなめた形だ。

例えそれが不幸な事故の結果だとしても妬む人はいただろう。

「ケインをこの手に抱いたのは、ケネアが生きている間に両手に満

たない程度しかない。

今思えば、当時もつと辛かったのは、家族を亡くしたばかりのケネアだったのだろう。

出産と同時に、ケネアが死の気配を漂わせるようになった。

私はガースエとしての仕事を傍らに医者や魔術師を片端からあたって、少なくとも礼金を用意しては、ケネアの治療を頼んだ。

いずれも効果はなく、ケネアの死は変えようがなかった。

私がそれに気づいたのは、死ぬ直前にあったケネアに、ありがとうと礼を言われた時だったよ」

「ありがとう、ですか？」

「ああ、新しい家族^{ケイン}を授けてくれて、私を独りぼっちにしないでくれてありがとう、だ。

ろくに家にも帰らず、仕事に明け暮れていた男に対して、独りじやなかったからと……当時、ケネアと一緒にいたのは、まだ言葉も喋れない赤子だけだったのに。

ケネアを失って初めて、私はケネアのことを愛していたことに気づいた」

当時を思い出しているのか。お祖父様は私の方を向いているが、私のことを見ていない。

そして、ポツリポツリと呟くようなお祖父様の懺悔^{ざんげ}は続く。

「……昔、ケインに声をかけたら、泣かれてたことがあった」

声をかけたら？ お父様が泣いた？

「その時、たまたま屋敷を訪れていたルヴィナがケインを抱きしめたら、ぴたりと泣き止んでくれて……ああ、母親を欲していたのだらうと思ったのだ」

それって、つまり、お父様が2歳とかの頃の話じゃ……。

「彼女が私と付き合っていた頃に子供を授かってたという話を聞き、その真偽を確かめるつもりだったのだが、それよりもケインを抱きしめてくれたルヴィナへ、その場でプロポーズをしていたよ。」

もちろん、ケネアのことには愛していた……けれど、私が恋をしたのはルヴィナだった。

そしてそのとき誓ったのだ。ガースエの家をあるべき元に返そうと

フツツと自嘲するかのようにお祖父様が笑い。

「私は、ケインの良い父ではなかった。だが、せめてケネアの血筋にガースエを戻すことだけが願いだっただが、それも叶いそうにない。ガースエを継ぐ家の当主としても良い当主ではなかったということだな」

10歳：「お祖父様の本音(3)」

ドスドスツ、バンツッ！

荒い足音が聞こえたかと思ったら、応接室の扉が勢いよく開け放たれる。

「ケイン……？」

「……お父様……」

部屋に乱入してきたのは、お父様こと、ケイン・ガーロオ・バーレンシアだった。

「声をかけたら泣かれたって、いつの話ですかっ！！」

あ、ツツコムところはそこなんだ。

「……あれはもう30年以上は前の話になるか？」

お祖父様も律儀に指折り数えて返事をする。
いや、そういうことじゃないと思うんだけどな。

「そんな子供の頃の記憶なんて残っていませんよ！」

お父様が至極まっとうな意見を言う。

というか、今になってやっと納得したけど……お父様とお祖父様って、やっぱり血のつながった親子なんだなあ。こう、にじみ出る雰囲気がよく似ている。

二人が並んで言い争い(?)をしているのを見て、私はほんやりとそんな感想を抱いた。

「旦那様、ケイン様……喉がお渴きではないでしょうか？」

そう言ってアギタさんは、蒸留酒のボトルとグラスを2つ取り出した。

ああ、つまりは、これ以上は2人とも素面じゃないほうがいいという判断か……できる執事は違うな。

「いただきますしよう！ 父さんも飲んでください！」

「う、うむ……」

お父様の勢いに押されて、お祖父様がうなづく。

アギタさんは手早く水割りを作って、お父様とお祖父様に手渡す。

「なんだか、変にうじうじしていた過去の僕に乾杯！」
「……………」

呆氣にとられるお祖父様を横目に、お父様が一気にグラスの半分を煽るようにして飲む。

「父さん、話をしましょう」

「……………いったい、何の話をするつもりだ？」

手元のグラスを持って余しながら、お祖父様が目の前で息巻くお父様に問い返す。

「とりあえず、すべてを……………今の僕は、過去の僕を笑い飛ばしてやりたい気持ちなんです。」

「……………父さん、僕も父親になりました」

「ああ……………そうだな」

「けれど、今でも父さんのことはよくわかりません。それでも、わかったことが一つだけあります」

「一つだけわかったこと？」

「父さんがいたから、今の僕がいます。もう泣くだけしかできない子供じゃありません。」

だから 「

呼吸を一拍。

「 30年間分の話をしましょう」

そのお父様の言葉を、お祖父様はゆっくり噛み締め、そっとグラスに入っていた薄い琥珀色の液体で流し込む。

「長い話になるぞ……」

「構いません……今日はきっと僕と父さんにとって最後のチャンスなんです」

10歳：「これで一件落着？（1）」

上質な小麦粉とたっぷりなバターを使ったパウンドケーキがホロホロと口の中で溶けていく。

フェルが用意してくれるお菓子はどれも美味しく、最近のちょっとした楽しみだ。

あれ……もしかして私って餌付けされてる？ ジルと一緒に？

「お茶のお代わりはあるかい？」

「うん、もちろ」

驚愕の真実に気づいてしまい、内心は大荒れながらも、フェルの言葉に返事をする。

……まあ、いつか、美味しいものは正義。

結論から言えば、リックの養子縁組の話は撤回されることになった。

少なくともリックが自分独りで物事の判断をできるようになるまでは、今回のようなことは起きないと思う。

あの日、翌朝まで語り明かしたお祖父様とお父様は、お互いにほんの少しだけ歩み寄れたようだ。

それから、理由がもう一つある。

伯父様夫婦に子供ができた。

伯母様が大人しかったのも、妊娠による体調不良とそのことを隠していたことへの不安もあったようだ。

もちろん相手は伯父様である。不倫を疑われても仕方のない状況かもしれないが、本人もバツチリ心当たりがあると言っているらしい。

そもそも、伯父様は子供が作れないと言っていたが、伯母様と口裏を合わせて子供を作ろうとしていなかったらしい。お父様の愚痴聞いている中で教えてくれた。

理由はお父様がガースエを継がず、自分が継いでしまったことに伯父様は後ろめたさを感じていたのだとか。

結局のところ、お父様、お祖父様、伯父様、それぞれの感情が絡まった糸玉のようになっていたということだ。

糸玉をほどくにはどこかで断ち切るか、ゆっくりと時間をかけるのが一番だろう。

正直なところ、きちんと当事者全員が話し合っていれば、今回みたいなことは起こりえなかったかもしれない。

「まあ、ともあれ、お家騒動の解決お疲れ様」

「どづいたしまして……」

フェルには、以前に色々と相談にのってもらったため、詳細をぼかしつつも結果の報告をした。

あんまり興味はなさそうだと思ったが、結構、真剣に聞いてくれていた。

フェルのいいところは、なんでもない話でも、きちんと人の目を見て話を聞くことだろうな。

「問題は解決したのに、どこか浮かない顔をしているな？」

「うん、まあ、なんだろう……ちよつと違和感がね」

「違和感？」

「色々と情報を聞いて集めたけど、結局本人に直接話して、そうしたらその結果が上手くいったわけで……うん」

確かに、今回の問題の解決に当たって、私はそれなりに活躍をしたと思う。

けど、解決されてみると、別に私でなくても良かったような気がするわけ……。

「頑張った実感が湧かない、とか？」

「なの、かな？」

「少なくとも、ボクはユーリが頑張っているのは知っているぞ」

「うん、ありがとう」

むう、十歳児フェルに心配されるようでは、いけないと思うのだが。

「なんていうか、私はたまたまそこにいただけって気がするんですけどね」

「ふむ……舞台に例えるなら、袖の裏でユーリにその役割を割り振った脚本家がいる、みたいなの？」

「ああ、うん、すっごくそんな感じ」

そもそも今回の件は、まず、シズネさんに発破をかけられたのが切っ掛けで……ロイズさんに相談して、アギタさんから話を聞いて……。

で、ロイズさんがお父様に話をしたせいで、いきなりお父様と直接対決をして、その結果、お祖父様との会話不足に気づいて……。

お祖父様のところに直接乗り込むと、お祖父様はお祖父様で予想していた以上に口下手だということが発覚して、事件は解決、めでたいな。

……黒幕はシズネさんとロイズさん？

10歳：「これで一件落着？」(2)「

「ふう……」

小さく息をはいて、
外していたら、赤っ恥だよなあ。

推理小説の探偵は、いつもこんな気持ちなんだろうか……。

フェルとのいつもの会談が終わった翌日の昼。

私は一人で再びバーレンシアの本家を訪ねていた。

お祖父様は帰宅していなかったが、目的はお祖父様ではない。

「今回の件……私に情報が集まるように裏で動いていたのは、お祖母様、ですね？」

「あああら、どうしてわかったのかしら？」

あっさりと犯行を認める真犯人。いや、犯行でもなんでもないんだけど……。

「多分ですが、シズネさんとロイズさんも協力者ですね？」

「ええその通り。ユリアちゃんは賢いわねえ」

推理というか、私の思いつきに近い推測なんだけど、当たっていたようだ。

「気付いたきつかけはアギタさんです。」

軽食屋で会って、お祖父様の情報を話してくれた時に、最後にアギタさんは、その時のことをお祖父様に話すと言っていました。

けど、この間お祖父様に会った時、お祖父様は私とアギタさんの会談を知らない様子でした。

つまり、アギタさんは、最後の質問において、その場しのぎの嘘をついたことになります。

そうして考えてみるとお祖父様以外にもう1人、アギタさんに対して命令できる人物がいることに気付いたんです。

もう1つ、今回の件についてお父様の事情とお祖父様の事情を知っているという2人にある程度近い人ですが、今回の計画を立てれないと思いました。

だから、私はお祖母様が裏で動いていると思ったんです」

当たっていたから良かったものの、そもそもが惚とほけられた時点で詰みだった。

ほとんど賭けみたいな推理しかできない不恰とほ好な探偵もいたもん

だ。

今回の事件において、2枚のパズルがあるといったが、まさにその通りだった。

お父様の事情とお祖父様の事情を知っていて、その2枚のパズルをバラバラにして渡してくれたのが、お祖母様だったのだ。

こうなってくると、1つ疑問が湧いてくる。

「けど、お祖母様はどうして、自分でお父様とお祖父様の仲直りをさせようとしなかったのですか？」

「あらあら、耳が痛い質問をされちゃったわ。

そうね、わたしだからできなかった、ということかしら？」

「どういことですか？」

お祖母様が、唇に右の人差し指を当てて「ん〜」と、何かを考えるような仕草をする。微妙によく似合う。

「ケネアさんのことはご存知よね？ アギタさんから聞いているわ」

「はい」

「カイトを産んで、ひっそりと暮らしていたわたしを見つけ出してくれたのが、ケネアさんだったのよ」

「……そうだったんですか？」

「ケネアさんが、お亡くなりになる直前だったかしら、わたし宛に手紙が届いてね……」。

『あなたに頼めた義理ではないかもしれませんが、あの人を支えて、息子^{ケイン}を慈しんでくれませんか？ 後の無い私の最初で最後の願

「いっす」って
「……………」

なんて、言えはいんだらうか。

会ったことも話したことも無いけど、少なくとも、私の中に流れる血の4分の1がケネアさんのモノなのだ。

…それだけ身近なはずなのに、皆の思い出の中だけにしかない…
…とても遠い存在だと思う。

10歳：「これで一件落着？」(3)「

「手紙をもらうまでは、ずっと、ケネアさんのことを憎い敵だと考えていたの。恥ずかしい話だけど、悲劇の主人公みたいな自分の境遇に酔っていたのね、きつと。」

あの人のために身を引いた自分の方が、本当にあの人のことを思っている、みたいなの。

そのためにもケネアさんは、憎い敵役でいてくれなければならなかったのに……そんな手紙が届いたの。

敵わない……素直にそう思ってしまったわ。

女としても、母としても、多分、わたしは一生をかけてもケネアさんに追いつけないのかもしれない、って。

それまで一度も話したことも会ったことさえない相手だったのね。

認めちゃったら、同じ人を愛した者同士、子供を持つ母同士ですよっ？

ケインのことが気になって気になって、それでも踏ん切りがつかなくて……ケネアさんが逝去された噂を聞いてから、やっとのことで、あの人の前に姿を現したの。

そこからは、まあ、あの人に求婚されて……。

……ユリアちゃんにはまだちょっと早すぎる話だったかしら？

「そんなことはありません、けど」

静かになってしまっていた私の態度を、お祖母様はそう受け取ったようだ。

ただ事実は小説より奇なり、って言う言葉を思い出していただけなんだけどな。

「それで、どうしてお祖母様が二人の仲直りをさせられなかったのですか？」

「うん、私もお祖父様の考えには、賛成だったからかしらね……」

「つまり、お祖母様もバーレンシアの家をお父様に継がせたかったと？」

「ちょっと悲しそうに目を細め、けれど、すぐにいつもの笑顔に戻り。」

「ええ、でも、ケインが自分で道を選ぼうとしているなら、それでもいいかなとは思っていたのよ。」

「直接血はつながっていないとしても、大事な息子ですもの。」

「そうして、気づいたときには、すっかりあの人とケインの間に溝ができていたの。」

「ケイン宛に何度か手紙を書いたんだけど、『元気です』みたいな味気ない返事しか帰ってこなくてね。」

「もうわたしじゃあ、この二人の仲直りさせるのは難しいところまで溝が広がっていたわ。」

そして……気付いたら10年以上経っちゃっていたわ。

あの人とカイトは良く似ているって言われるけど、それは外見だけであって、本当にあの人に似ているのはケインの方だと思うわ。

2人とも、真面目で、変なところで頑固だね」

「あ、それならよくわかります」

どっちかがもう少し不真面目だったら、もっと早くに、自然に解決をしていたような気がする。

今回の事態を巻き起こしたのは、ほんの少しのすれ違いで、どっちが悪いわけでも、どっちかが相手を憎んでいる訳でもなかったこと。

……私は悪いところ探しをしてたせいで、今回の事件の真相に、事前に気づくことはできなかった。

「今回、ケインが王都に戻ってくると聞いて、いいきっかけだと思っただわ。

そこでシズネさんに相談したら、ロイズさんとユリアちゃんの話を聞かせてもらったの。

ユリアちゃんに任せることにしたのは、昔から事情を知っている人が動いても事態は変えられないと考えたからよ。それがわたしではダメだった理由ね。

こっついうのも願掛けって言うかしら？

実際にユリアちゃんに会うまではちょっと不安だったけど、シズネさんの言うとおり、とってもお利口さんで、もしかしたら上手く

いくかも……いえ、きっと上手くいくって信じていたわ」

シズネさんが問題になるようなことを話したとは思わないんだけど、私のことをなんて説明したんだろう。

それにしても、今回は皆、私に変な期待を掛けすぎだと思う。

まあ、その期待を裏切るような結果にならなかったのが幸いだけだ。

「お祖母様、ありがとうございました。今日はもう帰りますね」

「そう？ 良かったら、また遊びに来てちょうだいね」

「はい、今度来るときはリックとリリアと一緒に来ます」

「それはいいわね。絶対今度は3人で来てちょうだい、約束よ？
楽しみに待っているわ」

嬉しそうに微笑むお祖母様に見送られ、私はバーレンシアの本家をあとにした。

10歳：「仲良しが一番ー!!」

「ただいまー」

挨拶をして玄関をくぐると、タタタツという音が聞こえる勢いで駆けるリリアが、私の右腕にしがみつくように飛び込んできた。

「おかえりなさいませ、おねえさまっ!!」

「こらっ、リリア。飛び込んだら、危ないでしょ」

「だって……」

とリリアが何か言い訳をしようとした時、今度はダダダツという音、リリアよりもずっと重量感があり……

「ボースー!!」

「ジ、ジル待てっ!! うわっ!？」

「きゃあっ!？」

ジルがリリアと反対側に飛び込んでくる。

対格差のせいで勢いを受け止めきれず、リリアを巻き込んで一緒に倒れこんでしまう。リリアが床にぶつからないように、自分の体を下にして、受け身を取る。

「あたたた……ジル、ちょっとどいて。大丈夫、リリア？」
「はい、だいじょうぶです……」

ジルがパッとどいたので、リリアを先に起こして、自分も起き上がる。

いつつ、こりゃ、背中か腕のどこかが打ち身になっているかも……
あとで魔術で治そう。

「ボス、おかえりなさい！」

「あのね、ジル……」

「何するのよ、このバカ犬!!」

「ジルは犬じゃない!! オオカミ!!」

うー、むー、と2人が睨みあう。

「……おかえりなさい、お姉さま」

「ただいま、えーと、あの2人はまた？」

「はい、またです」

リックが困ったような顔をして、私の質問を肯定してくれた。
まあ、あの2人が喧嘩をする原因なんて、単純なもので……。

「ボスはリリアより、ジルの方が好きだ！」

「そんなことないもん、おねえさまはバカ犬より、わたしの方がずっと好きだもん！」

「ジルの方がずっとずっと好き！」

「わたしの方がずっとずっとずっと好きなの！」

「ジルの方が……」

「わたしの方が……」

やれやれ。モテる女はつらいな。

「はい、2人ともこっちに注目！」

「何ボス？」 「何おねえさま？」

「私は喧嘩する子は大っ嫌いです」

「「っ!?!」」

口喧嘩に夢中になっていた2人に、とっておきの言葉をかける。

恐る恐るといった感じに2人が私のほうを見てくる。それににっこりと笑ってうなづく。

そうすると、リリアとジルはお互いにお互いを探るように見つめあい。

「「「「めんなれ」」」」

そして、同時に謝罪の言葉を口にする。

喧嘩するほど仲がいいって言うし、この2人は、本当に仲は悪くないのだ、きっと。

でも、喧嘩するより、仲良しなのが一番いいよね。

10歳：「仲良しが一番！」（後書き）

「?????」研ぎ澄まされた刃を磨き」

慎重な手つきで鞘から剣を取り出し、鞘は脇にそっと置く。

刃がランプの光を反射させ、鈍い輝きを放つ。

用意していたボロ布で剣身についている古い油を丁寧にぬぐう。

それが終わったら、綺麗な布に特製の油をたらして剣に薄く延ばしながら塗っていく。

錆を防ぎ金属を保護するために調合された特製の油は、あたしにとって姉のような存在であり、古くからの仲間である錬金術師に作ってもらったものだ。

こうして、この剣の手入れをするのは何日目だろうか。年に2、3回行っていたとして、40回に届くかどうかくらいか。

いなくなった彼の代わりに、この剣を抱いて枕を濡らした日々も、すでに昔の話と言えるのかもしれない。

それでも時折思い出したかのように、こうして使われる当てのない剣の手入れをしているのだから、未練がましいにもほどがある。

あたしにとって、これは贖罪じゆくざいなのだと思う。

罪を償^{しぐな}つように、赦^{ゆる}しを乞^{ねが}う行ない。

剣の手入れをすることで、彼のことを忘れていないことを再確認する儀式。

それは自己満足でしかない。

彼が生きていれば、困ったような笑みを浮かべ、あたしのことを一言で許してくれるだろう。

女子供には甘すぎるところがあったから。

そして、彼も孤児^{みなしこ}であったためか家族に対して、とても強い思いを抱いていた。

彼が死んだ時、あたしはすぐに彼を追うことを考えた。

しかし、それを止めてくれたのは、当時まだ錬金術師の卵だった彼女だった。

「キミの命はキミの物じゃない。命を賭けてキミを助けた彼の物だ。キミは、彼の死を無駄にするつもりか？」

その一言が枷^{かせ}となり、あたしは死ぬことができなくなった。

そして、あたしは彼女に連れられえるままにこの街にやってきた。彼との思い出が残るあの家にいたら、あたしはきつと生きたまま死んでいたかもしれない。

彼女が彼の部屋から持ち出すことを許した物は2つまで。

あたしは彼が愛用していた剣と彼の読めない字で書かれた日記帳のうち1冊だけを持ち出した。

この街は、異邦人だったあたしにもとても温かく、いつしか、あたしは笑顔を取り戻していた。

彼女の実家は、この街での名士らしく、あたしに与えられた家は1人で住むには少々大きすぎるものだった。

最初は、彼の真似をしてみただけだった。

どんな場所にも、落ちこぼれや逸れ者はいるものだ。そんな子たちに声をかけて回った。

気がつけば、あたしが声をかけずとも、自然とそういった子たちが集まるようになっていた。

もしかすると、彼女は、あたしが大きな家に1人でいることに耐え切れなくなつて、そう行動することを見越していたのかもしれない。

問い詰めても、きっとはぐらかされるに決まっているけど。

物思いに耽つてると、階下から、あたしを呼ぶ声が聞こえてきた。

何かあったのだろうか？

あたしは剣を鞘に収めると、丁寧に布で包んでクローゼットの奥にしまった。

15歳：「オーズギ寮の住人たち（1）」

「……リアちゃん、……」

うー、なんだか、とても眠いんだ……あと5刻（約10時間）ほど、寝かせて……。

「それじゃあ、1日が終わっちゃうよ。ほら、ユリアちゃん、起きて……」

ユサユサと私を揺する手を掴んで、クイツとバランスを崩す。

「わきやつ！？」

私の上に倒れそうになるルノエちゃんの身体を、上手く誘導して毛布の中に引つ張り込む。

ロイズさんに教えてもらった捕縛術を応用して両手両足で動きを封じ、そのまま抱き枕代わりにする。

「ユユユ、ユリアちゃんっ！！ おっ、お願いだから、目を覚ましてっ！！！」

うわっ!?

耳元で大きな声を出されたのを切っ掛けに、私の意識がゆっくりと覚醒し始めた。

んー、窓から日が差し込んでいると言うことは、まだ朝方のはず。

「つまり、挨拶は、おはよう?」

「お、おはようー……」

狭いベッドの中、毛布は一枚、私の手の中にシツカリとハマっているルノエちゃん。

「ルノエちゃん、朝から人のベッドに入り込むなんて、大胆だね」
「ちち、違うよっ!？」

ユリアちゃんが、わたしをベッドの中に引っ張り込んだんだよあつ!?!」

必死になつて無実を主張するルノエちゃん。可愛いなあ。

こう思わずホッペをムギューとしたり、抱っこして頭を撫でてあげたくなる可愛さ。

まあ、年齢も体格もほとんど同じくらいなんだけどね。

言われてみれば、ルノエちゃんの言うとおり寝ぼけて引っ張り込んだような気がしないでもない。

まあ、中身はどうあれ私の体は女の子だし、どこにも問題はないね。

ルノエちゃんをギューと抱きしめても全然問題はありません。

「うっうっうっ……お願い、そろそろ離して……」

「私、抱かれ心地には自信があるんだけど、どうかな？」

リリアとかジルとか、それとリックとかには大絶賛なんだよ。というわけで、もう一回ギューと。

「おーねーがーいー、はーなーしーてーー!!」

ふむ、「お願い」っていうのは、ルノエちゃんの口癖の1つだな。

私が手足の拘束を解くと、水を浴びかけられた猫のように、ベッドから部屋の壁際まで一気に逃げ出した。

そして、おもむろにスーハーと深呼吸をしている。

そんなルノエちゃんを横目に、すっかりと目が覚めた私は、服を脱いで……

「うあっ!?! わ、わたし、先に食堂に行ってるから……っ!?!」

顔を赤くしてルノエちゃんが部屋から跳び出て行く。

ふむ、別に全裸になったわけでもないのに、下着姿であそこまで慌てるとは、まったく初心だなあ。

脱いだ服を扉の近くにある籠の中に投げ入れ、適当にチエストから服を取り出して着替える。

籠の中に入れておくとあとで寮母さんが回収して洗濯して、また部屋に届けてくれる。

軽く柔軟と体操をして体をほぐすと、私も食堂へと向かった。

15歳：「オースギ寮の住人たち（2）」

火の季節の3巡り目の第2日。

私が学術都市フェルベルにやってきて、そろそろ季節1つ分の時間が経とうとしている。

15歳になった翌日、事前に準備をしていた予定通り、王国立フェルベル学院の魔術師専攻科に無事入学した。

ただ、入学するまでには少しばかり面倒なことがあった。入学試験の際、私の能力が魔術師専攻科に入るための基準に到達していなかったのだ。

魔術や学問に関する知識試験は問題がなかったのだが、魔術実技の試験で素質なしの判定を受けてしまった。

試験の課題実技が「火の玉で少し離れた先にある的を燃やす」というものであったことがまず1つ目の理由だ。

【一角獣の加護】を秘密にしているために原因を説明する訳にもいかず、試験の結果として、すっかり理論だけの「おちこぼれ魔術師」とみなされてしまった。

そのため、魔術師専攻科ではなく、数理学者専攻科や魔術学者専攻科といった実技を伴わない学科を強く勧められた。

しかし、将来的に使い魔^{ファミリア}持ちの魔術師になるためには、魔術師専攻科に入る必要があった。

そこで、学院の規則にあった特別入学制度とこのを利用して入学することにした。

簡単にいえば、学院公認の裏口入学みたいなものだ。

入学支度金とは別に、特別免除金という名目の寄付金を私うことで入学を許可される制度だ。

私としては、別に、魔術師の資格が取れるならば、フェルベル学院にこだわるつもりはなかったが、いくつかの事情が重なり、無理やりにも入学することになったのだ。

まあ、結果として前世ぶりの学生生活を送っている。

「おはようございますーす」

食堂に入るとオースギ寮のメンバーが全員揃っていた。

「お、おはようございますっ……………」

ルノエちゃんは、私と目が会つとさっきのことを思い出したのか、ぎこちない動きで視線を外す。

あれで本人は、自然な流れで向きを変えてバレていないつもりなんだろうな……………まったく可愛いもんだ。

「お早うせ」

「……（じくり）」

「おはよう。ユリアちゃんが最後だよ。ほら、さっさと座って」

ルノエちゃんの挨拶で他の3人もこっちを向く。

これは、私のお世話になっているオースギ寮が数少ない規則の1つとして、「食事は出来るだけみんな一緒に」という言葉を掲げているからこそその光景だろう。

「すみません、少し昨夜遅くまで本を読んでいたの、寝坊しました」

「まあ、若いからって無茶をして……」

「そういうタマコさんだつてまだまだ若いじゃないですか」

「ふっ……まだまだ、とか言われているようじゃ、本当の若さには敵わないんだよ」

軽く遠い目をしつつ、私の前にパンを配ってくれる。

タマコさんは、爪族のつまり猫っぽい獣人で、年齢は内緒らしいがぱつとみでは20台半ばくらいに見える。

黄色がかった茶色のストレートの長い髪、ピンと三角形にとがった猫耳、スラリとした尻尾がスタイリッシュさを演出している。

本名はタマコ・オースギさん。

私がお世話になっているオースギ寮の寮母さんだ。

オースギ寮は、寮を名乗っているが建物自体はタマコさんの家であり、私たちはタマコさんの家に下宿をしているような状態と言え

る。

学院が運営する寮もあるらしいのだが、入寮を希望する生徒の数に対して寮の部屋数が圧倒的に足りないらしい。

そこで、寮にあぶれた者は、街の宿屋に長期滞在をするか、下宿できる家を探す。

貴族の子息の中には、最初から高級な宿屋で当たり前のように長期滞在にする人もいるらしいけど。

オースギ寮もそんな寮代わりの下宿先の1つで、オースギ寮というのは半ば通称だ。

ただ他の寮や下宿先とオースギ寮が違うのは、何かしらの訳あり学生が入居してくることが多いようだ。

私もそうだが、今食堂にいる全員は何らかの事情を抱えていることを、短くない付き合いの中で察していた。

15歳：「オースギ寮の住人たち（3）」

「ユリア殿、薬茶也」

赤っぽい褐色の鱗族の少女が、私の前に緑色のお茶を出してくれる。

名前はミロン・イエーン、小柄だが獣人種の特徴的な引き締まった肉体をしている少女だ。

年は私より2つほど上だが今年入学したらしいので、まだ同じ学院1年生。学院では薬師専攻科に所属している。

「ユリアちゃん、それ本当に美味しいの？」

「この渋みが大人の味なのさ。慣れると美味しいと思うよ？」

ミロンさんいつもありがとう」

「礼はいらない也。私の薬茶を喜んでくれるのはユリア殿だけ也」

ミロンさんが時々淹れてくれるお茶は、簡単に言えば抹茶のような味がする。

私としては、前世の日本を思い出す懐かしい味で普通に飲めるのだが、どうも他の皆には不評らしい。

徐々にだが最近苦味も美味しく感じれるようになってきた。それだけ大人に近づいたと言うことなのだろう、多分。

「そういえば、このお茶は牛乳や砂糖とか足すとルノエちゃんたちも飲みやすくなるかも」

「牛乳也可？」

「そうそう少し濃いめに抽出してね。牛乳と砂糖で割るんだよ」

「……ユリアちゃん、それ美味しい？ セーも飲める？」

私がミロンさんに、抹茶ラテの作り方を説明している横から、可愛らしい声が聞こえてきた。

ラベンダー色の美しい髪と薄いエラを持つマーマンの少女。名前はセララセラ。

ミロンさんよりも小柄で、今年で10歳になるリリアと同じくらいの背丈しかないが、私と同じ年の15歳らしい。学院では植物学者専攻科に所属している。

なんでも特殊な【先天性加護】持ちらしい。

いつも眠そうにしているが、食べ物と飲み物の話題への食いつき方が違う大食い魔人だ。

「うーん、どうだろう。ミロンさんが入れてくれたままの状態で飲むよりは、ずっと飲みやすくなると思うけど」

「……（じい）」

「セラちゃん飲んでみたいの？ 今日の夜にでも作ってみようか？」

「……飲む（こくん） ユリアちゃん、ありがとう」

まあ、なんていうか、可愛い生き物って感じなのだ。こっ、ナデナデしたくなる感じ。

とりあえず、約束をすると興味がなくなったのか目の前の朝食を食へ始める。

その姿も小動物の食事を連想させる。

が、そんな可愛らしい食べ方とは裏腹に、セラちゃんの前には私たちの2倍以上の食事が用意されている。

しかも、それが見る見る減っていくのにセラちゃんの体は変化しない……不思議なこともあるもんだ。

「ほら、ユリアちゃんもさっさと食べないと、講義に間に合わなくなっちゃうよ?」

「あ、うん。精霊様に感謝を、いただきます」

思わずセラちゃんの食べっぷりを眺めていると、ルノエちゃんに注意される。

確かに、もう少し経つと講義開始前の鐘が鳴ってしまつ。

略式で食事の挨拶を済ませ、私も自分の目の前に置かれたシチュエーションに手をつけた。

「ユリアちゃん、あんまり焦って食べると喉を詰まらせるよ?」

「んお? だい、じよぶ、だよ」

口に物を入れたまま喋るのは淑女にあるまじき行為だが、問題はない……と思う。

そんな私を少しあきれたような目で見るルノエちゃん。さきほど部屋まで私を起こしに来てくれた子だ。

名前はルノエで、家名はないらしい。

黒い髪と瞳を持って、セラちゃんとは別の意味でとても可愛らしい生き物をしている。黒い髪のせいか日本人っぽくて、かなり私の好みに近い容姿だ。

ルノエちゃんも私と同年で15歳になったばかり、同じ魔術師専攻科に所属している。

「もう、食べ終わったら、すぐに出ないと間に合わないかもよ？」

「んっくん、大丈夫、席を確保してくれるって言ってたから」

「……また席取りをお願いしたの？」

「ごくごく、ぷはっ。違うよ、向こうが勝手にしてくるだけ、席を取るのが好きみたいだから気にしないでいいよ」

はあ、となんだか呆れたような溜息をルノエちゃんが大きくついた。

15歳：「講義／堕ちた精霊王（1）」

カンカンカーン、カンカンカーンと、今日最初の講義開始を知らせる鐘の音が、学院内に響き渡る。

「よっし、ぴつたり！」

私は鐘が鳴り始めると同時に講義室へと入った。

講義の担当教師は、始業と同時に入ってくることはないから問題はない。

「『ぴつたり！』じゃないの！ ぎりぎりって言うの！」

「あははは、ルノエちゃんてば真面目さんだなあ」

「わたしは普通だよ。ユリアちゃんってシツカリ者のくせに、変な所でルーズだよな」

「そんな私に付き合ってくれるルノエちゃんが好きだよー？」

「あうあう……」

最近、私の身の回りで可愛い生き物が多くて困るな。双子やジルと離れることになる分、可愛いモノ成分が減ってしまうと思いきや、なかなかとっても充実しています。

学院の授業は大きく「講義」と「師事」の2つに分かれる。

「講義」は、主に1人の教師が不特定多数の学生を相手として事前に決めたスケジュールに沿って授業を行なう。

ほとんどが講義室での座学であるが、授業によっては専用の実験室や訓練場を使った実技であったりもする。

学院に入ったばかりの1年目、つまり1年生の間は基本的に講義を受けて、実力と知識を付けていく。

前世でいうところの日本の大学のイメージに近い。もともと必修科目もなければ、定期試験も特にない。

試験がないならば、講義を受ける必要や勉強をしなくても良さそうに思えるが、そうはいかない。

なぜなら、基礎が終わった2年目以降、「師事」に移る際に困ってしまうことがあるからだ。

「師事」とは、特定の教師が受け持つ「教室」に所属することだ。その教師から専門的な授業を受けることだ。

どの教師を師事するかは、完全に教師と学生と個人による自由契約となっている。

そして、学院をするための卒業する条件が、師事している教師の推薦と3人以上の教師から出される課題をこなすことだ。

学生にとっては、まず師事する教師が重要になってくるし、教師の方も自分の名誉と実績のためにも優秀な学生だけを教室に所属させたい。

学院1年目の講義は、教師と学生のお互いのアピール期間も兼ねている。

「えーと、あ、いたいた。おはよう！」

「おはようございます。お嬢様、ルノエ様」

私は、彼が確保してしてくれた席にさっさと座る。

「おはようございます、ウエステッド様。いつもありがとうございます。」

でも、わたしのことは、どうぞルノエと呼び捨ててください」

「そう言われましても……お嬢様の大事なご友人を呼び捨てなどできません」

「ルノエちゃんも、いい加減諦めちゃいなよ。シュリは自分で一度決めたら、絶対に曲げないんだから……」

「うっ……」

そう、目の前で笑顔を浮かべている青年はシュリ・ウエステッド、私たちの兄貴分だった少年だ。

真正面に立つと170イルチ近い私が少し見上げるくらいだから、178イルチ位はあるだろう。

全体的にほっそりしていて、いかにも学者肌の優男という雰囲気だ。

茶色がかった黒髪に深い緑色の瞳に、昔の面影が十分残っている。ただ年相応に育った体には、成人男性特有の精悍さがでてきていた。

シュリはフェルベル学院には2年前に入学しているので、私とルノエちゃんからすれば先輩になる。

本来なら今から始まる講義に出る必要はほとんどないが、私と一緒に受けれるという理由だけで受講しているようだ。

そこにはラブはなく、少しでも恩に報いる律儀な性格ゆえだろう。

シュリはバーレンシア家の後見を受けて、学費から在学中の生活費など、一切の費用はバーレンシア家が払っている。

そもそも、私が 宝魔石 を売ってお金を稼ごうとした最大の理由は、自分の分とシュリの分の学費を作るためだった。

色々とあつて、今のバーレンシア家はお金に関してはまったく言っていないほど困っていない。結局、私の学費も実家が出している。

義理ができてしまったので、ホランさんの『セールテクト輝石店』には10個ほど 宝魔石 を卸したが、その代金のほとんどは手つかずのままだ。

1個あたり手数料を引いて大体60万シリルの儲けで、約500万シリル位は残っている。へそくりというよりも、隠し財産だなあ。

15歳：「講義／堕ちた精霊王（2）」

私たちが席に着くのと同時、講義室に担当の教師が入ってきた。年は30代前半くらいだろうか。まだ若く、物腰の低い男性だ。

「それでは、創世学の第5回目の講義を始めます。

この講義も、今回を入れて、あと2回となりました。よければ最後までお付き合いください」

壇上へ上がって、教室を一瞥し軽くお辞儀をする。それがその教師の講義開始の挨拶となる。

講義室の造りは、やや横幅のある四角い部屋で、長辺の中央に教壇があり、そこを囲む扇状に椅子が並んでいる。

基本的に机はない。
なぜなら、講義を受けながらノートを取るという習慣がないからだ。

薬学の実験室には、机が置いてあるらしいが、それは作業台としての役割が大きい。

人によっては、1日の終わりごとにその日の講義内容を紙に書き残したりしているそうだ。

さて、『創世学』というのは、簡単に言えば眠れる神が世界を作った時代を検証する学問だ。

前世の世界とは違い、この世界は神話の時代に起こったことは全て歴史的眞実であるとされている。

魔術を使う上で重要となる“ルーン”は、世界の理を意味する文字であり、世界を作り上げる途中である神代かみよと密接ことわりに関わってくる。

そもそも“ルーン”は精霊王と神が世界を創造するときに使われた理を示しているとされている。

そのため、創世学は魔術師においての基礎教養の1つとなっていた。

前世代の古代帝国の話ですらまともに残っていないのに、さらにそれよりも古い神代の話は、多くが口伝かもしくは記録系の魔具によつてのみでしか確認できない。

また神話の多くは物語的な側面を持ち、眞実が上手く隠されていることもある。

それらを読み解くのも『創世学』の一面というわけだ。

「さて、前回までは精霊王と原始精霊の誕生について講義をしてきました。

今回は、少し、近年出てきた説を踏まえた話となります」

確か前回までは「地、風、水、火、森、海」の各精霊王の誕生と、それぞれの眷族である精霊の関係、それから、太陽の精霊と星の精霊についての話が中心だった。

「精霊王と呼ばれる精霊は、主に6名ですが、最近の『創世学』では、もう1名の7番目の精霊王がいたというのが通説になりつつあります。」

その歴史から名を消された精霊こそが“野の精霊王”です」

ああ、なるほど、例の説か。

教室を見た感じだと、半分くらいの生徒は私と同じように知っているが、もう半分の生徒は興味があるようだ。

ちなみに、シュリは私と同じなのか今の言葉に特に反応はない。反面、ルノエちゃんは初めて聞く説だったのか、興味深げに壇上に立つ教師を見ている。

「皆さんは、神話における創世の章を読んだことがあるならば、“荒廃の魔王”のことは知っていると思います。」

“荒廃の魔王”は神が眠った直後に、カルカチュアを襲った魔王と伝えられています。

世界の長い歴史のうち魔王が出現は三度あるため、“最初の魔王”とも呼ばれる存在ですね。」

この“荒廃の魔王”の出現により、世界に悪魔と妖魔が生まれま

す。その辺りのことについては、また後日機会があれば語るとして、今回の話は『“荒廃の魔王”がどこから現れたのか?』という話です」

要約すると、この“荒廃の魔王”は、原始の精霊王の7番目の存在であった“野の精霊王”が堕ちて、悪意に満ちた存在へと変貌したという話が続く。

そもそも、神の下に世界は調和をしており、そこに不和は存在しなかった。

しかし神が眠るとその調和が徐々に崩れだし、精霊王同士で些細なけれど致命的な争いが起こってしまう。

結果として最も我の強かった“野の精霊王”が他の精霊王に戦いを仕掛け、“野の精霊王”は魔王という存在になったとされる。

現代でも精霊が強い悪意を持つと、悪魔と呼ばれる存在に変化すると言われている。俗に“墮落”と呼ばれる現象だ。

さらに言えば魔王というのは、ただ単純に力の強い悪魔の俗称ではない。

今回のように強い力のある原始の精霊王が墮落をしたなら、それは悪魔ではなく、魔王と呼ばれる存在になっただろうと考えられる。

あまりに昔過ぎることなので、人類は誰も証言できず、当の精霊王や神代の時から存在する古き精霊たちが人類に対して、神代の歴史を教授することはない。

そして、これからも基本的にそうなることはないだろう。

「歴代の魔王のうち、“荒廃の魔王”だけが他の魔王とは異なり、あまり滅されたとは伝わっていません。唯一大地に封印されたと思われるものがほとんどです。

それらのことを総合的に解釈することで、“荒廃の魔王”が“野

の精霊王”であったという説が成り立ちます。

“ 荒廃の魔王” は、その正体が精霊王であったがゆえに大地へと封印されたのです」

精霊は世界を守る存在であり、精霊王にいたっては世界の要と言
える。

精霊王ほどの存在が消えらるとなると世界に対して大きな影響を与
えてしまう。

ゆえに、その存在を滅することをせず、身動きが取れないように
封印されたと言われている。

15歳：「講義／堕ちた精霊王（3）」

「魔王……か」

「ん？」

私がもらした呟きにルノエちゃんが反応する。軽く首を振って「なんでもない」と伝える。

『グロリス・ワールド』でも、魔王と呼ばれるモンスターの設定はあった。

もつとも、私が『グロリス・ワールド』で遊んでいた頃は魔王の配下にあたるボスモンスターを倒すイベントが定期的開催されていたくらいで、実際の魔王と呼ばれるモンスターが出てきたことはなかった。

私が死んだあとは、『グロリス・ワールド』に魔王は登場したのだろうか？

今の私に知る由もないし、意味もないことだけど。

目の前に広がる雄大な草原、その一方には極色彩の装備をまとったプレイヤーたち。

もう片側には、醜悪な容貌と獰猛な本性を隠そうともしない悪魔軍のモンスターたち。

彼らを睥睨するかのように浮かぶは、魔王の名を冠したイベント用特殊モンスター。

魔王が悠然と手を振り下ろすと、一斉にモンスターたちが前へと進軍を開始する。

パーティ単位で連携して、モンスターたちの猛攻を迎え撃つプレイヤーたち。

草原のあちこちで、プレイヤーとモンスターが激突しあう。激しく鳴り響く剣戟^{けんげき}、降り注ぐ攻撃魔術、指令を飛ばすパーティリーダーの絶叫、淡い色に光り輝く回復魔術……

カーン、カーン……

講義の開始から1刻（約2時間）弱の時が過ぎたこと知らせる鐘が鳴る。

そして、それは講義の終了を表わす合図でもあった。

「それでは、今回の講義はこの辺りにしましょう」

鐘の音と講師の言葉でツラツラと思いを馳せていた私の精神が、限りなくゲームに近いファンタジーの現実に引き戻される。

……まあ、ゲームと違って、この世界でいきなり魔王が復活とか言われても困るんだけどな。

伝説を聞く限り、ろくなことにはなりそうにないし。

「今回は神代かみよが終わりとされる。四大精霊王の不和について講義します。それでは」

講義が終わると、そそくさと教師は講義室から出て行く。

教師がいなくなると、学生たちも一人一人、次の講義や予定に向かうべく講義室から散っていく。

「えっと、ユリアちゃんは、次の実践魔術の授業は受けてないんだよね？」

「うん、まあ、私は出てもしようがないしね……って、そんな顔をしないで、いつものことでしょ？」

「べ、別に変な顔をしたつもりはないんだけど……」

実技が伴う講義は、そういった魔術師の求められている需要が多いためか、攻撃魔術を使えることが前提となっている。

そのため、授業を受けていてもあまり面白くない。

最近は、すっかり簡単な照明や水を作り出す魔術以外は使えないと思われている。

「大丈夫、時間は有意義に使うから。」

お昼までソニア教授の所に行って来るから、昼食は一緒に食べよ。

あ、シユリも一緒にする？」

「ええ、お嬢様とルノ工様はご迷惑でなければ、ご一緒させていただきたいと思います。」

けど、ルノエ様はよろしいのですか？」

「ご迷惑だなんて、そんなことはありません！」

そもそも、ウエステッド様を誘ったのはユリアちゃんですし、私もユリアちゃんに誘われた形になるんですよ？」

「そうだね。細かいことは気にしないで、みんなで食べた方が美味しいしね？」

「ありがとうございます。それでは、また後ほど」

優雅に一礼をすると、講義室から出て行った。

というか、今の動きとか、下手な貴族の子弟よりも貴族っぽいんだよな。

「実践魔術は訓練場での授業だよな。途中までだけど、そろそろ行くかうか？」

「はいっ」

そして、ルノエちゃんはあれだ。なんとなく小型犬っぽいな、牙族じゃないけど。

15歳：「ソニア教授の研究室（1）」

ルノエちゃんと別れて、私は学院の中心から奥の方へと向かう。

多くの生徒や教師を擁する王国立フェルベル学院は、ミュージシアン大陸でも最大規模の学び舎と言われている。

なにせ、30万人の人口を抱えた学術都市フェルベルのうち、約2割の土地が学院の敷地なのだ。学院の敷地を軽く一周するだけで駆け足で1刻（約2時間）は必要となる。

講義棟が集まっている学院の中央を離れ、奥に移動すると教師用の研究室が集まる区画となる。

さらにそこも過ぎると、徐々に出歩く人の数がまばらになってくる。

そして、研究室が集まる区画の最も端っこに、私が目的とするソニア教授の研究室兼工房兼住居があった。

「おはようございますー。教授起きてますかー？」

遠慮なく研究室の扉を開けて中へと踏み込む。

……………。

返事がない、どうやら眠ったように泥って……………もとい、泥のよう

に眠っているのだろう。いつものことだ。

そして、すっかりこの生活に馴染んでいる自分に驚く。
んー、せっかくだし適当な論文でも読んで時間を潰すかな。

王都での5年間は、充実した毎日の連続だった。

フランチャイズのファーストフードチェーン『バーレンシア商会』の開店と成功。

食文化の変化に伴い、油の需要が高まることが予測されたので、『バーレンシア商会』を使って精油の事業を立ち上げてみれば、それも大成功。

『バーレンシア商会』が立て続けに商業的成功を収めたため、その資金を元手に入浴習慣普及のための銭湯モドキを運営すれば、王都でお風呂が一大ブームになる始末。

『バーレンシア商会』による収益は、あれよあれよという間に年間2000万シリルを突破……お父様の年収のざつと15倍以上だ。実家はすっかり成金貴族と呼ぶにふさわしい急発展振りだ。

まあ、実生活としては夕飯のおかずが一品増えたくらいで、大金に酔いしれたりしないのは、さすが私のお父様とお母様といった所だろう。

ともあれ、おかげでバーレンシア家には私とシユリの二人分の学費を払っても、余りある資産ができてしまっていた。

それから、この5年で変わったことと言えば私の身長はお母様よりも高くなり、170イルチ弱……ジルと大体同じくらいまで伸びたこと。

胸も膨らみだし、今ならギリギリでBカップくらいはあるんじゃないだろうか？

いまだにきちんと私の中にある男心が、微妙になる気持ちを訴えてくるが。

私の夜会デビューは、今思い出しても少し笑いがこみ上げてくる。

何せ今話題の成金貴族のご令嬢だ。夜会の参加者は全員、さぞかし贅を凝らしたドレスで登場すると期待に胸を膨らませていた。

そこへ一見すると質素という感想しか出てこない、黒いドレスでの登場だ。

所々に小振りな宝石を身に着けているものの、肌に密着した生地には、高級なドレスの象徴であるレースや刺繍が一切使われていない。

だが、夜会が進むにつれ、徐々に、私の服装が話題に上り始める。私が着ていたのはいわゆるマーメイドドレスと呼ばれるタイプのもの、私がフリルをふんだんに使ったドレスを嫌ったために急遽オーダーメイドしてもらったものだ。

剣術によって引き締められた私の身体には、スラリとしたシルエットのドレスが似合うと、自己分析した結果の衣装選択だった。

そんな異色なファッションが夜会の参加者の中で賛否両論を巻き

起こしていた。

宝石こそ小振りであるものの、眼鏡の一件で仲良くなった細工師のクムさんの手が入っている。

黒のマーメイドドレスに合うよう絶妙な細工が施され、近くで見ると人が見れば決してドレスの価値が安くないことを知らしめた。

年の割には背が高く、初めての夜会に対しても落ち着いた物腰の私の言動が、話題に拍車をかけた。

まあ、精神年齢で言えば30過ぎなわけで、多少のことではうろたえたりしないさ。

椅子に座って論文の束を捲めくっていると、トテトテとキノコが歩いてきて、私の前にお茶の入ったポットとカップを載せたお盆を置いてくれる。

私が『ありがとう』の意を込めてお礼をすると『いえいえ、大したお持て成しもできず』とばかりに傘を左右に振るキノコ。

いやあ、ほんとできたキノコだなあ。

15歳：「ソニア教授の研究室(2)」

走りキノコ と呼ばれる系統のモンスターがいる。

『グロリス・ワールド』では、お馴染みのマスコットのモンスターだった。

外見はキノコに足と腕っぽいものがくっついた、見た目からキノコのまんまで、足っぽいものを器用に使ってあちこちを駆け回る。

習性としては、木を倒して腐らせて群れの巣を作ったり、縄張りに入ってきた外敵を撃退する程度の行動を本能で行なう。

また寒さが厳しくなる前の森の季節の終わり頃が 走りキノコの旬と言われており、その頃の 走りキノコの肉(?)は滋養が豊富で歯ごたえが良く、意外と高級食材であったりもする。

一般的なタイプで体長が大体80イルチ程度だが、種によっては体長が2メルチ以上まで育ち、街や村によっては馬車馬や騎馬の代わりに飼育されている。

中には10メルチ以上の大きさまで成長するタイプもいるらしい。そこまで育つと人里に近づくだけでひどい被害が出てしまうため、発見されると王国軍や近くの冒険者連盟が緊急的に対処する事態になる。

便宜上“彼”と呼ぶが、彼の名前はリギー。ソニア教授の《使^{ファミリ}魔^{アイ}》である 走りキノコ だ。

ソニア教授曰く、10年に1体の逸材で、通常の 走りキノコ

から一線を描すほど賢いらしい。

確かに私が喋っている内容もおぼろげながらに理解するし、ジェスチャーで大まかな自分の意思を伝えてくれる。

彼に淹れてもらったお茶を飲みながら、トテトテと研究室を整理しているリギーの様子を眺めていると……。

「……リギー、水」

奥の部屋から、手入れを怠ったボサボサ頭を掻きつつ、よれよれの白衣を羽織ったソニア教授がやってきた。

寝惚ねぼけているせいか、非常に動きが鈍く表情もぼんやりとしている。

椅子に座るとそのまま倒れこむようにしてテーブルに上半身を預けると、むにゅりと大きなお山が潰れた。

おおよその目安だがFくらいはある。いつもながら立派です。

とそこへ、リギーがなみなみと水を注いだ木製のジヨッキを持ってくる。

「ん……んくんく、ぷはっ！」

リギーが持ってきたカップを受け取ると、体を起こしてジヨッキを傾け、一息で水を飲み干した。

水がこぼれて濡れた口元を白衣の袖で拭う。

「おはようございます、ソニア教授」

「ん？ ああ、バーレンシア君か。」

「うむ、おはよう……こんなに朝早くからどうしたのかね？」

「お昼まで講義がないので、論文を読ませていただくかと思っ

て……それより、朝というには、もうお日様は高いですよ」

「……うむ、勉強熱心なのはいいことだ」

あ、時間の部分はスルーされた。

ソニア・ランドリユー。

フェルベル学院における歴代の女性教授で最も若くして教授になった女性。専門は錬金術。今年で29歳の未婚者。

男性のような物言いで、性格も女性よりも男性寄り。

きちんと手入れをすれば美しい赤銅色の髪の毛は、無造作に肩下まで伸ばしていて、基本的にボサボサだ。

外見に関しては、かなりのポテンシャルを秘めていると見るのだが、お洒落どころか身なりに対して興味がなく、服も裸でなければいいとさえ公言していた。

そこへ、リギーがパンと干し肉と干しブドウを持って戻ってくる。

ソニア教授は服だけじゃなくて、食事に関しても、空腹が紛れてそこそこ栄養価があればいいと言う無頓着ぶりが発揮される。

女性が男性かと言う前に、若干、人間としてもアウトコースギリギリかもしれない。

「そんな食生活ばかりしていると、いつか倒れますよ?」

「しようがないじゃないか、バーレンシア君。ボクもリギーも料理ができないんだから」

「リギーは火が扱えないからしようがないですけど、ソニア教授のはただのものぐさですよね?」

それに、学院公認の食堂に行けば教授は食事を無料で出してもらえるのも知ってますよ?」

「バーレンシア君は、一体ボクをどうしたいんだい?」

「別にどうしたいじゃありませんけど! こう、保護欲がくすぐられるんです」

「……普通に考えたら、立場は逆じゃないかね?」

「私も同感です!」

うーむ、私ってダメ男にひっかかる素質があったりするんだろうか?

15歳：「ソニア教授の研究室（3）」

さて、そんな軽口を叩ける間柄だが、私とソニア教授の関係を一言で表すならば「師弟」ということになるだろうか？

今の私はソニア教授の教室に仮所属している。

入学して1年経たない学生であっても優秀な生徒であれば、半年目くらいから教師の方から声がかかり、仮所属という形で2年次より先行して所属契約を交わすこと自体は珍しくないらしい。

教室に所属するのは学院に入って2年目以降であることは慣例になっているだけであり、決して1年目から師事を受けることを禁止する規則はない。

ただ、さすがに入学して季節が変わるよりも早く教室に所属した私は、異例中の異例と言えるようだった。

私とソニア教授の馴れ初めを話すと、入学試験の時になる。課題実技の試験を棄権した私は、その次に行なわれる自由実技に賭けていた。

他の受験者たちが課題実技で指定された火属性の魔術以外の、氷や岩や雷を使った異なる系統の攻撃魔術を繰り広げている中、私は魔力を操作する能力と魔術の独創さで勝負にでた。

自由実技で「魔術を使ってお茶を淹れる」という、一見ネタに見えるが繊細な魔力操作が必要であり、満を持して《熱湯作成》などのオリジナル魔術を披露したのだ！

結果は……大不評。

後日にソニア教授から聞いた話では、私の評価が「理論だけのおちこぼれ魔術師」となったのはこの自由実技がとどめだったらしい。何十人分もの派手な魔術を見続けていた時に「ただお茶を淹れる」実技を見させられたせいで、地味過ぎな印象が強く残ってしまったようだった。

ふっ、策士策におぼれるってヤツだな。
無難に見た目が派手な魔術を使えば良かったと後悔もした。

試験に落ちて、どうしようか途方にくれていたときに声を掛けてくれたのが、ソニア教授だった。
そして、私に特別入学制度のことを教えてくれたのもソニア教授だ。

その後、私が無事に入学するとソニア教授の教室創立にあたり第一期メンバーとして所属することになった。
いや、正確には元々そういう約束で入学したと言える。

ソニア教授が錬金術を専門としている理由は、錬金術がもつとも日常生活に転用し易い魔術だかららしい。

厳密に言うならば「魔術の一般化」を掲げて魔術の研究に勤しん

でいる。

たまたま入学試験の自由実技をしている際に、面白い魔術を使う私を見かけて声をかけたのが、すべての切っ掛けとなる。

今年から教室を開くことになり、どんな教室にして、どんな学生を所属させるか迷っていたらしい。

つまり、試験的には失策であった《熱湯作成》が私とソニア教授を引き合わせたのだ。

私としてもソニア教授に師事することでいくつかのメリットがあり、入学前から教室への所属が決まった。『禍福は糾^{あひな}える縄の如し』とはよく言ったものだ。

「ところで、ソニア教授、ずいぶんと眠そうですが……また夜更かしをしてたのですか？」

自分の今朝の所業を棚に上げて、パンをかじるソニア教授に質問した。

「フツ、良くぞ聞いてくれた、昨晩は 夜月茸^{よつきだけ} の発光周期でな！
もちろん 夜月茸 というのは、無月の夜に胞子を飛ばすキノコで、その胞子は強く発光することで有名なのは説明するまでもないと思うが、その美しさたるや暗闇をキャンバスとして、光の精霊が舞い踊るがごとく。それはそれは貴重な一夜だった！ ああ、こんなことならば、無月の夜が2日に1回訪れても良いというのに……
そもそも 夜月茸 の発光周期を月齢に依存させないように改良を……いや、だめだ！ それでは 夜月茸 の自然な美しさを損なっ

てしまうのではないか！ くうっ、ボクはなんて罪深い。己の欲望を満たすために悪魔のような所業に手を染めようとだなんて……」

あー、スイッチが入っちゃったかな。

ソニア教授の性癖を一言で言うならば……キノコ狂だ。

「キノコのために生きて、キノコのために死ぬ」と公言している。

そして、キノコの話になると、四半刻ほどは延々と喋り続けるのだから厄介だ。

私が初めてこのバーサークモードのソニア教授を見たときは、ドン引きしたもんなあ。

ああ、もしかして、ソニア教授が結婚できていない理由がわかったかもしれない。

……さて、論文の続きでも読むか。

いつもの『キノコ万能説』序章』を語り始めたソニア教授を横目に、私は手元の論文に目を向けた。

15歳：「中庭でランチを（1）」

意識が戻ってきたソニア教授と、今後私が補佐する予定の研究について簡単な話し合いをし、私は研究室をあとにした。

途中の屋台でお昼ご飯を買って、待ち合わせ場所である中庭に到着した。ちよつと早く着きすぎたのか2人の姿はまだない。

木陰に座って、手提げカバンから水筒を取り出す。

火の季節特有の暑さも日差しを避けるだけで大分和らぐ。

「ん〜……《ソア熱ベスをス放コちオてル冷ヤやス》」

小さくルーンを唱えて魔法を発動させる。水筒の中のお茶から熱が奪われ、空気中に散っていく。

熱力学の定説を無視した現象。魔法のおかげである。

あまり派手なものはいないから、こうしてこっそりとその恩恵に預かるだけだ。

いや、「おちこぼれ魔術師」という立場も、これはこれで面白いのだ、結構。

ほどよい温度まで冷したお茶を一口飲んで、喉を潤す。

このお茶は屋台のサービスでもらったものだ。

屋台の隣にある椅子に座って食べるときはコップを貸してくれるが、水筒を持っていけばこうしてお茶を注いでもくれる。

このドリンクサービスは『バーレンシア商会』で私が始めたサービスだ。

お客の評判がよく、それを聞いた商人たちが真似をし始めて、今では軽食を扱う店の定番サービスの1つとなっている。

良いと思ったスタイルをバンバン取り入れていく、この世界の人たちはバイタリテイが旺盛おっせいだと思う。

「お待たせしました！」

すみません、ちょっとお昼を買うのに手間取っちゃっています…

…はあはあ」

「そんなに焦らなくても良かったのに、シュリもまだ来てないしね」

ルノエちゃんは短く速い呼吸をして、乱れた息を軽く整える。

暑い中走ってきたのだろう、オデコや首筋にがっつりと汗が浮かんでいる。

ハンカチを取り出して汗をぬぐいつつ、私の横に腰を下ろす。

「あら、そこにいるのは、ユリア・バーレンシアじゃありませんの？」

ん？ この声は……

「これはこれは、マルグリット・ラシクレンペ様。ごきげんよう」

私は素早く立ち上がって軽く土埃を払うと、目の前の少女に一礼をする。

マルグリット・ラシクレンペ。

ガールウ・ラシクレンペの第二子で、生粋のお嬢様だ。家名にラシクが入っていることからわかるように、古くからラシクレンペ家はラシク王家の血統と密に連なっている。

現ラシク王国国王との関係で言えば、再従兄弟はとこになるとか。

鮮やかな金髪の縦ロールに、少しツリ目気味でアーモンド形の目の色は透き通るような青。

いかにも勝気な美少女という様相だ。

うちのリリアから甘えん坊っぽさを抜くと似てるかもしれない。

手に持っているのは白いレース縁がとても綺麗な日傘で、以前使っていたものとは違うようだ。

マルグリット嬢が使っているものならば、間違いなく一流と呼ばれる職人に作らせた最高級品だろう。

それをこんな短期間で買い換えるとは、さすがは大貴族様ということか。

「ふ〜ん、こんな所で何をしているかと思ったら、ずいぶんとみすぼらしい昼食ですこと。」

お金はありあまっているんじゃないやありませんの？ ああ、商売人はけち臭いのが基本でしたかしら？」

私とルノエちゃんが持っているサンドイッチを見て、あからさまに見下したような視線を向けてくる。

マルグリット嬢は、そんな姿がとてもよく似合う。

「まあ、お金を持っているのは実家であって、私自身ではありませんから。」

それに結構美味しいんですよ、これ？ お一つ差し上げますから、食べてみますか？」

表向きは『バーレンシア商会』のトップはお父様ということになっているし、私はアイデアを出しただけで実際に動いているのはロイズさんやトルバさん、ペートだからな。

ちなみに、『バーレンシア商会』の会長はお父様で、ロイズさんが副会長、トルバさんが軽食部門の統括、ペートが副統括だったりする。

「いいませんわっ！ あなたから何かをもらう理由がありませんもの！！」

原因がわからないのだが、どうもマルグリット嬢には嫌われていくようだ。学院で初対面した時から敵対的だった。

私としては、仲良くしたいと思ってるんだけどなあ。

15歳：「中庭でランチを(2)」

「ところで、そちらのあなた、わたくしとどこかで会ってないかしら？」

見覚えがあるのですけれど」

「え、えっと……わたしもラシクレンペ様と同じ魔術師専攻科ですので、いくつかの授業で一緒させていただいておりますから、時々すれ違っておりますので、それではないかと……」

ルノエちゃんには、マルグリット嬢と目を合わせないように俯きつつ、普段の口調より若干早口で答える。

いつもとちよつと様子が違う感じだけど……マルグリット嬢の前で緊張している？

マルグリット嬢は、良いのは家柄だけではなく、魔術師としての才能もあり、フェルベル学院でも10年に1人の天才とか呼ばれている。

私が受けたのと同じ入学試験を受けており、堂々と首位の成績を修めている。

噂では、すでに彼女の所属をめぐって何名かの教授の間で熾烈な駆け引きが行なわれているとかいないとか。

そんな彼女の前ならば、多少緊張してもおかしくはない、とは思っけ。

「そうなの？　あなた、名前はなんていうのかしら？」
「あの、その……ルシエと申します、家名はありません」

ルノエちゃんが「家名はない」と言ったとき、マルグリット嬢が一瞬考えこむような素振りを見せた。

「家名はない」ということは、ルノエちゃんが地位の高い生まれではないことを示している。

都市部に住んでいたり、一定以上の階級の人には家名を持っているもちろん、セラちゃんのように種族の伝統によって家名を持たないこともあるが、ルノエちゃんはどこからどうみても人間だ。

けど、聞き間違え……かな？　ルノエちゃんが「ルシエ」と名乗ったように聞こえたんだけど。

「……その名前は記憶にないわね。わたくしの思い違いだったかしら」

マルグリット嬢がルノエちゃんをじっと見詰める。
けどそれは、ルノエちゃんを蔑むような目ではなく、どこか感心するような温かい目だった。

そして、マルグリット嬢が何か口を開こうとしたとき。

「お待たせしました、お嬢様。

講義が終わったあとで、教授に掴まってしまいまして……申し訳
ありません」

「!?!」

「あ、大丈夫だよ。私たちも今さっき来たところだから」

ちょうどシユリが中庭にやってきた。

「ウエステッド様……?」

「ん? ああ、これはマルグリット・ラシクレンペ様、ご挨拶が遅
れて失礼いたしました。」

足の御加減はいかがですか?」

「あつ、お蔭、さまで……歩くだけでしたら、なんの支障もありま
せん」

「それは良かったです」

ん?

「ウエステッド様のおかげです。」

あの時は、その、本当にお世話になりました……まことにありが
とございました」

「いえ、大した事をしたわけではありません。それよりも大事がな
くて良かったです」

隣を見ると、ルノエちゃんもやや呆然と2人の、というかマルグ

リット嬢の変化に戸惑っているな。

「と、ところで、ウエステッド様……」

「はい、なんでしょうか？」

「先ほど、どなたかをお嬢様と……？ それに何か待ち合わせをしていたかのような……」

私の方をちらりと見て、視線をシュリへと戻す。

「あつ、はい。」

私はバーレンシア家から後見を受けておりまして、お嬢様というのはユリア・バーレンシア様のことです。

今日はお昼を一緒にということでしたので」

「そ、そうでしたの……ああ、わたくしは行く所がありますので、これで失礼いたします」

それだけ言い残すように、足早に中庭から立ち去っていった。

えー、あー……何だったんだろう？

15歳：「中庭でランチを(3)」

「シユリは、ラシクレンペのお嬢様と仲がいいの？」

芝生に座って、各々が持ち寄った昼食を食べ始める。

今日の私のメニューは、大きめのパンに切込みをいれてチーズとハムを挟んだものと、同様に野苺のジャムを挟んだもの。サンドイツチの一種だ。

それと水筒によく冷えたお茶。

ルノエちゃんとシユリは、たまたま同じ料理でシチューと串揚げのセットのようだ。

シチューの容器は、買った店に持っていくと割引をしてくれるというサービス券代わりにもなっている。

……まあ、バーレンシア商会の息がかかった店は、フェルベルにも出店してたりするということだ。

「仲がいいといえますか……お聞きになりたいのですか？」

「え、いや、無理には言わないけど……」

そう言われてしまうと聞きたい気持ちと不安になる気持ちが半々になる。

「まあ、聞かれて問題になるような話ではないのですが……先日、ちょうど私の目の前で転ばれまして……。」

足をくじいてしまったようなので、医務室までお連れした次第です」

「ふん……」

それだけで、あの態度か？

いや、まだ何かありそうな気がするんだけど……ん、足をくじいていた、んだよね？ え、まさか、もしかして……。」

「えーと、医務室に連れて行くときにさ、肩を貸したりしたの？」

「いえ、歩くのが辛そうでしたから、妙齡の婦女子に失礼とは思いましたが抱き上げてお連れしました……けど」

うわあ、つまりはお姫様抱っこか。

シュリは見た目こそほっそりとしているが農村の出身だ。小さい頃から農作業を手伝っているため、身体能力は低くない。

マルグリット嬢は女性としては平均的なサイズだし、私でも魔術を使わずに抱え上げられるくらいだ。シュリならば余裕だろう。

つまり、弱みを見せてしまったことによる恥ずかしさが、マルグリット嬢にあのような態度をさせたんだろう。納得だ。

「しかし、よくマルグリット嬢を抱き上げたりできたね。」

筋力的にという意味じゃなくて、地位とか肩書き的にさ」
「そのときは、まさか“六字”^{ロオノウム}の方だとは、想像もしてませんでしたので……」

この世界において、「6」という値は神聖な数とされている。
ゆえに地位の高い人ほど、子供には6文字の名前をつける傾向にある。

そういうわけで、地位の低いものは自然と、6文字より短い名前をつけるようになっていた。

明確に法で定められていたりするわけではないが、名前が6文字の場合は“大三”^{ガイシャ}以上の地位にある人物かその家族の名前だと言っているだろう。

一般人の人たちも、神聖なる「6」の数にあやかり、その半分である3文字の名前をつけることが多い。

私の家族もそうだし、知り合いの名前は、ほとんどが3文字だ。

例外がフェルネやお祖父様とお祖母様だろう。その3人に共通して言えることが、位が決して低くなく4文字であることだ。つまり、3文字より多いが6文字には足りない。

地位が上がるのに合わせて、名前を長く改名する人も少なくない。

ちなみに、家名について言えば、これは大体の家の家名は6文字であると言っているだろう。

バーレンシアもそうだし、ウエステッド、コーズレイト、セイロウインと、いずれも6文字だ。

話が少しずれたが、ロオノウム“六字”というのは6文字の名前のことであり、簡単に言えば上級貴族本人かその縁者という意味を持つ。

「医務室での処置が終わったあと、名前を伺ってとても驚きましたよ」

とシユリは言うが、シユリの慌てたり驚いたりする姿があんまり想像できないんだよな。

だらだら喋っている間に全員食事が終わったようだ。

さっきのマルグリット嬢との話し合いの影響なのか、食事中的ルノエちゃんが静かだった。

普段から比較的大人しいけど、決して喋らないわけじゃないし…
…心配しすぎかな？

私と視線が合うと、なんでもないように笑顔を返してくれる。
まあ、大丈夫そうだな。

よっし、それじゃあ残り半日頑張りますか。

15歳：「講義／建国の英雄」

『王国史』というのは、その名の通りラシク王国の歴史についての授業だ。

これが魔術にどう影響するのかといえば、まったくと言っていいほど意味はない。

……日本の大学に例えるならば、一般教養と呼ばれる授業に近いだろう。

名目的には、将来王宮に勤める可能性の高い学生たちが、基礎教養として自国の歴史を知っておくことも必要であるためとされている。

あくまで魔術師専攻科の教授による講義であり、受講者は魔術師専攻科以外からの科から参加している学生がほとんどだ。

逆に魔術師専攻科生の出席率は低い。

その理由は魔術師専攻科の学生は家庭教師などを雇える身分にある貴族の子弟が多いため、今更『王国史』を学ぶ必要はないからだ。実際の所、私も書籍などである程度、王国の歴史は知っていて、講義の内容の8割ほどが既知であることが多いので、ルノエちゃんに付き合っ受講しているようなものだ。

そもそも、フェルベル学院では入学試験で魔術実技が試される。

この時点で一般的な家庭では、かなり無理が出てくるのだ。

なぜなら、例の 発動具 のせいだ。

魔術を実際に使うには 発動具 を持つことができる立場にいないといけない。

発動具 を用意できればよし、そうでなくとも教師として 発動具 を持っている魔術師を雇う必要がある。

必然的に実家がお金持ちの貴族や豪商である者だけが、魔術師専攻科に入学できる可能性があると言える。

「あゝ、そういうわけで、ラシク王国の初代国王アルクオード・ラシクリウス様のご生誕なさったのが、ラシク村と呼ばれる農村であったことは、有名な史実ですな。

当時の大陸東部は、20以上の勢力にわかれ、大陸東部の覇権を争っていた時代にお生まれになったわけじゃ」

『王国史』を担当する教授は、老人の男性で白髪で胸まで届く白い顎鬚あごひげを生やしている。

前世の絵本などに出てきた魔法使いのおじいさん、もしくは痩せているサンタクロースが近いかもしれない。

「アルクオード様が成人となった日に、“予言の御子”アーケによって大陸東部をすべる覇者となる、という予言を受けたことから、村から旅立たれる。

そして、その先方でアルクオード様はラシクリウスの六将となる傑物たちとの出会いを経て、ラシク王国を建国するのじゃな」

この辺りは、若干神話じみた英雄譚が続く。

やれ、“万剣の戦士” シューベイルは一度剣を振るうと万の兵士を切り倒すとか、“湖沼の賢者” ハーバリアムは話術によって国を1つ滅ぼしたなどの、そういう話は枚挙にいとまがない。

ただ、確定的とされる史実によれば、初代国王の下には重要な6人の配下がいたことは確かなのだ。

そのうち5人の血筋は、今でもラシク王国で名門として呼ばれている。

“万剣の戦士” シューベイルを祖とするエイツロンド家。

“湖沼の賢者” ハーバリアムを祖とするオンクオート家。

“聖歌の双子” ノイラとノイルの双子を祖とするファズノイラ家とフォズノイル家。

“白亜の貴婦人” フレーラを祖とするラシクレンペ家。

ちなみに、フレーラはアルクオードの義母にあたる人物で、家名からもわかるとおりマルグリッド嬢の先祖でもある。

「……というわけで、今も王国守護の大役を担っており、いずれもラシク王国にはなくてはならない名家である。

唯一例外がアーケ様ではあり、ラシク王国が事実上の東部統一をなすと同時に、王国史からその名が消えておる。

その理由については諸説あるのじゃが……」

六将には、初代国王の最初の配下にして“王の導き手”とも呼ばれる“予言の御子”アーケも含まれる。

しかし、その血筋は他の5人と違って不明であった。

尊ではラシク王国を影ながら支配する一族がいて、それがアーケの子孫であったり、本人であるといわれていたりする。

まあ、根も葉もない与太話に過ぎないけど。

この講義はつまらないわけではないし、教師も実力のある教授なのだが……いかんせん、貴族への贅美がしつこいだけが玉に瑕だなあ。

「15歳…」お茶を飲もうよ(1)」「

「ねえ、ユリアちゃん、どこまで行くの?」

学院の門を出てしばらくして、ルノエちゃんが質問してきた。

午後の授業も終わり、オースギ寮に戻る前に、寄りたいたころがあったので私たちはフェルベル学院前の大通りを歩いていった。

学院の外に行くので「先に帰っていてもいいよ」と言ったのだが「迷惑じゃなければついて行きたい」と言われたので、こうして一緒に移動している。

「ん、ちよつと『ペート軽食店』に用事があつてね」

「ペートさんの店に?」

「うん、あそこなら牛乳のストックがあるから、ちよつとわけてもらおうと思つてね」

「あつ! 朝言つてたミロンさんのお茶に使うの?」

「そういうこと。フェルベルだと新鮮な牛乳が手に入りにくいんだよねえ」

フェルベルの付近では酪農が盛んではなく、生乳せいじゅうが市場いちばにあまり出回っていない。

売られているものは大体が発酵乳、つまり飲むヨーグルトみたいな加工をされたものがほとんどだ。

普段飲む分にはそれでもいいのだが、抹茶ラテを作るには、できれば生乳を使いたいと思う。

歩きながら、ルノエちゃんとダラダラと授業やランチの際のマルグリッド嬢やシュリについて話す。

「えっ？ ルノエちゃんはマルグリッド嬢がシュリに惚れているって言うの？」

「えっ？ だってユリアちゃん、アレはどう見ても恋する乙女の態度でしょ？」

「うーん、だってあれは『一般民に弱みを見せてしまい、どうしていいのかわかっていない』態度でしょ？」

私のその返事に、ルノエちゃんが本日二度目の大きな溜息をつく。

「だって顔が赤くなってたし」

「それは弱みを見せちゃったことへの恥ずかしさでしょ？」

「確かに恥ずかしさもあるかもしれないけど、全然理由が違っよ。」

「アレは、好きな男の子の前で緊張して照れていたんだ」

「そうかなあ？」

「そうなの、きつと」

仮にマルグリッド嬢がシュリに惚れているとして……前途多難もいいところだよな。

「もし仮にマルグリッド嬢がシュリのことが好きだとして、私たちは何かするべきなのかな？」

「えーと……応援、とか？」

私の質問に対して、自信なさげにルノエちゃんが答える。

昔、想像していたのよりも、ラシク王国での身分は絶対的な差というわけではない。

けれど、小さな農村の男性が王家に連なる女性と気軽に付き合えるほど薄い壁というわけでもない。

ルノエちゃんも、そのことに気づいたんだろう。

仮にシュリが【霊獣の加護】を持っていた、なんて幸運に恵まれれば別だけどなあ。

【霊獣の加護】があり、うまく立ち回れば成り上がることもできる。フェルの家なんかがいい例だろう。

「いらっしゃいませー、ようこそ『ペート軽食店』へ」

店内に入ると“アルバイト臨時雇用”の少女が明るい声で私たちを迎えてくれた。

『ペート軽食店』は、『バーレンシア商会』が資本を出しているいわば子会社みたいなものになるのだが、ほとんど支店みたいな感じかな？

“臨時雇用の交代制度”や“作業着の貸し出し”など、いくつかの制度を試験的に導入している。
もちろん、これは前世でのファーストフードのシステムを参考にしている。

……ウェイトレスさんって可愛いと思うんだ。

15歳：「お茶を飲もうよ」(2)「

ふむ、短めに切ったこげ茶色の髪と濃紺に近い瞳。

年は私よりも2つか3つくらい上だろうか。ただ身長は私よりずつと低くて、150イルチくらいかな？

その小柄な体に薄いピンクのワンピースと白いフリルつきの前掛けエプロンの制服が、よく似合っている。

「あの、お客様……？」

「あ、ごめん、私たちはお店のお客じゃないんだ」

「ええと……？」

うん、ウェイトレスさんが可愛いな、とか楽しんでいる場合じゃなかった。

入り口にずっと立っていると、お店に迷惑をかけちゃうしな。

食事には中途半端な時間でも店内はほどほどに賑わっているようだ。

「ペートって今いる？」

「えっと、ペート……店長ですか？ 店長でしたら、店の奥にいらっしやいますけど……」

この間来たときは見てない顔だから、新人さんだよな。

私の顔を知ってる店員さんがいれば早かったんだけど、勝手に押し入るのもアレだし……んぐ、一応ペートの顔を立てるか。

「良かった。それじゃあ、ペートに『ユリアが来た』って伝言を頼めるかな？」

「あ、はい……しばしお待ちください」

こういうとき、人は堂々と当たり前のような態度をされると何となく従っちゃうんだよな。

『バーレンシア商会』での経験から得た処世術の1つだ。

臨時雇用の子が店の奥へと入り、しばらくすると少し慌てた様子の青年が出てきた。

「いらっしやいませ、ユリアお嬢様、ルノエお嬢様……」

「やあ、ペート、突然ごめんね」

「いえいえ、ユリアお嬢様には、最大の便宜を図るよう旦那様から言い含められておりますので……さて、店先で立ち話をするのもなんですので、どうぞ店の奥へ……」

ペートに連れられて、奥の個室へと向かい、応接室兼執務室兼店長室へと通される。

頑丈そうな机の上に書類が束となっておいてあり、ペートの忙しさを物語っている。

「どうぞ、一応この店で一番質の良い葉を使っています」

「ありがとうございます」

「あ、ありがとうございます」

ルノエちゃんは、また緊張しているのかぎこちなくお茶のカップを受け取る。

ペートに会うのは初めてじゃなし、シユリの前でもそうだったが、そろそろお嬢様扱いに慣れても良さそうなんだけど……。

ボロだって、致命的なものじゃなければ問題はない。というか、逆に今みたいに張り詰めすぎている方が良くないと思う。

ペート自ら淹れてくれたお茶は、ペートが自信満々に言うだけあって、香りもよく色もとても綺麗だった。

熱さを気をつけながら一口味わう……焙じ茶とジャスミン茶を足したような味かな？

飲むと、お茶の葉を煎じたときの独特の苦味と乾いてもなお香りを失わない花の香りがとても楽しい。

「それで、今日は何の用事なんだ？

もしかして姉ちゃんに何かあったのか？」

よそ行きの仮面をはずしたペートが、昔ながらの口調で質問してくる。

年は私と変わらないため、今年から成人だ。

変わったところは、この5年で背をギリギリ追い抜かされたことと、なかなか出来る男になってしまったことだろうか？

今は『バーレンシア商会』のフェルベル進出計画の責任者を担って
てくれている。

それと最近気づいたのだが、お父様に憧れているらしく、なんと
なく髪型や、商売中の言動の参考にしている節があるようだ。

「いや、ペルナちゃんは関係ないよ。今日はさ、牛乳を少しわけて
もらおうと思ってるね」

「牛乳？ 今度は何を作るんだ？」

「んー、ペートは ラルシヤの葉 や ツチの実 とかが入ったお
茶って飲んだことある？」

「というか、それはもう薬じゃないのか？」

まあ、おかげさまで、おれは病気らしい病気はしたことがない
で」

手を左右に振って

「そっか、とりあえず濃い目の薬草茶を作って、牛乳と砂糖で割る
んだ。美味しくできたら、この店でも扱ってよ」

「ああ、つまり、苦豆ラテってヤツのバリエーションか？ 苦豆茶
は人を選ぶけど、苦豆ラテはうちの人気メニューだぜ。

で、牛乳と砂糖は、どんくらいあればいい？」

「今日は、試験的に作るだけだから……そうだね、牛乳をコップ1
0杯分と砂糖をコップの半分だけもらえる？」

「了解。そんじゃ、手配してくる」

返事を聞くが早いか、ペートはさくつと応接室から跳び出て行っ

た。

15歳：「お茶を飲もうよ」(3)「

ミロンさんから譲ってもらった ツチの実 の粉末と煎じた ラルシャの葉 を少な目のお湯が煮立っている手鍋に投入。

少し火から遠ざけてト口火で数分、普段ミロンさんが淹れてくれるお茶より濃くなるように抽出する。

適当なタイミングを見計らって、深緑色の液体に砂糖を惜しげもなく入れて軽く混ぜる。

手鍋を火から離して、余熱で砂糖を溶かす。

前もって用意しておいた布で漉したら、抹茶シロップ(仮)のできあがり。

このシロップをコップに注いで、牛乳で割り、魔術で作った氷を入れてやれば完成だ。

ホットミルクで割って温かいまま飲んでもいいのだが、暑い季節はやはり冷たい方が美味しいだろう。

「というわけで、早速試飲をお願いします」

夕食後の団欒の時間を狙って、さっそくオースギ寮のみんなに抹茶ラテを用意してみた。

陶器製のコップに薄緑色の液体がなみなみと注がれている。と言つても、それほど大きなコップではないので容量的には牛乳瓶1本分くらいかな。

「頂く也」

「……………」

最初に動いたのはミロンさんとセラちゃんだ。予想通りと言えは予想通り。

残ったタマコさんとルノエちゃんが見守る中、2人がまず一口飲む。

「……………ごくん……………悪くはない也。ただ、我としては味に物足りなさを感じる也」

辛党のミロンさんは、ちょっと甘すぎたのかもしれない。

以前、ミロンさんの得意料理の真つ赤なスープをご馳走になったことは、忘れることのできないインパクトがあった。

ものすごく辛かったが、ギリギリ食べられる辛さのうえ、味は美味しくて、辛い辛いと言いなながら食べたものだ。

食後に、思わず舌に回復魔法を使ったけどな。

「……………ごくごく……………甘い。ユリアちゃん、すごい。ありがとう」

セラちゃんが可愛い仕草でちょこんとお辞儀をする。

「いえいえ、どういたしまして……今回は比較的甘めに作ったから、ミロンさんなら砂糖なしで牛乳に混ぜてもいいかもね。」

それだけで苦味は大分押さえられるし、薬草の苦味が牛乳の臭みを消してくれて、相乗効果で飲みやすくなるはず。それと薬草も牛乳も体にいいしね」

ツチの実 もラルシャの葉 も安価で手に入り、味さえ我慢できれば常飲すると健康に、ひいては美容に効果が高いらしい。

牛乳は栄養価が高くて、滋養強壮に役立つし、暑さで食欲が減っている時には最適だろう。

「なるほど、こいつは確かに飲みやすくなったな」

「ちよつと独特だけど、わたしもこれくらいなら美味しく飲めそうです」

恐る恐る抹茶ラテを口をつけた2人も、一口飲んで緊張がほぐれる様子が見て取れた。

「よく見たら、薄緑の色合いも決して悪くはない気がするな……これは、簡単に作れるのかい？」

「うーん、生乳（生乳）さえ手に入るなら、レシピ自体は簡単なんですけど、「発酵乳じゃダメなのかい？ ……いや、あの独特の酸味があると、

味のバランスが難しそうだな」

「ええ、飲めないわけじゃないと思うんですが……今回の生乳も知り合いに譲ってもらったものなので」

「そうか、体にも良いならたまに寮でも出そうと思ったんだけどね」

「ひとまず、知り合いの軽食店でメインメニューになるか相談してみます」

「なるほど、じゃあメニューになったら、教えてくれ」

概ね高評価だ。セラちゃんとタマコさんは、おかわりをして2杯目を飲んでいる。

これなら『ペート軽食店』の新メニューとして、いけそうかな？

試作品のシロップは少し残してあるから、明日にでもペートに試飲してもらおう。

15歳：「お茶を飲もうよ」(3)「(後書き)

いつも『攻撃魔術の使えない魔術師』、通称『コマツな』を応援いただきありがとうございます。

最近、少々身の回りが忙しく、更新速度に執筆が追いつかなくなっていました。

本日の更新で話が一区切りついたので、またしばしの執筆休暇を設けたいと思っています。

不定期更新も考えたのですが、個人的な希望として「まとめて休んで、まとめて連日更新」と言う形を取りたいと考えています。

今週中にもう一度更新をして、そこで、今後の予定などを告知しようと考えています。

この作品は、必ず完結までさせたいと考えています。どうぞご理解ほど、お願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9966q/>

攻撃魔術の使えない魔術師

2011年9月26日00時57分発行